博士論文

アメリカ時代のラフカディオ・ハーン

―ハーン文学の形成とその特質をめぐって―

孫　恵仁

2013 年

目次

序章　問題の所在と研究の諸前提 ………… 1
1. 本研究の目的 ………… 1
2. ハーンの経歴 ………… 2
3. ハーン文学の概観と評価 ………… 5
4. 先行研究 ………… 7
5. 研究方法と構成 ………… 12

第1章　シンシナティにおける犯罪報道記事 ………… 18
1.『インクワイヤラー』紙におけるセンセーショナリズムの推進とハーン ………… 19
1.1. シンシナティのアイルランド移民者ハーン ………… 19
1.2.『インクワイヤラー』紙の編集長との邂逅 ………… 20
1.3.『インクワイヤラー』紙の変化 ………… 21
2. 劇的に描写される犯罪事件 ………… 24
2.1. ニュースから掘り出される物語 ………… 25
2.2. 五感を活かした写実的な描写 ………… 28
2.3. 犯行現場の疑似体験 ………… 32
3.「皮革製作所殺人事件」にみられる独創性 ………… 37
3.1. 破格の形式 ………… 38
3.2. 内容的特色 ………… 39
4. 結論 ………… 45

第2章　新聞における風刺・風俗画 ………… 47
1. 挿絵制作者としてのハーン ………… 48
1.1.『アイテム』紙における新たな挑戦 ………… 48
1.2. 風刺雑誌『ジー・ギグランプス』の成功と失敗 ………… 49
1.3.「皮革製作所殺人事件」による成功 ………… 51
2. 社会的不正義の批判に用いられた風刺 ………… 51
2.1.「警察委員会」………… 51

2.2.「警察の能率のよさ」 53
2.3.「警察が相互扶助する社会」 54
2.4.「よりどりみどり」 55
2.5.「あの評決」 56
2.6.「捜査を望む」 57
3. ニューオーリンズの日常を描く風俗画 58
3.1.「洗濯婦」 58
3.2.「ウウッ」 60
3.3.「濡れ足りていますか？」 61
3.4.「水かき足」 62
3.5.「ささやく波のそばで」 62
3.6.「火事」 63
3.7.「ケーキとキャンディ」 64
4. 結論 66

第3章　異文化を捉える文学的スケッチ 68
1. シンシナティの黒人町 69
1.1. 1870年代のシンシナティや黒人社会の状況 69
1.2. 下層民の黒人社会を記事の対象にした背景 70
1.3.「バトラーズ」 70
1.4.「無宿人」 73
2. ニューオーリンズのクレオール 77
2.1. 1870年代のニューオーリンズの状況 78
2.2. クレオールを記事の素材として取り上げた背景 79
2.3.「クレオール人の典型」 79
2.4.「なぜ蟹は生きたまま茹でるのか」 82
2.5.「クレオール人の気質」 83
3. 結論 86

第4章　ローカル・カラー文学への志向 87

1. シンシナティからニューオーリンズへ 87
1.1. 伝記的研究から探る移住の契機と問題点 88
1.2. 報道記者の仕事に対する嫌悪 90
1.3. ハーンの文学的志向 91
2. ローカル・カラー文学とケイブル 92
2.1. ローカル・カラー文学の普及 92
2.2. 南部文学とケイブル 93
3. ハーンとケイブルとの影響関係 95
3.1. クレオールの音楽をめぐる二人の協力 95
3.2. 二人の関係の亀裂 97
3.3. ケイブルの作品をめぐる論争とハーンの態度 98
3.4. 北東部の文芸雑誌への寄稿 100
4. ローカル・カラー文学作品としての『チータ』 103
4.1. 小説家としてのハーンの最初の試み 103
4.1.1. 『チータ』の誕生 103
4.1.2. 『チータ』の構成 104
4.1.3. 書評にみる『チータ』のローカル・カラー文学としての特徴 105
4.2. ローカル・カラー文学作品としての特徴 106
4.2.1. 緻密かつ鮮麗に描かれる熱帯の島々 106
4.2.2. 方言の使用 109
4.3. 報道記者時代の手法の活用 112
4.3.1. 事件を再構築する手法 112
4.3.2. 死体についての描写 114
5. 結論 115

第5章　再話文学の開花 117
1. ニューオーリンズの伝説 117
1.1. 新聞記事における再話の背景 117
1.2. 「熱帯の入口にて」の概観 118
1.3. オールドリッチの創作意図の改変 120

1.4. 原話と再話の比較 121
1.5. 再話に見られるハーンの倫理観 123
2. ポリネシアの伝説「泉の乙女」 126
2.1. 再話の「泉の乙女」と原話の「泉の妖精」 126
2.2. 再話と原話の比較 129
2.2.1. 「盗賊の歌」の挿入 130
2.2.2. ギリシア神話および人魚伝説の加味 133
2.2.3. 帝王切開の意味の変化 137
2.2.4. 失踪した息子 138
3. 結論 141

第6章　解放黒人問題とハーン 143
1. 南部の解放奴隷への眼差し 144
1.1. 南北戦争後の南部黒人の状況 144
1.2. 「南部の問題」の著者ガヤレ 145
1.3. 「南部の預言者」の概要 145
1.4. 「南部の預言者」に見るハーンの解放黒人への姿勢 146
2. 黒人女性奴隷『ユーマ』の物語 151
2.1. 『ユーマ』のあらすじ 153
2.2. 西インド諸島のマルティニク島における黒人乳母ダー 153
2.3. 伝統化した奴隷制度 154
2.4. 奴隷の身分に対するユーマの自覚 156
2.5. 廃止すべき悪としての奴隷制度 158
2.6. 選択を迫られるユーマ 161
3. 結論 161

終章　本研究の結論と課題 164

注釈 172

参考文献 223

図版 E1

略語一覧

一次文献表示の略語

(WL) *Writings of Lafcadio Hearn in Sixteen Volumes*. Kyoto: Rinsen Book Co., 1998; Boston and New York: Houghton Mifflin Co., 1922.

Vol. 1. *Leaves from the Diary of an Impressionist; Creole Sketches; and, Some Chinese Ghosts*. by Lafcadio Hearn.

Vol. 2. *Stray Leaves from Strange Literature; and, Fantastics and Other Fancies*. by Lafcadio Hearn.

Vol. 3-4. *Two Years in the French West Indies*. by Lafcadio Hearn.

Vol. 13-15. *Life and Letters: in Three Volumes*. edited by Elizabeth Bisland.

Vol. 16. *Japanese Letters*. edited with an introduction by Elizabeth Bisland.

(AL) Hearn, Lafcadio. *Articles on Literature and Other Writings from Cincinnati Enquirer 1873*. ed. Tominaga Makita. Tenri: Tenri Central Library, 1974.

(BB)———. *Barbarous Barbers and Other Stories*. ed. Ichiro Nishizaki. The Hokuseido Press, 1939.

(CL)———. *Children of the Levee*. ed. O.W. Frost. Lexington, KY: University of Kentucky Press. 1957.

(NO)———. *The New Orleans of Lafcadio Hearn: Illustrated Sketches from the Daily City Item*. ed. Delia Labarre. Baton Rouge: Louisiana State University Press, 2007.

(PG)———. *Period of the Gruesome: Selected Cincinnati Journalism of Lafcadio Hearn*. ed. Jon Christopher Hughes. Lanham New York London: University Press of America, 1990.

(『著作集』)『ラフカディオ・ハーン著作集』全 15 巻、恒文社。

(『中国』)小泉八雲著平井呈一訳『中国怪談集他』、恒文社、1976 年。

(『飛花』)小泉八雲著平井呈一訳『飛花落葉集他』、恒文社、1976 年。

(『カリブ』)ラフカディオ・ハーン著平川祐弘訳『カリブの女』、河出書房新社、1999 年。

(『「怪談」以前』)ラフカディオ・ハーン著キャメロン・マクワーター他共著高橋経訳『「怪談」以前の怪談』、同時代社、2004 年。

序章　問題の所在と研究の諸前提

1. 本研究の目的

本研究の目的は、ラフカディオ・ハーン(Lafcadio Hearn, 1850-1904)が来日するまでの足跡をたどり、彼独自の文学世界が形成されていく過程を確認し、その特質がどのような点にあるのかを明らかにすることである。ハーンは『怪談』、『心』といった日本に関する作品によって作家としての地歩を固めた。ハーンはそれゆえに、日本をアメリカやヨーロッパに紹介した作家として知られている。韓国籍を持つ論者がハーンの世界に出会ったのも、日本に関する彼の作品を通してであった。しかし、素朴な疑問として感じたことがある。それは、外部の人間である彼が、果たして異文化である日本を的確にとらえることができたのかという点である。この疑問に対して、ハーンの日本での活動を論じた諸先行研究は、本章3節で言及するように、彼が日本人の心あるいは精神の真髄を捉えたと評価しており、確かに一定の説得力を持つ答えを提供してくれる。しかしながら、ハーンの異文化への視座とその形成過程をより深く理解するためには、彼の活動を日本にのみ絞って考察するだけでは十分とはいえない。ハーンは、シンシナティやニューオーリンズ、仏領西インドのマルティニク島に至るまで、異文化に対する記事や作品を書き残している。本論文では、それらの作品を通して、ハーンの異文化理解が形成されていく過程を明らかにする。こうした異文化への関心と洞察力は、ハーン文学の主柱の一つである。

ハーン文学にはもう一つの主柱がある。再話文学である。その独自の再話技法の陶冶は、アメリカでの報道記者時代に多くを負っている。彼は、報道記者として多くの犯罪事件を体験しながら、記事の中でそれらを物語化して読者に伝える手法を身に付けた。それが、彼の再話文学の基盤となっているのである。報道記者時代に培われた文学手法を確認、分析し、その手法が実際に再話の中で活かされていることを明らかにすることで、ハーン独自の再話文学の形成過程を明確にする。

ハーンのアメリカ時代に関しては、言うまでもなく、多くの先行研究がなされている。しかし、それはハーンの伝記か、あるいは文学作品に特化した研究がほとんどである。論者の意図は、こうした二分化された先行研究を統合しながら、ほぼ伝記を通して知られていただけの彼の報道記事やスケッチを視野に収め、再解釈することで、それらに内在している

文学性や物語性に光を当てることにある。

一文無しでアメリカに渡った19歳のアイルランド人移民が、19世紀末のアメリカ社会の中でどのように文筆活動を始め、文学手法を磨き、異文化に対する卓越した共感力、理解力を身につけたのか。さらに、ハーンの報道記事や再話文学に特徴的な臨場感あふれる叙述のスタイル、また他ならぬ弱者を含めた庶民を作品の中心に配するという感性が、どのように形成されたのか。こうした問いには、アメリカ時代のハーンの歩みを知らずに応答できない。本論文では、ハーンを取り巻く環境や人々との出会いを通じて、ハーン文学が形成されていく過程を解明し、その特徴を見極めることで、アメリカ時代におけるハーン文学の全体像を描くことを目的とする。

上記のような研究目的に適合した研究方法を確定するため、序章ではまず、ハーンの経歴や文学活動の概観と評価を前提として提示し、そのうえで、特にハーンのアメリカ時代に関する先行研究を整理する。それらを踏まえて研究方法と本論文の構成を示し、序論とする。

2. ハーンの略歴

来日以前のハーンの来歴に重点を置いて、紹介する。[1]ハーンは、1850年ギリシアのレフカダ島で生まれた。父親チャールズ・ブッシュ・ハーン(Charles Bush Hearn, 1819-1866)はイギリス陸軍の軍医補であり、母親ローザ・アントニア・カシマチ(Rosa Antonia Cassimati, 1823-1882)はギリシア人だった。チャールズが英国陸軍の軍医補としてギリシアに駐屯した際、ローザに出会い、結婚したのである。ハーンが生まれて間もなく、父親は英領西インド諸島に転任した。残された母子は、ハーンが2歳になった時、父親の実家アイルランドのダブリンに移住した。しかし、ハーンの母親は、ダブリンの気候や生活習慣に適応することができず、ハーンが4歳の時ギリシアに戻ってしまった。一人残されたハーンの面倒は、大叔母サラ・ホームズ・ブレナン(Sarah Homes Brenane, 1793-1871)が見ることとなった。敬虔なカトリック教徒だった大叔母は、彼をカトリック教徒の跡継ぎとして考え、カトリックの学校セント・カスバート・カレッジに送った。しかし、ハーンは、彼女が望む通りのカトリック教徒にはなれなかった。ハーンは、その学校で目に怪我をし、左目を失明した。ハーンに失望していた大叔母の前に、遠縁のヘンリ・ハーン・モリヌークス(Henry Hearn Molyneus, 1837-1906)が現れた。彼は、ブレナン夫人の信用を得て、彼女の資産を自

由に運用した。しかし、投資に失敗したため、ブレナン夫人は、破産することになる。彼女は、ハーンの面倒を見ることもできなくなり、ハーンは学校から中退を余儀なくされた。経済的にハーンの後見人となっていたモリヌークスにとって、ハーンは厄介な存在であったため、1869年、19歳になったハーンにアメリカ行の片道チケットを渡した。ハーンはアメリカに渡る。

彼が最初に暮らし始めたのは、シンシナティだった。一文無しで渡米したため、当初は経済的な辛酸を舐めた。しかし、運よくハーンは印刷屋のヘンリー・ワトキン(Henry Watkin, 1824-1911)と出会う。ワトキンは、ハーンが一生父親代わりに慕い続けた人物である。ワトキンはハーンを自分の工場で働かせ、給料の代わり寝る場所と食事を提供した。ハーンは、ワトキンと暮らしながら、1872年に日刊新聞『シンシナティ・インクワイヤラー』*Cincinnati Enquirer*(以下『インクワイヤラー』紙と略記)の見習い記者として就職する。筆を執る仕事は、このようにして始まった。記者としての能力を認められ、1874年には正規の記者となった。しかし、混血女性との結婚が原因で1875年に解雇された。当時のオハイオ州では黒人──混血も黒人とみなされた──との結婚が禁じられていたのだ。ハーンは、非常に落胆したが、解雇されて1か月後にはライバル紙『シンシナティ・コマーシャル』*Cincinnati Commercial*(以下『コマーシャル』紙と略記)に寄稿を始め、まもなく正規の記者となる。

シンシナティにおいて、ハーンは1872年11月から1877年10月までの約5年間、新聞記者として働いた。主に事件の取材を担当したが、文芸評論や論説およびスケッチも書き、幅広く活動した。この時期に書かれたスケッチの中には、シンシナティの黒人の社会を取り上げたものがある。

1877年、シンシナティでの生活を終え、ニューオーリンズに移った。ニューオーリンズには、スペインやフランスの植民地文化の残滓やアフリカ黒人の文化が混交しており、他の地域には見られない独特な文化が存在していた。ハーンは、ニューオーリンズの町の風景、とりわけクレオールの姿を文学的スケッチに書き留めた。代表的南部作家だったジョージ・ワシントン・ケイブル(George Washington Cable, 1844-1925)と親交を結び、彼と共同で、黒人の歌の蒐集にも積極的に参加した。

ハーンは、ニューオーリンズにおいて1878年から約3年半の間、『アイテム』*Item*紙の副編集者として務め、『アイテム』紙が『デモクラット』*Democrat*紙に合併された後には『タイムズ・デモクラット』*Times Democrat*紙の文芸部長として、約5年半を務めた。この時期のハーンの仕事は、同じ新聞の仕事でも、シンシナティの時とは異なるものだった。報道記事

の担当ではなく、文芸関係の記事に専念した。

作家としての活動は、1883年、念願の北東部の文芸雑誌への寄稿が決まったことから始まった。同僚作家ケイブルが、ハーンをハーパー社(Harper & Brothers)に紹介したのである。最初の寄稿が決まってから、ハーンの活動は活発となった。翌年には最初の再話集『飛花落葉集』*Stray Leaves from Strange Literature*(1884)が刊行され、1885年には、ニューオーリンズに関する3冊の本、『ゴンボ・ゼーブ──クレオール俚諺小辞典』*Gombo Zèbes, Little Dictionary of Creole Proverbs*、『ニューオーリンズ周辺の歴史スケッチと案内』*Historical Sketch Book and Guide to New Orleans*、『クレオール料理』*La Cuisine Creole*が世に出ることになった。1887年までに小説『チータ』*Chita*(1889)を書き上げ、もう一つの再話集『中国怪談集』*Some Chinese Ghosts*(1887)を完成した。ハーンはこの時期に新聞の仕事から離れる決心をし、タイムズ・デモクラット社を退職する。ハーパー社と寄稿の契約をし、約10年間のニューオーリンズ生活から離れ、仏領西インド諸島のマルティニク島に移ったのである。

ハーンはマルティニク島に2年間滞在する。2年の間、彼は小説『ユーマ』*Youma*(1890)と寄稿文『仏領西インドの二年間』*Two Years in the French West Indies*(1890)を書き上げた。『ユーマ』は、マルティニク島のある黒人女性奴隷の物語であり、『仏領西インドの二年間』は、ハーンが当地に暮らしながら自らの体験を綴ったものである。1889年、ニューヨークに来たハーンは、ハーパー社の美術主任パットン(William Hardman Patten, 1865-1936)と日本の美術と文学について話し合いを持った。そして、後日、ハーンは日本行きが実現できた場合の著述計画をパットンに送った。それをみたパットンは、すぐさまハーンの日本行を計画したのである。ハーパー社との契約が成立し、1890年3月、カナダのバンクーバーから日本行の船に乗り込んだ。4月に横浜港に入り、ハーンの日本時代が始まったのである。

ハーンはしかし日本に着いてまもなく、ハーパー社との契約を解除した。それまでハーパー社に持っていた不満が爆発したのである。[2]日本に長期滞在することを希望したハーンは、東京帝国大学の教授だったチェンバレン(Basil Hall Chamberlain, 1850-1935)に就職斡旋を頼んだ。彼らは以降、親しい友人となる。ハーンは、知人の紹介により、松江の中学校の英語教師となった。その翌年の1891年には、熊本に移り、英語教師を続ける。約3年後の1894年には『神戸クロニクル』*Kobe Chronicle*への就職が決まり、神戸において約2年間暮らした。1896年には、東京帝国大学の英文学教授となったため、東京に移る。

1904年、東京の自宅で心臓発作を起こし、他界した。

ラフカディオ・ハーンの生涯について彼の文筆活動の変遷を中心として以上に概観した。彼の書き残した作品とそれに対する同時代あるいは後世の評価を次にみたい。

3．ハーン文学の概観と評価

ハーンは、大きく分けて三つの地域において文筆活動を行なった。アメリカ、仏領西インド諸島のマルティニク島、そして日本である。各地域において彼が滞在した期間は、アメリカが約19年(1869-1887)、仏領西インド諸島のマルティニク島が約2年(1887-1889)、日本が約14年(1890-1904)である。[3]彼が最も長く滞在した地域はアメリカだが、本格的な著作活動は、マルティニク滞在の時期から始まり、主要な作品のほとんどは日本において出版された。[4]マルティニク時代から作家として独立して活動を始めたからである。アメリカにおいてハーンは、中西部シンシナティおよび南部ニューオーリンズの日刊新聞の記者として働いた。数多くの記事を書き残し、記者として認められた。しかし、それはその地域に限定された評判である。作家として名を馳せたのは、小説『チータ』および『ユーマ』、紀行文『仏領西インドの二年間』が著名な文芸雑誌に発表され[5]、刊行されてからのことであった。こうした作家活動は、彼が来日してから本格的になる。ハーンは、1890年に来日して以来14年間で12の作品を書き残している。最初の作品『日本瞥見記』*Glimpses of Unfamiliar Japan*(1894)を始めとして『東の国から』*Out of the East*(1895)や『心』*Kokoro*(1896)などの作品は、日本文化に関するエッセイであり、『骨董』*Kottó*(1902)や『怪談』*Kwaidan*(1904)などは「雪女」や「耳なし芳一」のような日本の民話ならびに『雨月物語』や『今昔物語』のような日本の昔話から題材を採り、新たに物語として書き上げられた再話作品である。

日本文化に関するハーンの作品は、出版された当時から、日本人や日本文化の本質をとらえたとして評価された。例えば、来日後の最初の作品『日本瞥見記』に関して、1894年8月14日付『ニューヨーク・タイムズ』*New York Times*の新刊紹介欄には次のような書評が掲載された。

> 彼〔ハーン〕は「アンティル諸島の真珠」〔マルティニク〕を描いた時と同様に「日が昇る国」〔日本〕についても描いた。そしてもう一度、その国の本質的な精

神の美しさを見せてくれた。確かに人々はよく日本を訪問してきた。しかし、ハーンが日本を訪れ、発見するまで、本当の日本を見た人は誰一人いなかったのだ。[6]

ハーンが来日したのは1890年であり、書評者の言う通り、ハーン以前に多くの西洋人が日本を訪れ、日本に関する書物を書き残した。例えば、ローエル(Percival Lowell, 1855-1916)やロチ(Pierre Loti, 1850-1923)等である。[7]しかし、他の西欧人よりも遅れて日本を訪れたハーンだけが、本当の日本を見せてくれた、と書評者は評価するのである。

『日本瞥見記』から2年後の作品『心』に対しても、類似した評価がなされた。1896年5月号の『オーヴァーランド・マンスリー』*Overland Monthly*誌の書評には次のように記されている。

*Kokoro*は、事物の本質を意味する言葉である。本作品は、戦中および戦後〔日清戦争〕における日本人の気質や態度を描いている。西欧作家の誰一人として、ハーンほど日本人の心や精神に近づいたものはいない。『心』に収録された15のエッセイおよび物語は、読者を日本人の家に連れて行くだけではなく、彼らの実際の生活の中に連れて行ってくれる。[8]

書評者の比喩を借りれば、それまでの西欧作家は、読者を日本人の家に連れて行くことはできても、彼らの生活の内部まで入らせることはできなかった。ハーンこそが初めて読者をそこまで連れて行ってくれたのである。

ハーンが日本文化や日本人の深いところで理解したという、こうした評価は、現代にも継承されている。例えば、『西洋文学の日本発見』*Japanese Tradition in British and American Literature*(1958)や『東西比較文学研究』(1990)を執筆したアール・マイナー(Earl R. Miner, 1927-2004)は、ある調査結果を「ハーンと日本――一つの解明の試み」"Hearn and Japan: An Attempt at Interpretation"の中で語っている。[9]その調査とは、幾人もの作家に対し、日本文学や絵画、生活の特徴についてどこから知識を得たのかという問い合わせだった。質問状を送ったマイナーは、回答の中からアメリカの詩人ジョン・グールド・フレッチャー(John Gould Fletcher, 1886-1950)の返事を代表として取り上げる。その返事は、俳句に関するもので、ハーンと『日本事物誌』の著者チェンバレンの話が登

場する。フレッチャーの返事はこうである。

> 私は俳句をラフカディオ・ハーンの訳で(あまり正確ではありませんでした)、それからバジル・ホール・チェンバレンの日本の詩についての本の中で、読んだ記憶があります。[10]

フレッチャーの言葉の中で注目すべきは、フレッチャーが俳句をハーンの訳で読み、俳句に関する知識をチェンバレンから得たというところである。日本語に堪能であり、俳句の英訳の先駆者であるチェンバレンではなく、「あまり正確ではない」ハーンの訳で俳句を読んだことは何を意味するのか。マイナーは、その意味について次のように説明する。

> フレッチャーの心情に則して言えば、もしチェンバレンやアストンが俳句についての詳しい知識源だとしたら、ハーンはそれにもかかわらず、俳句の心とはどういったものであるかを西洋の読者に理解できるようにしたのである。[11]

俳句の心を日本人の心として読みかえれば、日本に対する知識においては、チェンバレンの方が優れているが、日本人の心そのものを理解することに関しては、ハーンにまさるものはいないということである。ここまで見てきたように、ハーンは、日本人の心、あるいは精神の精髄を捉えたと評価された。こうした評価を背景として彼は作家としての地歩を確固たるものとしたのである。

日本の本質を理解した作家と評されたハーンは、来日以前のアメリカ時代に何を成し遂げ、どのような経験を積んできたのだろうか。この問題は本論文全体を通じて論じられる主題であるが、具体的な検討に入る前に、ひとまず、この主題に関連する先行研究そして本論文の構成を次に確認したい。

4. 先行研究

アメリカ時代のハーンに関する研究は三つの方向に大別できる。第一は伝記的研究、第二は新聞記事を蒐集した選集、第三は作品分析を中心とした研究である。

この三つの方向性の第一にあたる伝記的研究として重要なものは次に述べる四つであ

る。まず、最も古い伝記としてハーンの友人、同僚であり、新聞記者や作家として活動したエリザベス・ビスランド(Elizabeth Bisland, 1861-1929)[12]の『ラフカディオ・ハーンの人生と書簡』*The Life and Letters of Lafcadio Hearn*(1906)がある。ハーンの死後、彼の書簡を出版しようとする企画が立ち上がり、ビスランドはその編集を担当した。この著作は、2巻からなり、ハーンの死の2年後に当たる1906年に出版された。『ラフカディオ・ハーンの人生と書簡』には、ハーンがビスランド本人そして同僚や友人に送った1877年から1895年までの書簡、例えばヘンリー・E・クレビール(Henry Edward Krehbiel, 1854-1923)[13]、ウィリアム・D・オコーナー(William D. O'Connor、生没年不明)、ジョージ・ミルブリー・グールド(George Milbry Gould, 1848-1922)[14]、バジル・ホール・チェンバレン(Basil Hall Chamberlain, 1850-1935)などに宛てた書簡が収められている。伝記は、この書簡集に添える形で書かれたものである。短いながらもこの伝記はビスランドがハーンから直接聞いた事柄、ハーンの文章や彼の知人の証言によって構成されており、ハーンの生涯全体を扱っていることを含めて、ハーンのアメリカ時代の生き方、息遣い、活動を直接的に反映する伝記である。ただし、同書はハーンと同時代を生きた人々の回顧録とでも言うべき内容であって、後世の研究者が学問的厳密さをもって再構成したものを「伝記的研究」と呼ぶのであれば、ビスランドのそれは「研究」とは性格を異にする。それでも、この『ラフカディオ・ハーンの人生と書簡』は以後のハーンの伝記的研究の基礎資料になった点において、第一に挙げるべき伝記といえる。

ビスランドの伝記がハーンの全生涯を扱ったのに対して、アメリカ時代のハーンの活動に重点を置いたものに英文学者O.W.フロスト（O.W.Frost, 1926-?）の博士論文『若き日のラフカディオ・ハーン』*Young Hearn*(1958、西村訳、2003)がある。この研究は、それまでの伝記の中で語られてきたハーンの生い立ちを実証的に論じ、特にシンシナティ時代に関しては、新聞記者としてのハーンの業績が綿密に調査されている。フロストはシンシナティの『インクワイヤラー』紙および『コマーシャル』紙におけるハーンの記事を通じて、彼の活動を跡付けている。この研究を出版した後、フロストはシンシナティの黒人社会に対するハーンのスケッチ記事を12編蒐集し、『波止場の子供たち』*Children of the Levee*（1957）[15]というタイトルで、出版した。

上記の研究と並ぶ重要な伝記的研究は、エドワード・L・ティンカー（Edward Larocque Tinker, 1881-1968）の『ラフカディオ・ハーンのアメリカ時代』*Lafcadio Hearn's American Days*(1924、木村訳、2004)である。ティンカーは、ラテンアメリカにお

けるヒスパニック文化の研究で名を知られており、ニューオーリンズの歴史や文化に関する研究においても著作を残している。ニューオーリンズ文化に関する最初の著作がハーンの伝記である。ハーンの全生涯を扱ったビスランド、シンシナティ時代に光を当てたフロストに対して、このティンカーはハーンのニューオーリンズ時代を研究の中心に据えている。ティンカーが研究を行った1920年代には、ハーンの同僚や知人が存命であったため、ティンカーは彼らに対するインタビューから得た情報を利用した。また、『アイテム』紙に掲載されたハーンの挿絵記事を初めて復刻して伝記に挿入した。それまで取り上げられなかった新しい情報や資料を利用してニューオーリンズ時代のハーンの活動を浮かび上がらせたのがティンカーの功績である。

上述の伝記的研究の成果は最終的に、アメリカ学の研究者であり伝記作家であるエリザベス・スティーヴンスン(Elizabeth Stevenson, 1919-1999)の『評伝ラフカディオ・ハーン』*The Grass Lark*(1961、遠田訳、1984年)においてひとつの頂点を迎えることになる。スティーヴンスンは従来の伝記だけでなくハーンに関する基本文献を網羅した上でハーンの全生涯を再構成している。それゆえ彼女の研究はハーンの伝記のなかでも、学術的に質の高いものの一つと評価される。例えば、『評伝ラフカディオ・ハーン』を日本語に翻訳した遠田は、スティーヴンスンが広い視野から明確な再評価を行い、こうした作業により、かつてないほど鮮明で奥行きのあるハーン像を描き出すのに成功したと評価している。[16]

これまでに挙げた四つの伝記的研究はハーンのアメリカ時代すなわち新聞記者から作家へと道を拓いていく過程を跡付ける際に不可欠な文献である。本論文にとってこれらの研究は伝記的事実を根拠づける基礎的な資料となる。しかしながら、これらはあくまでハーンの伝記つまり彼の生活を追跡し、活動の記録を収集したものであって、このなかに彼の記事に対する分析は乏しい。とりわけ、これらの研究がハーンの記事を文学性という観点から論じることは少ない。従来の伝記的研究の成果を土台としつつ、それを文学性という観点から取り上げる点が本論文の独自性である。

先行研究の第二の方向性つまりハーンの新聞記事を蒐集した選集は、ハーン文学の研究の重要な礎石である。そもそもハーンの記事は署名なしで書かれており、膨大な無署名記事の中から彼の手になるものを同定することは決して容易なことではない。この点を考慮すれば、こうした選集の編纂作業は高く評価されるべき研究業績である。この分野における際立った貢献は、法律家で新聞資料の収集家アルバート・モーデル(Albert Mordel, 1885-没年不詳)によってなされた。モーデルが同定したハーンの記事は、最初はモーデル

により刊行されたが、[17]後には日本の編集者がモーデルの助力を得て選集を刊行した。[18]モーデルと同じ時期に、ニューオーリンズでは教育家であり芸術家であるチャールズ・ウッドワード・ハトソン(Charles Woodward Hutson, 1840-1936)が、ニューオーリンズにおけるハーンの記事を蒐集し刊行した。[19]モーデルやハトソン以降も、未刊行記事の刊行は近年まで行われている。[20]これらの研究の成果があるからこそ、本論文におけるハーンの文学的形成過程およびその特質を明らかにすることができる。

第三の研究方向である作品分析としてはベンチョン・ユー(Beongcheon Yu, 1925-)の『神々の猿』*An Ape of Gods*(1964、池田訳1992)が代表的である。同研究には、アメリカ時代から日本時代に至るまでのハーンの業績が芸術、批評、哲学という三つの区分において考察されている。ほとんど伝記的研究に終始していた時期に、ユーは、従来のハーン個人に対する批判や擁護とは距離を置き、アメリカから日本までのハーンの主要作品を取り上げ、ハーン文学の全体像を描くべく画期的な試みをしている。しかしそこでは、刊行された著作と文芸評論のみが対象となっており、報道記事は除外されているのである。ユーによるハーン文学の全体像構築という試みは、論者に多大のインスピレーションと示唆を与えるものであるが、論者は、ユーが除外した報道記事にこそ、ハーン文学形成の重要な萌芽があると考える。

アメリカ時代におけるハーンの再話作品に関する研究は、日本の研究者森亮や平川祐弘により担われてきた。森は、『小泉八雲の文学』(恒文社、1980)の中で、ハーンの再話文学とその手法に着目する。彼は、『中国怪談集』の分析を通して、ハーンの再話を体系化し、文学の特色ある一ジャンルとして位置づけている。平川祐弘は、『西洋脱出の夢』(新潮社、1981)の中でハーンの最初の再話集『飛花落葉集』に収録されている「泉の乙女」を取り上げた。平川は、ハーンの再話作品と原話とを比較対照し、相似と相違を分析する。平川の手法の特徴は、原話の時代的、地域的、文化的背景をも視野に入れつつ、ハーンの日本時代とも対照しながら再話との比較を行うところである。本論では、先行研究において明らかとなった再話の特徴を踏まえた上で、ハーンの再話文学がどのように芽生えたのか、その原型はどこに見出すことができるのかを中心に考察を加える。

ハーンの小説ジャンルについては、杉山直子、平川祐弘および牧野陽子の研究が重要である。作品『チータ』と『ユーマ』に関して、平川は、『ラフカディオ・ハーン──植民地化・キリスト教化・文明開化』において、小説家としてのハーンは技法上の短所を表した、と批判している。しかし同時に民俗の観察者としてスケッチの才能を見せた、という評価も

している。[21]作品『ユーマ』に関しては、杉山は、「アウトサイダーとしてのハーン──『他者』との同一化をめぐって」のなかで、ハーンの黒人描写に矛盾がみられると指摘する。すなわち、ハーンが黒人の女性を当時のステレオタイプにとらわれず、一人の人間として見事に描き切ったにもかかわらず、時には、明らかに白人優位主義から人種問題を語ることもあった、と主張する。[22]杉山は、その矛盾をハーンの個人的状況から説明する。すなわち、孤児であり、常にアウトサイダーとして生きたハーンは、ユーマに代表される社会の「他者と同一化」する傾向があり、それが白人優越主義の価値観との矛盾を生じさせた、とのことである。

論者は、それぞれの研究による文学的特徴を踏まえた上で、これらの研究とは異なる視点からの分析を試みる。すなわち『チータ』に関しては、当時のアメリカ文学において流行となっていたローカル・カラー文学およびその代表者であるジョージ・ワシントン・ケイブルとの関係を中心に分析を試みる。『ユーマ』に関しては、黒人の公民権および奴隷制をめぐる論争との関わりにおいて、ハーンが示した姿勢に着目しながら、彼の異文化理解の特質を解析する。

上記の三つの分類以外にも、ハーンに関する直接の研究書ではないが、シンシナティの黒人の歴史や民俗学的観点からハーンを取り上げた研究がある。ニッキー・M・タイラー（Nikki M. Taylor, 1972-）は、シンシナティにおける黒人歴史の研究者である。彼女の著書『自由の限界』*Frontiers of Freedom*(2005)には、1802年から1868年までのシンシナティにおける黒人コミュニティの歴史が取り扱われている。その中で1860年代の黒人コミュニティについて、タイラーは、フロストが編集したハーンのスケッチ記事の選集『波止場の子供たち』を資料として使用している。当時の黒人社会を垣間見る唯一の資料である、と彼女は語る。[23]アメリカのフォークロアの研究者であるサイモン・J・ブロナーは、『伝統を追って』*Following Tradition*(1998)の中で伝統とは何か、という根本的な問いからアメリカの伝統の歴史まで、フォークロアを中心に論じる。その中で、ハーンとケイブルは、ニューオーリンズの黒人の文化を書き残したフォークロアリストとして取り上げられる。[24]様々な民族や文化が混交するアメリカにおいて、伝統を担うことは重要な課題である。その過程において、社会の表層には現れ出ない側面を書き残したハーンは、貴重な資料の提供者なのである。これらの研究の中心に立つのは、ハーン自身ではないため、ハーンに対する言及は多くはない。しかしこれらの資料は、歴史学や民俗学的なコンテクストの中でハーンを登場させており、ハーンの専門的研究とは異なった視点を提示している。そのような視点を本論での作品分析に生かすことで、ハーン文学の形成過程がより多角的に可視化すると思われ

る。

ハーンのアメリカ時代の活動をめぐる研究は日本時代のそれと比較すると量の面で少ない印象は否めない。それでも、上述のように伝記的研究、記事の蒐集といった基層となる研究は充実し、作品分析についても優れた成果がある。このようにハーンのアメリカ時代についての研究環境は整いつつあるが、本論文は次に述べるような研究方法を用いて、この分野の研究のさらなる発展に寄与することを目指している。

5．研究方法と構成

冒頭に記したように、本論文はハーンがアメリカ時代に独自の文学世界を形成する過程を辿り、その特質を抽出することを目的とするが、そのために本論文は二つの方向性から論を進める。第一は、ハーンの新聞記事からその文学的特質を浮かび上がらせることで、第二は、ハーンが作家になる過程に着目し、その成果である作品を考察し、分析することである。

来日以前、ハーンは約18年間筆を執る仕事に携わり、その中の約14年間はジャーナリズムに従事した。しかし、皮肉な言い回しであるが、ハーンの記事は、ジャーナリズム的ではない手法が使われることにより、高く評価された。それは例えば、シンシナティ時代における犯罪報道記事であり、ニューオーリンズにおけるスケッチ記事である。これらの新聞記事は、ハーンの活動の実態を把握するために伝記の中で取り上げられることや資料の目録化によって蒐集・刊行されることはあった。しかし、基本的にこれらは新聞記事であるため、ハーン文学の特質と結び付けて、文学的な見地から研究されることはほとんどなかった。報道記事に見られる文学的手法は、ハーンの再話文学や小説に影響を与えている点において重要である。本論文では、報道記事の検証を通して文学的影響を明らかにし、スケッチ記事を通してハーンの異文化理解の変遷を浮き彫りにする。

ハーンの再話は、シンシナティ時代の犯罪報道記事における文学手法との関わりの中で分析する。最初の小説『チータ』については、ローカル・カラー文学、とりわけ南部文学との関わりを中心にその特徴を明らかにする。小説『ユーマ』は、19世紀末の公民権運動という時代の流れの中で、ハーンがどのような異文化理解を示したかという観点から論じる。

具体的な本論の構成は以下の通りである。

第1章「シンシナティにおける犯罪報道記事」では、報道記事にみられるハーンの文学

的手法に焦点を当てる。客観性を重視する報道記事と主観性を帯びる文学的手法、この両者は一見、対立するものに見える。興味深いことにハーンの文学的手法は、報道記事、特に犯罪報道記事に顕著にみられ、それがハーンの記事の魅力として注目を浴びることになる。なかでも重要な記事は「皮革製作所殺人事件」をめぐる記事である。ハーンの報道記事の特色を際立たせるために、当時の他の新聞報道との比較を試みる。

ハーンは、初期の2年間の犯罪報道記事において、読者の興味を引きつけるため、報道記事では使われない三つの文学的手法を試みた。その手法については、第1章において詳述するが、代表的な特徴は報道記事の物語化である。初期の2年間、文学的特色は報道記事の中で育まれ、最終的に「皮革製作所殺人事件」で頂点を迎える。ここでは挿絵という新たな手法も用いられている。ハーンは、一連の独自の手法を駆使することで、報道記事というジャンルに新風を吹き込み、ついにスター記者となり、この分野での成功を掌中に収めたのである。

こうした報道記事の物語化は、彼の後の創作過程に重要な影響を及ぼすことになるが、この論点は本論の第4章と第5章で詳細に論じることになる。

第2章「新聞における風刺・風俗画」では、以下の二点に焦点を当て、論じる。すなわち第一は挿絵の制作者としてのハーンに注目する。第二は、その挿絵記事にみられる特徴を分析する。第一の点に関しては、画家との出会いに関するハーンの記事と彼が編集した絵入り雑誌を取り上げる。第二に関しては、実際ハーンが手掛けた挿絵記事を分析の対象にする。ハーンは、実にニューオーリンズにおいて181点もの挿絵記事を残した。それらは、政治・社会に対する風刺記事と人々の日常を描いた風俗記事に大きく分類できる。若干の政治風刺を除けば、社会に対する風刺記事を含めて、身近な日常生活に関わる素材が圧倒的に多い。本章では、人々の生活に関わる挿絵記事の中から特徴的なものを取り上げる。それは、警察の腐敗に対する風刺であり、日常生活の中で生じる様々なトラブルに関する風刺、そして人々の素朴な日常を描いた風俗ジャンルに属する挿絵記事である。

第一の点つまり挿絵の制作者としてのハーンについては次のことが重要である。ハーンは、シンシナティにおいて、新聞に使用した挿絵によって成功し、雑誌に使用した挿絵によって失敗した経験を持つ。成功にせよ、失敗にせよ、挿絵がもつ威力をハーンは実感し、その実感は彼に日刊紙に挿絵記事を使うという試みをさせた。その試みに必要だったのは、当然、挿絵を制作できる技術である。しかし、それだけではない。挿絵を入れて、効果が

得られる素材を的確に捉える目が重要である。ハーンは、まさにその両方の素質を兼備した挿絵制作者だったのである。挿絵制作者としてもハーンは非凡な力を発揮したといえる。

挿絵記事の特徴は次のような点に顕著にみられる。警察に対する風刺記事において、ハーンが、権力を持つ側の不正を厳しく批判していることである。町のトラブルを扱った記事には、当時貧民の職業と見なされていた洗濯屋のような社会的弱者が主として登場する。ハーンは、彼らに少々問題があると考えたとしても、温かいまなざしを向ける。風俗画を取り入れた挿絵記事は、目に見える町の姿だけではなく、その中に潜んでいる庶民の哀歓をも表現したものである。本章で確認できるのは、ハーンの挿絵記事が、風刺・批判より、むしろ人々の日常に目を向けた際に、ユーモアおよびペーソスが共存するあたたかな作品となっていることである。

この時期、果敢に新たな試みに挑戦するハーンのこうした資質が、いち早くニューオーリンズ新聞界に挿絵導入という新たな時代の幕明けを可能にしたのであった。ハーンは、時には厳しく、時には温かく、時にはユーモラスに19世紀末のニューオーリンズを歴史の中に描き残したのである。

第3章「異文化を捉える文学的スケッチ」では、ハーンの異文化記述の変遷とその意義を論じる。この章でとりあげるのは、新聞に掲載されたシンシナティの黒人社会およびニューオーリンズのクレオール社会に関する文学的スケッチである。

黒人とクレオールとはシンシナティとニューオーリンズにおけるマイノリティであり、両者とも外部とは関わろうとしない性質の社会を形成していた。それゆえ、その様子は外部の人間にとって未知な存在であった。ハーンはそのような存在に目を向け、スケッチの素材として取り上げた。そのスケッチは、黒人社会を細部に至るまで観察している。しかし、ハーンは彼らに共感することはない。彼らの生活を表層的に素描するのみである。それはあたかも、黒人の生活を観察しながら通り過ぎる者の視点、いわば、それは通過者の観察といえる。ニューオーリンズにおいてはそこに新たな視点が加わる。クレオールのスケッチには、従来と同じく、詳細な観察眼が働くが、それだけではない。ハーンはクレオール社会を内部からもとらえているのである。彼は、クレオールの内部で生活した。彼は、こうしてクレオールに共感し、住民と同じような視点を持つことに成功したのである。つまり、定住者の視点をも獲得したのである。その結果、彼のスケッチは、クレオール社会に対して、通過者の観察と同時に定住者の視点を持つようになった。このように二つの視点を併せ持つ複眼的な見方は、後

のハーンの作品に定着したのである。異文化の捉え方が変化した原因のひとつとして、ニューオーリンズにおける読者が誰なのか、という問いに応えなければならないだろう。つまり、かつてシンシナティにおけるスケッチの読者は専ら外部の人間であったと考えられる。その理由は、奴隷解放直後の黒人の識字率が高くなかったと推測される点、新聞を買うほど、黒人が経済的に豊かではなかった点、『インクワイヤラー』紙が南部に共鳴する民主党支持の新聞だった点である。それに対し、いまやニューオーリンズにおいてはクレオールの人々も読者に含まれていたのである。この読者層の違いは、ハーンの異文化描写の変遷を論じる上で見過ごすことはできない。

以上3章で、ハーンが通過者として細密に観察するという視点を超えて、クレオール社会の中で、自らも定住者としての視点を獲得したことを確認する。もろもろの生活を体験しつつ、当事者性を獲得することで、ハーンの文学的世界は奥行と深みを加えたのである。続いてハーンのローカルな事象への関心の深まりを辿りながら、ハーンの作家としての意識が決定的になる過程についても確認する。

第4章「ローカル・カラー文学への志向」では、ハーンのジャーナリストから作家への変化の過程を考察する。そのために本章は、具体的に以下の二点について論じる。第一は、ハーンが報道記者から、作家になるべく志を新たに努力した過程を辿ることであり、第二は、その成果である小説『チータ』の文学的特色を分析することである。第一に関しては、ニューオーリンズの南部作家ジョージ・ワシントン・ケイブルとの関係を軸に論じる。

第一においてハーンとケイブルとの関係に注目する理由は、ケイブルがハーンにとって作家になるためのロール・モデルだったと考えられるからである。ハーンは、シンシナティにおいて、作家になるための登竜門として新聞記者の職を選んだ。しかし、その道は彼の望む通りには拓けなかった。その際にハーンが目を向けたのが、当時アメリカ文学において流行したローカル・カラー文学である。ローカル・カラー文学は、変わったものや異国的なものに集中しようとしたハーンの文学的志向に合うものであった。そして、南部文学の代表とされたケイブルは、ハーンと類似する状況の中で作家として成功した人であった。ハーンは、ケイブルの成功から作家への道を見出したと思われる。その理由は、ハーンがケイブルのいるニューオーリンズに行き、すぐケイブルをとの親交を結び、彼と一緒にクレオール音楽の蒐集をするなど、ケイブルと共に行動をしたからである。そのことから、ハーンが南部文学作家への道を志し、ニューオーリンズを人生の転換の地として選んだことが見て取れる。ケイ

ブルは、ハーンにとって高い壁であった北東部の文芸雑誌に彼を紹介した。それは、ケイブルがハーンに作家への第一歩となる道を拓いてくれたことを意味する。ハーンもその好意に応え、それを契機に脱皮したかのように活発に文筆活動を行なった。その結果、まもなくハーンも南部作家の一人として知られるようになったのである。

本章の第二の柱は、この時代のハーンの転機を示す作品『チータ』である。『チータ』は、南部作家としてのハーンの最初の小説である。同物語は、メキシコ湾の小さな島を襲ったハリケーンと生き残ったクレオール少女の物語を主題としている。同作品の特徴として、まず、事件を劇的に再構成する手法について述べる。これはハーンがシンシナティの報道記者として働いた際、事件を劇的に伝えるため培った手法であった。さらなる特徴は南部文学の要素が強いことである。南部文学の要素とは、異国的な舞台背景、現地の人々を主人公とすること、そして方言がふんだんに取り込まれていることである。[25]このように『チータ』は、ハーンがシンシナティ時代に培った手法が活かされたものであり、南部文学の本質を自己のものとして、地方色鮮やかに表現された作品でもある。ハーンは、『チータ』を世に出すことにより、作家としての自立を決意したと言っても過言ではない。

第5章「再話文学の開花」では、ハーンが作家としての自己意識を高め、後のハーン文学の白眉である要素がどのように形成されたかに視点を移す。ハーンの再話の出発点は、1884年に刊行された『飛花落葉集』とされる。しかし、同書の前に再話の手法が用いられた新聞記事があった。シンシナティからニューオーリンズに向かう途次に書き上げた「熱帯の入口にて」"At the Gate of the Tropics"である。同記事の中で、ハーンはニューオーリンズに対する第一印象を綴り、当地のナツメヤシに纏わる伝説を紹介する。その伝説は、アメリカの詩人であり小説家であるトーマス・ベイリー・オールドリッチ(Thomas Bailey Aldrich, 1836-1907)が書いた「アントワーヌ神父のナツメヤシ」"Père Antoine's Date-Palm"であった。ハーンは、記事の中でオールドリッチの作品を紹介する体裁を取っているが、原作と比較してみると、かなりの相違点が見られる。つまり、ハーンの再話手法により書き変えられていたのである。本章では、ハーンが本格的に再話作家として活動する前に、新聞記事において再話手法を用いたことに注目し、その再話にどのような特徴が見られるのか、また、それが後の作品の特徴とどのような関連を持つかについて論じる。最も早い時期に書かれたハーンの再話の特徴を明らかにすることによって、再話作家としてのハーンの特質をより鮮明に浮かび上がらせることができると考える。

シンシナティ時代の犯罪報道記事にみられる文学的手法が再話の中に取り入れられたとすれば、次章において取り上げる『ユーマ』には、ニューオーリンズ時代のスケッチにみられる異文化へのまなざしが反映されている。

第6章「解放黒人問題とハーンの姿勢」では、ハーンがニューオーリンズならびにマルティニク島の解放黒人および混血の人々をどのように捉えていたのかという点を論じる。南北戦争後の19世紀後期において、ニューオーリンズでは解放黒人をめぐって激しい論争が巻き起こっていた。黒人への公民権付与が主な論点である。南部の白人は、既存の秩序を維持しようとする伝統的考え方を主張し、連邦政府は、解放黒人をアメリカ市民として認めようとする新しい考え方を主張した。ハーンは、南部における新旧の衝突について、記事「南部の預言者」"Southern Prophet"を書いた。ニューオーリンズの著名な歴史家シャルル・ガヤレ（Charles Gayarré, 1805-1895）の論説を紹介する記事であるが、この記事には、解放黒人の公民権に対するハーンの考え方、ひいては有色人種に対するハーンの姿勢が示される。本章では、まず、「南部の預言者」を取り上げ、解放黒人問題に対するハーンの姿勢を明らかにする。続いて、その姿勢が実際に彼の文学作品に反映された例を見る。マルティニク島の黒人奴隷を主題にした『ユーマ』である。この小説は、奴隷制廃止以前のマルティニク島を舞台としており、奴隷制廃止を主張する側との激しい論争が作品の中に見られる。大きな変化がもたらされた時代をハーンがどのように描いたのか。異なる価値の衝突に関するハーンの姿勢はいかなるものであるのか。『ユーマ』の分析を通して、ハーンの文学世界を通底している異文化に対する独自のスタンスを浮き彫りにする。

第1章　シンシナティにおける犯罪報道記事

ハーンは1872年から1877年まで、アメリカの中西部オハイオ州のシンシナティにおいて日刊紙の報道記者として働いた。最初の約3年間（1872年11月～1875年7月）は『インクワイヤラー』紙に、続く2年間（1875年8月～1877年10月[26]）は『コマーシャル』紙に勤務した。この約5年間の記事を概観すると、ハーンが実に様々な分野の記事を書いたことがわかる。文学の書評、日常生活に関わる情報、社会的腐敗の告発、社会的弱者への取材、犯罪事件の取材、講演や公演の報告、社会各分野における人物のインタビュー等である。[27]これらの記事でも、ハーンは社会の闇の部分や人々の目に留まりにくい日常世界から素材を掘り起こすことを好んだ。『インクワイヤラー』紙の編集長ジョン・A・コカリル(John Albert Cockerill, 1845-1896)は後年、「ハーンは貧しい人々の生活について書くのが好きだった。彼は都会の闇の路地をさ迷い歩き、ぞっとするような恐ろしい場所から魅力のある素朴な物語を掘り出した」と回顧する。[28]大手日刊紙の見習い記者として仕事を始めた若きハーンが、日常のニュースを伝達する一方で、独自の世界をみいだそうとしていたことがわかる。彼は人々の目を引く素材を取り上げ、後述するように独特な手法を用いて伝えた。その手法が使われたのが、犯罪に関する記事である。シンシナティにおける記者生活の中で、『インクワイヤラー』紙における最初の約3年間、彼は最も多く犯罪関連記事を書いた。そして、その記事の一つ「皮革製作所殺人事件」"Violent Cremation"が評判をとった。

「皮革製作所殺人事件」は、ハーンが報道記者として一躍名声を博すこととなった記事として、ビスランドを始めとする伝記的研究の中において必ず言及されるほどに重要な位置を占める。2004年、『インクワイヤラー』紙の現役記者であるフィンセンは、ハーンが記事の中に複数の挿絵を挿入したことなど、形式的な面において当時の新聞界の常識を破るものだったことを指摘した。[29]里見繁美は、「ラフカディオ・ハーンのシンシナティ・ニューオーリンズ時代」[30]の中で、フィンセンの解説を踏襲し、挿絵の挿入や過度なセンセーショナリズムは、ハーンが編集した雑誌『ジー・ギグランプス』*Ye Giglampz*の経験に起因している、と結論づけている。[31]

本章においては、フィンセンの解説を踏まえて、ハーンの記事に見られるセンセーショナリズムを時代的背景の考察と共に取り上げる。それが第1節である。第2節では、初期2年

間の報道記事を取り上げ、「皮革製作所殺人事件」にみられるハーンの報道記事の特徴が形成されていく過程を明らかにする。第3節では、「皮革製作所殺人事件」を取り上げ、試行錯誤のうちに形成されたハーンの手法がどう反映されたのかを考察する。そして、ハーンの記事が当時の他の新聞記事と異なる独自性があったことを確認するため、他の日刊紙の記事との比較を通して考察し、実証する。

1.『インクワイヤラー』紙におけるセンセーショナリズムの推進とハーン

1.1. シンシナティのアイルランド移民者ハーン[32]

1869年、後見人モリヌークス にアメリカ行きの片道チケットを渡されたハーンは、19歳でイギリスから単身渡米した。シンシナティに在住するモリヌークスの妹夫妻の許に行くようにと言われたのである。ハーンはリバプール港からニューヨーク行きの移民船に乗った。ニューヨークに着いたのは初夏であった。[33]そこから移民列車でシンシナティに向かった。当時、シンシナティには、数多くの移民者がおり、その数はシンシナティの人口のほぼ3割を占めていた。移民者の8割以上はドイツやアイルランドからの移民者で、[34]そのアイルランド系移民の中に19歳のハーンがいた。一文無しであったハーンは、最初の2、3ヶ月間、モリヌークスの義弟トマス・カリネーン(Thomas Culinan)の仲介により、アイルランドの親戚からわずかな送付金(計5ドル)を3回にわたって支給されるだけという状態であった。しかし、カリネーンは、扶養家族を大勢抱えていたため、ハーンを厄介扱いした。彼の態度にハーンは屈辱を感じ、二度とお金をとりに行かなかった。[35]その後当然ながらハーンの生活は厳しさを増すことになった。後年異母妹アトキンス夫人(Minnie Charlotte Atkinson, 1859-1932)[36]に宛てた書簡に、この時期の苦労が記述されている。書簡によると、ハーンは宿屋の給仕や電報配達、また店の事務所の会計係など、実に様々な職に就いたが、実際そのような仕事は彼にはほとんど不向きであった。電報配達の仕事を一日でやめると、それを紹介した知人達は怒り、その後彼の世話を拒否したというエピソードも語られる。家賃すら払えず、ついに下宿屋から追い出され、路上で眠っていたところを、警官に咎められ、馬屋で寝たこともある、という。[37]

そのような厳しい状態から彼を救い出したのは、印刷業者ヘンリー・ワトキン(Henry Watkin, 1824-1911)[38]であった。ハーンとワトキンがどのように出会ったのか、その経緯は明らかではないが、初対面については異母妹に宛てた手紙に次のように記されている。

> 私は彼〔ワトキン〕に助けを求めました。彼は私を気に入ってこう言いました。「君は何も知らんだろう。でもまあ、私が仕込んでやろう。店で寝ればいい。給料は出せんよ。君はまだ何の役にもたたんからな。まあ、せいぜい私の話し相手になるぐらいだろう。だけど、食事はちゃんとやる」。彼は私に紙くずのベッドを作ってくれました。(本の裁断所から持ってきた紙くずです。)気持ちがいいし、温かいベッドでした。紙を片付けたり、店の床掃除をしたり、その合い間には、使い走りをしてワトキンさんの質素な食事をいただきました。[39]

この時、ワトキンは、ハーンを物資的に助けただけではなく、心理的な安定も同時に与えたといえる。ワトキンとハーンが出会った時、ハーンは寝食に不自由し、当然まともな職業もなかった。ワトキンは、ハーンが生活のための技術を何一つ持たず、ただ熱心に本を読み、文章を書くことに夢中であることを発見した。19才のアイルランド移民者ハーンは、年齢に比べ身体は小さく隻眼だったことも手伝い、自らの外見にコンプレックスをもっていたため、対人関係には消極的な側面があった。しかし、ワトキンはそのようなハーンの外貌は気にせず、彼に印刷工場の使い走りなどの仕事をさせながら、寝床や食事の面倒をみたのである。彼はハーンの生涯において'Dear Old Dad'[40]と呼ばれた、父親代わりの存在であった。

ワトキンとの暮らしから安定を得たハーンは、1872年まで、フランス語の翻訳や業界誌の編集助手、また出版社の校正係などの仕事に携わった。そして1872年からシンシナティの有力日刊紙の一つであった『インクワイヤラー』紙に寄稿を始めることになったのである。

1.2.『インクワイヤラー』紙の編集長との邂逅

このように学歴も経験もないアイルランド系移民青年がいかにして有力日刊紙に寄稿できるようになったのか。ハーンが新聞記者として活動を始められたのには、二つの理由があったものと思われる。第一はハーン自身の文学的才能であり、第二は当時の『インクワイヤラー』紙の変化である。第一の点に関しては、先行研究において必ず言及されるある逸話がある。その逸話は、ハーンの文学的才能がどうであったかを雄弁に語っている。当時の『インクワイヤラー』紙の編集長ジョン・A・コカリルが後年に書き残したものである。コカリルは、1895年に『ニューヨーク・ヘラルド』*New York Herald*紙の極東通信記者として来日し、当時、神戸に暮らしていたハーンと再会した。そして、翌年の1896年、『現代文学』

Current Literature[41]にハーンとの出会いを回顧する記事を掲載した。

> 二十年ほど前に、私が西部の町で日刊新聞〔『インクワイヤラー』紙〕の編集長をしていた頃のことである。ある日、一人の風変わりな色の黒い小男が、編集室を訪ねてきた。妙におどおどしていて、おそろしく度の強そうな眼鏡をかけ、福の神に見放されたとしか思えない格好をしていた。
>
> その男は蚊の鳴くような声で、自分の原稿を買ってくれまいか、と言うのだった。私は金の支払いについてはあまり権限がないけれども、書いたものを見たうえで考えてみようと言った。すると彼は、コートの下から原稿を取り出して、震えるように私の机に置くと、まるでゆがんだ茶色の妖精(ブラウニー)のように逃げ去った。とても言いあらわせないような不思議な印象だった。
>
> その日も遅くなってから、彼の置いていった原稿を読んでみて、私はびっくりした。魅力的な文章の中にキラリと光る力強い思想が溢れていたのである。[42]

この時採用された原稿は、アルフレッド・テニソン(Alfred Tennyson, 1809-1892)の新作『国王牧歌』*Idyls of the King*(1872)を論評したものとされる。[43]「国王牧歌」は3回に分けて1872年11月24日、12月1日、12月9日に『インクワイヤラー』紙に掲載された。コカリルは、まだ正式な記者としてはハーンと契約しなかったものの、見習い記者として受けいれた。ハーンはまもなく他の仕事を全て辞め、『インクワイヤラー』紙への寄稿に専念し、原稿料のみで生活を始める。[44]それがハーンにとって最初の筆を執る仕事となったのである。

ハーンが記者として働くことができた第二の理由に関しては、重要なポイントであるはずなのだが、19世紀末のアメリカの新聞や『インクワイヤラー』紙の歴史と関連する事項であるため、ハーン研究の中ではほとんど言及されてこなかった。[45]すなわち、19世紀ジャーナリズム全体の変化に従う『インクワイヤラー』紙自体の変化であった。

1.3.『インクワイヤラー』紙の変化[46]

『インクワイヤラー』紙自体の変化は1870年代に入ってから顕在化した。当時の新聞は、政治と密接に関わりを持っており、『インクワイヤラー』紙も1870年代に入るまで非常に政治色が強い新聞であった。南北戦争の折には、民主党を支持するコパーヘッド(Copperhead)の代表的な新聞の一つとされた。[47]コパーヘッドとは、軽蔑的な呼称で、

民主党支持者でありながら南部に同情的であり、リンカーン大統領に反対した北部の人々を指すものである。[48]

しかし、1865年に戦争が終結すると、アメリカの新聞全体が変わり始めた。アメリカの新聞の歴史を扱った20世紀の研究『アメリカン・ジャーナリズム』*American Journalism*では、1872年から1892年の間を「独立新聞の台頭」"The Rise of the Independent Press"と位置付けている。[49]独立とは、新聞が政治から独立したことを意味し、党派の代弁者としての役割から脱却したことを意味する。南北戦争以前、そしてその最中では新聞の社説が政局に大きな影響を与えた。しかし、戦後、一応の平和が戻ってくると、新聞の社説や政府の行事に対しては、人々の関心は弱まる。[50]それに代わって、今や人々はより身近に感じられる日常のニュースに対し期待が高まるようになった。読者のこうした新しい需要を満たすために、新聞における報道記者の重要性が高まったのである。[51]

シンシナティにおいてこの変化に素早く対応したのが『インクワイヤラー』紙であった。当時、シンシナティには、『インクワイヤラー』紙以外に二つの英語の朝刊新聞があった。[52]『コマーシャル』紙と『シンシナティ・デーリー・ガゼット』*Gazette*紙（以下『ガゼット』紙と略記）である。両紙とも売り上げにおいて、『インクワイヤラー』紙より大きな新聞であった。1872年、父親から会社を受け継いだ若き社主ジョン・R・マクリーン(John R. Mclean, 1848-1916)は、新聞の性格を変え、ライバル紙を抑えて、『インクワイヤラー』紙を急成長させようと考えた。彼は、『インクワイヤラー』紙から党派色の払拭を決断し、報道記者であった自身と同年代の若いコカリルを編集長として抜擢した。[53]

コカリルは、後にピューリツァー(Joseph Pulitzer, 1847-1911)の下でニューヨークの『ワールド』*World*紙の編集長として務めた人物である。同紙は、アメリカ新聞史において最も大きな足跡を残した新聞であった。[54]1869年にコカリルは『インクワイヤラー』紙の記者となり、1年余りの後同紙の編集長に抜擢されたのである。彼は、『インクワイヤラー』紙の売り上げを伸ばすために、有能な報道記者を発掘、育成する必要があった。そのような時期にハーンが彼の前に現れたのである。25才のコカリルは猛烈に働き、部下に対して情け容赦をしなかった。『インクワイヤラー』紙には新しい風と活気が吹き込まれ、発行部数は伸びる一方であった。スティーヴンスンは、『評伝ラフカディオ・ハーン』に次のように記す。

> コカリルは、後にもっと大きな仕事でセイント・ルイスやニューヨークへ移ったが、最も意気盛んであったのは、『インクワイヤラー』のボスとして君臨していたこの時

代だった。それをまともに受けた部下の一人に、ハーンという名のあまりぱっとせぬギリシア系アイルランド人の小男がいたわけである。[55]

コカリルが編集長を務めてから、『インクワイヤラー』紙はセンセーショナリズムの先鋒となった。1890年代、ニューヨークで旋風を起こした「イエロージャーナリズム」は、『ワールド』紙と『ジャーナル』*Journal*紙が発行部数を伸ばすべく、扇情的な記事等を武器につばぜり合いをした結果、生まれた言葉である。その『ワールド』の編集長がコカリルだったことを考えると、『インクワイヤラー』紙のセンセーショナリズムは、「イエロージャーナリズム」の先駆けだったともいえよ。

ハーンは、『インクワイヤラー』紙のセンセーショナリズムにとって、まさに強力な武器だった。彼は、巷で起こる殺人、堕胎などの犯罪、ホームレスや下層民の生活、また動物の死骸や人間の死体といった、19世紀のアメリカで、その市民たちが出会わないような素材を取り上げた。こうしたいわば非日常的な素材は、センセーショナルな記事にあつらえ向きであった。ハーンは、特にこうした素材を収集、取材した。彼はそれらを時には生々しく、時には鮮烈に描きあげた。婉曲的に上品に扱うのではなく、一般大衆向けにどぎつい表現を交えて、人々を刺激するハーンの記事は、読者の好奇心を満たし、『インクワイヤラー』紙の販売向上に大いに貢献したのである。当時の上司コカリルについて、後年ハーンは知人宛ての手紙の中で述懐している。

〔コカリルは〕やり手の厳しい上司で、天性のジャーナリストでした。彼に好意を抱く者など、私たちのうちには一人もいなかったでしょうが、その経営の才には、みな一目置いていました。彼は私たちを怒鳴りつけては、半殺しにするまで働かせるのです。(自分自身に対しても容赦しませんでした。)〔…〕わずか2,3年で、彼は発行部数をぐんぐん伸ばしました。[56]

半殺しになるまで働かされたという証言は、文字通りの意味に近かったようである。この時期、ハーンは午後1時から午前3時まで、一日約14時間も働かされていた。ハーンが『インクワイヤラー』紙に書いた記事は、約280篇以上ある。[57]インクワイヤラー』紙がセンセーショナリズムの代表的な新聞として位置づけられることに、ハーンは一役買ったのである。

こうした社会環境的な要因にハーン自身の文学的才能が交差した時、新聞記者とし

ての彼の名声は確固たるものとなった。では、その文学的才能とはいかなるものであっただろうか。

2. 劇的に描写される犯罪事件

ハーンが『インクワイヤラー』紙に入社したのは将来的に作家になることを望んでいたからである。それはシンシナティを離れた後に彼が書いた記事に窺える。1880年4月11日付ニューオーリンズの『アイテム』紙に掲載された「西部の新聞労働」"Western Newspaper—Work"には、若者たちが「報道界は文学へのある登竜門を提供する」[58]と思い、ジャーナリズムの世界に入ったことが語られている。その中の一人がハーンであったのだ。しかし、毎日約14時間に及ぶ報道記者の過重な仕事は、作家になるための十分な時間を彼に与えなかった。しかし、そのような状況の中でも、彼は報道記事という限られた範囲の中で、文学的手法を用いた。結果だけが必要な報道でも、その素材が人々の気を引き、読者の好奇心を満たす素材であれば、結果以外の部分にも目配りをし、読者に「見物」の機会を与えた。ハーンの仕事ぶりについて、シンシナティ時代、ハーンと一緒に報道記者として働いたジョセフ・S・テュニソン(Joseph S. Tunison, 1849-1916)は、次のように語る。

> 〔ハーンは〕与えられた仕事のためなら、困難、危険をものともしないことは、誰も認めていた。……どの上司も、彼を朝刊新聞で一番きつい仕事である夜間勤務にまわした。というのは、センセーショナルな事件はたいていここから出てくるうえに、異常で刺激的な事件を扱わせたら、彼の右に出る者はいなかったからである。[59]

『インクワイヤラー』紙において、ハーンは厳しい勤務環境に耐えながら、同紙が求める記事を次々と探し出してきた。この時期にハーンが追求していたことは、人々の目を必ず釘付けするような刺激的なものであり、それは『インクワイヤラー』紙が追求する目標、すなわち販売部数を伸ばすことにも合致していた。ハーンは1874年10月4日付の記事「大めがね」"Giglampz"の中で、自分の傾向を第三者になぞらえて、次のように描写する。

> 一風変わったグロテスク・アラベスク趣味の男がいた。この若い男は生まれつき極端なものの賛美者だった。彼は「ぞっとするほど恐ろしいもの」、または「耐えられないほど美しいもの」しか信じていなかった。フランスの煽情派を崇拝し、朝食を取っている人々の鼻先に、骨や血や毛髪の混った悪臭紛々たるものを突きつけることに耽溺していた。他人の胃をむかむかさせることは彼の格別の喜びであった。[60]

単に刺激的な素材を取り上げるだけでは、他人の胃をむかむかさせることはできない。その素材をどのように伝えるのか、つまり表現手法も重要なのである。次節では実際にハーンの記事を取り上げ、素材を選ぶハーンの視点とそれを伝える文学的手法について論じる。

2.1. ニュースから掘り出される物語

ハーンが見習い記者となって間もない頃に書いた「愛の真髄」"The Elixir of Love"（1872年12月20日付『インクワイヤラー』紙掲載）は、報道記者としてハーンが目指す方向を示す。記事の内容は、6か月前に起こった殺人事件の犯人が刑務所で自殺を図ったニュースである。6か月前の殺人事件は二人の男性と一人の女性の三角関係から起こったものだった。記事には殺人事件の詳細は述べられていない。ただ、ボンドという男性がシングルデッカーという夫人を間に挟んでトムソンという牧師を殺した事件だったことが言及される。加害者ボンドは収監され、裁判を受けている状況である。その際、ボンドがシングルデッカー夫人の危篤を知り、自殺を図ったという事件である。ハーンは、記事のタイトル「愛の真髄」の下に次の三つの副題を付けた。「鉈振り犯人、自殺を計る」、「頸静脈を切ったが失敗。動脈を切ろうとする」、「彼は一途に愛のため死のうとした」。この副題から、ハーンが同事件において強調したい側面が浮かび上がる。すなわち、自分の首を何度も切り裂く自殺の場面、そして愛のために自らの命を絶つという側面である。記事の冒頭から、この事件を劇的に伝えようとするハーンの意図が窺える。6か月前の殺人事件を演劇の第3幕と例え、その事件に関わる人物を俳優として紹介する。登場人物は3人だったが、一人は殺され、もう一人は危篤状態であるため、一人残された収監者の男性が記事の主人公となる。恋敵の頭を鉈で裂き砕いた犯罪者としてではない。愛する女性の危篤を知り、苦しんだあげく、自分の命までも捨てようとするドラマの主人公としてである。

記事はボンドが自殺を図る経緯を辿る。裁判から拘置所に戻る際、ボンドの弁護士は、

ボンドの愛した女性シングルデッカー夫人が危篤であることを彼に知らせる。その様子は、弁護士ウィルソンとボンドの会話によって紹介される。シングルデッカー夫人が死に瀕していると聞いたボンドは泣き崩れる。

> これを聞き、ボンドは胸が張り裂けるようにすすり泣いた。そして、この世で最後の希望が無くなったと言った。このちょっとした知らせは、彼が耐えられる苦痛の度合いを超えたようにみえた。しばらく彼が子供のように泣くと、ウィルソンが言った。
> 「泣き止みなさい。知られているほど彼女の状態は悪くないかもしれない。」
> するとボンドが答えた。
> 「俺はこの世の中で彼女に何事も起こらないようにするはずだった。」
> ウィルソン――「なぜだ、ボンド。人々はみんな君が彼女をとても憎んでいると思っているぞ」
> ボンド――「違う。俺はこれまで彼女を憎んだことはないし、今も憎んでいないんだ。彼女を俺の意のままにできたなら、彼女の髪の毛一本にも害を及ぼさなかったはず。」[61]

ハーンは収監者の自殺未遂の知らせを聞き、現場に向かったため、上記の会話を直接聞いたとはいえない。おそらく弁護士を取材して聞いた情報であろう。しかし、その会話は、「弁護士の証言によると」のような伝言の形を取ってはいない。小説の作者が、作中人物の会話を挿入するように、二人の会話は記事に挿入される。このことは、ハーンが事件を取材し、それを全知の作者として伝えようとしたことを意味する。「登場人物」に直接語らせる手法は、後の記事にも用いられる。

弁護士との対話後、拘置所に戻ったボンドは、監房の窓を自分の上着で塞ぎ、自殺を図った。看守たちが駆けつけてみると、ボンドは喉から血を流してうずくまっていた。ポケットナイフで喉や腕を切り付けたのだった。治療を受け、しばらく眠った後目が覚めると、彼は叫ぶ。

> 彼〔ボンド〕はうつらうつらしながら、不明瞭な言葉で何かをぶつぶつ呟いた。その時、誰かの歩く音を聞いて彼は急に飛び上がった。布団を投げ飛ばし、肘を

ついて起きた彼は、興奮した目つきで周囲を見回し、絶叫した。

「彼女は死んだ──彼女は死んだ、俺はどうすればいいんだ。」

そのあと、怪我した手を布団から出し、喉の切口をもみちぎろうとするかのようにひっつかんだ。しかし、看護人たちが素早く制止し、彼の自害を防いだ。彼は再び横になり、目を閉じて話した。

「俺はまだ死んでいないんだな。俺が死んだと誰が言った。」[62]

目覚める度に、苦しみ叫びながら自害しようとする彼の姿は、何度も繰り返し描写される。ボンドは鉈で牧師を殺した凶悪犯罪者だが、他人を殺害するのと同様の残酷さをもって自らの命をも断とうとする。シングルデッカー夫人に対する愛は暴力的でありながら、しかし究極な形の愛として、すなわち「愛の真髄」として表現されるのである。

ボンドの牧師殺害は、その凶暴性と煽情性のゆえに事件当時には町を騒がせたことだろう。だが、その事件は、ハーンが『インクワイヤラー』紙で働く前に起きた事件であり、本来なら報道記事としては、すでに時宜を失した話題だった。人々の関心の対象から遠くなった話題に改めて興味を喚起するため、ハーンは、事件の背景に潜む愛の純粋さと犯罪という、劇的要素に注目した。表面的事実を淡々と伝えるよりは、その裏の事情をも探り、劇的に伝えたのである。

日常的で平凡なニュースに非日常的ドラマを見つけ、記事にまとめあげる傾向は、約20日後に書かれた記事「凍死」"Frozen to Death"からも看取できる。1873年1月13日付けの記事「凍死」は、テネシーからのニュースを紹介したものである。メンフィスの下流で「3人の男が小型ボートで凍死体として発見。ボートはメンフィスから30マイル離れたところに浮遊する流氷の間で発見された」、というニュースだった。それに加え凍死体の身元確認ができないと書かれてあった。事実だけが簡略に伝えられた記事を見て、ハーンは「恐ろしい暗示に満ちている」と述べる。つまり、夜、ウェスタン川に立っている誰かの目の前に、流氷に紛れ、凍死体を乗せたボートが流れ過ぎたかもしれない、ということである。ハーンは、その光景を説明するのではなく、読者の頭の中に描かせる。「ニューポート・ブリッジに立ったと想像してご覧なさい」といい、川を流れる流氷が橋脚にぶつかり、割れる様子を想像させる。そして次のように述べる。

頭の中にこのような情景〔流氷が割れる様子〕を描き、実際に12月の肌を刺

すような突風に対してしっかりと身を包んだ時、想像してご覧なさい。目の前に流氷より暗く、高い物体が近付き、あなたはそれを見るために立ち止る。それは小型ボートで、橋脚に衝突し、半円を描きながら向きを変え、一瞬月明かりに照らし出される。なんてこった！あれは人間の顔だったか。死んでいるのか。あるいは、三人は（一瞬しか見ていないが、あなたは三人だと思った）厳しい寒さのせいで、昏睡状態になっているのか。[63]

寒い冬の夜、流氷と共に流れてくるボートとその中の死体、そしてそれを見つめる「あなた」の姿は、全てハーンの想像の産物である。ハーンは凍死体発見というニュースを膨らませ、ホラー映画の一場面のように脚色したのである。このシーンは記事のほぼ半分を占める。しかし、他の地方のニュースがシンシナティに紹介された理由は別にあった。狩に出て音信不通となったシンシナティの元市長の息子と同僚が死体の身元である可能性が出たのだ。すなわち、ハーンは、そのような事実の報道に先立ち、「川を下ってきた凍死体」から浮かび上がる想像の一場面を優先して扱ったことがわかる。事実を伝える新聞記事としては不要な叙述であったとしても、緊迫感にあふれ、あたかも読者自身がその場に居合わせているかのような臨場感の中で、小説を読むような面白さを読者に与えるのである。劇的な場面を設定し、それが読者の目の前で展開するように再現するハーンの記述は、彼の記事に最も効果的に用いられる手法であり、ハーンの記事の大きな特質であるといえる。

このような報道の仕方は、見習い記者となって間もないハーンが創出した方法であり、将来的に彼を報道記者として成功させた理由でもある。次項では、死体描写に対するハーンの嗜好について論じる。刺激的な素材をより刺激的に伝えるため、彼はどのような手法を用いたのか。

2.2. 五感を活かした写実的な描写

ハーンは、シンシナティにおいて死体に対する記事を多く書いた。死体解剖の最初の記事は、1873年4月16日付けの「墓を開いて検死」"Dug up"である。記事には、検死官が、すでに埋葬された死体を再び掘り出し、死因を究明するために再検死を行う過程が描かれている。死人は、ジョージ・H・ヴェルビルという人物で、当初は死亡原因として脳脊髄膜炎と診断された。しかし、彼が埋葬された後、死因が殴打あるいは何らかの暴力によ

るものではないか、という疑惑が生じたのである。ハーンは、検視官に付き添い、屍体が掘り出され、検死の一部始終を目撃した。そして、それを仔細に記したのである。ハーンの死体描写はいかなるものであったのだろうか。その一部を紹介しよう。

> メスを執ったエドウィン・ライヴス医師は、肋骨の上端から真直ぐ下に向かって鮮やかに切れ目を入れた。厚い緑色の皮膚は、メスの動きにつれて開き、内臓を覗かせていった。それから医師は肋骨を覆っていた皮膚をつまみ上げ、また戻し、注意深く靭帯を別にして、肺、肝臓、心臓、腎臓と、1つ1つ取り出した。[64]

ハーンの記述に従うと、検死官は、腹部から取り出した臓器に問題があるかどうかを調べるために、肝臓の所々に切り口を入れた。すると、その切り口から蒸気が発散し、死の悪臭が漂った。その匂いは、吐き気を催す死体解剖に病的な好奇心を持った人でさえも、一定の距離を保たせる悪臭だった。臓器の調べを終えた検死官が今度は頭部の検査に取り掛かる。

> 研ぎ澄まされた大型のメスが取り出され、耳から耳にかけての頭の部分に切れ目が入り、その下に頭蓋骨の白い骨の部分が見えた。
>
> 頭皮を頭蓋骨から剥ぎ取った時、前頭部の皮は裏返しになり、顔面に垂れ下がった。[65]

ハーンは、検死官が頭蓋骨から頭皮を剥ぎ取り、頭蓋骨を開けた上、脳髄を取り出して検査する行動を全て説明する。一人の医者がその脳を自分の研究に使いたいと申し出て、遺族の顰蹙を買ったことも省略せず記す。同記事の目的は、ヴェルビルの死因を明らかにすることである。そのため検死の様子を説明するのであるが、全ての過程を一つ一つ懇切丁寧に描くハーンの態度から、死体に対する彼の関心の深さが読み取れる。何の面白味もない検死室の状況が、一転して劇場に転換している。

上の記事ではグロテスクな死体の描写に重点が置かれているとすれば、次に取り上げる記事では、死体の描写に留まらず、死体に感情を移入する。そうすることにより、抗えない死に迎えられた人間の無力さや人生の無常さ、命の切なさが表れる。1874年5月3日付けの記事「死の舞踏」"The Dance of Death"は、ハーンが医科大学の解剖室を見学し

た内容である。タイトル「死の舞踏」は、階級や年齢や性別とは関係なく、「死は万人を襲う」という意味を寓意的に表現した絵画作品である。ハーンが記事の中で言及するハンス・ホルバインは、「死の舞踏」を主題とした木版画の連作で著名である。ホルバインの絵には、日常生活の中で、死が隣に来ていることに気付かない人々の様子が描かれている。万人が死の前では平等であり、誰も死には抗えないという「死の舞踏」の意味にふさわしく、記事には生のむなしさを表す一人の若い女性が登場する。ハーンの知人の医学生は、解剖室に「上玉」が入ったと『インクワイヤラー』紙の記者たちに話し、その死体について次のような会話をする。

「十九か二十の娘さ。ブロンドで、きれいな髪をしていたよ。体も素晴らしかった。腕や脚もすべすべ、機械で磨き上げたみたいだった。切り刻むのが惜しかったね」
「でも、やっちまっただろう？」
「もちろんさ。今ごろ彼女の体に何が残っているやら、よほど丈夫な胃袋でももっていなければ見れないだろうよ」[66]

知人が、ハーンに「丈夫な胃袋を持っていなければ」という言葉を使った理由は、1年前、解剖室に行ったハーンが、そこから逃げ出したからである。ハーンは、知人の誘いで解剖見学に行ったが、そこの悪臭に耐えられなかったことについて記す。そのことをからかい、知人がまた見学を誘ったのである。ハーンは、即、快諾する。ハーンは、この誘いに飛びついた理由は特に言及しないが、その背景には悪趣味ともいえる心理が垣間見える。二十歳のブロンドの白人女性が切り刻まれる状況は、他の解剖とは全く異なる光景を想像させるのだ。ハーンは、見学の理由について「そこ〔解剖室〕で遭遇するであろう魅力ある光景と臭いとを克明に伝え、わが読者の共感を呼び起そうというのである」[67]と語る。

彼が、しかし医科大で目にしたのは、展示室に標本として陳列されている、ミイラや身体各部の骨のコレクションやビンに保存された頭部のない顔だけの胎児などであった。解剖室には、知人の話した女性とは別人で、すでに医学生による解剖済みの死体がテーブルの上に置かれてあった。ここでハーンの詳細な死体描写がなされる。

骨、腱、神経や動脈、凝結した血の黒い塊等々、そして忌まわしい例の悪臭。

躯幹部の骨は腐食した肉片をあちこちに付着させたまま、なおまとまりを保っている。肉を削がれたばかりの肋骨から、肉の小片が垂れ下がっている。脊椎はすでに腐敗が始まって、ところどころ緑色に変色し、忌まわしい太古のムカデのような縞模様になっている。足首、脚、腿の骨はひとまとめに積み上げられ、これまた強烈な臭いを放つ。頭蓋骨と背骨は持ち去られていた。切断された両手が無造作に胸部に放置され、血のついた十指が悲しげに祈りを捧げているかに見える。[68]

頭と四肢が胴体から切断され、身体の肉の半分以上が取除かれた死体を詳細に描写するのは、ハーンが得意とする分野である。しかし、同記事には、他の死体を扱う記事とは一味異なる雰囲気が加わる。引用の最後の文章を見ると、切断され、胴体の胸部に放置された両手について、ハーンは祈りをささげているようだと記述する。胴体と両手だけが残った死体は、不気味なものである。しかし、ハーンの表現により、バラバラに解体され人間性を留めないような酷い姿になった、「誰か」が、せめて両手でもと、血を流しながら切に祈りをささげる光景が思い浮かぶ。ハーンは、単なる肉の塊に見えていた骸に魂を吹き込んだのである。物体化した死体を人間として蘇らせることに成功したともいえるだろうか。

二人は、記事の冒頭で言及された若い女性のところにも行く。ハーンは、ここでは、死体の具体的な様子ではなく、彼女の短い人生のむなしさに注目する。

それは部屋の中央の台に置かれていた。心胆を寒からしめる頭のない肢体。かつて愛し愛されたその肉体が、今や血のこびりついた肉塊と黒ずんだ骨。かつては名前もあった。冗談混じりに笑いこけながら寄ってたかってこれを切り刻み、手足をバラバラにした連中と同じ熱情と感情によって、この娘の生命が活動していたのである。ほんの二、三週間前まで、この血痕のついたきゃしゃな骨の枠組みの中で、一人の女性——うら若い、見目麗しい女性——の心臓がことこと脈打っていたのである。[69]

彼女の死体も解剖が進み、頭はなくなり、手足も切断されていた。しかし、ハーンはそのような様子から生前の彼女の姿を想像する。生のエネルギーに満ちた、若く美しい彼女に何があったのか。二十歳の彼女は、希望に満ちた輝かしい生を象徴する反面、突然死に

襲われた姿は、生の不確実さを象徴する。彼女は、二、三週間前まで、力強く脈打っていた自分の心臓が突如止まることも、自分が解剖室の台の上で、バラバラになることも、知らなかっただろう。彼女こそが、「死は万人を襲う」という記事のタイトル「死の舞踏」に最もふさわしい存在だったのである。

グロテスクなものをそのまま伝えるのではなく、その中に悲しさや切なさといった味わいを付けたのが、この記事から見られるハーンの文学的手法である。

2.3. 犯行現場の疑似体験

ハーンの犯罪報道記事において第3節で取り上げる「皮革製作所殺人事件」を除けば、最もセンセーショナルな記事は、中絶と子ども殺しに関するものである。中絶の記事には、施術の場面や中絶された胎児の姿が描写され、子ども殺しの記事には、自分の娘を殺した母親の話が取り上げられた。

1873年5月には、中絶を行う占い師の記事が掲載された。22日付「マダム・シドニー・オーガスティン」"Mme. Sidney Augustine"および翌日の23日付「千里眼の中絶師」"The Clairvoyant Abortionist"である。前者には、違法的に中絶を行なった占い師が逮捕された経緯が記される。そして後者には、証拠を確保するために、占い師の館を捜査する光景、そして裁判の様子が描かれる。記事に登場する占い師オーガスティンは、多くの女性に中絶を行なってきた人物だった。ある日訪れてきたヘティ・スパーリングも中絶を希望する一人だった。しかし、彼女は中絶の費用を持っていなかった。すると、占い師は彼女にお金の代わりに自分の女中として働くように命じた。25ドル分にあたる9週間働き終えなければ、施術は行わないとのことだった。10週目に入ったある日、彼女は施術を受けることとなる。次は施術に関するハーンの描写である。

> ヘティは若い女性たちがその部屋で奇妙な姿勢で立っているのをしばしばみた。彼女はその姿勢が何を意味するのか気になった。もちろん、見当はついていた。10週が過ぎ、お金が間に合った際、彼女の推測が正しかったことが判明した。婦人は彼女を奥の間に連れて行き、彼女が以前みた女性たちと同じ姿勢を取るよう指示した。婦人が使用した道具は、一方の先が球状の鋼製の棒と液体が入っている細長い注射器だった。[70]

犯罪の場面を具体的に描写するハーンでも、中絶の場面を詳述できなかったようである。その代わりに、ハーンは読者の好奇心を掻き立てる方法を取った。奇妙な姿勢で立っている女性や彼女らに使われた道具を紹介することにより、読者に戦慄の走る場面を想像させたのである。

しかし、中絶された胎児の死骸に関する描写には躊躇がない。「千里眼の中絶師」には、証拠確保のためにオーガスティンの屋外トイレが調べられる様子が記された。次の通りである。

> オーガスティン婦人の屋外トイレが引っ張り出され、深さ2フィートまでの汚物が調べられた。トイレ掃除に使う道具を汚物のあちこちに突っ込み、固い物質を探した。すると、道具の先のフックに服で包んだものが引っ掛かった。それは慎重に取り上げられ、地面に置かれた。包みを開いてすぐに、汚物が中まで入らなかったことが分かった。包みの中には流産した赤ん坊の残骸があった。人間の形を作り始めたばかりの赤ん坊の死骸だった。死骸は、血なまぐさい物質の腐敗した塊の中にあった。悪臭を放ち、凝固した塊だった。[71]

まだ完全な人間の姿をなしていない胎児の死骸が、トイレの汚物からすくいだされるのは、人々をぞっとさせる場面である。上述した胎児の死骸は服に包まれていたため、それでも原型を保っていた。しかし、若い女性が頻繁に出入りしたという証言を考えた際、どれほどの胎児が屋外トイレの中に埋もれているだろうか。ハーンは読者にその可能性を気付かせる。

> トイレの中の他の物質も取り出され、調べられた。汚物からそれ以上胎児の残骸が見つからなかった理由は容易に理解できるだろう。強くも固くもない動物質は、短時間で識別できないペースト状の柔らかい物質に変わるのだ。絹のドレスの中から発見された赤ん坊も包まれずに放りこまれたなら、おそらく他の胎児と同様に識別できない状態になっていただろう。[72]

ハーンは、現場において発見された死骸の状況をありありと読者に見せつけるところにとどまらない。調査員が突く汚物が実はペースト状になった胎児であると、恐ろしい想像を読

者に突きつけることによって一層の恐怖心を掻き立てるのである。

子ども殺しの記事においては、新たに犯罪現場を再現する手法が登場する。1874年8月2日付の記事「いつくしみ深い殺人」"A Motherly Murder"には、幼い娘を殺した母親の事件が取り上げられる。ハーンは記事の冒頭において、これまで見てきた悲しい話の中でも最も悲しい話であると紹介する。事件の概要はこうである。2歳を過ぎたクララという娘を持ったパーキンス夫妻は、夜通し喧嘩をする。その場には彼らの知り合いのJ・クレアという男が一緒にいた。彼は喧嘩の原因を提供した人物であった。パーキンス夫人は、精神的に不安定であり、喧嘩する間、かみそりで娘を殺そうとした。クレアが彼女を止め、一旦状況が落ち着くと、朝方になってパーキンスは外出し、クレアも家から出た。すると、パーキンス夫人は、使用人に戸締りをさせた後、彼女を家に帰らせた。娘と二人になった夫人は、家にガスを付けた後、娘の首を切り、自分の首も切った。後から家に戻ったパーキンスは、娘が死んでおり、妻は虫の息であることを知った。命を取り留めたパーキンス夫人は、娘クララを殺害した容疑で逮捕された。

実の娘の首を切って殺害した事件は、その事実だけで人々を驚かせるものである。しかし、ハーンは、事件が刺激的であればあるほど、伝え方によって、衝撃をより大きくできることを知っていた。彼は、人々に殺害の現場を再現して見せる方法をとった。ハーンはパーキンス夫人の行動を一つ一つ追っていく。

> 彼女〔パーキンス夫人〕は、全ての窓と雨戸を閉めた後、マントルピースの上にあった鎮静剤を2瓶飲んだ。それから、ガス灯の明かりを付けずにすべてのガス栓を開けた。(ガス灯の様子から、彼女があらかじめガス灯受けを壊そうとしたことがわかる)そして、むごたらしい行為をするため、アイボリー色の小さい時計を覆ったガラスを壊し、その中から恐ろしく鋭い破片を右手に強く握った。彼女は、洗面台の近くにひざまずき、闇の中から小さなクララを呼びながら、子供の喉を切るためゆっくりと前に進んだ。[73]

読者は、この描写を読み、パーキンス夫人と共に行動することになる。彼女は、家の全てのドアを閉め、娘クララと自分を外の世界から隔離する。それから、心中を確実にするため、家中にガスを漏らす。そして、ガラスの武器を持ち暗闇から娘を呼び込む。このようなパーキンス夫人の姿は、まるで獲物を狙う捕食者のように描かれる。娘は、獅子に喉をか

み切られた子羊のように何もできない。母親の慈悲を求めることだけが彼女に残った全てであった。

「あ、ママ、ママ、殺さないで」

彼女〔パーキンス夫人〕によると子どもは必死に願い、動脈の血がゴボゴボ強く流れ出る間、「ママ、ママ」と何回も哀願したそうだ。彼女は、片手で死んでゆく子どもを胸に抱き、ブスっと自分を強く刺した。気管に入った刺しこみは、首を横切り、喉の4インチ深さまで達した。[74]

母親が子どもを殺す場面は、同記事においてクライマックスである。ハーンは、その効果を大きくするため、小見出しを利用した。"O! MAMA, MAMA, DON'T KILL ME!"という文句は小見出しとして挿入される。[75]中央揃えで大文字である。彼は、読者がこの文句を見た瞬間、子どもの恐怖が感じられるように視覚的工夫をしたのである。

ハーンが念入りに仕上げたもう一つの場面は、子どもの死体に関する描写である。母親は自殺に失敗し、生きたまま発見される。家には警察と検視官が駆けつけた。検視官が子どもや母親の状態を調べる際に、ハーンもその場にいた。ハーンは、子どもの死体を細かく観察し、それを記事の中に描写する。その描写は、子どもの死体に向けられたハーンの眼差しが、単なる事件の被害者を見る記者の目ではないことを物語る。そもそも、この事件を取り扱った他の新聞[76]は、母が子どもを殺した行為には注目するが、殺された子どもの死体について、ハーンのような興味は示さない。次は、子どもの死体に対するハーンの描写である。

小さな犠牲者は、すでに冷たかった。子どもは、元々白かったマルセーユ織りのドレスを着ていた。ドレスは優美に刺繍されており、折り返しの部分にはレースが付いていた。しかし、今ではスカートの前のところのわずかな部分だけが、本来の色を見せていた。ドレスの袖から袖口まで真紅色だった。優美な胴着も真紅色だった。繊細な肌着、珍しいデザインのパンタレット[77]、上品な靴下、ピンク色の可愛い靴下留め、そして足にぴったりなブーツ、全て深く血に染まっていた。検視官の調べであらわになった絹製の肌着も同じだった。[78]

ハーンは、パーキンス夫人が、心中の準備段階で、娘に一番いい服を着せ、身なりをきれいに整えたと記す。彼は、その様子が、まるで子どもの祖母の家を訪問する時のようだったと述べる。ハーンは、心中するとしても、子どもには一番美しい姿でいてほしいという親心を描いたのであろう。そのように着飾られた子どもが、母に首を切られ、血に染まった姿で床に倒れていた。2.2で述べた通り、ハーンは、死体に関しては、常に入念に描いてきた。時にはグロテスクに、時には憐れみを込めて描いた。しかし、目の前の子どもの死体は、それまでの死体とは異なる印象を彼に与えたであろう。上の引用に続く描写は、事件とは関係のない内容で、子どもの死体に対するハーンの純粋な感想が述べられる。その感想は、ネクロフィリアに近いとも取れるものである。

> 口を開けた恐ろしい傷が首にあるにもかかわらず、小さい体は美しかった。金髪の長い巻き毛は所々不自然な濃い色に染まっていたが、それでも美しい眉の上から髪を結んだリボンまで優雅に垂れ下がっていた。そのリボンには血のしみがついていた。子どもの青い目は半分開いたままで、小さい唇は少しだけ開いていたが、真珠のように白い歯を見せるには十分だった。そして、こぶしを握りかけた手は血の抜けた血管のせいで大理石よりも白かった。それは、これまで見てきたどの光景よりも奇妙に美しい光景であり、哀れな光景でもあった。[79]

ハーンは、白いドレスを着た白人の女の子が血に染まった時の鮮烈さに心奪われたのだろうか。子どもの死体は、グロテスクでも、哀れでもなく、美しい「もの」として描かれる。段落の最後に「哀れな光景」という言葉が付け加わっているが、その言葉さえなければ、引用の描写からは、哀れな感情はほとんど感じられない。金色の髪、上を向いた青い目、少し開いた口から見える白い歯、握りかけた白い手は、鮮烈な色の対比をなして、美しい芸術品として描写される。

ハーンは、子どもの死体を前にして、それまでのスタイル、すなわち死体を生々しく、不気味に描写することはしなかった。まだ3歳にもなっていない幼女が、母に首を切られ、血まみれになった姿は、いたわしい側面があったであろう。ハーンが書いた死体に関するそれまでの記事を考えると、幼女の酷い姿を生々しく伝えるのに、彼ほど長けている記者はいなかったはずである。しかし、ハーンは、あまりにも早く散ってしまった小さな命に対して、そのような描写はしなかった。彼は、子どもの最後の姿を美しく描くことによって、彼なりの憐憫の

情を表したといえよう。

中絶や子ども殺しの事件は、その素材からして、センセーショナルなものである。ハーンは、それらの事件を伝える際は、他の事件の記事を伝える時とは異なり、クライマックスになる箇所や想像力を働かせる箇所を抑え、描写力を駆使して劇的に読者に伝えたのである。

『インクワイヤラー』紙に入って約2年間、ハーンは犯罪の報道を重ねながら、表現手法を身に付けた。彼が身に付けた手法は、三点に要約できる。第一、ハーンは、登場人物や事件の詳細を全て把握している三人称小説の語り手となる。取材した事実をもとに、想像力を働かせて事件を再構成し、それを物語化して、読者に伝える。人物間の会話を直接話法として記事に挿入する点に特色がある。第二、ハーンは、五感を活かした写実的で緻密な描写を用いている。主に死体やグロテスクなものに対して、この描写は用いられている。読者は、ハーンの描写を読み、描写の対象を想像できたといえる。第三は、犯行場面の再現である。物語化の特徴とも重なるが、特に事件のクライマックスといえる犯行場面は、臨場感を重んじて再現された。読者は、犯人、あるいは被害者の傍らで犯罪現場の疑似体験ができたのである。

このような三層にわたる表現手法が、凝縮して現れた一つの記事がある。それが1874年11月に発生した皮革製作所殺人事件の記事である。次節では、その記事を分析する。

3.「皮革製作所殺人事件」にみられる独創性

1874年の初頭、正式な記者となったハーンに、同じ年の11月、大きなチャンスが転がり込む。凶悪殺人事件がシンシナティ市の一角で発生したのである。その事件の報は、11月8日日曜日に新聞社にもたらされたが、あいにく普段そのような大きな事件を取材する記者は不在であった。ハーンは事件の取材を志願した。正式な記者となって間もないハーンではあったが、コカリルは、ハーンの願いを受け入れる。[80]

この事件が人々を驚かせた理由は、なによりもその凄惨さにあった。単に人を鉄の叉で刺殺しただけではなく、証拠隠滅のために皮革製作所の炉で遺体を焼いたのである。これが並みの凶悪事件でなかったことは、焼死体が発見された翌日の11月9日、『ニューヨーク・タイムズ』の第1面に「衝撃の殺人」"Shocking Murder"というタイトルで同事件が報道されたことからも見て取れる。[81]ハーンの伝記を書いたエドワード・ティンカーは、『ラフカ

ディオ・ハーンのアメリカ時代』の中で、この事件が市全体を震え上がらせた大事件であったため、各新聞のスター記者たちがこぞってこれを記事にしたと述べている。[82]実際に、『インクワイヤラー』紙を含め、『コマーシャル』紙、『ガゼット』紙、『シンシナティ・デーリー・タイムズ』*Cincinnati Daily Times*紙(以下『タイムズ』紙と略記)が、この事件を取り扱った。報道合戦の中で、結果的にハーンの記事を掲載した『インクワイヤラー』紙が、最も多くの部数を売り上げた。同紙は即日完売となる。さらには、増刷の要求までも絶えることがなかった。[83]ハーンの給料は、週10ドルから25ドルに一気にはね上がり、シンシナティにおける彼の名声が確立された。[84]初日の記事で他紙の販売部数を大きく上回った『インクワイヤラー』紙は、11月9日から11月16日まで、独占的に事件のことを報道したのだった。ティンカーも述べるように、これが報道記者としての活動の頂点と言える。もちろん、その背後には彼をスター記者に押し上げた多くの読者たちがいたのだが、彼らは記事のどこに魅力を感じただろうか。それはおおよそ二つの面、すなわち、形式面と内容面からみることができるだろう。

3.1. 破格の形式

ハーンの記事は当時の新聞の常識を破る体裁をとっている(図1参照)フィンセンの解説によると、当時の『シンシナティ』紙は、1面の左側に首都からのニュースを、残りの部分には国内、国外のニュースを掲載し、シンシナティ市内で起きた出来事は、4面か5面、あるいは8面に掲載するのが通例であった。[85]いかに重要であっても、一つのニュースがヘッドラインの1コラム以上を占めることはほとんどなかった。[86]実際に『インクワイヤラー』紙以外の新聞は4面あるいは8面にこの皮革製作所殺人事件を掲載している。しかし、図1からわかるようにハーンが書いた記事は、1面の1コラムどころか、5コラムまで占めている。

『インクワイヤラー』紙の特長は記事の配置のみではなかった。同紙にはイラストが5つも挿入されている。これも前例のないことであった。『コマーシャル』紙や『ガゼット』紙にもイラストが挿入されているが、それらは簡単な間取り図に過ぎない。当時のイラストは、木版であったため、技術的にも、予算的にも、容易に入れられるものではなかった。翌日の新聞に5つものイラストを入れることが、いかに困難な作業であったのか想像に難くない。それにもかかわらず、ハーンはそうすることを決めた。第2節で取り上げたように、彼には凶悪な犯罪事件を取材してきた経験がある。その経験が同事件の重要性を彼に気付かせたであろう。イラストを入れたハーンの判断は、見事に的中することとなる。

『インクワイヤラー』紙の記事を読んだシンシナティ市民の反応は、同紙の翌日の続報に記されている。

> 火葬殺人の話題は、市内の至る所で持ち切りだった。インクワイヤラー紙は、この凶悪な悲劇の全貌をイラスト入りで伝えたので、新聞は引っ張り凧であった。事件の審問の内容を掲載した夕刊が発表された後でも、売れ行きは収まらず、何千部もの追加発行した新聞が、昼も夜も飛ぶように売れ、それでも更に追加の要求が絶えなかった。犯行現場付近は、何百人もの野次馬が一日中彷徨し、その殆どがインクワイヤラー紙を手にし、自分の目で確かめたものと記事を比較し、記事と現場が一致していたことに満足していた。[87]

市民たちは確かにハーンの記事に魅了されたのであった。記事の配置、詳細なイラストの挿入といった、旧来の形式を打ち破ったハーンの斬新な試みが『インクワイヤラー』紙の販売向上にも、そして、彼自身の記者としての評判にも貢献したのである。

3.2. 内容的特色

体裁に内容が伴わないならば、成功がおぼつかないことはいうまでもない。内容的な魅力を確認するために、以下では『インクワイヤラー』紙と他の新聞の記事とを比較する。その前に、皮革製作所殺人事件の概要を簡単にみておこう。

事件の被害者はドイツ系の移民ヘルマン・シリングという青年であった。彼は、皮革製作所の労働者で、夜にはそこで寝泊りしながら夜番の仕事も兼ねていた。彼は、15歳の少女と親密な関係となったが、その少女の父親アンドリアス・エグナーに娘を誘惑したとして訴えられた。彼はそれを否認した。その後、少女は妊娠したが、7ヶ月目に早産を契機に死亡してしまった。彼女の父親は激怒し、息子と共に、その日、シリングを殴り殺しかけた。しかし、同僚がシリングを助けてその日は殺されずに済んだ。しかし、エグナー父子は、おおっぴらに機会があれば必ず彼を殺すと言い放っていたのである。

そして、事件の日、皮革製作所から解雇され、シリングを恨んでいた元同僚ジョージ・ルーファーとエグナー父子は凶行に及ぶ。彼らは厩舎でシリングを棍棒で殴り、鉄の叉で殺害した。殺害後、厩舎の隣にある煮沸室に彼を引きずって行き、炉に押し込んだ。証拠隠滅を図ったのであるが、死体は完全に焼かれず、半分黒焦げとなった形で翌日、別の

従業員によって発見された。エグナー父子は直ちに逮捕され、ルーファーも共犯者として検挙された。

以上が事件の概要である。では、各新聞は事件をどのように伝えただろうか。[88]死体の描写に関する例をみてみよう。半分黒焦げになって発見された被害者の死体は、おそらくグロテスクなものであったろう。『コマーシャル』紙は、死体の様子に関して具体的な描写は行わない。『ガゼット』紙や『タイムズ』紙は、死体が炉から引き揚げられる場面を次のように描写する。まず、『ガゼット』紙からの引用である。

> 死んだ男の黒焦げの胴体の一部であった肝臓と腸を引っ張り出して彼〔事件担当警部〕はぞっとした。次に胴体と離れ離れになった頭部を、黒焦げの頭蓋からあふれだした脳みそと一緒に取り出した。続いて黒焦げの手足。その後の努力によって、粉々になった部分を除く全ての残りの部分を拾い集めた。[89]

次は、『タイムズ』紙からの引用である。

> そこには骨やカリカリに炭化した肉のおぞましい物体、そして損傷した頭蓋骨の中には脳みそが、それも乾燥するまで焼かれ、両手の平をかろうじて満たすほどの脳みそがあった。[90]

事件の凶悪性のため、『ガゼット』紙や『タイムズ』紙の描写にも、「肝臓と腸を引っ張り出して」という表現や「損傷した頭蓋骨の中には脳みそが」といった刺激的な表現がなされている。被害者がいかに無残な姿であったかが見て取れる。『ガゼット』紙や『タイムズ』紙の表現がそれまでハーンが死体描写に用いた詳細な描写に留まっていたとすれば、ハーンの描写には死体のグロテスクさを伝える点において両紙をはるかに上回っている。以下はハーンの書いた死体の描写の一部である。

> 脳漿はほとんどすべて沸騰してなくなってしまったが、それでも頭蓋の底部にレモン程度の大きさの小さな塊が残っていた。パリパリに焼け焦げて、触るとまだ温かった。パリパリ焼けた部分に指を突っ込むと、内側はバナナの果実程度の濃度が感じられ、その黄色い繊維質は検死官の両手の中でさながら蛆虫のご

とく蠢いているように見えた。[91]

焼死体は、その素材自体が強烈な印象を与えており、『ガゼット』紙や『タイムズ』紙の記事がみせるように、記者がその場面を見たまま伝えるだけでも、刺激的なものとなる。ハーンは、焼死体などみたことのない読者に自分の描写をより分かりやすく感じさせるために、比喩を用いる。レモンやバナナや蛆虫など、実際に身近にあって想像できるものである。自分が見たことのないものに対しては説明を聞いても、ピンとこないものである。その時に自分が知っているものに喩えられると、理解が容易になるのと同じ原理である。焼けた死体の臭いが焼けた牛肉の臭気に類似するというハーンの描写は、牛肉を食べる人にとっては吐き気をもよおす表現であったであろう。さらに、焼死体を素手でさわり、その感触までも読者に伝える。

『ガゼット』紙と『タイムズ』紙の記者が書いたのは、死体が炉から取り出される場面である。しかし、ハーンは、焼死体を見るために、葬儀社にまでついて行った。彼はそこで死体を直接見て、触り、その上で描いたのである。検視台の上の死体を直接見て、描いたのは彼一人だった。ハーンの死体に対する深い関心は、第2節で取り上げた。ハーンは以前の死体描写において、自分が見たもの、嗅いだものをそのまま読者に見せ、嗅がせるような具体的で生々しい描写を心がけた。つまり、視覚や嗅覚に訴える描写である。しかし、同記事の中では、焼かれて半分残っている死体を読者により身近に感じさせるために、新たに触覚を用いたのである。

次にみる例は、犯行場面、すなわち被害者が襲われる場面である。この事件には目撃者がいなかったため、事件の様子は、現場に残された証拠を元に推測される。『インクワイヤラー』紙以外の3紙は、多少の推測が加えられたにせよ、現場の状況から分かる範囲での事件の経緯を述べる。3紙の襲撃の場面は以下のとおりである。

『コマーシャル』紙。

暗殺者たちが(二人いたと考えられる)どこでシリングを最初に見つけたのかは知られていない。しかし、彼らが六つ叉で彼を刺し、棒で殴ったのは確かである。おそらくシリングは必死に暗殺者たちともみ合いになり、大きな声で助けを求めたことは疑いない。暗闇の中、彼は生きるために一人で戦った。その戦いは小さな厩舎の中や中庭において行われた。しかし、彼には素手しかなかったであろう。

殺害者たちはすさまじい不意打ちを彼に食わせた。彼は若く強かった。そして、命は大切であった。しかし、運命は決まってしまい、彼は殺された。[92]

『コマーシャル』紙の記者は遺留物や証言を根拠として、被害者と加害者の戦いを正確に再現しようと試みる。知られていない事項に関しては、ありのまま伝え、襲撃を再現する際も、断定せず、全て、証拠や証人の話によるものであることをはっきり示す。現代的意味でのジャーナリズムに近い報道の形式と言える。そこには想像力の入り込む余地はほとんどない。次に取り上げる『ガゼット』紙の報道も『コマーシャル』紙とほとんど相違はない。

『ガゼット』紙。

犯行を犯した連中は、厩舎に隣接した馬具格納室に潜伏していたに違いない。シリングが何も気付かず、短い戦いの末、殺されたからである。シリングが自分を守るために馬の後ろに引っ込んだことは、そこにある最もおおい血溜まりから見て取れる。しかし、小さい厩舎のあちこちで血まみれの戦いが行われた証拠があふれている。[93]

犯行現場に残っている証拠を手掛かりに、犯行場面が推測される。犯人はどこに隠れ、どこで被害者を襲ったのか。どのようにして被害者は殺されたのか。これらのことは証拠に基づいて推定されるのみである。『タイムズ』紙の報道も証拠に基づき、戦いの場面を推測する。

『タイムズ』紙。

彼〔シリング〕が厩舎に入った時、一人、あるいは何人かの者らに攻撃された。彼らはそこで彼を待ち伏せしていたに違いない。戦いは、現場の様子が表わす通り、シリングが力尽き、六つ叉で突き刺され、絶命することになった。このおぞましい悲劇、生き残るための必死の闘いや馬具格納室の最も暗い片隅でのすさまじい死を目撃した人は誰もいなかった。[94]

『タイムズ』紙の記事も、『ガゼット』紙や『コマーシャル』紙の記事とほとんど相違がない。3紙の記者は、血の付いた六つ叉、血溜まり、激しくもみ合った痕跡といった遺留物を根拠

に推測を行なう。しかし、ハーンの描く犯人と被害者との死闘シーンは、証言を基礎に置いてはいるが、ハーン自身が三人称小説の語り手となって、襲撃の場面を語る。

> その時、殺害者たちは機をうかがって馬具格納室の開けはなした戸口から犠牲者が近づいてくるのをじっとうかがっていたのである。暗黒と沈黙の中をシリングはさらに数歩すたすた近づいてきた。と何者かがこの夜警の喉首を、突然、鉄のごとき力でもって締めあげた。かくて命がけの死闘が始まったのである。夜は咫尺（しせき）を弁ぜぬ真暗闇で、夜が隠さんとする暗き悪事にふさわしい陰鬱な暗さであった。襲われた男は若くて力があり、ヘラクレスのように筋骨逞しい男であった。しかしまったく不意打ちを喰らったのであり、身に寸鉄も帯びていなかった。自分の喉をぐいぐい締め付ける力から、敵は腕っ節（ぶし）からいっても自分より強いことがすぐわかった。途端に今度はいきなり背後からがつんと一発喰らった。気が遠くなるほどの一撃だったが、これで前だけでなく後ろにも敵がいることがわかった。相手は二人だ、しかもそれが自分の命を狙っている、という恐ろしい考えが初めて頭に閃いた。[95]

シリングの死闘の場面はこの後も、彼が六つ叉で刺され、死ぬまで続く。厩舎のあちこちに血が散在し、六つ叉にも血が付いていたことから、シリングが厩舎で刺されたのは誰もが推測していた。しかし、闘いの詳細を知る人は誰もいなかったため、他の新聞ではシリングが攻撃され、叉で刺されたとは書いてあっても、その時の詳しい経緯に関しては書いてはいない。しかし、ハーンは想像力を働かせ、まるで被害者と加害者の荒い息遣いまで聞こえてきそうな緊迫感溢れる場面に描き上げたのである。

被害者シリングが殺された後、炉に入れられる場面も、ハーンのスタイルが顕著に見られる。まず、他の3紙の記事からみたい。『ガゼット』紙は、「死体の処理——死体は焼き尽くされるように炉に入れられた」という見出しをつけ、炉に関する説明をした後、次のように述べる。

> 掃除のために炎管につながる小さい開口部があった。人間の体がその炎管を通ることはほとんどできない。しかし、それにも拘わらず、死人の体はこの開口部から炎管まで無理矢理に突込まれ、焼き尽くされるように置かれた。このように

して最も重要な証拠－殺害された人の体－を破壊しようとしたのである。[96]

『ガゼット』紙の記者は、残された証拠から当時の状況を説明している。それに対し、他の3紙は、被害者が生きたまま焼かれた可能性に言及する。『コマーシャル』紙には次のように書かれる。

> シリングを殺した後、あるいは意識をなくすほどひどく怪我させた後、〔…〕体を穴の中に投げ入れた。その穴は、ボイラーの下の熱い灰をのせた台の上にあった。そしてドアを閉め、被害者を灼熱の空間に閉じ込めたまま置き去りにした。この中で彼は、十分に加熱したオーブンの牛もも肉と同様に、こんがりとあぶり焼かれたであろう。[97]

『コマーシャル』紙の記者は、被害者が無意識状態であったかもしれないと述べているものの、炉に入れる時の被害者の意識の状況に関しては特にコメントしていない。それに対し、『タイムズ』紙では、記者の想像力が少々加えられている。

> ここに土曜日の恐怖が集結している。それは殺人により始まった。攻撃の方法からそもそも、その使われた道具、そして凄惨な結末まで恐ろしく、最終的には死体を焼くことで終わった。燃え盛る灰だめの開口部に入れられた際、ひょっとすると彼にはわずかな息があったかもしれない。[98]

『タイムズ』紙の記者は、炉に入れられた時に被害者が生きていたかもしれない、と、『コマーシャル』紙の記者より一歩進んで推測する。しかし、その推測には、積極性はなく、そのような可能性を提示したに過ぎない。実際のところはどうだったのか、確認することができないからである。だが、ハーンは葬儀社にまで行って、焼死体を詳細に観察した分、他の記者より大胆な推測ができる根拠を提示する。すなわち、遺された骸骨の強く食いしばった歯が被害者の生きたまま焼かれた際の苦悶の証拠だ、ということである。そこから物語を展開してみせる。

> おそらくいきなり相手の殺人的打撃によって気を失い、抵抗力を失ったまま、

> このみじめなドイツ移民の意識を喪失した図体は炉の中へ押し込まれたのであろう。凶悪な相手が熊手を使ってその体をさらに奥の燃え熾る地獄の火の中へ突込んだ時か、あるいは男の血塗れの衣服に火が燃え移って、焼かれるという最初の苦悶を感じた時かに、男の意識は火焔の死に直面するべく蘇ったに相違ない。想像してみるがいい。男は助けを乞うて半狂乱の叫び声を立てる、狂ったように弁じ立てる、生きようと思って死物狂いにあがく、命のために人間業を超えた争い——百年の苦痛苦悶が一瞬の断末魔の中に群りおこる——と見る間に叫び声はかすかになり、死物狂いのあがきも弱々しい身悶えと変わってゆく。そして残忍な殺人者たちはその間中ずっと、鬼のごとく無慈悲に、悪魔のごとく暴戻（ぼうれい）に、一個の哀れなる人間の命を滅ぼすための努力に喘ぎながら、無言の凱歌を奏しつつ凝視していた！[99]

他の新聞は、被害者が生きたまま焼かれた可能性に関して言及しながらも、それ以上の推測は書かない。それは報道記事としては当然のことであろう。しかし、ハーンの場合は、まさに人々が心の中で密かに想像するかもしれない恐怖の状態を大胆に描いて見せる。それは、炉に入れられた被害者が、自分の体が燃えることに気付き、覚醒することである。ハーンは、体が焼かれる苦痛を味わいながら死物狂いであがく被害者の絶望的な姿を描き出す。そして、読者に「想像してみるがいい」と、被害者の苦痛を一緒に味わうことを要求するのである。

このようにハーンの記事の中には焼死体の様子や殺人過程が臨場感溢れる筆致で描かれている。犯罪記事に用いられたこれらの手法は、報道記事の領域を逸脱したものといえよう。しかし、五感を刺激する表現、あたかも目の前で物事が起こっているような描写により、ハーンは読者の心に殺人現場を再現してみせた。読者を魅了したのは、まさにこのような手法だったのである。

4. 結論

ハーンは新聞記者として文筆に携わる仕事を始めたが、最終的な目的は作家になることであった。当時のジャーナリズムは、作家を目指す若者にとって機会を得る場、あるいは筆力を磨く場でもあった。日刊紙の新聞は素材の選択の幅が広かった。高尚な題材と並

んで、社会からタブー視されるような話題もまた日刊紙は取り上げることができた。その頃、新聞界に変化があった。19世紀末、南北戦争が終わった後、アメリカの新聞は、政治からの独立を宣言した。読者は、政治よりは身近なニュースを求めるようになり、報道記者の存在価値が増していた。シンシナティにおいて、いち早く政治的に独立し、センセーショナリズムに走りかけた『インクワイヤラー』紙にハーンは入社した。自己アピールする機会として、彼は報道記事のための刺激的な素材を選び、劇的に伝えた。彼は事実を並べただけではなく、文学的力量を駆使して記事を書いた。その文学的手法は、一言でいえば、事件の物語化といえる。ハーンは、凶悪事件を創作の素材として捉え、自分が物語の語り手となって、読者に伝えた。その手法が、ハーン特有のものであったことは、他の新聞との比較を通して明らかにした。

事件を徹底して調査し、改めて劇的に面白く組み立てる手法は、後の創作活動にも息づいている。ハーンが創作した2編の小説は、共に実話に基づいているのである。また、彼が日本時代に著した『骨董』や『怪談』が原話の上に成り立った作品であることはよく知られている。実話ないし原話の骨組みを想像力によって肉付けしていくという手法が、シンシナティ時代に豊かに芽吹き始めたといえる。

第2章　新聞における風刺・風俗画

ハーンは、ニューオーリンズにおいて約7ヶ月間、自ら挿絵を制作し、記事を書いた。その挿絵記事は、これまで『クレオール小品集』*Creole Sketches*(1924)や『ラフカディオ・ハーンのアメリカ時代』*Lafcadio Hearn's American Days*(1924)、『ニューオーリンズ発見』*Inventing New Orleans*(2001)に抜粋で出版された。全ての挿絵が出版されたのは、『ラフカディオ・ハーンのニューオーリンズ』*The New Orleans of Lafcadio Hearn*(2007)が最初である。同書を編集したラバーは、ハーンの挿絵記事を復刻しただけではなく、記事によっては、その記事が書かれた背景や当時の状況を脚注において説明している。ハーンの挿絵記事を研究する際に、重要な資料である。ラバーによると、1880年5月22日から1881年2月10日まで描かれた挿絵記事の数は全181点ある。ただし、重複する挿絵が5点あるため、実際の挿絵の数は176点である。挿絵は、新聞の一コラムに入る大きさで、その下に解説が付けられた。[100]

2011年、島根大学付属図書館ハーン図書出版編集委員会は、『ニューオーリンズとラフカディオ・ハーン』という論文集を刊行した。その中にラバーの選集を底本としたハーンの挿絵記事が解説と共に30編紹介された。編者常松正雄は、30編を「ニューオーリンズ」「音楽」「近代化」「社会問題」に分類した。「ニューオーリンズあるいはアメリカの社会や文化的状況が見えてくる」ことや、「ハーンの思考を読み取ることができる」ことを考慮して、30編を抜粋したことが述べられる。[101]

論者は、176編の挿絵記事の中で、当時のニューオーリンズの庶民の生活が見られる挿絵記事やハーンの文学的傾向が表れる挿絵記事に重点をおいた。まず、挿絵記事を内容から分析すると、次の5つに分類できる。第一、政治を風刺したもの25点、第二、社会を風刺したもの99点、第三、オペラハウスの公演の紹介9点、第四、タナー医師の絶食実験5点[102]、第五、ニューオーリンズの町の風景や折々の思い43点である。第一、第三、第四の場合、当時の政治的状況やオペラの情報や情景、絶食実験という話題となっていた事柄がわかるような記事である。しかし、庶民の生活の様子やハーンの文学的傾向を浮かび上がらせるには適切ではないと考え、本論では取り上げない。取り上げるのは、第二、第五の挿絵記事である。第二の社会を風刺したものは、数量的に最も多いが、その内容にはばらつきがある。さらに細分化すれば、2種類に分類できる。一つは、警察や州政府に

改革を促すものや犯罪に関連する辛辣な風刺38点、もう一つは、町の様々な問題に対する軽い風刺61点である。後者には、町の人々が迷惑だと思うことや、ハーン自身が不便に思うことなどがユーモアを交えて書かれ、そこからは当時のニューオーリンズの生活ぶりがうかがえる。

本章では、ハーンが描く辛辣な風刺やユーモラスな風刺はどのようなものであったか。また、当時のニューオーリンズの姿をハーンはいかに描いたのか。具体的に作品を取り上げ、分析を行う。挿絵制作者としてのハーンに焦点を当てると共に、上述した挿絵記事にみられる特徴について論じる。

1. 挿絵制作者としてのハーン

1.1.『アイテム』紙における新たな挑戦

ハーンは、1877年にシンシナティからニューオーリンズに移り、翌年の1878年から約3年間『デーリー・シティー・アイテム』*Daily City Item*紙(以下『アイテム』紙と略記)の副編集者として勤務した。ハーンが採用された当時、創刊約1年の『アイテム』紙は、地方のニュースを伝える新聞であったが、売れ行きが伸びず、経営難に陥っていた。ハーンが働き始めて間もなく、編集長は、文芸における彼の才能を認めた。編集長は政治欄を除くすべての欄をハーンに委ねた。ハーンは、地方のニュースだけではなく、社会に対する論説や新刊の批評、フランス文学の翻訳および「ファンタスティックス」という創作作品、ならびにニューオーリンズの町のスケッチを書いた。彼の幅広い活動により、『アイテム』紙は購読者を増やすことができた。[103]しかし、1880年1月、夕刊『ニューオーリンズ・ステイツ』*New Orleans States*紙が創刊され、『アイテム』紙の読者層を取り込んでしまった。『アイテム』紙は再び困難な状況に陥った。その危機を脱するためにハーンの選んだ手段が挿絵の導入である。当時のニューオーリンズにおいて、広告や特別な場合以外に日刊紙が挿絵を常用するケースは、アメリカ全土をみても非常に稀であった。[104]ハーンは『アイテム』紙の危機を救済するために、自ら挿絵を描き版画までも製作した。その数は、先述した通り全181点にのぼる。こうした彼の試みは『アイテム』紙を再生させたと同時にニューオーリンズの他の新聞からも評価された。[105]

ところが、ハーンが挿絵を描き始めて3ヶ月が経った1880年8月、ニューオーリンズの有力日刊紙であった『ニューオーリンズ・デモクラット』*New Orleans Democrat*紙が挿絵を

掲載し始めた。毎日ではなかったが、ハーンが一人で作るものより何倍も大きく、専門の版画家が制作した本格的なものであった。[106]一人で全ての作業を担っていたハーンは、目を酷使したこともあり、1881年2月、最終的に挿絵記事を終わらせたのである。

『ニューオーリンズ・デモクラット』紙の編集長E.A.バーク(E. A. Burke, 1839-1928)は、あらゆる点で他紙に抜きんでようとする野心家であった。『アイテム』紙におけるハーンのフランス文学の翻訳が評判を得ると、彼に『ニューオーリンズ・デモクラット』紙への寄稿も依頼した。ハーンは、1880年5月から『ニューオーリンズ・デモクラット』紙にも寄稿した。1881年12月、『ニューオーリンズ・デモクラット』紙は、ライバル紙であった『ニューオーリンズ・タイムズ』*New Orleans Times*紙と合併し、『タイムズ・デモクラット』*Times Democrat*紙として生まれ変わった。合併以前にも『ニューオーリンズ・デモクラット』紙の政治的影響力は強かったが、合併によりその影響力は堅実となった。合併の際、『タイムズ・デモクラット』紙は、ハーンに文芸部長の職を提案した。ハーンは、その提案を受け入れ、『アイテム』紙を辞職し、『タイムズ・デモクラット』紙で働くこととなったのである。[107]

『アイテム』紙の挿絵記事に対する読者の反応は、ハーンが始めた"Illustrated Letters from the People"というコーナーから垣間見ることができる。このコーナーでは、街の中で迷惑行為とされる問題が取り上げられた。挿絵を手がけたのはハーンだったが、内容は読者の手紙から成り立ったものである。ハーンの挿絵記事が掲載された7ヶ月間、このコーナーが約5カ月も続いたことから、挿絵記事が読者の関心を引いたことがわかる。

新聞の売り上げを伸ばすための苦肉の策とはいえ、画家でもないハーンがいかにして挿絵という新しい手法を選んだであろうか。次節では、彼がニューオーリンズに至るまでの経験に照らしながら、その点について考察を加える。

1.2. 風刺雑誌『ジー・ギグランプス』の成功と失敗

挿絵とハーンとの関係を知るためには、ハーンがニューオーリンズで働く以前に報道記者として勤めたシンシナティ時代に遡る必要がある。シンシナティにおいて、ハーンは『インクワイヤラー』紙の記者として、シンシナティの若き芸術家たちをインタビューした。その中の一人が画家ヘンリー・ファーニー(Henry Farny, 1847-1916)だった。彼は後にネイティブ・インディアンの絵画で名声を得るが、当時はまだ雑誌のイラストレーターとして知られた存在であった。1874年3月、ハーンは、インタビューのため、彼のアトリエを訪問する。[108]二人はインタビューを通して、相互に共感を覚えたようである。それは、新聞や雑誌といった

商業的な環境から独立し、創作活動に専念したいという思いだった。彼らは意気投合し、わずか3ヶ月後の6月21日に雑誌『ジー・ギグランプス』を発刊した。ファーニーは風刺漫画やイラストレーションを担当し、ハーンは論説や翻訳およびファンタジーといった小品を担当した。

『ジー・ギグランプス』は、図2の表紙から読み取れる通り、芸術(Art)、文学(Literature)、風刺(Satire)に専念する絵入り週刊誌である。表紙のイラストレーションを含めて三つの挿絵が入り、全部で8頁の構成であった。第1号の半分以上の記事をハーンが書き、ファーニーが政治に対する風刺漫画を描いた。「大めがね」を意味する雑誌の名前は、ハーンの大きなめがねに由来する、とハーン自身が語っている。[109]

結果的に『ジー・ギグランプス』は、1874年8月の第9号を最後に廃刊となった。ハーンは、雑誌の廃刊後、1874年10月4日付『インクワイヤラー』紙の記事「大めがね」"Giglampz"の中で、『ジー・ギグランプス』がどのように生まれ、なぜ終わりを告げたのかにういて、詳しく記している。[110]その記事によると、二人は、意気込んで雑誌を発刊したが、第1号はあまり売れなかった。販売不振の原因に対し、出版に携わった人々は内容が「余りに堅苦しすぎた」と、分析したという。[111]しかし、その分析に対し、ハーンは、記事の中で異なる意見を示す。彼は、「高い水準の面白さを理解し鑑賞できるほど、アメリカ人の美的センスは発達していない」[112]と考えたのである。ハーンは、『インクワイヤラー』紙の報道記者として働いた経験から、大衆に理解できるものや彼らがお金を払って読むものについて知っていた。ハーンは、報道記事とは性格の異なる煽情性を提供しようとした。それは、通俗的なものではなく、「もっとも高級な煽情」であった。つまり、「極端な恐怖や美の苦悩にあらわされるフランスの煽情派」である。[113]ところが、皮肉なことにその信念のせいでファーニーとの間に亀裂が生じ始めた。ハーンによると、ファーニーは、ハーンの翻訳を読み、彼が大衆の「堕落した趣味」に迎合していると決め付けた。ファーニーは、ハーンの翻訳の半分を削り、残り半分を自分の手で修正した。ハーンは辞表を提出した。

この問題が原因となり、二人は度々衝突した。なんと、ハーンは2カ月の間に5回も辞表を出したのである。しかし、辞表を出すたびに、また戻った。ハーンは『インクワイヤラー』紙を辞めてまで、『ジー・ギグランプス』に愛着を持ち、力を注ごうとしたのである。ファーニーとの見解の差は埋まらず、結局、ハーンが共同編集者の座から降りた。それでも、最後まで『ジー・ギグランプス』誌に記事を書き続けたのである。

同紙は、少しずつ購読者を増やしながら第8号まで発刊したが、第9号を最後に廃刊となった。廃刊の理由は皮肉なことにも『ジー・ギグランプス』が風刺雑誌としての地位を確立したことにあった。直接的な原因は、蒸気船の沈没事故を描いたスケッチである。（図3）それには、死体を救いあげる人々や死体の身元を確認する人々、また沈没した船の残骸が描かれた。事故を報道する新聞であれば、何の問題にもならないスケッチだった。しかし、『ジー・ギグランプス』誌は風刺画を売りとする雑誌である。それまでの辛辣な風刺画に慣れてきた読者は、特に説明もなく描かれた事故のスケッチを風刺画として捉え、悲劇を嘲笑っているのかと激怒したのである。結局、購読者がみな購読をやめ、『ジー・ギグランプス』は、短命に終わった。

2ヶ月足らずの短い期間であったが、ファーニーとハーンが試みた絵入り雑誌は、風刺雑誌としての地位を確保したという点において失敗とはいえない。実際に『ニューヨーク・ヘラルド』の週末版と交換記事の形で『ジー・ギグランプス』誌の記事が掲載され始めていた。[114]新しい雑誌を成功させるという挑戦は終わったとしても、ハーンはその過程で風刺技法を磨き、画家ファーニーの風刺漫画を経験することができたのである。

1.3.「皮革製作所殺人事件」による成功

第1章で取り上げた「皮革製作所殺人事件」は、1874年11月8日シンシナティで起きた凶悪殺人事件である。彼がこの記事によって成功した理由の一つが挿絵だった。ハーンは事件現場をファーニーに描かせた。イラストレーション一枚によって廃刊となった『ジー・ギグランプス』での経験は、挿絵が持つ威力を彼に実感させたであろう。ハーンとファーニー、そしてもう一人の画家が5つの絵を完成させた。（図4）そして、翌日の発行に間に合わせるために、版画もみずから制作した。翌日、五つの挿絵は新聞の1面に掲載され、新聞の売れ行きはとどまるところを知らなかった。[115]こうしてハーンは挿絵の力を体験しただけではなく、絵を描き、版画を作り、新聞に入れるという実際の作業も経験した。一連の経験はニューオーリンズ時代に『アイテム』紙上で生かされることとなったのである。それでは、『アイテム』紙の挿絵記事について具体的にみてみる。

2. 社会的不正義の批判に用いられた風刺[116]

2.1.「警察委員会」"Police Board"

ハーンが描いた辛辣な風刺の中で最も多いのは、警察に対する風刺記事である。38点の内、14点を占め、警察の怠慢や暴力、腐敗を告発するものであった。最初の警察風刺の挿絵記事は、1880年6月1日に書かれた。この挿絵からは、ニューオーリンズに来る前に報道記者として働いたハーンの経験が窺える。というのも、ハーンはシンシナティにおいて死体に関する記事を多く書き、上述した「皮革製作所殺人事件」でも骸骨の絵を描いた。(図4)また、彼はみずからをグール(Ghoul)と呼んだ。グールというのは、死体愛好など残虐趣味を持つ人を意味する。この挿絵にはハーンのグール的傾向が活かされている。記事のタイトルは「警察委員会」である。内容が短いので、全文引用しよう。

警察委員会

普通見られる多数の職務怠慢の諸件

殺人犯(Murder)と強盗(Robbery)が街路を歩いている、

　人殺しの武器をさげて。

そのときおとなしい警官は持ち場の地区で眠っている、

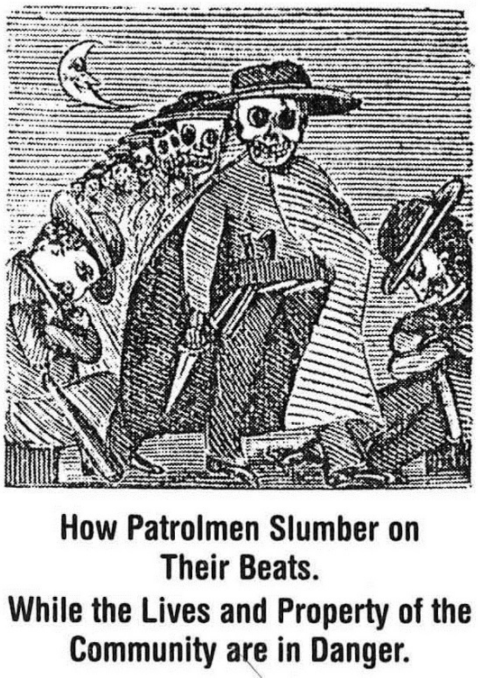
　ご自分の大事な命のほかは何も気にしないで。

不気味な行列が進む様子を見るがいい、

　何の妨げもなく血みどろの目的地に向かっていく。

その間、眠るお巡りは安らかに証明する、

　どんなに自分の小さな魂を大事に思っているのかを。[117]



自分のお警邏区域で、生命、財産が危険にさらされているとき警官が居眠りしている状態。

ハーンの記事において町を歩いているのは殺人者(Murderer)と強奪者(Robber)といった人間ではない。そこには「殺人(Murder)と強奪(Robbery)」が歩いている。そのような事件が町に充満していることは、骸骨の姿で表現される。骸骨は鋭いナイフや銃を持って

おり、眠りこけた警察の間を、まさに、すり抜けようとしている。空には三日月がその有様を見下ろして嘲笑う。「普通見られる多数の職務怠慢の諸件」は、果てしない骸骨の列が物語る。ハーンの伝記を著したティンカーは、1924年4月13日付『ニューヨーク・タイムズ』の記事「コラムニスト・漫画家ラフカディオ・ハーン」"Lafcadio Hearn, Columnist and Cartoonist"の中で、ハーンの風刺の効果を次のように評した。「警察は、この新しい攻撃にどう対処すればいいのか分からなかった。長く退屈な論説より、改革にははるかに効果的であったのだ。」[118]同年9月に生じた警察の過失およびその隠ぺいは、まさにハーンの挿絵記事によって攻撃された。

2.2.「警察の能率のよさ」"Police Efficiency"[119]

1880年9月、警察の取り調べによって市民が死亡する事件が起きた。被害者の名はジャン・マリ・バレス。ハーンはこの事件に対して4回に渡って挿絵記事を書いた。以下では、この4回の記事について詳しく見ていく。

記事によると、事件のあらましはこうである。バレスは飲酒した後、暴れ、迷惑行為によって警察に逮捕された。逮捕の際、彼は警察に腹部を蹴られ、その後遺症によって死亡した。9月25日付けの記事「警察の能率のよさ」には、その様子が描かれている。タイトルは、反語的な意味で、過度な暴力を行使した警察の能率の悪さに対する皮肉である。

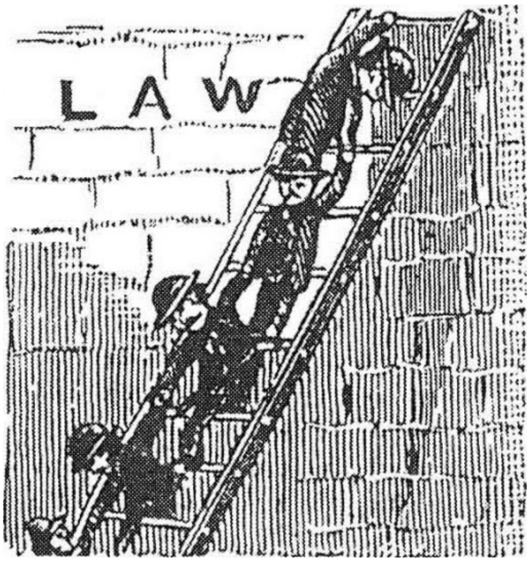
絵の中の被害者はすでに死んだように動いていない。首をたれて、気を失っているようにみえる。その被害者の上で警察が片手に棍棒を持ったまま、片足を上げ、被害者の腹部を蹴ろうとし、もう一人の警察はそれを見ている。記事の中でハーンは、問題を起こす人を制圧する際、警察が殴る、蹴るなどの暴力を振るうべきではないと指摘する。彼らに許可された棍棒を使い、手足だけを拘束すればよいとのことである。もっとも、ハーンが問題にしているのは犯罪者の人権ではなかった。彼が立腹するのは、被害者がならず者でも無法者でもないことである。ハーンは、普段から無法者や乱暴者に対する厳罰を強く主張してきた。しかし、この事件において被害者は、泥酔状態であるにせよ、一般市民である。すでに気を失っているバレスを情け容赦

なく踏みつける警察の挿絵からは、弱者である被害者に対するハーンの同情と警察に対する怒りをはっきりと読み取ることができる。この記事の最後は次のように終わる。

前述したとおり、通常のならず者の集団が義務を果たそうとする警官を攻撃した場合、その乱暴者の何人かの頭が殴られて割れたとしても、合理的な状況であるため我々は警察を支持しなければならない。しかし、警官3人にたった一人の酔っ払いがおり、前者が後者を死ぬまで踏みつけたり蹴ったりすることを選択したとすれば、我々はそれを単なる殺人事件だと見なさざるをえない。[120]

ハーンは、過剰な対応によりバレスを死なせた警官たちの行為は殺人に等しいとはっきり述べる。しかし、警察側は、一人の人間を死なせた警官たちの過失をもみ消そうとした。ハーンはその様子を連続する記事の中で風刺を交えて告発する。

2.3.「警察が相互扶助する社会」"The Police Mutual Aid Society"[121]



上の記事の2日後にあたる9月27日、「警察が相互扶助する社会」という記事が書かれた。警察が手に手をとって、法律の壁から堕ちた仲間を必死に引き上げる様子が描かれる。ハーンの記事によれば、警察の殺人や職権乱用は、有罪を立証するのがほぼ不可能だという。彼の言葉を引用すると以下のとおりである。

〔警察による〕暴行や殴打事件が起きると、目撃者が〔警察の無実を〕証言するために土の底から飛び出てくるように見える。警官の命が非常に危険であった、殴られた男はナイフあるいは銃を持っていた、それに警官は非常に寛容であった、と目撃者は証言する。

警察が望めば、市内の異なる7か所で同時に自分を見たと誓う目撃者を見つけられるだろうと、我々は信じて疑わない。[122]

一般市民が暴行により死亡したにもかかわらず、その加害者が権力を持つ警察であるため、誰も責任をとらない状況。ハーンは、法の側に立ったものがお互いを必死に助け合う姿を描くことで、警察が市民の安全より、自分たちの護身にばかり関心を持っていることを告発する。さらに、彼らの権力を恐れ、嘘の証言が雨後の筍のように出てくるだろうと予測する。ハーンの予想通り、まさにバレス事件において、あちらこちらから矛盾する証言が続出した。一方は、警官がバレスを蹴る場面を目撃したと証言する人々がいる半面、他方は、そのような事実はなく、逆にバレスが警官を蹴り、警官の方が30フィート飛ばされたと証言する同僚警官もいた。食い違う証言は、9月29日の記事「よりどりみどり」の挿絵に描かれている。

2.4.「よりどりみどり」"You Pays Your Money, and You Takes Your Choice"[123]

「警察の能率の良さ」に類似する構図であるが、一人の警官が後ろに倒れている。被害者に蹴られて30フィート飛ばされたとされる警官である。「警察の能率の良さ」の警察は、一人が被害者を蹴ろうとし、一人は隣でただ見ているだけだった。しかし、「よりどりみどり」の二人の警官は、積極的に被害者に暴行を加えている。一人は頭を押さえつけ、一人は被害者に跨り、右手で首を抑え、左手で殴ろうとする。被害者の足は、警官が跨った際の衝撃のせいか、上に上がっている。前回の挿絵より、暴行を加える側の積極性が強調されている。この挿絵は、被害者がこのような状態で果たして、一人の警官を30フィートも蹴り飛ばすことができただろうかという疑問を提示する。ハーンは、上の証言以外にも被害者が樽にぶつかって怪我をした、自らを地面に投げだしたという証言も紹介する。ばらばらの証言を前に、陪審員の意見は一致せず、今後とも一致をみないだろうと、ハーンは記し、最後を次のように締めくくる。

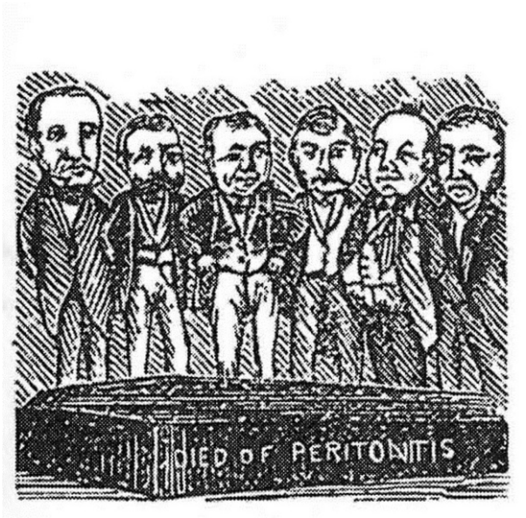
> しばらくすれば、我々は次のように誓う目撃者を見ることもできそうだ。地面が飛び上がってバレスの腹を殴った、あるいはバレスが自分で腹を殴っ

た、もしくはバレスの腹部がバレスを殴った、そうでもなければ屋根の上から煉瓦が落ち、立っている彼の腹部に落ちた、あるいはドリスコル巡査長〔バレスを蹴ったといわれる警官〕はバレスに遠くまで蹴り飛ばされ、翌朝まで現場に戻る道を探せなかった。[124]

お好みの証言をどうぞという記事のタイトル、さらに、地面が立ち上がって被害者の腹を殴った、被害者の腹部が被害者を殴ったという荒唐無稽な表現に至っては、警察への不信感が極端な表現をとっている。その毒舌は警察だけにとどまらず、事件を検視した検視官にも及んだ。

2.5.「あの評決」"That Verdict"[125]

この事件に対する最後の挿絵記事は、10月2日付の検視官の評決に関する記事「あの評決」である。検視官が出した被害者の死亡の原因は、腹膜炎であった。しかし、腹膜炎を引き起こした原因について、検視陪審員ははっきり言わない。それを風刺して書かれた記事である。



被害者の棺には、「腹膜炎による死亡」と書かれており、その後ろには高慢な表情の検視官たちが立ち並んでいる。この記事は、検視官が自ら評決を述べる形式となっている。少々長いが、全文を引用する。

我々、聡明な検視陪審員は、死亡者が腹膜炎により死亡に至ったことを確認する。

腹膜炎を起こす原因は、999以上ある。

死亡者は腹膜炎を引き起こすような蹴り方で蹴られたかもしれない。

そうでないかもしれない。

階段から落ちて怪我したかもしれない。

そうでないかもしれない。

仰向けに倒れてお腹を壊したかもしれない。

そうでないかもしれない。

偶然、自ら自分の腹部を蹴ったかもしれない。

ある目撃者は死亡者が警察に殺されるのをみたと誓う。

ある目撃者は反対のことを誓う。

我々は警察の隣人であるから、警察に有利な解釈を行った方が分別のあることだと見なす。

それ以外の解釈は健康的ではないと考える。

従って、我々は死亡者が単に腹膜炎で死んだことだけを見出す。

しかも、警察の証言によれば、彼は腹膜炎を引き起こせるほど何回も転んだようだ。

人々がこの評決に満足できなければ、自ら検視をもう一回行えばよい。[126]

「よりどりみどり」において被害者が「自ら自分のお腹を殴った」といった表現がこの記事にも使われる。実際に下された判断を知る由もないが、ハーンにとっては容赦できない評決であったに違いない。バレス殺人事件に関する一連の挿絵記事は、ハーンが警察に感じる怒りを表す。事件の調査がまだ終わっていない段階で書かれた最初の挿絵、つまりいかにも倒れている無防備な人を警察が一方的に殴打する場面がそれを物語る。

2.6.「捜査を望む」"Want to Investigate"[127]

警察側の非を露骨に表現した一連の記事は、警官たちにとって大きな脅威となった。このことを示すのが10月5日の記事「捜査を望む」である。ことの発端は、10月3日付の記事「決済しなさい」"Poney Up"であった。[128]売春婦を恐喝し賄賂をうけとる警察についての記事である。それに対し、警察は恐喝事件を捜査するどころか、逆にハーンが所属した『アイテム』紙を捜査した。本来、違法行為を捜査すべき警察が、身内である

という理由で捜査を行なわないことに対して、ハーンは怒りを隠さない。かばいあいをする警察の身内たちの繋がりが壊れるまで戦い続ける、と記事「捜査を望む」において宣言するのである。この日の挿絵は、いかにも警察をからかうものであった。絵の人物が左目を瞑っていることから、ハーン自身を描いていることが見て取れる。記事の最後は、次のような毒舌で終わる。

> 警察にもいい人がいることを疑うわけではない。ただし、そのような人と知り合いになる、とても貴重な喜びを味わったことがないだけだ。[129]

実際に警察の復讐捜査であったかどうかは別として、『アイテム』紙に対する捜査までも引き起こすほど、ハーンの風刺記事が辛辣であったことがわかる。

ここまでの挿絵記事は、警察に対する風刺記事であった。これらの記事は極めて厳しい論調で書かれており、挿絵は効果的に警察の無能さや腐敗した様子を暴いた。権力のある側の不正を攻撃する武器として風刺が用いられており、言葉や挿絵は刃となって相手の肺腑をえぐる。それに対して、町の人々やその生活に対する風刺は、前述したものとは性格が異なるものだった。その相違をよく表すのが、洗濯婦への不満を綴った「洗濯婦」である。この記事には、過ちを犯した洗濯婦への風刺もみられるが、同時にニューオーリンズの日常の姿も描き出されている。そのため、「洗濯婦」は、人々の日常を描いた風俗画を取り上げた第3節において分析を行う。

3. ニューオーリンズの日常を描く風俗画

ハーンの挿絵記事には、第2節のような社会的不正義に対する風刺記事以外に、ニューオーリンズの庶民の生活を活写したものがある。時には皮肉を込めて、時には滑稽に、時にはロマンティックに、時には哀愁漂うものに仕上げられた風俗的記事からは、人々の生活や当時の町の様子を窺うことができる。

3.1. 「洗濯婦」"Washerwomen"[130]

1880年8月31日付の記事「洗濯婦」は、ハーンが体験した洗濯婦とのトラブルが書かれている。彼は、記事の冒頭において、問題のある洗濯婦を列挙する。値段は安いが靴下

や肌着を返さない人、シャツのボタンを落としズボンの紐を引っ張り出す人、シャツの糊を薄くつける人、洗濯したものを約束した時間に持ってこない人である。単に問題を指摘するだけではなく、皮肉を交えて次のように述べる。

> 非常に安く働いてくれる洗濯婦がいる。ただし、彼女は絶対に靴下、あるいは肌着を返してはくれない。代わりにくれるものは間違いなく元より悪いものだ。
>
> シャツのボタンを全て洗い落とし、ズボンのひもを全て引っ張り出すことを人生のルールと決め、元通りにしておこうとは夢にも思わない洗濯婦がいる。この洗濯婦は約60〔セント？〕を請求する。[131]

ハーンは、このように洗濯婦の狡賢さや雑な仕事ぶりを批判する。しかし、その批判には、彼が警察を批判した際の手厳しさはみられない。挿絵からは、風刺は見られず、人より大きな物入れを頭にのせた洗濯婦の姿が描かれている。洗濯婦は、警察とは立場が異なり、社会的に弱者だった。ハーンは彼女たちの過ちを指摘しながらも、その苦労にも目を向ける。

> 一週間ずっと重労働をするのはとても厳しい。彼女たちは疲れて倒れるまで働く。天気の変化も見なければならない。時々、洗濯棒が折れたりすると、一日中の仕事をまたやり直さなければならない。仕事に使う石鹸やのりや青み剤も具備しておかなければならない。
>
> そして、美しく清潔できれいに仕上がった洗濯物を注文した人に持っていく。労働に対する当然の報酬をもらうことを期待して。
>
> しかし、その期待に反して、偽りの約束をうけるか、時には悪口まで浴びせられるだけである。
>
> すると、飢えたまま家に帰り、座って泣く。家には一銭もないからだ。〔…〕
>
> 時々洗濯婦が自分の仕事にうんざりし、努力することも客を満足させることも

辞め、怒りや憤激に満ちてボタンをもぎ取ったりズボンの紐を引っ張ったりするのも不思議ではない。

彼女たちがいつも天使でないとしても、それは彼女たちの責任ではないのだ。[132]

この記事の最初には、洗濯婦のいい加減な仕事ぶりが描写された。靴下を戻さない人やシャツのボタンを全てなくしてしまう人などの話である。しかし、ハーンはそれを批判する代わりに洗濯婦がそのようになった理由に目を向ける。彼は、洗濯婦の仕事がいかに重労働なのか。それにもかかわらず、いかに報われないのかについて、彼女たちの立場から語る。一銭もない家に戻り、座って泣くだけの洗濯婦を描くハーンの視線には、彼女たちに対する憐みが感じられる。

このように立場の弱い者に対する風刺は、批判するだけではなく、見える姿の裏側にある事情にまでハーンは目配りをした。洗濯を預けた人々の中には、彼女たちの間違った行為に腹を立てた人もいるだろう。ハーンは、一方では自分も洗濯を預ける側として、その気持ちに理解を示す。他方、そのような人々に向けて、彼女らの切実な事情を説明し、社会的寛容を促すのである。

1880年11月29日から12月2日までの4日間、長期間の雨に関する記事が3篇書かれた。当時のニューオーリンズの町が抱えた問題や庶民の暮らしが描かれる。

3.2.「ウウッ」"Ugh"[133]

1880年11月29日付の記事「ウウッ」[134]は、そのタイトルから、言葉では表せないイライラの気持ちが伝わる。挿絵には、雨が降り注ぐ中、荷車に乗った人が馬に鞭を打とうとする場面が描かれている。その荷車は、増えた水に浸かっており、馬の体も下の半分が水に沈んでいる。隣には樽や得体のしれないものが水に浮かんで流れていく。道路の状態が非常に悪いことを挿絵は物語っている。[135]

ハーンは、悪天候およびずさんな道路管理のせいで、町が泥やゴミにまみれ、悪臭に満

ちてしまったことを上のような挿絵で表現する。挿絵の説明では、道路にも歩道にもあちらこちらに凸凹ができ、危険な状態であると指摘する。しかし、そのような状況を改善できる対策が何もない現実に対して、ハーンは「ウウッ」といううなり声で不快感を表すのである。二日後、12月1日付の記事「濡れ足りていますか？」は、長期間の雨および道の整備を担当する当局への皮肉が混ざった内容である。

3.3.「濡れ足りていますか？」"Wet Enough for You?"[136]

挿絵の中の人は、雨に濡れたくない気持ちのためか、腰まで深く傘を差している。しかし、その傘の片側は破れており、雨を完全に塞ぐことができない。人はズボンの裾をまくっている。ズボンの裾をまくらなければ、泥まみれになるほど、道はどろどろとなっている。道の整備は、市の当局の責任である。頼りのない敗れた傘は、自分たちの仕事をしっかりしていない当局への皮肉である。挿絵に付いている説明は以下の通りである。短いため、全文を引用する。

> 昨日、太陽が顔を出した。ニューオーリンズの人々は、この世の終わりが近づいてきたと考え始めた。
>
> しかし、彼らが光に目を慣れさせようとしたとたん、空は暗くなり、天国の水門が再び開かれた。
>
> そういうわけで、人々は、降雨地域や気圧計、寒さやリウマチについて以前よりも深刻に噂をした。[137]

挿絵が市の当局に対する非難を込めたとすれば、その説明には、降り続ける雨に対する恨みが込められている。ハーンは、久々に日差しが射したことについて、人々が世の終わりを感じたと語る。雨の降らない状態の方が異常に感じられる程、長く雨が降ったことを意味する。降り止まない雨は、ついに人間をも変えてしまう。12月2日付の記事「水かき足」では、挿絵の登場人物が変身を始める。

3.4.「水かき足」"Web-Footed"[138]

泥沼になった道に耐えられなくなった人間の足は、「進化」を遂げる。ハーンは、水かき足になった人々の足を描く。水かき足は、水や泥を恐れず、堂々と歩いている。挿絵の説明は以下の通りである。

> 上の絵は〔新聞の挿絵は説明の上にある。〕、このような天気が続けば、必ず我々人間の足に現れる生理学的変化を表している。自然は、動物をその環境に適応させる。沼に住む動物は水かき足を持っている。我々の足が水かき足になる日に備えて準備しよう。[139]

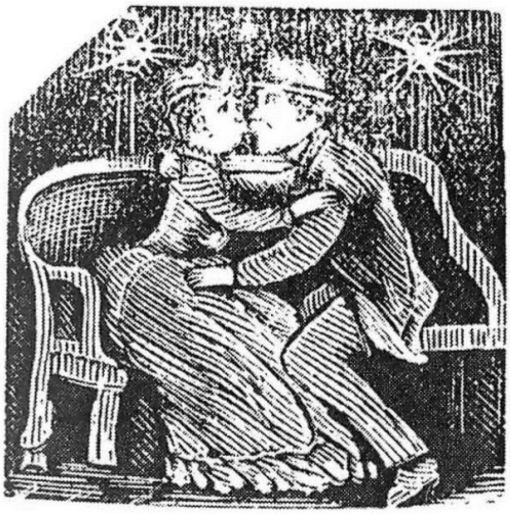
ハーンは、降りつづける雨に対し、「ウウッ」において、泥やゴミに満ちた道路の状況に怒りを吐露し、「濡れ足りていますか？」では皮肉をこめて語る。そして、最終的に「水かき足」では滑稽となる。長期間の雨にも、しっかり整備されていない道にも、彼は真っ平御免という気持ちを醸し出す。どちらも変わらない現実の中で、ハーンは「進化論」を取り出す。環境が変わらなければ、こちらが水かき足になろうというあきらめの雰囲気が感じられる。ニューオーリンズの市民は長期間の雨や泥まみれの道に苦しんでいた。一見すると突飛に見える水かき足の話題は、市民に「まさにそういう気持ちだ」と思わず叫ばせたであろう。水かき足の人々が歩くという滑稽な姿を視覚的に見せることにより、ハーンは人々にユーモアを与え、さらに共感を引き出したのである。

ハーンは、批判、非難、滑稽の瞬間ばかりでなく、市民の日常から、ロマンティックな瞬間や悲しい瞬間を鋭く切り取ることも忘れてはいない。そうした瞬時のドラマを挿絵記事に残したのである。「ざわめく波のそばで」は、人生において忘れられない一瞬を捉える。

3.5.「ささやく波のそばで」"By the Murmuring Waves"[140]

1880年08月15日付の記事「ささやく波のそばで」では、男女二人がベンチに座ってキスを交わしている様子から、二人がカップルであることが推測できる。空には星が輝いており、時間的に夜であることを示す。ハーンの説明によると、二人がいる場所は、静かな湖畔で、

カップルがよく訪れる場所である。この場所や恋人たちについてハーンは語るのである。



暗く音もない。ただ星だけが見降ろしている。カエルたちは無関係のものに注意を払わない。さざなみのむせび泣きは決して恋をさまたげない。そして、陸地からの遠い音楽、給仕の呼び声、乾杯の響き、さらに人々のざわめき。湖畔に二人きりでいるような心地よい気分を台なしにするのに、それらはあまりに遠くへだたっている。

しかし、それでも二人はひそやかにささやく。

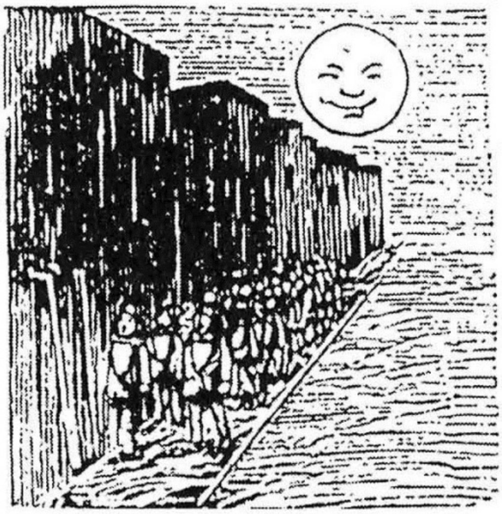
きっと、多くの人生の運命が湖畔の逢瀬で定まった。

きっと、多くの人々が今わの際に、あの夕暮れのおしゃべりの話題、波のざわめき、カエルやコオロギの歌、頭上の静かな星のまたたき、そして楽しげな人々の遠いざわめきを思い出すであろう。[141]

挿絵は、二人の周りに漂うロマンティックな空気を感じさせる。湖のさざなみの音も、カエルの鳴き声も彼らの邪魔にはならない。この場所で恋を囁き合った二人は、それによって運命が変わる。運命が決まったその空間や時間は、彼らにとって生涯忘れられないものとなる。ハーンは、ニューオーリンズのある特定の場所について語っている。しかし、その場所を知らない人でも、恋に落ちた経験がある人であれば、同記事を読み、記憶の彼方に眠っているあの一時を思い浮かべることができるだろう。それは、ハーンが、特殊な状況を描写しながらも、人間の普遍的な感性に訴えているためである。このような傾向は、1880年10月29日付の「火事」にも見られる。

3.6.「火事」"Fire"[142]

挿絵の中の月は、微笑んでおり、街を歩く消防員は歌を歌っている。ハーンは、今はなくなったニューオーリンズの古い習慣やその日に起きた火事について述べる。その習慣というのは、火事が起きた際、人々が着飾って見物したことである。そして、その日の火事が消えた後の様子について次のように語る。



火が消えた時、消防員が夜中に歌う声を聞くのは楽しい。彼らは堅固な支柱が並ぶ人通りのない街を通り抜ける。

それは危険が去ったという信号であり、全てうまくいったという嬉しい知らせである。「寝続けて、皆さま！──楽しい夢をみて！──我々がこの古い街を守ったんだ。」

時々彼らは歌わないことがある。急いで道を踏みならす音がただ聞こえるだけ。彼らの声は話す時も低くなる。すると、人々は心配になり、窓から外の闇を見渡す。街は無事である。火は消えた。しかし、若い生命の火も一緒に消えた。ある勇気ある少年が火の赤い雨の下、自分の持ち場で死んだのだ。普段歌う人々は歌えない。心がうち沈んだため。[143]

この記事は、タイトルが不気味な「火事」であるが、挿絵からは少しの不気味さも悲しさも感じられない。街を歩く消防員はみな歌っており、彼らを見ている月は微笑んでいる。記事の最初にも、遊びにでも行くように正装して火事の見物に行くニューオーリンズの慣習が紹介される。火を消して元気よく歩く消防員の姿は、凱旋する兵士のようであり、皆は安心して彼らの歌い声を楽しく聞く。全てがうまくおさまったと思わせた瞬間、ハーンは事態を反転させる。歌い声が消え、夜中の道は消防員が歩く足音だけで満ちる。火と共に消えてしまった一つの生命。挿絵と共に内容も途中まで明るかっただけに、青年の死は切なさを増す。「火事」の中でハーンは、特殊なニューオーリンズの習慣を紹介しながら、悲しみや切なさといった生活の一コマを切り取り、人々の心の深層に語りかけるのである。

ハーンは、目に見える光景だけではなく、その背景にある物語の描写にも目を配った。「火事」において、喜びが悲しみに変わる瞬間を描いたのと同じく、「ケーキとキャンディ」においても、日常の風景が変わりゆく姿を捉えている。

3.7. 「ケーキとキャンディ」"Cakes and Candy"[144]

「ケーキとキャンディ」は、1880年9月18日付の記事である。記事には、一人の女性が二人の子どもの前に座っている。前に立っている女の子は、指をくわえて、目の前の箱をじっと見つめる。小さい挿絵であるが、いかにも子どもが箱の中の物を欲しがる様子が見て取れる。

ハーンの説明によると、黒人の女性は、ケーキ売りである。小さいケーキを買い、ちびっこに売る仕事をする女性だ。ニューオーリンズには、このような仕事をする女性たちがおり、中には二代にわたって、ケーキ売りをする家系もあった。彼女と客の関係についてハーンは以下のように語る。

> 小さなくぼんだ指で5セントをにぎり、よちよちと彼女たちのところへ買いに来た幼児の多くは、今はみんな成人になっている。
>
> 中にはもう子どものいる者もいるが、この子どもたちもまた、5セント硬貨をもって買いに来るのだ。
>
> そういう訳でこの老婆は、いろいろな家族の歴史や浮き沈みをたくさん知っている。[145]

上の引用から、ケーキ売りの女性が単に商いだけをする人ではないことがわかる。彼女は、町の子どもたちの成長を見守り、また彼らの子どもたちとの絆を結んでいく。彼女は、常に子どもたちのそばにおり、子どもたちにちょっとしたお小遣いができる度に、彼らが駆けつける楽しみの対象なのだ。

しかし、その関係が変わってしまったことについて記事の後半は語る。1878年、ニューオーリンズに広がった伝染病の影響で、ケーキを買いに来る客足がなくなった。そして、伝染病が過ぎ去った後も、多くの子どもたちは戻ることができなかった。一人でぽつんと座る老女の姿は次のように描かれる。[146]

> 彼女は日向に腰掛け、以前のような微笑を浮かべることもなく、口を利くことも少なくなっていった。

自分のところへ来ていた子どもたちは、どうなったのだろうと思ったりした。

多くの子どもたちのことは、二度と噂を聞くこともなかった。これから先も聞くことはないだろうが、それでもなお彼女は、どうしているのだろうと気に掛けている。

ある日彼女に、金髪のちっちゃな子は何処にいるのかと尋ねたら、去年の夏から見ていないそうで、返ってきたのはこんな言葉だけだった。

「まったくねぇー、神様だけがご存知よ！」[147]

記事を最後まで読んで、もう一度挿絵を見ると、指をくわえた女の子が、去年から見なくなったという幼児のように感じられる。ハーンは、挿絵に目に見える光景、すなわち、町の一角で子供たちにケーキを売る老女、そしてそこに集まる幼児たちの微笑ましい光景を描いた。しかし、その説明には、可視的な表面の奥にある光景、すなわち、老女と子どもたちとの絆や伝染病によって町の子どもが亡くなった際の悲哀をも表現したのである。

4．結論

本章では、ハーンが挿絵記事を書くことになった経緯やその記事の特色について論じた。ハーンは、ニューオーリンズで刊行した『ジー・ギグランプス』を通して、ヘンリー・ファーニーの風刺漫画を経験し、「皮革製作所殺人事件」の記事に五つの挿絵を入れるという大胆な試みを敢行した。その記事の成功は、彼に挿絵の威力を実感させた。こういったシンシナティでの実体験があったからこそ、日刊新聞に挿絵をいれるという斬新な試みができたといえよう。

ハーンが記者として社会の腐敗を告発し、改革を求めていたことは、彼の警察に対する風刺記事からうかがえる。それらの記事は、挿絵という新しい方法により、一層効果的に改革を促すことができた。[148]ハーンは、一般市民を死なせた警察の過失が、権力という名の下で隠ぺいされたことを辛辣に批判する。彼らの行為には、情状酌量の余地がないとハーンが判断したからであろう。このような風刺は、目的が明確であるため、記事の内容は迂回することなく直線的に書かれた。メッセージを分かりやすく伝えるため、読者の想像力や感受性に訴えかけることは少ない。つまり、平面的な側面を見せる。一転して、市民の生活を表した挿絵記事は警察を風刺した記事とは異なる性格を見せる。彼が目を向けた対

象は、一般市民であった。特に、その中には洗濯婦のような社会的弱者とみなされる人々もいた。彼らに関する挿絵は、単線的ではない。目に見えるものだけを描くのではなく、その奥にある事情まで掘り出し、読者の感性に訴える。「洗濯婦」では、彼女らの問題点をも提示し、批判する。しかし、仕事の裏に存在する現実の厳しさも一緒に語る。人々が長期間の雨で不便を感じた際は、何日もかけて、彼らと共に怒り、彼らの代わりに恨みを言い、ユーモアで彼らを笑わす。ハーンはニューオーリンズの特定の湖において育まれた恋について話す。だが、その話は、恋愛という共通項を持った人々にまで共感が広がるものであった。「火事」や「ケーキとキャンディ」では、町で目にする日常が挿絵に描かれる。前者には、ニューオーリンズの古い習慣や火が消えた時の喜び、火と共に消えた若者への哀悼が複合的に生きている。後者には、町のお婆さんと幼児たちとの世代間の絆や伝染病の犠牲になった幼い命への切なさが描かれている。

このようにハーンの記事は、庶民の生活を描くとき、初めて様々な人間の感情が生き生きと交差し、色彩豊かなものとなるのである。

約7ヶ月間にわたるハーンの挿絵記事の連載は、社会記者としてのハーンの特色ある一面を示すが、他方、彼の文学的傾向も顕在的になる。当時のニューオーリンズの人々や街の風景を鮮明に描き出した彼の文学的資質は、後の西インド諸島や最終的に日本での活動にも脈々と受け継がれ、開花するのである。

第3章　異文化を捉える文学的スケッチ

19世紀初頭から、アメリカでは文学的スケッチのジャンルが流行した。[149]旅人が旅先で軽く素早く絵を描くように、多くの作家が風景、人々、出来事などを短文で描写し、新聞や雑誌に掲載した。ハーンが書き残した作品の多くは、このスケッチに該当する。[150]日本での作品『知られぬ日本の面影』や『心』などがそうである。これらのスケッチは、日本の知られていなかった姿を捉えたと出版当初から評価された。たとえば、『知られぬ日本の面影』は、日本人の本質的な内面の美しさを表したといわれ、[151]『心』は、ハーンほど日本人の心や精神に近づいた西欧作家はいない、と評価された。[152]ハーンの死後、1906年1月21日付『ニューヨーク・デイリー・トリビューン』*New York Daily Tribune*に掲載された記事「ロチとハーン」"Loti and Hearn"は、ロチとハーンが印象派作家という点においては共通点を持つが、ロチが日本の表層的側面を描いたのに対し、ハーンは日本人の精神的エッセンスを捉えた点において相違点を持つ、と指摘した。[153]彼のスケッチ作品がこのような評価を受けた背景には、異文化に対するハーンの特有な姿勢があった。それは、1890年、つまり来日直前の書簡から窺える。彼はニーヨークの文芸雑誌『ハーパーズ』の美術編集長に宛てた手紙の中で、単に観察者ではなく、日本人の日常生活に参加し、日本人の考え方で考えたい、との意気込みを語っている。[154]この姿勢により彼は、日本文化の内面までも描くことができたといえよう。しかし、このスタンスや手法は、日本で初めて培われたわけではない。作家としての活動に専念する以前、新聞記者としてシンシナティの黒人やニューオーリンズのクレオールについて書いたスケッチにもすでに認められる。ハーンのスケッチ記事は、シンシナティとニューオーリンズに分けて、それぞれの先行研究において取り上げられてきた。例えば、平川はシンシナティの黒人女性に関するハーンのスケッチ記事「ドリー」"Dolly"[155]を取り上げ、マーク・トウェインとの相違点を比較分析する。[156]平川によると、トウェインの場合、ミシシッピ河の生活を身近な日常として描いたのに対し、ハーンのスケッチに表れるそれは、現実の要素が排除された夢の産物である。平川は、社会の裏に住む有色人種の生活に興味を示したハーンだからこそ、来日後日本の庶民の生活に共感を寄せることができた、と指摘する。ニューオーリンズに関するハーンのスケッチは、ニューオーリンズの作家を紹介した『文学におけるニューオーリンズ』*Literary New Orleans*にとりあげられる。執筆者ヘフジバ・ローズケリー(Hephzibah Roskelly)は、ハーンがニュー

オーリンズのクレオールやケージャン、そして黒人の文化を、この都市に新たに移住し、定着することになった多くの「アメリカ人」のために紹介したと語る。ハーンは外部の人間でありながら、内部に同化しようとする自分の立場を活かし、異なる文化の間に生じる緊張感や抵抗を巧みに捉えたとしている。[157]

「ドリー」に現れた非日常性は、ハーンの報道記事および再話においても表れる特徴であり、本論文においても、その点を強調している。だが、ハーンが黒人社会に興味を示した背景やその社会に向けた視線については、平川とは異なる視点からの考察も行う必要がある。シンシナティやニューオーリンズにおけるスケッチを比較分析してみると、異文化に対するハーンの視線に相違がみられるからである。ハーン自身の状況の変化、両地域の状況などを視野に入れ、本章では、両地域におけるスケッチに見られる異文化への視線がどのように生まれ、変遷したのか。両社会に対する彼の視座の変遷を比較考察する。

1. シンシナティの黒人町

1.1. 1870年代のシンシナティや黒人社会の状況

まず、ハーンがスケッチの対象とした黒人社会の特殊な状況について説明しておきたい。[158]彼らの社会は、シンシナティ自体の発達と深く関連する。シンシナティは、蒸気船や鉄道による流通産業が発達した新興都市だった。経済の発達につれ、人口も激増した。1800年に750名であった人口は1870年には216,239名と膨れ上がった。[159]海外からの移民は、約3割をしめた。[160]特別な技術を必要としない蒸気船の荷役人足の仕事は、南北戦争の以前は移民者であるアイルランド人が独占したが、終戦後は自由となった黒人が占めるようになった。[161]荷役人足たちは、オハイオ河まで徒歩で行ける距離に住居を据えた。すると、居住地の周辺に波止場人足を相手とする酒屋、宿屋、売春宿、賭博場の店が軒を連ねることとなった。彼らの居住地は、「バックタウン」"Bucktown"と呼ばれた。白人の中でも貧しい人々や黒人男性の白人情婦が居住したが、多数派は黒人だった。バックタウンは、南北戦争以前には、殺人事件が多発したため、「死者の辻」"Dead Man's Corner"とも呼ばれた。[162]1875年、ハーンが取材に入ったときには、バックタウンは秩序を回復しつつあったが、それでも部外者が容易に立ち入ることができる場所ではなかった。ハーンは警官に同行してこの地域を訪れたのである。川辺の黒人社会に関するハーンの記事は、1957年、『波止場の子供たち』というタイトルで出版された。同書には、1874年から

1877年までの12編の記事が収められている。次節では、なぜハーンが黒人社会を記事の素材に取り上げたのか、その背景を考察する。

1.2. 下層民の黒人社会を記事の対象にした背景

ハーンは、記事の新鮮な素材を求めていた。1874年11月は、彼が正式な記者となって間もない時期だった。そして、第1章で取り上げた「皮革製作所殺人事件」により成功を収めた月であった。センセーショナルな記事により名声を博したハーンには、さらに読者の耳目をひくような素材が必要だったのであった。そこで取り上げたのがバックタウンである。外部に知られておらず、危険とされるバックタウンは、ハーンにとって格好の素材であったといえよう。しかし、彼が取材を望んだとしても、黒人社会の内側に入ることができない限り、取材は不可能である。黒人歴史の研究者タイラーは、著書『自由の限界』の中で、当時のバックタウンには、白人の出入りが禁じられている場所があり、ハーンがそこに出入りできたのは、混血の女性マティとの結婚が背景にあったと語る。[163]それは州法に逆らった結婚であった。当時、オハイオ州法では、異人種間の結婚が禁じられていた。白人側は、彼の結婚を反対したが、黒人側の助けにより結婚式を挙げることができた。[164]ハーンは、混血の女性と結婚したことから黒人コミュニティに受け入れられ、白人は出入り禁止の区域でも、立入ることができたのである。すなわち、ハーンは新たな素材として、それまでに知られていないバックタウンを選んだ。それに加え、黒人コミュニティに受け入れられたことにより、そこを取材できる条件が整えられていたのである。

次は、具体的にスケッチを取り上げ、黒人に対するハーンの見方がどのように表れるのか、分析を加える。

1.3. 「バトラーズ」"Butler's"

バックタウンの黒人に対する最初の記事「バトラーズ」は、1874年11月22日付の『インクワイヤラー』紙日曜版[165]の1面に掲載された。バトラーズとは、バトラーという人物が経営する黒人のレストランであり、黒人の中でも貧しい人々が主に利用するところであった。記事は、バトラーズの入った建物や周囲の景観がいかに不気味なのかという描写から始まる。

> 五等級の黒人用の売春宿や、黒い衣装の売春婦たちが獲物を狙っている暗い出入口や、乱暴な口論や酔っ払いの騒ぎの音が響くうさん臭い小道、荒

れ果てた借家やもっとも異常でむかつくような怪奇な構造物などが立ち並んでいる。そのような名うての環境の中にある「バトラーズ」を、通行人はたぶん口にするのもはばかられる不名誉な巣窟、売春婦、盗賊、常習犯の黒人たちの行きつけの場所と見るであろう。[166]

ハーンは、バトラーズの外観を事細かに描写する。まるで、読者を「バトラーズ」の店に案内するようである。読者はその描写により、彼が導く順序に沿って売春宿やいかがわしい小道を過ぎ、古い借家や不快感を与える建物の前を通る。そして目の前にバトラーズが現れる。そこは、通行人である読者にとって口にするのもはばかれる、犯罪の温床とも見紛う場所である。当然、新聞の読者たちが容易く接近できる場所ではない。しかし、表面的には犯罪の巣窟に見える場所でも、その裏側には別の顔があることをハーンは知っていた。そこを愛用する人々にとってバトラーズがどのような役割を果たしているのか、次のように語る。

　この恐ろしげな小屋は、有色人のうちでもより貧しい者たち、より黒人に近い階層にはまったく立派なホテルでありレストランであると考えられている。粗野な波止場人足も、一晩自分の女性を「バトラーズ」──その場所はそう呼ばれている──に連れていって、魚や卵、あるいは豚の足に、ウィスキーとか葡萄酒と呼んではこれらの飲み物への中傷になるようなある調合液をふるまったことがなければ、その女性に対する義務を果たしたとはけっして考えていない。「バトラーズ」は、黒人の住む界隈ではそれ相応にたぶんずば抜けてもっとも人気の高い場所なのである。[167]

危険にしか見えないバトラーズだが、貧しい黒人にとっては掛替えのない大切な社交の場であることをハーンは指摘する。それは、本来外部の人間では知りえない事情である。しかし、1.2で述べたように、ハーンは混血女性との結婚により、彼らの社会の一員として受け入れられた。そのため、彼らの社会への切符を手にし、内部の事情を知ることができたのである。そうはいうものの、ハーンが彼らの社会に溶け込んだわけではなかった。記事において、彼は旅行客を風変わりな場所へ案内するガイドの役割を演じる。「ちょっと『バトラーズ』を覗いてみると想像してほしい」と述べた上で、彼は次のような描写で読者の臭覚を刺激す

る。

> 扉を開けるなり、あなたは──赤く焼けたストーブに吐きつけられる唾の悪臭、安物のひどい煙草の臭み、おなじみの塩漬けの魚のにおい、四十度のウィスキーの混じったくさい吐息の胸の悪くなるようなにおい、それに名を挙げるのもはばかられる一つか二つの別の悪臭といった──さまざまな不潔なにおいのする一吹きの熱い空気に迎えられる。[168]

記事の冒頭で、ハーンは、バトラーズがみすぼらしい外見にも拘わらず、黒人にとって重要な社交の場であり、彼らに人気の高いレストランであると紹介した。しかし、それに続くのは悪臭の描写である。『若き日のラフカディオ・ハーン』の著者フロストは、この記事について、「どちらといえば取るに足らない」といい、「レストランのいい評判とのちょっとした矛盾を見せるなど、性急に纏められた節が見られる」と指摘する。[169]確かに、一見、相反するように見える紹介である。しかし、そこにハーン自身の立ち位置を認めることができる。その地区の内部に住む人々には愉快な場所でも、外部からの通過者であるハーンにとって、また彼の記事を通じてここを通る読者にとって、バトラーズは悪臭漂う不愉快な場所なのである。ハーンはその読者の側に立ってバトラーズを観察する。外部の人間として下層民の生活を観察する姿勢は、記事の最後でいっそう明確になる。最後はレストランの夜の光景が描かれる。

> 夜中になると、売春婦たちは帰ってゆき、バトラーズに住み込んでいる者たちは、休息の場をめぐって言い争う。彼らはほとんど夕食──一ダイムする三個の茹ですぎた卵と、古臭いライ麦パンの切り身にのせた一五セントの魚か一〇セントの豚の足──を済ませていた。冷蔵庫〔冷蔵箱〕は寝床として三人に各々一五セントで賃貸されているので、所有者の懐に一晩四五セントが入り込む。二つのベンチはそれぞれ一五セントで貸し出され、椅子で眠りたい者たちは一晩一ダイムを払う。そこで燈火は消され、梟の燃えるような眼が悪臭漂う薄明かりの中で燐光のように見えてくる。[170]

夜のバトラーズは、人々の寝所に変貌する。きちんとした宿に泊まることのできない貧し

い人々は、安い夕食を済ませた後、箱やベンチ、椅子を借りて一晩を過ごす。バックタウンに暮らす人々にとっては、何の変哲もない日常である。しかし、ハーンが伝えるその日常により、読者はこうした人々の生活を、臨場感を伴って垣間見ることができるのである。

ハーンは読者と黒人社会、つまり、見る側と見られる側の事情に精通していた。バックタウンの黒人社会は、白人には関心の対象とならなかったため、外部にはほとんど知られることがなかった。従って白人社会にとっては、その日常そのものが風変わりな素材だったのである。ハーンは、黒人社会から内部情報を得ていたことから、彼らの内部の一人として彼らの生活の一面を書くことも可能であっただろう。しかし、「バトラーズ」は、彼がその選択肢を取らず、単にそこを通る通過者の視点から記事を書いていることを示している。次に、彼が『インクワイヤラー』紙から『コマーシャル』紙に移って最初に書いた記事「無宿人」"Pariah People"をみる。ここには黒人社会の風俗、とりわけ負の側面が「バトラーズ」より詳細かつ鮮明に表される。

1.4.「無宿人」"Pariah People"

「バトラーズ」の約8ヵ月後にあたる1875年7月、ハーンは『インクワイヤラー』紙から解雇された。その原因は上述した混血女性との結婚であった。彼は非常に落胆したが、失業の期間はそれほど長くはなかった。1ヶ月足らずで『インクワイヤラー』紙のライバルであった『コマーシャル』紙への寄稿が決まったのである。ハーンは、『コマーシャル』紙に寄稿する最初の記事の素材としてバックタウンを選んだ。『インクワイヤラー』紙から『コマーシャル』紙へと勤め先は変わったが、彼が読者に提示しようとするものに変わりはなかった。それは繁栄するシンシナティの一角にある陰の社会である。

ハーンは、聞き込み捜査をする警官に同伴した。逃亡中の犯罪者を捕まえるためである。彼は、読者を捜査の過程へと導く前に、過去のバックタウンがどうであったのかをある事件を取り上げ説明する。この事件の紹介により、ハーンが見せようとするバックタウンの性格が明らかとなる。以下はその事件に対するハーンの解説である。

> バックタウンの巡回が警官の胆だめしだった時代があった。もちろん、殺人や街頭すじの追い剥ぎが、珍しくもない時代だった。バーを装ったある売春宿で、黒人の波止場人足が仲間の脳天をたたき割った事件は、今なお人々の記憶に新しい。息をのんで現場に立ちつくしている数人の新聞記者に向かって若い

> 女給が、ほほえみながら事のいきさつを語り、カウンターの上の赤い血と白い脳味噌を、まるでこぼれたビールを拭うかのように布巾で拭っていた。[171]

「脳天をたたき割る」や「赤い血」や「白い脳味噌」という刺激的な表現が並んでいることがわかる。そして、中産階級のシンシナティの市民であれば、日常においてみることのないはずの「白い脳味噌」を女給が「こぼれたビールを拭うかのように」ふき取る場面は、バックタウンがいかに危険な場所なのか、そこにはどのような人々が暮らすのかを印象づけようとするハーンの意図が伺える。

ハーンと警官がバックタウンに入ったのは、薄暗くなりつつある夕方の時間だった。そこには今にも倒れそうな古くて汚れた家屋が立ち並んでいた。ハーンはその町並みについて次のように描写する。

> バックタウンはガス灯の明かりで見ない限り、つまらない町である。
>
> だが、ガス灯に照らし出されると、幻想的な明暗のコントラストが絶妙の効果を生み出す。木造の建物は濃淡さまざまに入り組んだ影を背景にして、木造りの階段や、ポーチや柱がボーッと照らし出され、薄暗い明かりに浮き彫りになり、ドーリア風の正面があるように見えるのである。パックリと口を開いた戸口は漆黒の暗闇に通じ、無限の迷宮への入口を思わせる。家々の凸凹の輪郭が空を背景にして浮かび上がり、何か難破船の巨大な残骸を思わせる。くねくねと曲がってつづく道には、不気味な悪鬼のごときものが長い影を引きずってうごめいている。[172]

バックタウンは、オハイオ河まで徒歩で行ける距離にある街であり、人口が集中したため、家屋も密集していた。古く汚れており、傾いている家々はボロボロにしか見えないはずである。しかし、ハーンはガス灯の薄い光を用いて、ボロボロの家屋にギリシア建築のイメージを投影する。戸口が開いていても中が暗いため何も見えない玄関は、ミノタウロスを閉じ込めるために作られた「迷宮への入口」に例えられる。必要に応じて無計画に建てられ、凸凹になった家々の輪郭は「難破船の巨大な残骸」と表現される。バックタウンが不気味に描かれているのは確かである。しかし、それは不潔な町を見たというような現実的な不快感とは性質が異なる。ハーンは、想像力を働かせ、怪奇小説に登場するような陰惨な雰囲気を

作り出すのである。

警官に同行したハーンが出会った人々は、裁判から運よく厳しい刑期を免れたアイルラン系混血の女性もいれば、バックタウンでは有名なならず者の情婦もいる。浮浪者の情婦である二人の黒人と白人の女性は、自分たちの体を売り、その浮浪者たちを養っている。あるカラードの女性は、非常に端正な顔立ちで無垢な雰囲気を漂わせているが、盗人の一人である。バックタウンでは女性の間でお互いをカミソリで切りつける事件も稀ではない。警官でさえも一人でいると殺されかねない。ハーンの記事は、警官の視点から再現される。バックタウンの人々は大概が娼婦、泥棒であり、社会の最下層の人々である。

一晩中、警官は町を捜査した挙句、逃亡中の犯罪者を逮捕する。ハーンは記事の最後に新たに起きた犯罪事件を挿入することにより、バックタウンの印象を決定づけようと試みる。バックタウンに住むアルコール中毒の白人女性が犯罪に巻き込まれる事件である。事件の過程は、仔細に語られる。その女性は、泥酔状態で、ある男に性的暴行を受けた後、道に放り出された。しかし、間もなく、また何人かの男たちが彼女を裏通りに連れて行き、同じ目的でさらに彼女にお酒を飲ませたところだった。

> パトロールの警官の足音が近づいて来ると、連中は彼女を歩道に引っぱり出し、縁石の近くの敷石に、腰を下ろしている格好になるように支えをして座らせた。警官は道の反対側を歩いていた。酔っ払って支えを失い、敷石の上に横倒しになったにもかかわらず、警官は彼女の姿に注意を向けなかった。縁石を超えて溝のなかに垂れた彼女の髪を汚物が洗った。警官が太っちょマリアの住まいからコリゾン〔捕まった犯罪者の名前〕を追いたてている最中に、白人黒人をとり混ぜたゴロツキどもが、気を失ったこの女をかつぎあげ、カークの店の裏の空き地に運び込み、服を引き裂いたのだった。警官が駆けつけたときには、悪党どもは逃げ去り、追っても無駄だった。[173]

この引用には、ハーンが得意とする手法がふんだんに盛り込まれている。単に事件の経緯を説明するだけではなく、事件を読者の眼前に再現することである。一度性的な暴行に遭った被害者の目の前を警官が通り過ぎる、という描写は緊迫した状況を作り上げる。しかも、被害者が倒れているにもかかわらず、警官は彼女に気がつかない。結局彼女は、救助される機会があったにもかかわらず、再度悲惨な体験をしてしまう。読者は、思わず舌打

ちでもしたであろう。犯罪事件を刺激的に伝えることにより、ハーンは読者の嗜虐的好奇心を満たす一方で、バックタウンが危険で陰惨な場所であるという印象を読者に与えるのである。

聞き込み捜査の警官に同伴した事情を勘案しても、「無宿人」は、あまりにも刺激的な素材で埋め尽くされている。新たな職場においても成功してみせるというハーンの意気込みが感じられる記事である。記事は、警官の捜査取材だからといって、無味乾燥な文章で書かれた訳ではない。豊かな比喩が使われ、臨場感あふれる描写がなされる。このような工夫により、「無宿人」は見世物として読者に提供されたのである。

「バトラーズ」において、ハーンは写実的な描写に重点を置いたのに対し、「無宿人」には陰鬱な色彩を帯びさせた。「無宿人」以降の記事では、黒人の歌や踊りを書きとめようとする側面が顕著となる。1876年3月17日付けの「堤防の生活」"Levee Life"には、波止場人足として暮らす黒人の生活が詳述される。特に黒人の波止場人足たちの歌が集められていることが特徴である。それ以外にも黒人によるミンストレル・ショーの風景[174]、そして、蒸気船の汽笛を区別し、口笛で真似できる黒人の話[175]など、記事の素材はより多様化する。だが、彼らから一定の距離を保ち、観察するハーンの姿勢は変わらなかった。それはすなわち、ハーンが彼らの内面までには入らず、彼らの居住区を通り過ぎながら観察する、通過者だったことを意味しているのである。

ただし、たとえハーンが通過者としての視点から黒人社会を描いたとしても、ハーンのスケッチが書かれたこと自体に意味があるとするポジティブな評価があることも付言しておかなければならない。19世紀後半のシンシナティの黒人社会については、ハーン以外に記録した人がほとんどいなかった。そのため、ハーンのスケッチは、黒人歴史の研究において貴重な資料として評価されている。例えば、黒人歴史の研究者タイラーは、著書『自由の限界』の中で、次のように指摘する。

> 南北戦争以降、シンシナティにおける黒人の陰の社会について知られているほとんどは、ジャーナリストであり、民俗学者であるラフカディオ・ハーンによるものである。彼は1870年代の同社会を色彩豊かな筆致で描いた。[176]

著者タイラーは、シンシナティの最下層民として暮らしていた黒人の社会を陰の社会と表現する。そして、彼らについて書かれたハーンのスケッチを資料とし、当時の黒人の生

活を示すのである。

アメリカの民俗学者ブロナーも、ハーンの選集『ラフカディオ・ハーンのアメリカ』の序章の中で、彼のスケッチが持つ価値について以下のように批評した。

> ハーンは、社会の影の部分に潜んでいるアメリカ人の生活の一面を記録し、芸術的に素描した。彼らの生活は、元気や活気にあふれているように見え、人があえて近づこうとするとしばしば不安がる姿を見せた。19世紀末のアメリカの新興都市なら、大概経験する様々な文化的風景、それぞれのコミュニティ、それぞれの慣習は、ハーンの記事以外に記録されることはほとんどなかった。今日も、彼の記事は当時の風景や環境を蘇らせることを可能にするのである。[177]

ハーンは、人々の関心の外にあり、誰も近づけようとしなかった場所に入り込み、誰も書き留めようとしなかった素材をスケッチした。基本的にアメリカ社会のアウトサイダーを形成するこのようなコミュニティでは、市民を自称する人間たちには距離のある別世界であった。そうした事情から、ハーン以前には、このコミュニティの現実については報道記者の誰もが踏み入ろうとはしなかった。ハーンがこうしたコミュニティをスケッチの素材に選んだことの意味は大きい。だが、まだここでは、そのコミュニティに共感しようとする姿勢は見られなかった。しかし、後にニューオーリンズのクレオールをスケッチする際にその姿勢は次第に変化してゆくこととなる。続いて、ニューオーリンズ時代に書かれたクレオールのスケッチを取り上げ、シンシナティ時代との相違に照準を合わせ、比較考察する。

2. ニューオーリンズのクレオール

本論に入る前に、クレオールの定義について説明する必要がある。1877年12月3日付『シンシナティ・コマーシャル』に掲載された「ロス・クリオロス」"Los Criollos"[178]は、ハーンがシンシナティからニューオーリンズに移って間もない頃に書かれた記事である。ハーンは一般に広がっているクレオールに関する誤解について先ず指摘する。つまり、ムラート、クォドルーン、あるいはオクトルーン[179]といった混血児をクレオールだと解する誤解である。ハーンは、クレオールの語源を遡り、ニューオーリンズのクレオールとは、自分達の先祖がフランスやスペインの貴族であることに誇りを持つ人々であると説明する。後述するニューオーリ

ンズ出身の作家ジョージ・ワシントン・ケイブルは、1883年1月、ニューヨークの雑誌『センチュリー』*Century*に「クレオールとは誰なのか」"Who are the Creoles?"という文章を寄稿した。そこには、ニューオーリンズの人々がクレオールと呼ばれるまでの歴史が説明される。ケイブルは、ニューオーリンズのクレオールとは、フランス語を使用する支配階級の土着住民であると定義する。[180]

ハーンは、ケイブルが規定するクレオールの本来の意味を理解していたが、やがてニューオーリンズに暮らす期間が長くなるにつて、彼自身も混血児の人々をクレオールと呼ぶようになった。[181]

2.1. 1870年代のニューオーリンズの状況

ハーンのスケッチを見る前に、19世紀後半のニューオーリンズのクレオールについて説明しておきたい。[182]ニューオーリンズは、スペインやフランスの植民地文化の残滓やアフリカ黒人の文化が混交する独特な雰囲気を持つ地域であった。1803年、フランスの植民地だったルイジアナをアメリカが購入して以来[183]、ニューオーリンズにはいわゆる「アメリカ人」の移住が始まった。彼らは市内のカナル・ストリート(Canal Street)を境界線に川上の地域に定着した。[184]19世紀の初頭は、カナル・ストリートに跨ってアメリカとクレオールといった二つの文化が対立した形で存在した。[185]しかし、時間が経つにつれ、クレオール人の人口比率は、低くなっていった。アイルランドやドイツからの移民者が大量に入り、アメリカの他の地域からの移住も続いたからである。[186]川上のアメリカ人の区域は銀行や保険会社、取引所など、ビジネス街として発展した反面、クレオールの旧市街は停滞を続けた。19世紀の初頭にはフランス語人口の方が多かったが、ハーンが関わるようになった1870年代後半には英語人口の方が圧倒的に多くなっていた。肩身の狭くなったクレオール人の状況は、ハーンの記事からもうかがえる。1885年1月17日付け『ハーパーズ・ウィークリー』誌に掲載された「クレオール方言」"Creole Patois"は、次のように始まる。

> クレオールの子供達が*Vié faubon*〔…〕と呼ぶニューオーリンズの古びた一画から純粋にクレオール的な諸要素は消滅しつつあるとはいえ、そこでは依然としてクレオール語が日常生活に用いられている。[187]

19世紀初頭にニューオーリンズの主流であったクレオールが、19世紀後半には消滅し

つつある状況であったことがうかがえる。ハーンがニューオーリンズに入った時期は、そのような状況であった。忘れ去られつつあるクレオール的な諸要素は彼を魅了した。移住した当初、ハーンは「アメリカ人」が住むカナル・ストリートの川上に下宿した。しかし、約7ヶ月後にクレオール地区に引っ越しした。そこで数々のクレオール・スケッチが生み出されることとなる。

2.2. クレオールを記事の素材として取り上げた背景

ハーンは、シンシナティの『コマーシャル』紙の通信員としてニューオーリンズに来た。しかし、送稿する記事の内容に関し、『コマーシャル』紙と意見の隔たりが生じ、やめることとなる。第2章で述べたように、彼は地元の新聞『アイテム』の副編集長として働くこことなった。『アイテム』紙は、町の雑多なニュースを伝える小さな新聞であり、厳しい経営状態にあった。社主は、新聞を蘇らせるために、政治社説以外の全ての権限をハーンに委ねた。その結果、『アイテム』紙には文芸的色合いが加えられた。フランス文学の翻訳を始めとして、文芸評論や書評が書かれ、掲載された。ハーンがクレオール人の風俗について描き始めたのは、彼が旧市街に暮らして約1年が過ぎた時であった。しかし、クレオール人の風俗は、読者の関心を引くための突飛な素材として取り上げられたわけではなかった。シンシナティにおいては、黒人社会が全く知られていなかったため、それ自体が新鮮な素材になりえた。しかし、クレオール文化は、消滅しつつあるとは言え、幾世代にも渡ってニューオーリンズに根付いたものである。従ってクレオール人の風俗自体を記事の新しい素材とすることは不可能であったといえる。彼は、クレオールの中で生活しながら、外部の人間だからこそ気づく日常の面白さを描き始めたのである。

ハーンは、1878年6月から1881年11月まで、『アイテム』紙に勤めた。クレオールに関するスケッチが書かれたのは、自由に記事の題材を選ぶことができた、この時期である。これらのスケッチは、ハーンの死後、『クレオール素描集』として1924年に出版された。[188]この選集には1878年11月から1881年7月まで書かれた45本の記事が収められている。本論文ではこれらのスケッチから3編を取り上げる。そのうちの2編には、ハーンのクレオール人に対する見方が明確に表れており、他の1編は、当時ハーンが試みたクレオール訛りの英語が使われた記事である。

2.3. 「クレオール人の典型」"A Creole Type"

ハーンは、1879年5月6日から11月15日まで、6回にわたってクレオール人の経営する下宿屋について書いた。その最初の記事、1879年5月6日付の「クレオール人の典型」には、新たにニューオーリンズに移住してきたアメリカ人と地元のクレオール女性のやり取りがユーモラスに描かれる。記事の冒頭では、アメリカ人とクレオール人の違いが次のように説明される。

> この町に住んでいるアメリカ人も、比較的若い世代のものは、ここの市民と接触するようなばあい、性格の相違というものがよく呑みこめないから、なるべくそういう連中とは商売の取引を避けるようにしている。それをクリーオール人は、かえって勿怪(もっけ)のさいわいとして喜んでいる。どうもはたで見ていると、自分たちのことをわかってくれるものとはウマを合わせていくが、そうでないものは頭から毛嫌いして、嫁とり婿とり、あるいは兄弟同様の助けあいとか、そういう自分たち同志だけのつきあいに限って、できるだけ長く昔流儀の良俗のなかで暮らしていこうとしているようだ。ただ、そういうかれらに一つの著しい美徳があるとすれば、それは自分たちのことは自分たちで処理する、ということだ。残念ながら、ニューオーリンズに住んでクリーオール人以外の人たちは、つねにそうとは言いかねる。[189]

引用からは、カナル・ストリートを境界に外部の人間となるべくかかわりを持たないようにするクレオール人の姿が読み取れる。アメリカ人もあえて彼らとかかわりを持とうとはしない。それが一般的に知られるクレオール人とアメリカ人との関係である。しかし、性格も生活習慣も異なる二人がビジネスの取引をしようとしたら、どういうことが起きるだろうか。ハーンは、その過程から生まれるエピソードを両側の読者に提供する。お互いに接触を持たず、知らない間柄であるからこそ、このエピソードは記事の素材になったと考える。記事には、全く性格の異なるアメリカ人男性とクレオール人女性が賃貸交渉をする場面が紹介される。ハーン自身が約1年前にクレオール地区に入ったことを考えると、実体験が反映された可能性もある。クレオール人女性は、部屋を借りるため、家賃を知りたがるアメリカ人男性に、ほしい情報は与えず、優しい態度で、家に入るように招く。アメリカ人男性は、招かれるまま、その家に入るが、彼が腰を掛けた途端に彼女の態度は豹変する。

> 女(扉をしめて、生きている彫像みたいに客の前にどっかと座を占め、きゅうに

今までのやさしい声から、太い、よく響くアルトに変わって)「では、早速でございますが、おたがいにお話が納得いくように致しましょうね。手前どもでは、小躰な家を一軒持っております。ようございますね。で、あなたさまはごぎれいな家が一軒ほしいとおっしゃるのですね。ようございます、では一つ、おたがいに了解いたしましょう。まず第一に、わたくしどもでは、どなたにでも家はお貸しいたしませんの。とんでもない、あなた、ぜったいにそんなことはいたしませんとも！」(と声が尻上がりになる。)

男──「ですが、お家賃の方はどういう──」

女(黒い目をキラリと光らし、無言のうちに相手を怯えさせながら、威丈高になり)──「あなたね、話の腰を折らないで頂きます。こちらはね、三つの事を借家人に要求いたします。まず第一は何だかご存知ですか？ご存知ない。では申し上げましょう。現金、現金、現金！(尻上がりに)──只今ここですぐにわたくしの手へ──前金で──はあ、そうでございますとも、いつも前金で頂戴します」

男(おずおずしながら)──「ああ、さよで──よくわかりました。はあ、もちろん──そのつもりでおります。──それでおお家賃は──」

女(激しくかき鳴らすハープの最低音のような声で)──「ちょっと待って。借家人に要求する第二のことは、長くいて下さるという保証です。〔…〕」

男(最後の必死の努力が偶然うまくいって)──「いや奥さん、そりゃ拝借すれば、何年でも一つ家におりたいですよ。でも、拝見しないうちは、拝借するわけにもいきません。」

女──「お見せします。お見せしますがね。──ところで、第三の要求は、ぜったいに汚さないこと。〔…〕ではお見せしましょう。鍵はこれですの」

男──「で、お家賃の方は──」[190]

アメリカ人男性が知りたかったのは、家賃がいくらなのかという情報だが、クレオール人女性は、賃貸の条件を彼に全て熟知させるまで、その情報を与えない。記事の最後まで、彼はクレオール人女性の気迫に圧倒され、自分の意見をまともに話すことができない。ハーンは、アメリカ人男性の反応を通して、見慣れないクレオール地区に定着しようとする新参者の戸惑いや緊張感を表す。彼に対するクレオール人女性の接し方は、最初は優しく彼を家に招き入れ、彼の身動きが取れなくなった途端、態度が変わるなど、一見すると狡猾で

強引に見える。実際にアメリカ人男性は、クレオール人女性の勢いに飲み込まれ、結局彼女の出した三つの賃貸条件で家を借りることとなる。しかし、彼女の台詞をよく見ると、そもそも彼女は、相手を騙して家を借りさせようとするわけではない。彼女にとって、アメリカ人男性は信用できない外部の人間であり、その外部の人間に家を貸す際に、賃借の条件をきちんと伝えようとするだけである。その過程における彼女の仕草は、演劇のト書のように記される。次々と変わる表情や声、誇張した仕草は、相手に不快感を与えるというより、思わず微苦笑を誘うようなものである。

この記事において、ハーンはアメリカ人でもなくクレオール人でもない自分の立場を生かし、両側の読者が興味を持つような逸話を紹介する。「クレオール人の典型」という記事のタイトルからわかるように、性格の異なる両側の二人を登場させ、両文化の間で起こり得る典型的トラブルを描くことにより、両側の特徴を際立たせるのである。しかし、両文化の外側からみる立場を取っただけではない。時には、ハーンがクレオール文化の中に入り、彼らの言葉で記事を書いた。次節では、クレオール方言が使われた記事を取り上げよう。

2.4.「なぜ蟹は生きたまま茹でるのか」"Why Crabs are Boiled Alive"

ハーンは、クレオール人に成りすまして、記事を書くことがしばしばあった。クレオール地区で目にし、耳にした様々なエピソードをその本人たちの立場で書くのである。その場合、クレオール訛りの英語が使用された。こういった記事の代表的な例として「なぜ蟹は生きたまま茹でるのか」が挙げられる。

一風変わったタイトルをもつこの記事は、ハーンが町の中で耳にした会話を下敷きとしている。ハーンは、クレオールの主婦が話すクレオール訛りの英語を書き留めて記事に仕上げた。この記事は1879年10月5日付『アイテム』紙に掲載された。クレオール訛りの英語を見るために、原文も一緒に引用する。

> And for why you not have of crab? Because one must dem boil 'live? It is all vat is of most beast to tell so. How you make for dem kill so you not dem boil? You not can cut dem de head off, for dat dey have not of head. You not can break to dem de back, for dat dey not be only all back. You not can dem bleed until dey die, for dat dey not have blood. You not can stick to dem troo de brain, for

dat dey be same like you—dey not have of brain.[191]

なんだあ、蟹は買わない？生きてるまんま茹でるから？馬鹿言うなってんだ。茹でねぇで、どうやって殺すってんだよ。頭を切り落とすたって、蟹さんにゃ、頭なんかねぇぞ。背骨をへし折ろうたって、背中一面、背骨だい。血を抜こうにも、その血がねぇ。そんなら、脳味噌を串刺しか。そいつあ、よしときな。蟹さんはお前とおんなじで、脳なしとくら。[192]

蟹は生きたまま茹でるのがニューオーリンズの習慣であった。[193]それが嫌だから蟹を買わないと話す相手にクレオールの主婦は「馬鹿なことを言うな」と一喝する。記事には、相手の出身が書かれていない。しかし、生きた蟹を茹でるのを嫌う点、そしてクレオールの主婦が「お前には脳味噌がない」とあてこすりをいう点から、相手がクレオール出身ではなく、外部の人であることが推測できる。ハーンは、地元の習慣に対し、その言葉を用いて、彼らの立場を代弁するのである。

最後にクレオールに対するハーンの視線が表れる記事を取り上げる。

2.5.「クレオール人の気質」"The Creole Character"

「クレオール人の気質（かたぎ）」は1879年11月13日付け『アイテム』紙に掲載された記事である。「クレオール人の典型」から約6ヶ月過ぎた時点である。ハーンは、クレオール地区の独特な雰囲気をクレオール人の仕事ぶりを通して描く。記事は、街にある食品雑貨店に木製の日よけをかける仕事である。この仕事は、ハーンによれば、頑丈なアイルランド人大工2人であれば24時間で終わる仕事だという。しかし、クレオール人の店主に雇われた4人のクレオール人大工は、この仕事をいつ終わるともなく続ける。彼らが仕事をする様子は以下のように描写される。

〔…〕死骨折って働く気にならない。人生はあまりに短い。そこでわれわれは、その職人たちを身に町角へ行ってみた。行って見ると、なるほど、板なんかみごとに削ってあるし、釘の打ちかたなんかも、まことにきれいだ――この職人達は、根っからの気どり屋なのだ。やがて額を拭いて、四人はひと息入れ、巻き煙草をまくと、火をかりに店のなかへはいって行った。[194]

ハーンが見たところ、4人の大工がした仕事は、板をのこぎりで挽き、釘を打っただけである。彼らは、重労働でもしたかのように、汗を拭き、ため息までついて、煙草の時間に入る。火を借りに入ったお店で、彼らは知り合いに会い、お酒を一杯飲みながら、冗談を言い合う。そして、やっと仕事場に戻った様子が以下の通りである。

> やがて四人の大工は表へ出てくると、半分出来かけの日除けの上へあがって、下を通る様子のいい、青銅の像みたいな肌をした、浅黒い色の若い女ににやにや笑いかけ、そしてみんなでゲラゲラ笑いあった。そのうちに雨が降りだしてきたので、四人の大工は下におり、煙草を何本かふかしているうちに、昼飯どきになった。昼飯をすましてから、ものの十分ばかり、のっそりのっそり、悠々閑々と、名人かたぎらしく仕事をしていたかと思うと、ちょうどそこへ狂犬が一匹、下の通りを駈けてきた。[195]

クレオールの大工達は、仕事場に戻ったものの、仕事はほとんどしない。彼らは女性をじろじろ見ながら、笑いあい、雨を口実に食事の時間まで煙草を吸う。いよいよ仕事に取り掛かったかのようにみえたが、それもわずか10分で終わる。そして、そこに犬が走ってくると、それを口実にまた仕事場から離れてしまう。

> それ〔狂犬〕を見ると、四人の大工は意外の根気と、呆れはてた決意をもって、半マイルもその狂犬を追いかけていった。そしてまもなく揃って帰ってくると、さっそく自分たちの勇敢な行為を、店内で褒めそやす黒山の人達や、おりから角を曲がってきた洗濯女や、道をこえてきたイタリア人の果物売りの女や、向かい側の商売がたきの食料品屋のかみさんや、巡行中のでれすけ巡査や、近所の下宿屋の板前、東南の角の菓子屋のあるじ、西北の角の靴屋、西南の角の肉屋、東北の角をまわってきた石炭運びの女などに、滔々と弁じだした。〔…〕
>
> やがて、あたりが暗くなった。大工たちはまた一杯飲んで、それからご帰館になった。さて、その翌日もその通り。そのまた翌日もその通りで、二十三日間、判で捺したように同じ始末。日除けはいまだ出来かけのまんま、野ざらしのむざんな状態である。[196]

頑丈なアイルランド人2人にとって24時間でできる仕事を、4人がかりで23日間も行なったとすれば、しかも、それが未完成だとすれば、彼らは仕事をやっていないに等しい。ハーンが観察したところ、彼らが大工らしい仕事をしたのは、板を挽き、釘を打ったことしかない。彼らは、楽しくない仕事を死ぬほどやる気はなく、可能な限り楽しみながら、遊びの合間に仕事をする。仕事には出せなかった力を、犬を追いかける際には発揮する。彼らは町を走り回り、その武勇伝を町の人々に言い聞かせる。しかし、彼らの仕事がほとんど進まなくても、同じクレオール人である居酒屋の店主は、彼らを解雇することはない。

こういった風景は、24時間で仕事を終わらせられる人々に、怠惰に映るかもしれない。しかし、当事者であるクレオール人たち、大工だけではなく、居酒屋の店主、居酒屋の客、クレオールの町の人々にとっては珍しくない風景であろう。ハーンはシンシナティにおいて一日15時間余を仕事に費やした。記事にみられる皮肉を交えた描写や未完成の日よけに対する「野ざらしのむざんな状態」だという表現は、彼がクレオール人の仕事ぶりを批判するようにもみえる。しかし、その反面、仕事の結果を気にせず人生を楽しむ彼らの姿を表すことにより、ハーンは、クレオールののんびりした雰囲気も伝えるのである。

そのようなクレオールの雰囲気は、彼自身が体験したことでもあった。ニューオーリンズからシンシナティの友人クレビールに宛てた手紙(1878年日付不明)の中で、ハーンはこの地での生活を語る。午前中の仕事について説明した後、自由な午後の時間について以下のように述べる。

> 長い長い黄金の午後が私に、その香りよさと長閑(のどか)さをお楽しみなさいな、と囁きかけてきます。野心も向上心もない人にとって、理想的な生活でしょう。日曜日には塩辛いポンチアトレイン湖が、存分に泳ぎなさい、と誘いかけるので、私は遠慮なく応じます。[197]

この手紙を受けたクレビールは、ハーンの生活にあまり感心しなかった。逆に彼が「南部の退廃的で停滞した雰囲気」[198]に屈服したのではないか、と心配した。ニューオーリンズの生活に対する友人との相反する考え方から、ハーンがいかにクレオール的生活と相性が合い、その暮らしを愛したのかが見て取れる。

ニューオーリンズ時代のスケッチにおいてハーンは、時には観察者の立場から、時には内部の一員として「クレオール的諸要素」を書き留めた。それはシンシナティ時代には見ら

れなかった姿勢であり、ニューオーリンズ時代のハーンが異文化に対して新たな視点を得たことを意味している。

3. 結論

本章では、シンシナティやニューオーリンズにおけるハーンのスケッチをとりあげ、分析を試みた。シンシナティ時代、ハーンは混血の女性と結婚し、黒人社会の一員として受け入れられた。黒人社会は、外部に知られていなかったため、ハーンが求めていた新しい記事の素材に適合した。黒人の多くが居住するバックタウンは、経済的に貧しい人々が多く暮らし、犯罪率も高い場所だった。ハーンは緻密な観察力と文学的想像力を持って、彼らの日常を書き留めた。その結果、当時のシンシナティ黒人の生活の一端を垣間見ることができた。だが、彼らの内面的な部分にはほとんど触れなかった。黒人社会に対するハーンの視線が、コミュニティ内部の人間のものではなかったことを意味する。その理由の一つは、スケッチの目的が、知られていない黒人社会を外部の読者に提供することだったからである。ハーンは、バックタウンを通り過ぎるいわば通過者として、彼らの生活を描いたのである。

しかし、ニューオーリンズのクレオールに関するスケッチは、シンシナティのそれとは異なった。かつてクレオール住民は、ニューオーリンズの主人公だった。しかし、他地域から多くの人々が移住してきたことにより、クレオールは少数となり、政治・経済的影響力も弱まった。それでも、幾世代にもわたるクレオール文化は、クレオール人地区に生き残った。ハーンは、クレオールの居住地である旧市街に住まいを決め、その社会の中に溶け込もうとした。その結果、彼はクレオール社会を内部からも捉えることができた。ハーンは、外部者の視点に立って、クレオール人と最初に接した際の戸惑いをユーモラスに描いた。また、クレオールに対する批判的な視点を見せながらも彼らの生活の持つ良さをも読者に伝えた。つまり、彼は、クレオール社会を外部者の視線で見ただけではなく、そこに暮らす定住者の視点からも観察したのである。

このようなスケッチにおける姿勢、あるいは視点の変化は、ハーンが作家として成長するにおいて、異文化の捉え方として定着したのである。次章では、ハーンが新聞記者から作家への道に入った過程やその結果について考察する。

第4章　ローカル・カラー文学への志向

ハーンは1877年、シンシナティを離れ、アメリカの深南部(Deep South)[199]と呼ばれるルイジアナ州のニューオーリンズに移住した。彼はそこで約10年間、新聞記者や作家として活動を行う。本章の目的は、ハーンがジャーナリストから作家になる過程を明らかにし、その結果である小説『チータ』を取り上げ、ローカル・カラー文学としての特徴を明らかにすることである。

本章は、次の四点から分析を行う。第一に、ハーンがシンシナティからニューオーリンズに移った背景を、先行研究の問題点をふまえて、ハーンの文学的志向という独自の観点から跡付ける。まず、ハーンの個人的な事情を確認し、そのうえでハーンの文学的志向に着目し、この観点からニューオーリンズ行の理由を跡付ける。詳しくは、本論の中で述べるが、ハーンの文学的志向という点に注目すると、そこにはハーンとローカル・カラー文学ならびにその代表的作家ケイブルとの関係が重要な問題として浮かび上がってくる。しかし、ハーンとローカル・カラー文学、ケイブルとの関係を論じる前に、ひとまず、ローカル・カラー文学とケイブルその人について論じる必要があるだろう。この点が第二点である。第三に、ローカル・カラー文学の中でのハーンとケイブルの出会い、二人の関係の変化、その関係の終わりを文学的影響関係の観点から分析する。第四点は、ハーンの作家としての最初の小説『チータ』を取り上げ、この小説にみられるローカル・カラー文学の要素、そして、作品そのものが持つ特徴を浮き彫りにする。こうした考察を通して、ハーンがシンシナティからニューオーリンズに移った背景がその人間関係と彼の作品から明らかになり、ひいては、ジャーナリストであったハーンが作家になる過程とその成果である作品の特徴が示されるであろう。

1. シンシナティからニューオーリンズへ

ハーンは1872年からシンシナティの『インクワイヤラー』紙の見習い記者として働き始め、約1年後に正式記者となった。後述するように、1875年、ハーンは混血女性との同棲をスキャンダル視され、『インクワイヤラー』紙から解雇されたが、直ちにもう一つの有力紙『コマーシャル』に採用されるほど、彼は報道記者として名声を得ていた。しかし、そうした名声に

背を向けて、1877年、彼はシンシナティを去りニューオーリンズへと移る。彼をそのような行動へと駆り立てた理由は何であっただろうか。その理由について、本論文の先行研究であるハーンの伝記『評伝ラフカディオ・ハーン』は二つの理由を挙げる。伝記を手掛かりとして、まずは、ハーンの移住の理由をみよう。

1.1. 伝記的研究から探る移住の契機と問題点

『評伝ラフカディオ・ハーン』では、ハーンがシンシナティを離れた理由を結婚生活の破局から説明する。ハーンは1875年、混血の女性「マティ」と結婚した。しかし、当時、異種族間結婚は法律によって禁じられており、ハーンの友人はみな反対した。だが、彼はそれを押し切って、彼女と結婚した。[200]そして、それが原因で『インクワイヤラー』紙から解雇までされた。このように多くの波乱の末の結婚であったが、わずか数か月で、マティは種々の問題行動を起こすようになり、ハーンの悩みの種となった。ハーンは、当時の心境をワトキン宛ての手紙で吐露している。[201]ハーンは5頁に及ぶ手紙の中で、マティに関する悩みをワトキンに打ち明けた。この多くの悩みの中でハーンの苦悩が最もよく表れた部分を以下に引用しよう。

> マティのことでは、あなたには想像もつかないほど私は苦しんできました。そして、彼女が身を滅ぼしてゆくのを放っておくのは私には耐えられません。〔…〕彼女はけっして住んではならないところで暮らしていて、以前の友達みんなと喧嘩し、グランド・ホテルの近くで、ある女性にカミソリで切りつけたと聞きました。〔…〕
>
> 彼女を知っている人は誰も彼女に部屋を貸さないでしょう。乱暴で性悪な女であると評判になっています。[202]

ハーンが自らの妻の行跡に苦しむ様子をこの手紙ははっきりと示している。この後、ハーンは妻との別れを決意することになる。このような事情をふまえ『評伝ラフカディオ・ハーン』の著者スティーヴンスンは、ハーンがシンシナティを離れた理由を、マティに関する悩みから説明する。つまり、ハーンはマティと別れ、その罪悪感から逃れるようにシンシナティを離れた。スティーヴンスンはこのように説明する。

ハーンがその行先をニューオーリンズと定めた理由に関して、ほとんどの伝記は共通して『コマーシャル』紙の主筆エドウィン・ヘンダスン(Edwin Henderson、生没年不明)の

証言[203]を取り上げる。その証言の内容は、ハーンのニューオーリンズ行きの原因をヘンダスン自身が提供したというものである。具体的に言えば、ヘンダスンが話したメキシコ湾岸地方の話が、ハーンのニューオーリンズ行きの原因ではないかという推測である。先述の伝記的研究の著者スティーヴンスンは、ヘンダスンの発言を論拠として次のように記した。

> ある晩、ヘンダスンとハーンの二人が『コマーシャル』の事務所で夜遅くまで四方山話に打ち興じていた時のことである。〔…〕ヘンダスンの話は回顧調をおびてきて、かつて自分が愛した土地のことをハーンに話してやった。アメリカ南部の華麗な房飾り、フロリダの話だった。メキシコ湾岸地方の風景は、彼の心を虜（とりこ）にした。ハーンは寒さを嫌い、暖かさを愛し、色彩を喜び、くすんだものを嫌悪していた。ありふれた風情にうんざりし、はるか遠くのまだ見ぬものを渇望していた。午前二時の雰囲気の中で、南部は優しさと暖かさと光に満ち溢れた土地に変貌した。[204]

この証言は、ビスランドが書いた伝記『ラフカディオ・ハーンの生涯と書簡』に最初に登場し、その後の伝記もこれにならっている。ハーンのニューオーリンズ行の理由は、これまで専らヘンダスンのこの証言のみから説明されてきた。確かに、こうした伝記研究の指摘は、ハーンが南部へ向かった理由として十分な説得力を持つように思われる。それでもやはり、詳細にみれば、この指摘に全く問題がない訳ではない。その問題はおよそ次の二点にまとめられる。

まず、ヘンダスンの記述には、フロリダの話は登場しても、ニューオーリンズへの直接的な言及はない。この点に注目するならば、ヘンダスンの発言は、ハーンの南部行きの原因とはなりえても、具体的にニューオーリンズ行の原因になったとまでは言い切れない。次の問題は、ヘンダスンが主に気候を話題にしている点である。これまでの生活基盤をすべて捨てて新たな人生を切り開こうとした時に、見通しもないまま単に気候だけの理由で気まぐれに行く場所を決めることがあるだろうか。ハーンは、むしろ、自分の将来を見据えながら意図的に行動したのではないだろうか。もちろん、ハーンの同僚の証言をふまえた先行研究の指摘は、ハーンの行動を動機づけるひとつの重要な要因であることは間違いない。しかし、上記のふたつの問題点をふまえれば、ハーンのニューオーリンズ行きは異なった動機からも説明できるのではないだろうか。本章は、それゆえ、ハーンの行動を文学への志向性

という観点を中心として独自に検証した。この観点から考えると、ケイブルとローカル・カラー文学の重要性が浮かび上がる。次項では、報道記者の仕事に対するハーンの期待とその現実がいかにかけ離れていたのか。ハーンの文学的志向はどのようなものだったのか。それがケイブルとローカル・カラー文学とどのように関わっていくのかについて考察を加える。

1.2. 報道記者の仕事に対する嫌悪

ハーンは約5年間、シンシナティの二つの有力日刊紙の報道記者として、経験を積み、実力も認められていた。しかし、それは、彼の表現によれば「半殺し」になるまで働かされた結果であった。ハーンは任された仕事はきちんと果たしたが、仕事による疲労は蓄積されていった。1877年、ニューオーリンズに移住した後、シンシナティの友人ヘンリー・E・クレビールに宛てた手紙には、報道記者の仕事は二度とやりたくないという彼の気持ちがよく表れている。

> もう二度と新聞で事件記者の仕事はいたしません。もうガス燈には耐えられません。それがどんなに恐ろしい生活であるかはご存知でしょう。通信員として働いていれば、勉強して、勉強して、勉強しぬく時間をもてます(日付不明)[205]

この書簡は、ハーンがニューオーリンズに着いた直後に書かれた書簡である。シンシナティの報道記者生活がいかに耐え難かったかについて記されている。翌年の1878年、同じくクレビールに宛てた手紙には、報道記者の仕事は、芸術家がやるべき仕事ではないことが明言されている。日刊紙の寿命が12時間に過ぎないにもかかわらず、そのため芸術家としては、あまりに無駄なエネルギーを消耗することになるからである。同時に、日刊紙の過剰な仕事のため、創作にかける時間が取れない事情も述べられている。[206]それでは、ハーンはなぜそのような「凄まじい」労働環境の中で5年も働き続けたのか。その答えは、彼がニューオーリンズの新聞『アイテム』に書いた論説から見出すことができる。1880年4月11日付『アイテム』紙に「西部の新聞労働」という論説が掲載された。ハーンが自分の経験を基に書いたものである。記事の冒頭において、西部での記者生活の厳しさを述べた上で、次のように記す。

> 探訪記者としてこの道に入った多くの若者たちは、教育と文筆の才能さえあ

れば成功を得るのに十分だと思い描いていて、あのひどく実用的な西部の報道界で、そんなたんなる文筆の能力などまったく意味のないということを知らなかった。〔…〕異彩を放つ筆者など必要とされていなかった。必要とされていたのは、できるだけ多くの事実をできるだけ短い時間で集め、わかりやすい形で提供する才のあるものであった。〔…〕そうした時代、報道界は文学へのある登竜門を提供するものだと想像していた若者たちは、不承不承正気を取り戻した。[207]

ここでの「若者」が、シンシナティ時代、文学への道を目指して、新聞業界に飛び込んだ彼自身であることは想像に難くない。そうだとすれば、彼がどのような思いで新聞の仕事に飛び込み、そこから挫折を味わったかがみてとれる。ハーンが毎日14時間から16時間に及ぶ重労働に耐えられた理由。それは、新聞の仕事を通して作家への道が拓かれると考えたからである。しかし、ハーンは報道記者の仕事から未来を見出すことが難しいことに気づいた。他の道を探す必要があったのだ。その時点で、深く関わるのが、彼の文学的志向である。次項では、ハーンが文学世界を志向したことやその延長としての新たな道を明らかにする。

1.3. ハーンの文学的志向

報道記者を辞めると決めた時点で、文学的仕事を目指すのであれば、文芸の中心地であるボストンやニューヨークに行くのも選択肢の一つであった。実際に、ハーンの知り合いにも、そのようにして成功を収めた人物も少なくなかった。例えば、友人クレビールや後にニューオーリンズで知り会うエリザベス・ビスランドは、地方からニューヨークに移って成功を収めた人々である。しかし、当時ハーンが置かれた状況を考えてみると、彼がそのようにしなかった理由がうかがえる。彼はアイルランド移民であり、大学教育を受けていなかった。ユニークな犯罪報道記事により、シンシナティにおいては確かにその名は知られるようになっていたが、著名な文芸雑誌に原稿が掲載されたことはなかった。このような状況において、ハーンがアメリカの北東部に行っても、保守的なその地で、作家としての成功を期待することは難しかった、と思われる。彼は、文学的に自分に不足する部分を認識しながら、それを克服するための方法を模索した。それを推測させる表現が、1884年6月29日付のウィリアム・D・オコーナー(William D. O'Connor、生没年不明)[208]に宛てた手紙の中に見られる。

> あなたはきっと驚き呆れてしまうでしょうが、私は英文学の古典、つまり十六、七、八世紀の文学にはまったく無知なのです。学校でも英語の古典はあまり勉強しなかったので、今ではもう、文体という点を除けば、勉強する時もあるまいと思っております。自分の文体を明るくしたい時には──ちょうどコーヒーを卵の白味で明るくするように──自分の頭の中に古風な英語をちょっぴりたらしこむのです。そうして、東洋臭い突飛な表現を少しずつ沈殿させます。しかし、成功するためには、一つの仕事（thing）に集中すべきだと思います。ですから、私は珍しいもの、奇妙なもの、不思議なもの、異国風なもの、怪異なものを崇拝すると心に誓いました。私の気質にはぴったりなのです。[209]

自分の欠点を踏まえたうえで、自分の能力を生かした個性的な世界を構築しようというハーンの意気込みが感じられる。ハーンはシンシナティで報道記者の仕事をつづけながらも、他の新聞記者とは質の異なる記事を書き続けた。日刊紙の有効期限が12時間であるという空しさにもかかわらず、真摯な努力を続けたのであった。やがて新聞業界ではその努力が報われないことを知ったちょうどその時に、彼は、アメリカ文学に吹きはじめた新しい風を感じたのだった。保守的な北東部において従来とは異なる文学の流行が始まっていた。それが、ローカル・カラーと呼ばれる地方色豊かな作品群であった。ハーンは、その新しいうねりの中でケイブルの作品に接した。ではまず、ローカル・カラー文学はどのように生まれたのか、ハーンに影響力を持ったケイブルはどのような位置付けとなっていたのか、この問題を問うことにしよう。

2. ローカル・カラー文学とケイブル

2.1. ローカル・カラー文学の普及

1870年代、南北戦争後、過去の栄光を再び取り戻そうとする心情と今や一つとなった国の未知の地域を描こうとする動向とがあいまって、一つの文学の潮流となった。これがローカル・カラー文学という新しいジャンルである。このジャンルの小説や詩において重要な役割を果たすのが、舞台背景である。その舞台背景とは、規格化された文化の影響を受けていない慣習、方言、衣装、また自然環境など、特色のある要素を擁する地域や時代である。『南部のローカル・カラー』*Southern Local Color*(2002)の共同編者バーバラ・C・

ユーエル(Barbara C. Ewell)とパメラ・グレン・メンケ(Pamela Glenn Menke)によれば、ローカル・カラー文学には、重要な3要素が見られるという。それは、異国情緒の舞台背景(Exotic Setting)、そこに暮らす人々(Characters)、そしてその地の方言(Dialect)である。[210]特に多様な地域の方言の現れに関しては、言葉を標準化しようとする動きに抵抗する意味も含まれているという指摘は興味深い。[211]

一つのジャンルとして根を下ろしたローカル・カラー文学は、やがて供給者より需要者の方が多くなった。そうした多数の需要に応じるべく生み出された作品は地方の生活を描くものが圧倒的に多くなり、ローカル・カラー文学は19世紀の末まで支配的なジャンルとして存在したのである[212]。ユーエルとメンケは、その隆盛の背後にあるいくつかの理由を挙げる。一つには南北戦争の終了後、分断された国を一つにしようとしたこと、さらに北東部にある文芸雑誌の数が多くなり、新しい題材が必要となったこと、そして人々が自国の多様な文化に目を向け始めたことである。[213]

ローカル・カラー文学隆盛の契機となったのが、カリフォルニアの作家ブレット・ハート(Bret Harte, 1836-1902)の作品であった。彼の書いた鉱山の物語「ロアリング・キャンプの福坊や」"The Luck of Roaring Camp"が人気を呼び、『アトランティック・マンスリー』*Atlantic Monthly*誌と1万ドルの契約を結ぶことになったのである。ローカル・カラー文学に対する関心が高まるにつれ、他の有力誌も地方作家の発掘に躍起となった[214]。それによって、地方の作家、あるいは地方について作品を書く作家が北東部の雑誌を中心に活動することとなる。このようなうねりの中で、ジョージ・ワシントン・ケイブルも、ニューオーリンズで見出されたのである。

2.2. 南部文学[215]とケイブル

ケイブルは、南北戦争後の南部文学に新たな活力を吹き込んだ作家として評価される。彼は、1873年に北東部の雑誌『スクリブナーズ・マンスリー』*Scribner's Monthly*誌においてデビューした。同誌の通信員エドワード・キングが、「偉大な南部」"The Great South"という連載のためニューオーリンズを訪れた時、当地のケイブルに出会い、彼の作品「サー・ジョージ」"'Sieur George"を『スクリブナーズ・マンスリー』誌に掲載させたのである。ケイブルの作品は北東部の読者に認められ、次々と作品が同誌に掲載されるようになった。彼の成功は、敗北後沈滞していた南部文学を生き返らせるきっかけとなったのである。[216]

1881年9月号の『スクリブナーズ・マンスリー』誌には、「最近の話題」"Topics of the

Time"という欄に評論「南部文学」"Southern Literature"が書かれた。それによると、南北戦争以降、躍進する南部作家の活動により、新しい文学の時代が開かれた、と評されている。[217]評論は、それまで文芸分野に君臨してきたニューイングランドの文学グループが王座から追われ、死に掛けている、という危機感で締めくくられている。評論の論者は、豊かな南部の作品を受け入れることにより、その危機から立ち直れるとまで、提案しているのである。

南部地域の中でも、ニューオーリンズは、スペインやフランスの植民地だった経緯から独特な雰囲気を漂わせていた。『ニューオーリンズの作家達と黒人』*New Orleans Writers and the Negro*の筆者ジェームズ・R・フリスビー(James R. Frisby)は、ニューオーリンズの特徴を伝えている。フリスビーは、ニューオーリンズの特殊性について、異人種間の交わりから生じたものとして説明している。フランスからニューオーリンズに着いた初期の移住者は、結婚相手の女性が不足したため、最初は現地の女性、いわゆる「インディアン」の女性を妾とし、後に黒人が奴隷として連れてこられた時は、黒人の女性を内妻とした。何代にわたる異種間結婚の結果、ニューオーリンズの社会は白人対黒人という構造では説明できない重層的な社会に変貌した、と指摘し、ニューオーリンズのクレオールの特徴に関しては次のように述べる。つまり、イギリスからヴァージニア州に移住してきた中産階級の人々は莫大な富を得ることによって貴族のように振舞うことができたのに対し、ニューオーリンズの少数の貴族〔クレオール〕は、実際にフランスやスペインの肩書を持ち、何よりも純粋な血統と家族の名誉に関して敏感に意識する人々であったことである。[218]

ケイブルは、このようなニューオーリンズの独特な文化を題材として作品を書くことで北東部の読者に好評を得た。先述した『スクリブナーズ・マンスリー』誌の「南部文学」は、ケイブルが文学の素材として全く新しい分野を発見した作家であり、アメリカの優れた作家の一人であると評価する。[219]1882年2月号の『センチュリー』誌には「ジョージ・W・ケイブル」"George W. Cable"という評論が書かれた。同評論によれば、北部と東部は、変形されたイギリスであると評し、その影響を受けていないニューオーリンズのケイブルが生み出す作品こそアメリカ文学の独創的産物であると称賛する。また、ケイブルが描き出したクレオール社会には作家自身の個性が強く反映されているため、他の作家がクレオールを素材として作品を書く場合、ケイブルの模倣に過ぎないと、読者から言われるだろうと警告する。[220]北東部におけるケイブルのこうした高い評価に注目するのは、次節のハーンとケイブルの関係を論ずるための前提だからである。クレオールに関するケイブルの作品が北東部で好評

を博せば博すほどに、南部の白人にとっては、疎ましい現実となった。それまで語られることのなかった南部貴族の血統に関する情報を、ケイブルが明かすこととなり、いわば彼らのタブーに触れることになったからである。次節で詳しく論じる。

3. ハーンとケイブルとの影響関係

ローカル・カラー文学の端緒を拓いたハートや南部文学の先駆者ケイブルは、ハーンの目を惹くような経歴を持っていた。ハートは、ハーンと同じく高等教育を受けておらず、様々な職を転々とした末、地方雑誌の編集長を務めた人物である。ケイブルは、文学の後進地域と思われた南部に暮らし、一時期『ニューオーリンズ・ピカユン』*New Orleans Picayune*紙の記者として働いたが、間もなくその仕事も辞め、綿問屋の事務職員として勤務した人物である。ハーンが、自身と似たような経歴と才能を持つ二人に、自分のロール・モデルを見出し、ローカル・カラーの流れに身を投じようと考えたとしても不思議ではない。実際にシンシナティにおいてハーンはケイブルの作品をすでに読んでいた。1883年11月に『センチュリー』誌に書いた「ケイブルの物語の舞台」"The Scenes of Cable's Romances"には、ケイブルの作品「ジャナ・ポクラン」"Jean-ah Poquelin"を読んで受けた感想が綴られている。

> 十月の朝の、すみれ色と金色の光を浴びてまどろむ、ニューオーリンズの印象は、「ジャナ・ポクラン」"Jean-ah Poquelin"の記憶と奇妙に結びついていた。異国情緒豊かで絵のように美しい、その変わった小品が、まだ見ぬこの南部都市への、私の期待に与えた影響は少なからぬものがあり、おかげで私は、目にはいる特殊なもの、亜熱帯的なもののすべてを理想化しようとしていた。[221]

シンシナティ時代には、ハーンの側から一方的にアプローチするような二人の関係は、やがてニューオーリンズではケイブルとの親交を深め、相互的なものへと変化した。本節では、まず、二人の関係を私的な側面から明確にする。ハーンの書簡、記事、またハーンの伝記、ケイブルの伝記を基に、二人の公的、私的な交流、影響関係を考察しておきたい。

3.1. クレオールの音楽をめぐる二人の協力

1877年、ハーンは、誰一人知り合いのいないニューオーリンズに着いて間もなく、自らケイブルを訪問した。内気なハーンにしては珍しい行動である[222]それほど、ハーンは、ケイブルに関心を持っていたのであろう。ハーンは、週に2-3回はケイブルの自宅を訪ね、ケイブルは自分の友人たちをハーンに紹介した。

ハーンとケイブルの共通の興味は、クレオールの文化や方言および歌であった。彼らは一緒にニューオーリンズの町を歩き、黒人の歌を蒐集した。シンシナティにおいて黒人の歌を蒐集した経験のあるハーンが、この作業に熱心だったことはいうまでもない。1878年、ニューオーリンズ生活がまだ1年にも満たないころ、ハーンはケイブルとのクレオール音楽の蒐集についてクレビール宛ての書簡に書いている。

> ジョージ・ケイブルという魅力的な作家がいます。彼が『スクリブナーズ・マンスリー』誌に書いたニューオーリンズに関する繊細な物語を、あなたも何篇か読んだでしょう。彼は、クレオール音楽の研究を取り入れた作品を書いています。その作品の中にクレオールの歌を挿入し、脚注に楽譜を収録する予定です。私は、その歌を蒐集するケイブルの作業を少し手伝いました。しかし、彼は音楽を聴いて記譜することができるので、私より有利です。[223]

二人は町を歩いて、クレオールの黒人の歌が聞こえてくると、ハーンがクレオール方言の歌詞を書き留め、ケイブルが旋律を聞いたまま書き写すのが常だった。[224]しかしながら、この共同作業は彼らの関係に少しずつ亀裂を生じさせた。上掲の手紙が指すケイブルの作品とは、『グランディシム一族』*Grandissimes*(1880)である。ハーンが手伝って蒐集した約50曲の音楽は、その本に掲載されるはずであった。歌詞は本文の中に挿入し、楽譜は最後にまとめて収録する計画であった。しかし、出版された『グランディシム一族』の中には楽譜は一切掲載されず、クレオールの歌詞も短いものが数編収録されたのみであった。ハーンは1881年のクレビール宛ての手紙の中で不満を漏らしている。

> 私は、ケイブルの『グランディシム一族』のことで、とても嬉しく思いながらも、その一部に関しては少しがっかりしました。ケイブルは、私に話した最初の計画通りにしませんでした。その計画とは、およそ50曲のクレオールの歌を作品の所々に挿入し、楽譜は脚注に入れることです。しかし、本には、何篇かのごく短い歌が

> 収録されただけです。それに、クレオール音楽は細かい音程が使われているため、ケイブル氏はそれを正確に記譜することができませんでした。彼は、そのような細かい音程を記譜できるほどの音楽家ではないと私は思います。[225]

ハーンは、ケイブルが作品に十分に歌を収録しなかったことにだけ不満を言うのではなく、ケイブルの音楽的能力にまで疑問を呈している。ちなみに、ケイブルが最初の計画通りに歌を収録しなかったのは、彼の意向ではなかった。ケイブルの伝記が明らかにする限り、ケイブルは、クレオールの歌を作品に取り入れることを強く希望したが、編集長らの反対により、省略せざるをえなかったのである。[226]

3.2. 二人の関係の亀裂

ハーンとケイブルとの間の亀裂は、友人クレビールをめぐって深刻となった。二人は1883年までクレオール音楽の蒐集を続けていた。1883年、ケイブルがニューヨークを訪問することになった時、ハーンはニューヨーク在住のクレビール宛ての紹介状を彼に持たせた。クレビールがクレオール音楽に興味を持っていることを知っていたからである。ケイブルは、その紹介状を持参し、当時『ニューヨーク・トリビューン』紙の音楽編集長であったクレビールに会った。その紹介状の内容は以下の通りである。

> 私はケイブル氏に君を訪問するか、ニューヨーク滞在中に君を招待するよう頼みました。彼は君の芸術を大いに愛好しています。……もしクレオール音楽について語り合いたいなら、すばらしいチャンスになりましょう。[227]

しかし、ハーンの紹介によるケイブルとクレビールのこの出会いは、単なる趣味の話し合いでは終わらなかった。1884年の夏、二人は共同作業を始めたのである。アーリン・ターナー（Arlin Turner）が1966年に著したケイブルの伝記『ジョージ・W・ケイブル』*George W. Cable*には、二人の共同作業がどう進行したのかが記されている。[228]つまり、ケイブルがクレオール音楽の公演を手掛け、それを元にクレビールと共同で短い本を出版するとの計画であった。その本は『センチュリー』誌から刊行される予定だった。しかし、結果的に内容があまりに長く、言語学的に難しかったことで、計画は白紙に戻った。そのために準備した原稿は、後にケイブルがより軽い内容に仕上げ、1886年2月の『センチュリー』誌に発表され

た。「クレオール奴隷のダンス」"Creole Slave Dances"というタイトルである。同作品には、もちろん、ラフカディオ・ハーンの助力があったと一行の謝辞が書かれた。クレオールの音楽を一緒に蒐集したことへの謝辞である。しかし、その謝辞は、たくさんの協力者達の中の一人として書かれたにすぎなかった。

ケイブルとクレビールが彼を抜いて共同作業を始めたのは、ハーンにとって愉快なことではなかった。ハーンは自分の気持ちを露骨には明かさなかったが、ケイブルの陰口を言うような形で不快感を表した。その陰口の内容を見ると、ケイブルの持っている歌より、クレビールのものが面白かった[229]、ケイブルはクレオール音楽を正確に書き取れない[230]、ケイブルの手掛けるクレオール音楽には言葉では言い表せない何かが抜けている[231]という具合だった。しかし、これらの陰口はあくまでもクレビール宛ての私的な手紙に書かれたものである。公的に、すなわち仕事の面においてハーンは、ケイブルの作家としての力量を認めていた。仕事の面においてハーンが取った態度は、ケイブルの作品をめぐる論争の中でよく表れる。ケイブルの作品が引き起こした論争とそれに対するハーンの態度を確認しよう。

3.3. ケイブルの作品をめぐる論争とハーンの態度

1879年、それまでに『スクリブナーズ・マンスリー』誌に掲載されたケイブルの短編が『古きクレオール時代』*Old Creole Days*として出版された。[232]ニューオーリンズの人々は、地元出身の作家が北東部において認められたことを喜び、ほとんどの新聞は彼を称える記事を書いた。[233]しかし、2作目の長編小説『グランディシム一族』から南部と北部での評価が分かれ始めた。同作品は、『アトランティック・マンスリー』誌をはじめとする北部の著名な文芸雑誌から絶賛された。[234]ニューオーリンズのほとんどの新聞は、フランス系の『ラベイユ』*L 'Abeilles*紙を除いて、ケイブルの北東部での成功を歓迎した。[235]実は、『ニューオーリンズ・ピカユン』や『アイテム』、または『デモクラット』といった日刊紙は、ニューオーリンズの地元の人、すなわちクレオールが設立した新聞ではなかった。ハーンのように他の地域からニューオーリンズに移住してきた人々が編集長や記者を勤めていたのだ。そのため、彼らはクレオールと距離をおいた見方を取ることができたといえる。彼らは、クレオールが持つ不満よりは、南部の作家が成し遂げた成果に注目した。

しかし、いわゆる白人のクレオールは、そういう賞賛に同感することはできなかった。アメリカの民俗学者ブロナーは、著書『伝統を追って』の中でクレオールが感じた怒りの理由を三つにまとめている。第一、ケイブルが作品を通して、クレオールの混血化をほのめかした

こと。第二、クレオールの先祖が貴族ではなく、旧植民地時代に移住させられた囚人である可能性を暗示したこと。第三、クレオールの先祖が売春を利用する常連であったと暗示したことである。[236]すなわち、スペインやフランス貴族の子孫として高く誇りを持っていたクレオールにとって、ケイブルの作品は許しがたいものであったのである。[237]

クレオールの人々は怒りを感じていたが、作品が出版された最初の頃はそれを公にせずにいた。[238]しかし、1880年の末、その怒りは、匿名のパンフレットを契機として、爆発した。後に明かされたが、そのパンフレットを書いたのは、ケイブルとハーンの友人であるクレオール人神父アドリアン・ロケット(Adrien Rouquette, 1813-1887)だった。[239]友人にまでビラを書かせるほど、ケイブルの作品はクレオール社会の微妙な問題に触れているのである。そのパンフレットの内容は、『グランディシム一族』に登場するクレオールの魂とその子孫が会話する形式のものだった。そこでは、ケイブルを嘘つき、中傷する人、無学な人、悪魔などと呼び、彼がヴードゥー教の女司祭と性的な関係を持ち、混血の子供をもうけたなどと、誹謗に満ちたものであった。[240]ハーンは、1881年1月13日付の『アイテム』の書評「『グランディシム一族』、もう一度」"The Grandissimes Once More"の中で、このパンフレットを下品なくずであると強く批判する。ハーンにとって許せなかったのは、単なる誹謗中傷に過ぎないパンフレットが、クレオールの意見を代弁すると言い張るところであった。ハーンはこのパンフレットがニューオーリンズの恥辱であると断言する。

しかし、『グランディシム一族』における歴史的事柄の真偽に関しては判断を保留した。彼は、作品に描かれた1803年のニューオーリンズの社会的状況が、歴史的に正しいかどうかは、歴史家に任せる、と論争から一歩引いた態度を見せる。しかし、そう言いつつも、当時の誰よりもケイブルがその時代を忠実に描いたと評価する。そもそも先祖代々当地に暮らしてきたルイジアナ人でもなく、クレオールでもない人が、欠点のない完ぺきなものを書くのは、不可能であろう、とケイブルを擁護する。そして、ハーンは、『グランディシム一族』は、歴史そのものではなく、その上に成り立った小説である、と断言している。

ハーンは『グランディシム一族』を文学的に高く評価し、他方でクレオールとの論争になった歴史的問題に関しては、なるべく中立的な立場を取ろうと試みた。クレオールの言い分も考慮しながら、ケイブルの立場をも弁護したのである。

同時にハーンはケイブルとクレオールの中でジレンマも感じていた。クレオール社会の批判からケイブルを擁護していたが、彼らとハーンとは親密な関係であったのである。クレオールの主張にハーンが一部共感した側面もあった。たとえば、白人クレオールの言語の問題

である。ケイブルは、作品に登場する白人クレオールがニューオーリンズ特有の英語方言を話すように設定した。日常的に使われる方言であり、作品が現実的であると評価された側面もあった。しかし、上流階級のクレオール達は、不愉快に感じた。ハーンはそう感じる彼らの立場を理解していた。1881年クレビールに宛てた手紙の中でクレオールの言語能力に対して次のように語る。

> ここにいるほとんどすべてのクレオール――白人――は、英語、フランス語、スペイン語がだいたいできます。他に、子供や召使に話す時だけのために〔クレオール〕方言も使用します。子供は10歳くらいになると、普通はどんな場合でもクレオール語を使用することが禁じられます。[241]

このようにケイブルのクレオール描写に同意しない部分もあったが、ニューオーリンズにいる間、ハーンはケイブルに好意的な書評を書き続けた。自分が所属する『アイテム』紙や後の『タイムズ・デモクラット』紙を通して、ケイブルの作品が発表されるたびに好意的な書評を書き続けた。『グランディシム一族』の場合、3回にわたって書評を書き、ケイブルを援護した。『タイムズ・デモクラット』紙の編集長もハーンと同じくケイブルの擁護者であったため、同紙はまるでケイブルの専属機関紙のように、彼の動向を伝え、北東部から受けた賛辞を紹介した。[242]このように、ハーンが、孤立されたケイブルの味方であったとすれば、ケイブルは北東部の文芸雑誌への道をハーンに拓いてくれた。ハーンは、作家への道の第一歩として、文芸雑誌への寄稿を待ち望んでいた。しかし、その扉は中々開かなかった。次項では、ハーンの次のステップである文芸雑誌への寄稿をめぐる二人の関係について論じる。

3.4. 北東部の文芸雑誌への寄稿

ハーンは、作家として独立するためには、まず北東部の雑誌に認められる必要があると考えた。彼はニューオーリンズに着いてから、北東部の文芸雑誌に原稿を送り続けたが、ことごとく断られた。1878年6月にワトキンに宛てた二通の手紙からは自嘲的な気持ちが感じられる。

> 雑誌記事のための材料を集めてきましたが、それを書き上げることもできませ

ん。翻訳など、ただ機械的な仕事しかできませんでした。──それと空想的なエッセイを一つ、これは三つの雑誌からあいついで断られました。[243]

『アップルトン』紙から体よく断る手紙がきたので、同封します。もちろん、またしても。[244]

このように雑誌から掲載を断られたという内容はクレビールに宛てた手紙の中にも頻繁にみられる。不採用の連続で失意にあったハーンの様子は、1884年のオコーナー宛ての手紙に表れる。文芸雑誌での仕事を勧めるオコーナーに対し、ハーンは次のように答える。

全国的な雑誌でやっていくのは無理だと思います。小生の経験は、心沈むものでした。「すばらしい。学問的にも立派です──ですが、小社の意向とはいささか異なるようです」……「大いに関心をそそられます──しかし、申しわけありませんが、紙面は埋まっております」……「残念ながら、お引き受けできません。ですが、某社などにご送付なされてはいかがと存じます」……「十分公刊に値するものとお見受けいたします。ですが、当社の方針には、いささかそぐわないように思われます」……。[245]

何年も原稿を送り続けても固く閉ざされていた文芸雑誌への門は、ケイブルの紹介により開かれた。1883年、ニューヨークのハーパー社は、『スクリブナーズ・マンスリー』誌に寄稿していたケイブルを引き抜こうとして、彼を訪れた。ケイブルはそれを断り、代わりにハーンを紹介した。[246]それを契機としてハーンはハーパー社の雑誌に寄稿することとなる。後にすべての仕事を辞め、マルティニク島に行こうと決心できたのは、彼の最初の短編小説『チータ』が『ハーパーズ・マンスリー』紙に掲載されたからであった。著作活動だけでも生活できると判断したのである。

『チータ』のもとの話もケイブルから得た素材であった。その点に関しては、ティンカーの『ラフカディオ・ハーンのアメリカ時代』に、ケイブルが『チータ』の素材をハーンに盗用されたと考えた、と書かれている。[247]しかし、ケイブルの伝記はそれを否定する。著者ターナーは、ティンカーの見解が伝聞によるものであることを指摘し、ケイブルがハーンに関して失礼な発言をした記録は全くなかったと記す。[248]どちらの話が正しいのかはともあれ、ハーンが

マルティニク島やさらに日本に行くことになったのがハーパー社との仕事によるものであったことを勘案すると、ケイブルの仲介はハーンの人生に重要な役割を果たしたといえるだろう。

一方的な思いから始まり、双方の方向へと発展した二人の関係は、1885年にケイブルがマサチューセッツに移ると共に事実上消滅した。二人の関係が終わりを告げた理由に対して、ティンカーは、「他人〔ケイブル〕がしだいに成功してゆくことに対する妬みの害毒」[249]が、ハーンに架空の被害意識を持たせた、と語る。ティンカーは、『タイムズ・デモクラット』の編集長ペイジ・ベイカー(Page M. Baker, ?-1910)からの伝聞を引用し、ハーンが、ケイブルの自宅の玄関先で「嫌だ！やめた。あいつは私のアイディアを盗用するだろう」といい、訪問をやめ帰ってしまったと記す。[250]ティンカーは、それが架空の被害意識というが、盗用かどうかはさておいても、少なくともケイブルとハーンは1878年から83年までクレオール音楽の蒐集を一緒に行った。そして、それを発表する機会が与えられたのは、ケイブルだけだった。同様のテーマを扱ったとしても、ニューオーリンズ出身であり、南部文学の代表とされるケイブルが有利な立場であったことは否定できない。それは言い換えれば、ローカル・カラーを通して文学の道を拓こうとしたハーンが、その代表格であるケイブルを訪ねてきたが、まさにそのケイブルが大きな壁と感じられるようになったことを意味する。ハーンは、ニューオーリンズにおける経験をもとに、新たな道を開拓する必要があった。そして、1887年、マルティニク島に向かうこととなるのである。

1887年5月号の『ハーパーズ・ニューマンスリー・マガジン』に掲載された「最近の南部文学の近況」"The Recent Movement in Southern Literature"は、当時活動していた12人を中心に「南部作家」を取り上げ、その肖像画と共に作家の経歴や作品の特徴を紹介したものである。ケイブルは、南部文学の伝統を継承し成熟させた作家の一人として描写される。さらにこの記事において、12人の最後の一人としてハーンも紹介される。これが南部文学と関連してハーンの名前が取り上げられた最初であった。ハーンは、フランス文学の翻訳者として、また『飛花落葉集』や『中国怪談集』といった異国的物語の紹介者として紹介された。[251]

1896年8月号の『カトリック・ワールド』誌の記事「アメリカ文学の50年」"Fifty Years of American Literature"において、ニューオーリンズの作家としてハーンの名前が登場するのは重要である。この時期のハーンはすでに日本に移住し、日本に関する旺盛な著述活動を行っていたからである。 同記事は、他の記事と同様、ケイブルを最初に言及し、その次にグレイス・キング、レベッカ・ハーディング・デーヴィス(Rebecca Harding Davis, 1831

－1910)と共にハーンを取り上げる。[252]ニューオーリンズを代表する4人の作家の中で、このようにハーンの名前が入っていることは、いよいよ南部作家の一人として確実に認識されていたことを意味する。次節では、南部作家として彼が書き上げた最初の小説『チータ』の構造、意味、性格、評価を考察しよう。

4. ローカル・カラー文学作品としての『チータ』

ニューオーリンズ時代は、ジャーナリストとしてのハーンが作家として飛躍するため、翻訳や再話などに精力的に取り組んだ時期であり、その成果が徐々に出版され始めた時期でもある。最初に出版されたのは、フランス人作家ゴーティエの作品を翻訳した短編集『クレオパトラの一夜とその他幻想物語集』*One of Cleopatra's Nights and Other Fantastic Romances*(1882)である。その2年後刊行されたのは、エジプトやポリネシアなどの様々な国の神話や伝説などを再話した『飛花落葉集』である。さらに、その3年後同じく中国の昔話の再話である『中国怪談集』が出版された。そして、この時、漸くハーンは翻訳でもなく再話でもない最初の創作小説『チータ』を生み出したのである。

『チータ』は、1887年、500ドルで『ハーパーズ・マガジン』誌に買い取られた。ハーンのスケッチ記事や博覧会の取材記事がハーパー社の雑誌に掲載されたことはあったが、文学作品として小説が売れたのは初めてだった。ハーンは、これをきっかけに新聞記者の仕事をしなくても創作活動だけで生活できると判断し、『タイムズ・デモクラット』紙をやめ、ハーパー社の寄稿者として作家生活に入る決心をしたのである。『チータ』は、当時の書評において物語としての問題を指摘されたものの、全体としては熱帯の雰囲気を上手く伝えた作品として評価された。ハーンが次の小説『ユーマ』に取り組むことになったのも、この『チータ』の成功に負う所が大きい。

本節では、このように、ハーンの作家人生において大きな転換点となった『チータ』を取り上げ、作品に見られる特徴を明らかにし、ハーン文学における『チータ』の位置づけについて考察を加えたい。

4.1. 小説家としてのハーンの最初の試み

4.1.1. 『チータ』の誕生

1883年、ハーンはケイブルの自宅に招かれた。晩餐会の席でケイブルは、1856年にお

きたハリケーンについて話した。行楽地として名高いデルニエール(Dernière)島(最後の島)を襲った恐ろしいハリケーンから奇跡的に生還した一人の少女の話である。少女は、漁師に救われ、漁師夫婦の下で暮らすこととなり、何年かの間彼らと一緒に生活した。しかし、ある日、彼女の親戚が現れ、彼女はニューオーリンズの元のところに連れ戻された。だが、すでに自然豊かな島の生活に馴染んでしまった彼女は、結局都市を離れ、海辺に戻り、漁師と結婚して暮らした、という実話である。[253]この話はハーンに深い印象を与えたに違いない。というのも、まさにこの話を基にハーンは『チータ』を仕上げたからである。

しかし、彼が『チータ』の創作に取り組んだのは、話を聞いてから3年後の1886年のことである。その3年間、ハーンは熱帯の島を実際に体験した。1884年8月、ハーンは、『タイムズ・デモクラット』紙の編集長ベイカーから最初の休暇が与えられ、彼の薦めによりルイジアナの有名な避暑地であるグランド・イル島に行った。ハーンと同僚記者2人はメキシコ湾内、ミシシッピ河口バラタリヤ湾の小島グランド・イル島で3週間余り滞在した。毎日ゆったりと海水浴などを楽しみながら過ごしたハーンは、毎年この島で休暇を過ごすようになった。『チータ』を書くための資料もこの時に収集されたとされる。[254]

『チータ』は、1886年にグランド・イル島で起稿され、翌年の初め頃、同じグランド・イル島で脱稿された。小説の分量は中編小説に相当し、完成まで費やした時間は約10ヶ月であった。[255]この小説は、1887年5月に『ハーパーズ・マガジン』に採用され、1888年4月号に掲載される。そして、翌1889年、ニューヨークのハーパーブラザーズから単行本として出版された。こうしてハーンの初の小説『チータ』が誕生したのである。

4.1.2. 『チータ』の構成

『チータ』は、第1部「最後の島」の伝説(The Legend of L'île Dernière)、第2部海の力(Out of the Sea's Strength)、第3部高潮の影(The Shadow of the Tide)という3部構成からなる。この小説のあらすじは次のようなものである。

第1部「『最後の島』の伝説」(The Legend of L'île Dernière)において、語り手の「私」はグランド・イル島に向かう蒸気船に乗っている。語り手の「私」の口を通じて、ミシシッピ川の河口にある島々の風景が色鮮やかな筆致で描かれる。グランド・イル島では、語り手の「私」に島の漁師が有名な避暑地であったデルニエール島の惨劇について語る。その話は劇中劇となり、ハリケーンにより破壊されていくデルニエール島の様子が描かれる。

第2部「海の力」(Out of the Sea's Strength)において、少女チータの物語が本格的

に始まる。ハリケーンで生き残ったクレオールの女の子どもがスペイン人漁師により救われ、彼らの家族として暮らす様子が描かれる。彼女は漁師夫婦によりチータと名付けられる。彼女の父親はハリケーンによって亡くなったと考えられていた。しかし、父親は生き残っていた。彼は自ら娘を失ったと思い嘆き悲しんでいた。

第3部「高潮の影」(The Shadow of the Tide)。チータは成長していくにつれ、島に馴染んでいく。後日、実父は、偶然、チータに出逢うこととなる。しかし、彼は自ら名乗り出ることができないまま、伝染病による最期を迎える。

4.1.3. 書評にみる『チータ』のローカル・カラー文学としての特徴

『チータ』の書評は、米国の教会雑誌『カトリックの世界』*Catholic World*[256]や『ハーパーズ・マガジン』[257]に掲載された。これらの書評は『チータ』の欠点として、作中の出来事が不自然であり、人物の性格づけに深みがない点を指摘している。同時に小説の長所として、最後の島(デルニエール島)の風景を流麗な筆致で記した点、ハリケーンの襲来に果敢に立ち向かう人々、つまり人間と自然との闘いを鮮烈に描きだした点を評価した。1993年のポール・マレイ(Paul Murray, 1949-)によるハーンの伝記『ファンタスティック・ジャーニー』*Fantastic Journey*は、『チータ』を次のように批評している。

> 筋のはこびや、人物の性格づけなど、明らかな弱点が目についたのだが、にもかかわらず、ヴィクトリア朝時代のかしこまった読者のあいだでは、この作品は大好評を博した。取り上げられた場所や人物の異国趣味、センチメンタリティ、きわめて壮大な自然など、苦心の描写は歓迎された。[258]

『チータ』に対する評価は、他にもあるが、ここではマレイのものだけを挙げる。というのは、ここに著されている『チータ』の短所と長所が 他の評価にも共通に見られるからである。

ハーンは作家として成功を期して小説『チータ』を生み出したのであったが、マレイの評からは、ハーンの評価された点が物語作家としての資質、すなわち、構成や人物像の組み立てなどではなかったことが窺える。評価されたのは、作品の持つ異国情緒や感傷的な文体、自然の活写といった点である。ハーンは、ここではローカル・カラー文学としての特徴を活かすことに力を注いだと思われる。その特徴を観察してみよう。

4.2. ローカル・カラー文学作品として特徴

ローカル・カラー文学の重要な3要素について第2項において述べたが、それは、異国的舞台背景(Exotic Setting)、そこに暮らす人々(Characters)、そしてその地の方言(Dialect)であった。『チータ』には、このローカル・カラー文学の3要素、つまり、物語の舞台背景は、南部のニューオーリンズや南部地域の中でも避暑地として有名なグランド・イル島およびデルニエール島である。登場人物は、ニューオーリンズの白人クレオールや地元のスペイン人漁師といった人物である。彼らは、英語、クレオール語、スペイン語、フランス語で会話をする。

これらの3要素が『チータ』の中にどのように溶け込んでいるのか。そして、それ以外にも、シンシナティの報道記者時代にハーンが磨いた文学的手法である事件の再構成や死体についてのグロテスクな描写が本作品には活かされている。これらの点に関して分析していく。

4.2.1. 緻密かつ鮮麗に描かれる熱帯の島々

『チータ』の語り手は、ニューオーリンズから蒸気船に乗ってメキシコ湾に出る。目指す島は、グランド・イル、ハーンが1884年以来、毎年休養のため訪れた島である。[259]グランド・イルに到着するまで、蒸気船から見える風景は、時には美しく描写され、時にはグロテスクに描かれ、また、時には奇抜な表現をもって読者の目の前にくり広げられる。『チータ』の文章を磨くためのハーンの努力について、マレイは『ファンタスティック・ジャーニー』の中で次のように述べる。

> ラフカディオは『チータ』の文体に磨きをかけ、いっそう的確なものにしようとしていて、その音楽的比喩をどう思うかと、今やニューヨーク「トリビューン」の音楽批評家として健筆をふるう親友に意見を求めるのだった。クレビールは、文体を磨きに磨き上げようとするハーンの際限のない彫琢作業に、感銘を受けた。クレビールの目には、およそこれ以上いじりようのない、ほとんど完璧と映るある文章の中の、たった一つの単語を別の単語に入れ換えてみたら、どのような効果が生まれるだろうかとたずねるのだった。[260]

最初のオリジナルの文学作品であったため、ハーンが魂をこめて仕上げた様子がうかが

える。異国的な場面は、第1部における風景の描写に表れる。第1部全7章から成り立っており、第1章から第4章までがグランド・イルに着くまでの風景や着いてからの島の様子、第5章から第7章まで、ハリケーンに襲われたデルニエール島の悲劇が語られる。ハーンが毎年グランド・イルにおいて休暇を過ごしたことを考えるなら、第1部の語り手による風景描写は、ハーン自身の体験に基づいていることがわかる。

『チータ』の語り手は、蒸気船に乗ってグランド・イルに行く途中、グランド・テールという島を通り過ぎることとなる。グランド・テールは、崩れかかった要塞と燈台があることで有名な島であり、それ以外は荒涼な大地が広がるのみである。しかし、その雑草が生えている荒地の一部をハーンは以下のように描く。時刻は秋の夕方である。

> そうした時刻に黄褐色（おうかっしょく）の草々がすべてなにか鞘状（さやじょう）のものでおおわれるのを見かけることがある。小麦色をした鞘で、幅広く、平（ひら）ぺたで、風に揺らぐ茎（くき）一本一本の風下側に同じようにくっついている。〔…〕だがもし誰か人が近づけば、こうした青白い鞘はみな一斉に破れて、奇妙にまばゆい緋色（ひいろ）と暗褐色（あんかっしょく）の姿を見せるだろう。そこには白と黒との斑点（はんてん）が唐草模様（からくさもよう）となってついている。がそれはたちまち生き生きした花に変わったかと思うと、葉から離れて、私たちの目の前で空中に飛び立ち、幾千もが群をなして、ひらひらと飛び去って行く。そして遠くへ行ってはまた舞い降り、そこでもう一度小麦色をした鞘になってしまう……眠れる胡蝶（こちょう）の花吹雪とでもいおうか、花の舞いなのだ！[261]

ハーンが描くのは、幾千の蝶の群である。その蝶は一本一本の茎に眠り、遠くから見ると鞘状に見え、人が近づくと、一斉に舞い上がる。まるで、花吹雪のような光景を演出する。読者は、この段落の最初では、ハーンが一体何を描いているのか、戸惑うばかりであろう。しかし、それが蝶の様子であることを知ってから、再び文章を読むと、同場面は頭の中で映画の一場面のように鮮やかに視覚に訴えるのである。

ハーンの描写の個性が見られるもう一つの例は、樫の樹に対する描写である。島々にあるメキシコ湾側の樹は、暴風により、海から反対側に向かって曲がる場合がある。ハーンはグランド・イル島でみた五本の樫の樹[262]について、次のように記す。

> 水平線を背景に一列に並んだ五本の身をかがめたシルエットが浮かんで見

えたからで、まるで風に吹かれて髪を乱し、服を幟（のぼり）のようにはためかせて逃走中の女という様子だった。悲しそうに頭を伏せ、両腕を絶望的に北に向かって突き出して倒れまいとつとめている。[263]

目の前にあるのは、自然現象により、強い風に吹かれて曲がった樫の樹である。ハーンはその樹から苦しみの表情を読み取る。そして、それを敵から逃れようと、必死で走る女性に譬える。髪は乱れ、助けを求めようと、力を尽くして両手を前に伸ばすその姿は、ギリシア神話のある人物を読者に思い起こさせるだろう。アポロンから必至に逃げた挙句、月桂樹に変わったダフネである。グランド・イルの不思議な形の樫の樹は、ギリシア神話の悲愴感溢れる場面として生まれ変わるのである。

ハーンは、北東部では見ることのできない熱帯特有の色彩を、一日の間に移り変わる空や海の色を描くことにより、読者に伝える。熱帯の島で見られる一点の曇もない青い空について描写した後、海と空の色について描写する。

一点の曇もなく曙光（しょこう）は菫色（すみれいろ）の東方に紅（あか）らむ。その神秘の薔薇（ばら）が花開く時、その表面にはいかなる斑点（はんてん）もない。〔…〕その太陽が高く浮上するにつれ、大海はその色を変ずる。ある時は滑（なめ）らかで灰色だが、それでも朝の金色（こんじき）にきらめいて、この大海はヨハネの黙示録（もくじろく）の火とまじりあうガラスの海の幻影を思わせる。──ふたたび、そよ風が吹きつのるとともに、大海は信じがたい紫色の色合いを帯びるが、これは西インド諸島の風物を描く画家たちにはおおむね親しいものである。──そしてさらにもう一度、正午の炎（ほのお）のような光の下に、大海はエメラルドのぎざぎざの面（めん）へと変色する。夕暮が近づくと、水平線はいいつくせぬような甘美な色合いを帯びる──真珠の光、乳と火とのオパール色を帯びる。そして、その時、西方には黄玉（トパーズ）色の灼熱（しゃくねつ）の輝きや阿古屋貝（あこやがい）のような真珠光沢（しんじゅこうたく）のすばらしい閃きが見える。それから、もし海がおだやかに寝入る時は、海はそんな色すべてに──かすかに、あやしく、天の際（きわ）まで濃淡の影をつけながら、夢みるのである。

ハーンは、比喩を用いて色彩を描く。朝昇る太陽は、花咲く薔薇に例えられ、朝の太陽が照らされた海は、ヨハネが夢の中で見た「火（ひ）が混（ま）じったガラスの海（うみ）」[264]に例えられる。正午から夕方にかけての海と空は、エメラルド、真珠、オパール、トパーズといった宝石に例え

られる。眩いほどキラキラ輝く自然の色彩を宝石が持つ輝きに例えたのである。

花の吹雪のように舞い上がる蝶の群れ、必死に逃走するように見える樫の樹、そして宝石のように輝く海と空。第1部において描かれたこれらの熱帯の風景は、読者に非日常的な空間を提供する。彩り鮮やかな熱帯の島を描くハーンの表現や文体こそ、読者の心を掴んだ要因であったといえる。

4.2.2. 方言の使用

ローカル・カラー文学の特徴の一つは方言の使用である。ハーンは、異国的な雰囲気を一層効果的に伝えるため、一つの方言だけではなく、多様な言語を用いる。『チータ』には4つの言葉が使われる。語り手の英語、漁師夫婦が使うスペイン語、チータや彼女を救ったラルッセルというクレオール人青年のフランス語系クレオール語、そしてフランス語である。

方言の使用において注目に値することは、そこにケイブルの存在が見え隠れすることである。ケイブルは、作品の中にニューオーリンズ特有の英語方言、つまりクレオール語を使用した。このクレオール語の使用は、ウィリアム・ディーン・ハウエルズ(William Dean Howells, 1837-1920)を始めとして、北東部の批評家たちに高く評価された。しかし、ニューオーリンズの白人クレオールは、自分たちが侮辱されたと感じた。[265]ハーンは、その点においてケイブルとの相違を見せる。彼は『チータ』の中にクレオール語を入れながらも、白人クレオールにも一定の配慮をみせる。二人の相違について具体的な例を挙げてみよう。

まず、ケイブルの作品『グランディシムの一族』に登場する会話である。クレオールの名家の女性オーロラとその娘は、経済的に困窮して、催促された家賃をめぐって、会話を交わす。

> "You wan' to tague the pard of dose Grandissime'?"
>
> The daughter returned a look of agony.
>
> "No," she said, "bud a man wad godd some 'ouses to rend, muz ee nod boun' to ged 'is rend?"
>
> "Boun' to ged—ah! yez ee muz do 'is possible to ged 'is rend. Oh! certain*lee*. Ee is ridge, bud ee need a lill money, bad, bad. Fo' w'at?" The excited speaker rose to her feet under a sudden inspiration.

"*Tenez, Mademoiselle*!" She began to make great show of unfastening her dress.[266]

日本語訳では、方言を伝えることができないため、原文を引用した。母娘の英語は、文法的・発音的にかなり変形された英語方言であることが見て取れる。北東部の読者は、このクレオール語を独特なものとして評価した。しかし、当の白人のクレオールは、自分たちが「支離滅裂な英語」[267]を使う変わり者として描かれたことに憤りを感じた。

ハーンは、白人のクレオールのそのような気持ちを理解していた。彼は、クレビール宛ての手紙で、英語、フランス語、スペイン語までもできる白人クレオールの言語能力について書いている。フロストは、ハーンの伝記『若き日のラフカディオ・ハーン』の中で、ハーンとケイブルの違いを説明する。

> ハーンは、フランス系クレオールがかなり正確な英語を話すことを認めていた。ジョージ・W・ケイブルはそう思ってはいなかった。ケイブルの扱うフランス系クレオールたちには、フランス語の影響というより黒人の影響を示す訛り、彼が紹介するクレオールの類型に似つかわしい訛りがある。彼らはルイジアナのクレオールを代表していない——いずれにしてもクレオールの貴族階級を代表していない——型の方言を話す。[268]

ハーンが描く血筋のよいクレオールの言語能力は、まさにチータの父親の言葉に表れる。父親ズリアンは、ケイブルの物語におけるクレオール人とは異なり、正しい英語、フランス語、そしてスペイン語までも話せる。

『チータ』においてクレオール語を用いるのは、チータである。それもケイブルとは異なり英語系のクレオール語ではなく、フランス語系のクレオール語が使用される。チータはまだ5歳の子どもであるため、黒人の乳母から影響されたフランス語系クレオール語しか話せない。しかし、その箇所にもハーンは、白人クレオールに配慮した説明を加える。それはハリケーンから救われた女の子が、自分の名前の名字を発音できず、周りの人々を困らせる場面である。

> フランス人の古風な名前の中にはクレオールの子供たちにとってたいへん発

音しがたい苗字（みょうじ）がある。クレオールの片言を喋っている限りはきちんと発音できないのだ。それだからある年ごろになると、周囲はフランス語の発音を間違えるたびに笑いものにする。それは奴隷の乳母たちから習った方言を捨てさせて、きちんとしてフランス語を話させるためなのである。[269]

ハーンは、ハリケーンによって生き別れとなった父親ズリアンとチータがなぜ再会できなかったのかをクレオール語の特殊性によって説明する。つまり、チータは自分の名字が言えなかったため、父親を探すことができなかったということである。それと同時に、家柄のよいクレオールの家庭では、子どもの言語教育をしっかりと行うということも伝える。

ハーンのクレオール語使用は、会話の内容よりは、フランス語系クレオール語の音の響きや異国的な雰囲気を伝えることに重点が置かれている。というのも、クレオール語の会話が詳細に翻訳されないからである。会話が終わった後に概要だけが簡単に纏められる。チータと彼女を救ったクレオール人青年ラルッセルの会話がその代表的な例である。ラルッセルは、女の子の名字を聞き出すためにいろいろ質問をする。

—"Zouzoune? Zouzoune qui, chère?"

—"Zouzoune, ça c'est moin, Lili!"

—"C'est pas tout to nom, Lili;—dis moin, chere, to laut nom."

—"Mo pas connin laut nom."

—"Comment yé té pélé to maman, piti?"

—"Maman,—Maman 'Dele."

—"Et comment yé té pélé to papa, chère?"

—"Papa Zulien."

—"Bon! Et comment to maman té pélé to papa?—dis ça à moin, chère ?"

The child looked down, put a finger in her mouth, thought a moment, and replied:

—"Li pélé li, Chèri'; li pélé li, 'Papoute.'"

—"Aïe, aï'e!—c'est tout, ça?—to maman té jamain pélé li daut' chose?"

—"Mo pas connin, moin."[270]

このような会話が翻訳なしで続く。同じクレオール語の使用でも、ケイブルの場合、通訳がなくても理解できる程度の方言だとすれば、ハーンのクレオール語は英語話者には外国語に近いものとなっている。ハーンは、英語系のクレオール語が使えなくて、そうしたわけではない。第3章で取り上げた「なぜ蟹は生きたまま茹でるのか」では、ケイブルが駆使したような英語方言が使われている。ハーンがフランス語系のクレオール語を使用した理由は、一層異国的な雰囲気を醸し出すと共に、ケイブルとの差別化を図ることができたからであると考える。

4.3. 報道記者時代の手法の活用

4.3.1. 事件を再構築する手法

『チータ』には、ローカル・カラー文学の特徴も見られるが、ハーンがシンシナティ時代に培った文学的手法も見られる。デルニエール島の悲劇は、チータが登場する前の独立した物語として存在する。第1部の第5章から第7章までがこの物語に当てられている。日曜版新聞の特集記事に該当する程度の短い分量だが、物語は完結したものとして、コンパクトにまとまっている。臨場感あふれる描写によって事件を再構築するハーンの手法が存分に発揮できた場面である。ハリケーンが中心となった筋書は次のように展開される。ハーンの文章を引用しながら紹介する。

物語は、台風が来る前の静かな島の様子から始まる。一片の雲もなく青く広がる空や、風も吹かず沈んでいる空気。島の「夏の日々は薔薇色の光の中で生まれ、金色の中で」[271]沈む。島は避暑客で満ちており、誰一人災難の不吉を感じるものはいない。

そして、少しずつ海や風の変化が告げられる。風がない日にもかかわらず、海岸には重い波が打ち寄せられる。ある日、不気味な風が吹き始める。それから一日一日と、風は強くなり、波は高くなる。一週間経つと、風は吹きつのり、波は巨大なものとなった。

いよいよ災害の日の出来事が語られる。運命の朝、人々は蒸気船が入るのを待っている。待っているが、航海できる状況ではないことは誰もが感じていた。しかし、ある勇敢で老練な船長は、島の人々のために船を出すことを決意した。

「おい、みんな」

と船長は言った。

「これは万難を排して船を出さねばならんぞ」

そして船を出したのである。あらゆる危機を通して、部下は船長のそばを離れず、船長の命令に従った。朝の九時までには風は咆哮に変わっていた——ある時は低く呟くようになり、ある時は耳を聾さんばかりの轟音となって破壊した。その時、船長はスター号は死神に勝負を挑んでいるのだと腹を決めた。「勝って見せる」と船長は呟いた、「負けてたまるか。……きっと今夜この俺が必要となる」

[272]

このような覚悟をもった、スター号の船長と船員が、ありとあらゆる苦難を乗り越えて島まで辿りつく様子が描かれる。しかし、陸地にタラップを降ろせるほど、岸辺に近づくことはできない。錨を降ろし、少しずつ陸地の方へ進んでいく蒸気船。船長や船員全員が命をかけて奮闘するまさにその時、信じられない音が聞こえる。

そしておそろしい突風と突風の合間の半凪のおりに、船長の耳はあの度重なる恐怖の夜に信じられぬものを聞いたのである……　それは楽隊が奏する音楽であった！[273]

ホテルに泊まっている贅沢な避暑客は、外がどのような状況であるか、何も気づかず舞踏会に参加していたのである。自分達を救うために海と戦っている人々がいることも勿論知らない。おしゃれな衣装を身にまといワルツに合わせて踊る人々。

半時間後、ホテルのフロアに水が入ると、人々は悲鳴を上げる。大波が建物に突き当たり、巨大なホテルが崩壊し始める。寸前まで楽しい舞踏会の会場だった場所が、阿鼻叫喚の巷と化す。

すると恐怖の叫びが生じた——しゃがれた、恐ろしい、なんとも名状しがたい希望を失ったものが発する恐怖の叫びだった。〔…〕するとその時暗闇を通して、巨大な浪が雷鳴をあげてどどっと押し寄せた。どすんと怒濤が建物に突き当たった。巨大な建築物が赤子の揺籃のように揺れる。と思う間に、シーソーのように上下し、みしみしと崩れ始めた。[274]

このようにハリケーンは、ニューオーリンズの有名な避暑地を一晩で戦場のごとく変えてしまったのである。

穏やかな海の様子からハリケーンが島を襲う場面まで、ハーンは、読者に緊張感を保たせながら、物語を展開していく。勇敢な船長が船員たちと荒れ狂う海に立ち向かい、陸地にタラップを降ろそうと努力する姿は読者の手に汗を握らせる。死神がすぐ近くまで来ているにも関わらず、ワルツを踊る人々の姿は、「死の舞踏」が見せてくれた人生の無常さを思い出させる。ハーンは、報道記者時代、事件が発生すると、それに関わる事案を徹底的に調査し、記事の中で事件を再構成した。それと同様に、ハリケーンが生んだ世紀の悲劇について、ハーンは調査し、一つの物語として再構築したのでる。

4.3.2. 死体についての描写

ハーンが死体の取材をした経験は、岸部にあがった死体の山を、死者の持ち物を物色しようとする破廉恥な人々の会話の中で活かされる。この会話には、英語とスペイン語が一緒に使われている。この箇所でも、スペイン語の訳は付いていない。

"Che bella sposina!" Her betrothal ring will not come off, Giuseppe; but the delicate bone snaps easily: your oyster-knife can sever the tendon...."Guardate! chi bedda picciota!"……And it is not your quadroon bondsmaid, sweet lady, who now disrobes you so roughly; those Malay hands are less deft than hers—but she slumbers very far away from you, and may not be aroused from her sleep. "Na quita mo! Dalaga!—na quita maganda!"... Juan, the fastenings of those diamond ear-drops are much too complicated for	「また可愛い花嫁さんだな」「その婚約指環ははずせやしないよ、ジュゼッペ！それより指の骨を折る方が簡単よ。お前牡蠣(かき)とりの小刀を持ってるだろ。それで腱(けん)を切ってしまえ」……「見てみろ、なんて可愛い女の子だ！」〔…〕「奥さま、どうもドレスの脱がせ方が乱暴で恐縮ですが、脱がせてるのはあなたのおつきのカドルーンのお女中じゃないんです。このマレー人の手は不器用で失礼ですが、お女中はどっか遠くで寝ています、きっと御永眠にちがいない」「さあ、とってしまえ、すぐに。さあ、よいか、とってしまえ」……「ホアン、そのダイヤモンドの耳飾の留金は仕掛けが複雑でとてもお前さんみたいな新米の指でははずせまい

your peon fingers: tear them out! —"Dispense, chulita!"...[275]	よ。ちぎってしまえ」「すみません、お嬢さま！」[276]

ハーンは、シンシナティ時代、死体解剖の場面を詳細に描写し、読者の鼻の先にグロテスクな場面を突きつけた経歴がある。死体の持ち物を略奪するならず者の行為には、残酷な行為が含まれているが、ハーンはそれが大したことでもないかのような語調で描写する。特に、訳が付いていないスペイン語との比較は、英語の内容の残酷さを際立たせる。スペイン語では「また可愛い花嫁さんだな」という、女性に対して一見優しげな台詞が語られる。それに対して、英語で言われる内容は、死体から指を切って指環をとることや、女性の死体の服を脱がせること、また、耳飾を取るために耳をちぎることなどが、平然と指示される。最後の英語の台詞「ちぎってしまえ」"tear them out!"に続くスペイン語の台詞「すみません、お嬢さま！」"Dispense, chulita!"は、読者に皮肉を感じさせる。英語だけ話せる読者には、スペイン語の意味が分からないものの、スペイン語が使われることにより、物語の舞台が異国的な場所であることが伝えられ、スペイン語にも英語にも通じる読者には、台詞の対比がもたらす面白さが提供されるのである。

5．結論

本章では、ハーンがジャーナリストから作家になっていく過程を明らかにし、その結果として生み出された『チータ』の特徴について論述した。

ハーンが、シンシナティの報道記者生活を離れ、ニューオーリンズに行った背景には、当時流行していたローカル・カラー文学および南部作家ケイブルの存在があったことを明らかにした。そして、ハーンとケイブルの関係が、ニューオーリンズにおいてどのように生まれ、変化し、終わりを告げたのか。クレオール音楽蒐集の協同作業やケイブルの作品に対するハーンの書評を通して、二人の影響関係を明確にした。ハーンは、ニューオーリンズにおいてケイブルと共にクレオールの音楽を蒐集したが、ケイブルの作品ばかりが発表されることに対する不満を募らせていた。だが、そのような感情は、ケイブルの作品に対する彼の書評には影響を与えなかった。ハーンは、クレオール社会の敵となったケイブルを最後まで援護し続けた。ケイブルの方は、ハーンが北東部の文芸雑誌にデビューできる機会を与えた。

ニューオーリンズにおける二人の関係を通して、ハーンがニューオーリンズに移住した理

由にも、そこを離れた理由にも、ケイブルの存在があったことがわかった。ハーンは、ニューオーリンズのクレオールを題材にすることに限界を感じたのである。そして、もう一つの理由は、ケイブルの描くクレオールが北東部において評価されたが、ハーンはケイブルのその描写に同意できない点があったことである。ハーンはニューオーリンズに留まる代わりに、マルティニクのクレオールを描くことを選択するのであった。

『チータ』は、ジャーナリストであったハーンが作家として生まれ変わるために渾身の力をふりしぼって完成させた作品である。『チータ』において、ハーンが目指したのは、文体を極限まで磨くことであり、その結果、熱帯の島々の姿が輝く太陽の下にくっきりと浮かび上がる。また、第1部において描写されたハリケーンの様子は、新聞記者として事件を再構成してきたハーンの面目躍如たるものがある。その上、ハーンは自分の外国語能力、すなわちフランス語やスペイン語やクレオール語を用いてエキゾティックな雰囲気を漂わせる作品に仕上げたのである。

第5章　再話文学の開花

再話文学は日本時代のハーンが残した重要な文学的成果である。この再話文学の端緒は、本論文の第1章でとりあげた「皮革製作所殺人事件」にある。シンシナティで起こった実際の事件を取材したこの記事で、ハーンは事件を再構成し、物語化して読者に伝えた。この手法が読者を多く引きつけたことは、第1章で述べた通りだが、その手法はまた再話文学の要素の一つでもある。もっとも、「皮革製作所殺人事件」には、元となる物語つまり原話が存在しないという点で再話そのものと呼ぶにはまだ十分ではない。シンシナティでの記事は、いわば、再話の原型といえる。この原型が、実際に再話として結実するのが、ニューオーリンズ時代である。

この時期のハーンは、挿絵記事、スケッチ、フランス文学の翻訳、小説といった文学活動に精力的に取り組んだ。この実り多い時代に彼の再話文学も育まれたのであり、それが本章の主題である。一般に、ハーンの再話文学は『飛花落葉集』に始まるとされるが、その起点は7年前の「熱帯の入口にて」という記事であることはあまり知られていない。この記事を本章は再話文学の出発点と位置づけ、ハーンの再話とその原話を比較分析する。その際、原話と再話の相違に注目することで、原話にハーンがほどこした改変が浮き彫りとなる。この改変にみられる特徴を提示する作業が本章の第1節となる。この特徴が「熱帯の入口にて」以降の作品にどのような形で受け継がれてゆくのか、この点を確認するために、この記事の次の再話作品つまり『飛花落葉集』所収の「泉の乙女」を取り上げ、原話と再話の比較を行う。本章の第2節がこれに当たる。「泉の乙女」に関しては、先行研究において平川祐弘がすでに原話との比較分析を行った。[277]平川は、原話の時代的・文化的背景を視野に入れ、ハーンの再話がどのように形成されたのかを明らかにしている。本論では、平川の分析を活かしつつ、「熱帯の入口にて」から「泉の乙女」へと繋がる再話作品の特徴を浮き彫りにすることにより、ハーンの再話文学の独自の光輝を放つ要素が何かを提示する。

1. ニューオーリンズの伝説

1.1. 新聞記事における再話の背景

1881年から文芸部長として勤めたニューオーリンズの『タイムズ・デモクラット』紙に、ハーンは自分の再話作品を発表した。これらの作品は1884年にまとめられ『飛花落葉集』という題名で出版された。ハーンの再話は、一般的に、この作品が出発点とされる[278]。しかし、この再話作品の7年前に既に再話手法が新聞記事に利用されている。シンシナティの『コマーシャル』紙に掲載された1877年11月26日付けの「熱帯の入口にて」がその記事である。同記事の中で、ハーンはニューオーリンズに対する第一印象を綴り、当地のナツメヤシに纏わる伝説を紹介する。その伝説は、アメリカの詩人であり小説家であるトーマス・ベイリー・オールドリッチ(Thomas Bailey Aldrich, 1836-1907)が書いた「アントワーヌ神父のナツメヤシ」"Père Antoine's Date-Palm"であった。ハーンは、記事の中でオールドリッチの作品を紹介する体裁を取っているが、原作と比較してみると、かなりの相違点が見られる。つまり、ハーンの再話手法により書き変えられていたのである。

ハーンがオールドリッチの物語を再話した背景には、同記事より4年前に書かれた書評がある。1873年、ハーンは、同年に出版されたオールドリッチの短編集『マージョリー・ドーとその他の人々』*Marjorie Daw, and Other People*(1873)に対する同名の書評を書いた。その書評は、1873年11月2日付『インクワイヤラー』紙に掲載された。その時、短編集に収録されていた「アントワーヌ神父のナツメヤシ」に出会ったのである。ハーンは、書評の中で、同物語が美しく甘美で哀愁に満ちた珠玉の作品と称え、本文を長く引用しながら詳しく紹介した。

ハーンがこの書評を書いた時、彼はまだ見習い記者として『インクワイヤラー』社に勤めており、自分が「アントワーヌ神父のナツメヤシ」の舞台であるニューオーリンズに行くことになろうとは思いもしなかっただろう。ハーンは、ニューオーリンズに行くことを決めてから、オールドリッチの「アントワーヌ神父のナツメヤシ」を記事に活用しようと意図していたことは明らかである。なぜなら、ニューオーリンズに到着して最初に書いた記事「熱帯の入口にて」に「アントワーヌ神父のナツメヤシ」の粗筋ばかりか、本文からの引用も見られることは、あらかじめハーンが自分の書評あるいはオールドリッチの原作を携えていたことを意味するからである。それでは、「熱帯の入口にて」の内容について紹介する。

1.2.「熱帯の入口にて」の概観

シンシナティからニューオーリンズに移る際、ハーンは『シンシナティ・コマーシャル』紙か

ら退職したものの、引き続き同紙の通信員として記事を送ることになった。「熱帯の入口にて」は、『コマーシャル』紙のために書かれた記事である。[279]

記事は、1877年11月19日、20日付に書かれている。19日付には、波止場や蒸気船、旧市街の様子が描かれている。20日付には、綿花圧縮工場の見学記が述べられた後、突如オールドリッチの短編「アントワーヌ神父のナツメヤシ」が紹介される。これがハーンの最初の再話である。それではどのように紹介したのか。物語の粗筋は次の通りである。

アントワーヌという一生をニューオーリンズで過ごした善良なフランス人老神父がいた。彼には、若い頃固い友情を結んだ友人がいた。友人は熱帯地方の島に移住し現地の美しい女性と結婚したが、思わぬ不幸により友人夫婦はこの世を去った。アントワーヌは、友人が死ぬまで文通を交わし友愛関係を育んでいた。彼は、友人夫婦の残した一人娘の面倒を見ることになる。彼女は母親似であり、優雅で美しく野性的な魅力を持った女性に成長した。しかし、彼女は生まれ育った故郷が忘れられず、結局郷愁に駆られたあげく死んでしまう。しばらくすると、彼女が埋葬された場所からヤシの木が生えてきた。神父は故郷を懐かしく思っていた少女の思いがその木を生えさせたと信じ、自分が死を迎えるまでそのヤシの木を大切にした。

オールドリッチの小編の紹介はここで終わるが、20日付けの記事の後半には、この物語に対するハーンの独自の調査の結果が続く。その調査はこうである。ハーンは実際にその木を探して町を歩き回る。彼は大きなヤシの木が目に付く度、近所の人にアントワーヌ神父の伝説を訊き、該当する木なのかどうかを確かめる。しかし、物語に登場する木はどこにも存在しなかった。一番ナツメヤシに似ているとハーンが考えた木には様々な伝説[280]が纏わっていた。さらにハーンは、150年前に建てられた大聖堂を訪ね、そこの聖職者にアントワーヌ神父について聞いた。しかし、聖堂の古い記録にもアントワーヌのことは残されていなかった。ハーンは記事の最後を次のように締めくくる。

> 私はその場を去った。美しい物語を盲信していた自分を哀れみながら。[281]

読者が、ハーンの調査結果を読み、ヤシの木や神父の存在を含め、すべてフィクションにすぎないという印象を受けるとしても不思議ではない。しかし、原作者のオールドリッチの意図は、ハーンの調査結果とは異なっていた。

1.3. オールドリッチの創作意図の改変

オールドリッチが描こうとしたのは、完全なフィクションではなかった。オールドリッチは、実在するヤシの木に纏わる実存の人物としてのアントワーヌ神父の物語を書いたのである。それは物語の冒頭部分を見ると明らかである。オールドリッチは、ニューオーリンズのプレイス・ダームスにある9メートルあまりのナツメヤシを紹介することで物語を始める。紹介に続いて、その木を実際に見て記録を残したスコットランドの高名な地質学者チャールズ・ライエル(Sir Charles Lyell, 1797-1875)[282]の木の由来に関する記述を用いる。すなわち、1845年から46年にかけて北米各地を訪問したライエルがニューオーリンズでその地の気候には珍しいナツメヤシを見て調べたところ、その木は、20年前に死んだアントワーヌという神父が植えたもので、死ぬまでその木を守り続けたというものである[283]。その引用の後、オールドリッチは、ニューオーリンズ出身の女性から聞いたという神父とナツメヤシの話を語り始める。彼は神父に関して詳述してはいないが、アントワーヌ神父（1748年－1829年）は、ニューオーリンズのセイント・ルイス大聖堂で40年以上司祭を務めたスペイン人神父である。本名をAntonio de Sedellaといったが、フランス教区の人々から愛され、Père Antoineと呼ばれ親しまれた。1829年に神父が没すると、遺体は大聖堂に3日間安置され、多くの人々の弔問を受けた。その後執り行われた彼の葬儀は、町の歴史に名を残すほど盛大なものであったという[284]。ハーンが記事の中で訪問したという150年の歴史を持つ大聖堂こそ、アントワーヌ神父が約50年前に司祭を務めたセイント・ルイス大聖堂であった。50年という歳月は町の人々の記憶からアントワーヌ神父を拭い去ってしまったのかもしれない。だが、聖堂の記録にもアントワーヌの名が残されていなかったというのは不自然である。であるとすれば、記事の中でハーンは、物語を信じ、登場する神父やヤシの木を確かめるべく、町を歩き回ったとするが、実際に彼が目論んだのは、50年前に神父が死んだという事実ばかりか、その存在すら否定することではなかったろうか。だからこそ、ハーンは記事の中で"Alas! Nobody had ever heard of the Père Antoine."（ああ、誰一人としてアントワーヌ神父の名を知らなかった）と誇張して書いたといえはしないだろうか。

さらに、ハーンの記事の中では、アントワーヌ以外の人物の名前が一切使われていない。原作における親友エミールの名前は単に「友達」として、女性主人公のアングリスは「美しい女性」として登場し、娘のアングリスの場合も「娘」あるいは「子供」としてしか書かれていない。他方、オールドリッチは物語に出てくる地名や人物などを全て具体的な固有名詞に

よって語る。しかし、ハーンの場合は、登場人物の名前さえも忘れられるほど古い昔話を語るような体裁が取られている。ハーンの 再話では、時代性、場所性など具体的条件や制約が取り払われている。登場人物や舞台背景に歴史的実在性があるか否かは、関心外の事であったと思われる。むしろそれぞれの人物の特色や、愛、友情、ノスタルジーといった人間に固有な感情の美しさ、弱さ、魅力といった本質を描こうとしたように見える。

それでは、オールドリッチの原作はどのような内容であるか、再話と比較しながら具体的にみてゆくことにしよう。

1.4. 原話と再話の比較

原作「アントワーヌ神父のナツメヤシ」におけるアントワーヌは、親友エミールと一緒に神父になろうとする青年であった。しかし、二人はアングリスという太平洋の島から来た女性を同時に愛するようになり、アングリスがエミールを選んで町から消え去ると、アントワーヌとエミールの友情も終わってしまう。原作では、一人の女性をめぐって親友同士の友情までが破綻する語りであるのに対し、先述したように、ハーンの物語には男女間の三角関係は存在しない。それればかりか、原作にはない「手紙」という手段を用いて二人の友情をより篤くするのである。

原作に戻ると、ニューオーリンズに一人残されたアントワーヌは、初志を貫いて、神父にはなったものの、アングリスへの愛を断ち切れずに、虚無に満ちた生活を送っていた。他方、太平洋の島に駆け落ちしたエミールとアングリスは、不幸にも熱病で死を迎えることとなり、自分と同じ名前を持つ娘の面倒を見てくれるようアングリスがアントワーヌに手紙を送る。娘は流行病を避けるために、太平洋の島から船に乗って逃げるようにしてニューオーリンズに到着した。俄に両親をなくし天涯孤独の身となったアングリスが、見知らぬ国の地を踏んだのである。そのような星の下に生まれた娘をみてアントワーヌが感じたのは、少女に対する同情ではなかった。彼の心の奥に埋めておいた母アングリスに対する思いが、蘇ったのである。彼女と瓜二つの娘に出会い、彼は思わず喜びと驚きの声をあげたのである。それは彼がまだ若く、昔の恋を忘れていないことを示している。しかし、ハーンの再話では、子どもの姿にかつて愛した女性の面影を求める原作のアントワーヌ神父ではなく、「善良な老神父」にとって代わっている。ハーンは、物語の最初にアントワーヌ神父が善良なフランス人の老神父であると設定することによって好々爺のイメージを作り出す。それゆえに、彼が

両親を失った娘を受け入れたのは、親しい友人への愛からであり、その子に対する純粋な哀れみの心からと描写される。

ニューオーリンズにやってきた娘の死も語られる。それは、生まれ故郷への郷愁が原因であった。原作において、娘のアングリスは、郷愁のあまり、アントワーヌ神父のあらゆる心遣いにも、慰められることもなく、遂に衰弱して痩せ細り、死に至る。いかにアントワーヌが尽くしたところでアングリスのためになることは何もない。人生で二度も愛する人を奪われたアントワーヌは生きていく意味を見失う。そのような日々の中、神父は、アングリスの墓から、彼女が懐かしがっていたナツメヤシが生えたのを見つけた。母親に対する思いを娘に重ねたのと同様、アントワーヌは、今度はヤシの木を愛するようになる。彼の愛した人間への執着が異常にも見える場面である。しかし、ハーンの描くアントワーヌには、無力感や異常な執着など、一切みられない。ハーンは、ニューオーリンズに到着した娘をアントワーヌが大切に育てて、彼女が母親のように美しく成長したことで、責任を果たし、神父が娘の死とは直接かかわらないことを暗示する。故郷を思うあまり病に伏せた娘の最期に関しても、「そして、なおもヤシの夢をみながら、もはや夢なき大いなる眠りへと徐々に向かっていったのである」[285]と、死を眠りに喩えて描写する。再話の中のアントワーヌが、ヤシの木を大切にした理由は、死んだ少女や少女の母親へ恋心からではなく、少女の故郷の島への憧憬が熱帯地方のナツメヤシを墓の上に生えさせたと考えたからであった。

原作にはアングリスと呼ばれる二人の女性が登場する。母と娘である。太平洋の島から来た野性的で不思議な魅力を持つ母親のアングリスは、アントワーヌとその友人エミールの運命を変えるほど重要な役割を果たす。神父になるべく修業を積んでいた青年二人が恋におち、彼女を得るために争い、ついに、一人は駆け落ちをするまでに至るのである。エミールの将来を大きく変え、アントワーヌの心に空白を残し、二人の友情を破壊した存在としてのアングリスは、ハーンの記事の中ではすっかり影をひそめ、ただ、優雅でヤシのようにすらりと背の高い、南太平洋の島に暮らす女性として描写されている。アングリスの容姿について、傍らにいる他の女性達が平凡に見えるような不思議な美しさ、とオールドリッチが描いたのとは異なっている。娘に関しても同様な相違点が見られる。オールドリッチは、娘のアングリスが、母親ゆずりの野性美のある神秘的な美しさを持っており、「しなやかなヤナギのような姿態と肌の色の深み、情熱的な大きな目はアントワーヌの神父聖衣をあざ笑っているように見えた」[286]と記す。母親の魅力を受け継いだ娘を見た瞬間、女性への愛を諦め、

神父の道を選んだ自分が、愚かしく感じられたのであろう。ここで注意すべきは、原作のアングリスがまだほんの子どもにすぎないことである。オールドリッチは、7歳ぐらいのアングリスを成熟した女性のように描写している。おそらく、それは色黒のエキゾティックな女性を、欧米の男性が性的な対象としてとらえていた当時の風潮と関係しよう。しかし、ハーンが描く少女は、「母に劣らず清楚に、美しく育ってゆく、南海の自然の美のすべてが身にそなわっているのである。」[287]すなわち、南国の魅力を持っているものの、それは清楚なものであり、男性を誘惑するような類ではない。gracefulやcomelyという上品な女性を表わすのにふさわしい語彙が使われているのである。

ハーンが太平洋の色黒の女性に対し、このように優美さを強調するのは、これまでも多くのハーン研究者によって指摘されてきたように、ギリシア人の母親に対する憧れ[288]が、その背景にあると思われる。ハーンが来日する少し前に弟ジェームズに宛てた手紙をみると、母親が「黒くて美しい顔」であり、「野生のシカのような大きな褐色の目」をしていたと書かれている。そして、自分が持っているすべての長所はギリシア人の母親から受け継いだものだと語る[289]。彼の後の作品『ユーマ』を含め、多くの作品の中で、色黒の女性が優雅で美しく描かれていることを考えるならば、ハーンが、色黒の女性に自分の母親の姿を重ね合わせていたことがわかるであろう。ハーンは4歳で母親と別れたため、彼女の記憶が果たして鮮明なものであったかは確かではないものの、色黒の母親に対するハーンの思慕により、オールドリッチの作品の肌色の黒い太平洋の女性は気品のある女性として書き変えられたといえよう。

1.5. 再話に見られるハーンの倫理観

ハーンが「アントワーヌ神父のナツメヤシ」を再話する過程から、彼の倫理観が透けて見える。原作でも、再話でも、神父はナツメヤシを開発業者から守ろうとするが、原作のアントワーヌは、ヤシの木がアングリスの生まれ代わりであると信じていたため、それを守ることに必死である。

> 投資家は彼[アントワーヌ神父]の戸口に金貨の山を積んだが、彼は笑うだけであった。時には食べ物がなく、寒い思いをし、満足に着る物がないこともあったが、それでもなお彼は笑った。

「サタンよ、引き下がれ」老神父の笑顔はそう語っていた[290]。

年老いて経済的にも苦しいが、アントワーヌ神父にとって一番重要なものはお金ではなく、母親と娘の二人のアングリスと親友エミールの身代わりともいえるナツメヤシである。それゆえに、投資家が大金を積んで誘惑しても、イエスが荒れ野でサタンの誘惑に負けなかったのと同様、微動だにしない。おそらく彼からヤシの木を奪おうとする者は悪魔に等しかったに違いない。地域発展のうねりの中で、頑迷固陋に土地を死守する老人を思い出させる場面である。ところが、その箇所をハーンは少しだけ書き換えることによってアントワーヌ神父のイメージを一変させるのである。

戸口に金貨が山と積まれたが、神父はそれを見てもただ笑うだけであった。
法廷に話は持ち込まれた。神父の言い分が通った。[291]

ハーンの再話において、アントワーヌ神父がお金の誘惑に負けなかった点は、原作と同じである。しかし、そのあとが全く異なる。ハーンは、原作でアントワーヌ神父が貧しいという箇所を削除し、その代わりに、神父が開発業者のおこした訴訟に勝利を得たという、原作にはない内容を書き加えたのである。現実的に考えれば、経済力も政治力もない一介の神父が地域開発、町おこしという一大勢力に対抗して勝訴することは至難の業である[292]。しかし、ハーンは神父の主張が法により認められたと書き加えたことにより、アントワーヌ神父に正当性を持たせたのである。

このようにアントワーヌ神父に正当性を持たせた背景には、弱いものに対するハーンの思いが垣間見える。彼のそういう思いは、書簡や他の作品や節子夫人の『思い出の記』から読み取ることができる。たとえば、ビスランドが編集した『ラフカディオ・ハーンの生涯と書簡』の中には、絶対的な善と悪が存在するのかについて仲間と議論を交わしたエピソードが紹介されている。仲間が善と悪は場所により場合により判断される基準が異なるため、本質的な善あるいは悪は存在しないだろうと言ったのに対し、ハーンは深く考えたあげく、いかなる状況の下でも絶対正しくないことはあると答える。それは弱いものを虐めることである。ハーンは、酒に酔った男が子猫を虐待するのを見た話を披露する。ピストルを持っていた彼は、その男に4発発砲したが、全て外れてしまった。彼は「目が悪いため全部外れたことが

一生の後悔だ」[293]と述べている。もし、それが外れていなかったとすると、殺人あるいは殺人未遂となり、重大な結果を招いていたはずであるが、ハーンにとっては弱いものを虐げる人間に相応の処置がなされなかったことになにより怒りを感じたのであろう。また、日本時代に書かれた『明暗』に収録されている「死骸にまたがった男」では、男が一晩死骸にまたがっていたにもかかわらず、男の気が狂うこともなく、髪の毛が白くもならなかったことに対し、ハーンははっきりと「この物語の結末は、道徳的に考えて、どうも私には納得がいかない[294]」と記す。ここでいう死骸とは男に捨てられた妻のことである。男は、妻の怨念から逃れられた後、いかなる害もなく生き延びる。それどころか、彼の子孫までも繁栄したという結末である。ハーンは、元来加害者である夫への結末がそうであったことを受け入れられなかったのである。さらに、節子夫人が語る『思い出の記』の中の、伐採された境内の3本の杉の木についての逸話[295]もまた、たとえ木といえども生きているものに対するハーンの思いやりがよくあらわれている。

ハーンは子猫を虐めた男を殺してもいいと思うほど、弱い者いじめという「正しくないこと」が行われることに対して憤慨する。そして、時には、「死骸にまたがった男」の話のように道徳的ではないと断じたことに対しては物語であっても自分の意見を加える。寺社の杉の木がお金のために切られたことを知って失望し、住職と絶縁までしたほどのハーンであったからこそ、逆にいかなる困難があっても最後までナツメヤシを守ったアントワーヌ神父の行為がまさに人間としての道にかなったものとして映ったのであろう。彼にとっては正しい道を歩む人が貧しさに苦しむことが許せず、だからこそ社会的な弱者であるアントワーヌに合法的に木を守らせたのである。

これらの分析を通して、ハーンの再話は五つの点において改変されたことがわかった。第一に、女性一人をめぐって起きた三角関係の削除。三角関係を削除することにより、アントワーヌ神父と友人の友情が長く保持されたとすることができた。第二に、少女に対するアントワーヌ神父の態度。少女に対する恋心は純粋に彼女を哀れむ心情に変わった。第三に、ヤシの木に対する神父の姿勢。ヤシの木を大切にする理由は、愛した女性の代わりとする気持ちではなく、故郷に対する少女の心を想う思いやりに変わった。第四に、女性の容姿に対する描写。男性を魅惑する色黒のエキゾティックな魅力は清楚で優雅な美しさに変わった。第五に、ヤシの木を守った経緯。ヤシの木を守った経緯に、神父の主張が法廷において正当と、認められたと加筆された。これらの改変により、ハーンは、登場人物を

美化し、物語を一点の曇もない純粋で理想的な形に作り変えたのである。このような再話手法は、7年後に正式に出版された『飛花落葉集』においても表れる。次節では、『飛花落葉集』の「泉の乙女」を取り上げ、ハーンの再話手法がいかに作品の中に反映されているのかについて論じてみたい。

2. ポリネシアの伝説「泉の乙女」

『飛花落葉集』は、ハーンが再話として正式に著した最初の再話集である。同書には、ハーン自身が「解説」Explanatoryの中で語っているように、ポリネシアやヘブライ、インドや仏教およびイスラムの「異国趣味文学の中で、最も幻想的に美しいもの」[296]とハーンが捉えた物語が再話されている。同書は、「落葉集」"Stray Leaves"、「インド・仏教文学からの物語」"Tales from Indian and Buddhist Literature"、「カレワラの歌」"Runes from the Kalewala"、「回教国の物語」"Stories of Moslem Lands"、「タルムッドの伝説」"Traditions Retold from the Talmud"の5章からなり、全部で28編の物語が収録されている。

『飛花落葉集』の第1章「落葉集」に収録された「泉の乙女」"The Fountain Maid"は、2頁程度の短いポリネシア伝説をハーンが書き換えたものである。「解説」には次のように再話過程について述べられている。「ポリネシアの物語(「泉の乙女」)では、ギルの「南太平洋の神話と歌謡」のなかにある話を、かなり増補した。あの本は珍しい本だが、非芸術的な書物で、せっかくのみごとな材料が、すこぶる味もそっけもなく扱われている。ギル氏の著書のべつの個所に、例の怪奇な「盗賊の歌」の本歌と翻訳が出ているので、それを少々手直しして、あの物語に使うことを思いついたのである[297]」。ハーンの述べたとおり、「泉の乙女」は、ハーンが原話に相当の手を加え仕上げた作品であり、第1節において浮き彫りにした再話の手法が受け継がれた作品である。それでは、再話と原話との比較を通して、ハーンの物語構成の特徴を捉えてみよう。

2.1. 再話の「泉の乙女」と原話の「泉の妖精」

ハーンの「泉の乙女」は、ウィリアム・ギル(William Wyatt Gill, 1828-1896)が出版した『南太平洋の神話と歌謡』*Myths and Songs from the South Pacific* (1876)の「泉の妖精」"The Fairy of the Fountain"を原話としている。著者ギルは、ロンドン伝道会の宣教

師として、南太平洋にあるクック諸島(Cook Islands)[298]で布教活動を行った。22年間宣教活動を行うかたわら、マンガイア(Mangaia)の神話や伝説を集めて出版したのが同書である。マックス・ミュラー(Friedrich Max Müller, 1823－1900)の序文によると、マンガイアは、クック諸島の他の島に比べヨーロッパ文化との接触が少なかったため、島独自の文化を保存しており、ギルは、神話や伝説を収集する際、自分の持っているギリシャ・ローマ神話の知識が、ポリネシア神話に影響を与えないように注意したと述べている。[299]

ハーンが同書を「非芸術的な書物」であると評したのは、ギルの目的が文学作品の創作ではなく、知られざる現地の神話や伝説を書き留め、後世に残すことにあったため、聞き書きしたものに自分の想像力を加えず紹介したことによると思われる。

それでは、ハーンが「解説」で述べたところの「すこぶる味もそっけもなく扱われている」話を、どれほど「増補」したのか、具体的に見ていくことにしたい。だが、その前に再話の「泉の乙女」と原話「泉の妖精」の内容を要約して紹介しよう。[300]

「泉の乙女」

「泉の乙女」は人間を眠らせる魔法の歌を紹介するところから始まる。この歌に関しては次項で詳述するためここでは触れない。

ポリネシアにあるラロトンガ島にはヴァイピキという泉があった。毎月、新月が昇る夜になると、その泉から地下の世界に住んでいる色の白い盗賊達が地上に現れる。彼らは、冒頭の魔法の歌を歌い、村人たちを眠らせた後、タロイモやバナナ、ココナツなどを盗み、泉の底に持ち帰った。

ある日、酋長アキはヴァイピキ泉の近くで、地下の世界から盗賊の男女が現れ、呪文の歌を歌い始めるのを見た。そこで、アキは大きな葉の影に身を隠し、眠らないように耳を塞いだ。眠らずにすんだ彼は盗人の男女が食べ物を盗む間、泉の底に魚網を仕掛け、二人を捕まえようとした。泉に戻ってきた盗賊達はその魚網に掛かったが、男の盗賊は逃げてしまい、女だけが残った。彼女は非常に美しく、人間とは異なる魅力を持っていた。アキは彼女に恋をし、彼女と結婚した。

時が経ち、彼女はアキの子どもを身篭った。彼女は自分が人間世界の存在ではないため、人間の子どもを出産し、乳を飲ませると、故郷の地下世界へ10年間戻ることができないことを知っていた。そこで、彼女がアキに頼んだのは、自分の腹を切って子どもを取り出し、自分は行かせてほしいということであった。彼女は、自分の身体は元来、水と光と月光と風

から作られているため、腹を切られても死ぬことはないと言った。しかし、アキは、彼女だけではなく、子どもを失うことを恐れ、その頼みに応じようとしなかった。結局、彼女は子供を自然分娩し、10年間夫と息子と幸せな時間を過ごした。

10年後、彼女はアキと息子に、戻ってくることを約束して、泉に飛び込んだ。ある日、激しい雨がふり、風が吹くと、風に乗って聞こえてきた奇妙な声につられて、母親のように色が白く美しい息子はこの世からいなくなった。

息子がいなくなってからも100歳を超えて生きていたアキは、ヴァイピキ泉から彼女が戻ってくることを待ち続けていた。ある新月の夜、昔の呪文の歌が聞こえ、変わらぬ姿の色白の彼女が再び現れ、アキにキスした。朝になって、村人がアキを見つけた時、彼は永遠の眠りについていた。

以上がハーンの「泉の乙女」の内容である。次にギルの「泉の妖精」である。短い内容であるため、全文を訳出して紹介する。

「泉の妖精」

ラロトンガのアオランギという美しい村にヴァイティピという小さな泉があった。満月の夜が過ぎた日に、目にまぶしいほど色白の男女の妖精がその泉から上がってきた。彼らは村人が眠っている間に、タロイモやバナナやココナツを盗み、生のまま食べるために冥界に持ち帰った。

妖精達は気付いていなかったが、村人は彼らを捕まえるために罠を仕掛けていた。人間達は大きなすくい網を作り、夜には泉を常に見張った。新月が昇った夜、妖精達はいつもと同じように、略奪のために畑へ行った。人々は巨大な網を泉の底に慎重に仕掛けた後、霊の世界からきた美しい存在を追いかけた。最初に戻ってきた妖精の女の子は、泉に飛び込んですぐ網にかかり、捕まえられた。しかし、網を入れ替える時、彼女がもがいたせいでできた隙間から、彼女の次に泉に飛び込んだ男の妖精は逃げることができた。

美しい妖精は、酋長アティの大切な嫁になった。アティは彼女が地下の世界に帰ることができないように泉の入口を封じた。

彼女はラロトンガで「アティの比類のない存在（タパイル）」という名前で知られ、幸せに暮した。 彼女はアティの子供を身篭って産み月を迎えた時に、夫に頼んだ。「私に帝王切開手術を行ってください。それで、私の死んだ身体は土に埋めて下さい。でも、私達の子供は慈しんで育ててください。」アティはその願いを断り、彼女に子供を自然に産ませた。そのため、妖

精は美しい息子の「生きている」母親になった。

時が経ち、息子が逞しく育ったある時、母親は夫の前で激しく泣いた。彼女はその悲しみの理由を、地下の世界では母親が最初の子供を産むと、皆死んでしまうからだと夫に言った。その残酷な習慣を終わらせるために自分をあちらの世界に帰らせてほしいとアティに頼んだ。アティは彼女と一緒に行くことを決め、泉の奥に置いてあった大きい石を引き揚げさせた。彼女はありとあらゆる種類の植物の樹液を集め、それをアティの身体にまんべんなく丁寧に塗った。それは彼がスムーズに下界に行くためであった。

人間である夫の手をしっかりと握って、妖精は泉に飛び込んだ。見えない世界の入口にもう少しのところでたどり着こうとしていた。しかし、アティは、あまりにも体力の消耗が激しく、泉の底の世界までたどり着くことはできなかった。妖精は彼と一緒に行こうと五回も試みたが、ことごとく失敗した。霊の世界から来た彼女は自分の夫が自分と一緒に行くことが許されないことを知って泣いた。その世界には、死者の魂か、不死の存在しか入れないからである。

悲しみにくれて抱きあいながら、「比類のない存在」はこう言った。「私が一人で霊の世界に行き、あなたから教えてもらったことを教えます。」話し終えた彼女は再び水に飛び込み、人間の世界では二度と彼女の姿を見ることはなかった。アティは悲嘆にくれて、自分の家に戻って行った。それ以後、彼の息子はいなくなった母親にちなんでアティヴェ、すなわち「捨てられたアティ」と呼ばれるようになった。息子は霊の世界からきた母親同様、極めて肌の色が白かった。しかし、実に奇妙なことであるが、彼の子孫は普通の人間のように肌の色が黒かった。

この愛しい妖精の女についてアティの部族の古い歌は次のように歌っている。

> 彼女は再び霊の世界に降りて行った。
> 人々はアティが泉で最初に会った神々しい存在を褒め称えた。
> しかし、アティの心は今や悲しみに満ちあふれている。

これが妖精の祖先を偲んでつけられた「タパイル(比類のない存在)」という、よくある名前の起源である。[301]

2.2. 再話と原話の比較

2.2.1.「盗賊の歌」の挿入

ハーンは、「泉の乙女」を著すにあたって、ギルの『南太平洋の神話と歌謡』の中で「泉の妖精」とは別の箇所に収録された「盗賊の歌」"Thieves's Song"―正確には「盗賊、あるいは殺人者のためのお祈りまたは呪文」"Prayer or Charm for a Thief of a Murderer"―を手直しして使ったと、「解説」において述べている。別の箇所から取ったという部分を少し補足して説明しよう。ギルの『南太平洋の神話と歌謡』は全部で14章[302]からなり、創造神話や最初の人間や神々などに関する神話や伝説が記されている。「盗賊、あるいは殺人者のためのお祈りまたは呪文」は、第7章「種々の神話」"Miscellaneous Myths"に、「泉の妖精」は第11章「妖精の男と女」"Fairy Men and Women"にある歌であり、伝説である。ハーンは別々の章にあったこの二つを組み合わせて、一つの物語としたのである。

それでは、どのように「盗賊の歌」と「泉の妖精」を組み合わせたのか。ハーンは「盗賊の歌」を「泉の乙女」の最初の部分に魔法の歌として挿入している。ハーン自身は「少々手直し」したとしているが、双方を比較してみると、かなり手を加えたことが明らかになる。まず二つの歌を紹介することから始めたい。最初に「泉の乙女」の魔法の歌を掲げる。

逞(たくま)しきオマタイアヌク、
　丈(たけ)高く色黒きアヴァーヴァ、
　丈高きオウトゥートゥ、
　我等が行手に影を落せ、
　我等が前に椰子の樹のごとく高く立て、
　まどろむ人の上に夢のごとく身を屈めよ、
　眠れる人の眠りをなお深き眠りとせよ。

眠れ、敷居(しきい)の蟋蟀(こおろぎ)よ。眠れ、休みを知らぬ蟻どもよ。眠れ、おまえ、夜光る甲虫(かぶとむし)よ。

風よ、囁(ささや)くことを止めよ。休みなき草よ、さらさら音を立てることをやめよ。椰子の葉よ、動きを止めよ。堀の葦よ、そよぐことを控えよ。青い川よ、濡れた唇で岸にふれることをやめよ。

眠れ、おまえら家の梁よ、大小の柱よ、垂木(たるき)よ、棟木(むなぎ)よ、草葺の屋根よ、蘆(あし)をもて編める道具よ、竹格好の窓よ、幽霊のごとく軋み、幽霊のごとく泣く扉(とびら)よ、低

く燃える白檀(びゃくだん)の炎よ、ものみな眠れ。

おお、オマタイアヌク、
丈高きオウトゥートゥ、
色黒きアヴァーヴァ、
我等が道を影深くせよ、
我等が前に椰子の樹のごとく高く立て、
まどろむ人の上に夢のごとく身を屈(かが)めよ、
眠れる人の眠りをなお深き眠りとせよ――
風の眠りを
水の眠りをなお深くせよ――
夜の暗闇(くらやみ)をなお暗くせよ、
おまえたちの吐息で月にヴェールをかけ、
星々の火の明りをいっそう薄くせよ。
怪しい物の怪(け)の名において、
オマタイアヌク、
オウトゥートゥロラアー、
オヴァーヴァロロア、
眠れ、
眠れ。[303]

次は原話の「盗賊、あるいは殺人者のためのお祈りまたは呪文」である。

ここに我等の確かな助力者がいる。
我等のために現れ、
この家の門に立っている。
おお、神聖なオマタイアヌク！
おお、神聖な背の高いオウツーツ！
それから背の高いアヴァーヴァ！

我等は略奪の旅に出た、

我等の左側にいて助けて下され、
みなを眠りに包んで下され。
背の高いココヤシのように我等を支えて下され。
おお、家よ、おまえは我等の神様に呪われた！
　全てのものを眠らせるのだ。

深い眠りを皆のうえにおおいたまえ。
家の主人よ、眠り続けよ！
この家の玄関よ、眠り続けよ！
この家に住んでいる小さい虫達よ、眠り続けよ！
この家に住んでいる甲虫よ、眠り続けよ！
この家に住んでいるハサミムシよ、眠り続けよ！
この家に住んでいるアリよ、眠り続けよ！
この家に掛けられている干草よ、眠り続けよ！
そなた、家の大黒柱よ、眠り続けよ！
この家の主な棟木よ、眠り続けよ！
この家の垂木よ、眠り続けよ！
この家の桁よ、眠り続けよ！
この家の小さな垂木よ、眠り続けよ！
この家のその他の柱よ、眠り続けよ！
そなた、棟木の覆いよ、眠り続けよ！
この家の葦よ、眠り続けよ！
家の草葺よ、眠り続けよ！
この家人の中で運悪く最初に目覚めたものよ、
再びぐっすりと眠りたまえ。
我等の神がほしいと願えた、
そなたら人間の魂は諦めるしかないのだ。
おお、ロンゴ、我等の神様よ、
完全な勝利を与えて下され。
侵略する側の部族は可能なかぎり相手の村の近くまで接近してこの呪文を

唱えた。彼らは略奪に成功することで有名であった。[304]

ギルの歌の最後に添えられた文章から明らかなように、この歌は略奪を行う前に実際に使われた呪文であった。呪文を唱える目的は村人を眠らせ、眠りから目覚めないようにすることである。家の玄関や虫達や柱、屋根など、家の主人を目覚めさせる可能性があるものすべて呪文の対象となり、それら全てが眠らされる。村を侵略する際、村人が無防備でなければ、反撃に遭う可能性があるため、呪文の力を信じていた人達にとってこの歌は、欠かせない重要な武器であったといえる。それを承知して読むと、この歌には戦闘前の緊張感さえもただよっているように感じられる。

他方、略奪や殺人のための呪文を妖精達が食べ物を盗む時に歌う魔法の歌として使おうとしたハーンは、その目的にふさわしく内容を入れ変えたと言えよう。ハーンの歌で眠らせられる主たる対象は風、川、水、暗い夜、月、星など、自然を賛美する際用いられる素材であり、物語の最初に挿入することによって全体的に幻想的な雰囲気を作り出している。しかし、ポリネシア神話でのタパイルは月夜に地下の世界から地上に現れて夜明けまで踊る存在であり、魔法の歌を歌う妖精では決してない。[305]人を眠らせる不思議な歌を歌いながら盗賊達が登場する設定は、より夢幻的な雰囲気を作り上げるためのハーンの再話上の技法といえよう。

しかし、魔法の歌の役割はそれだけではない。アキが「泉の乙女」に出会ったきっかけは、彼が泉のそばで、耳を塞いで人を眠らせる魔法の歌を聞かなかったことによる。それゆえ、彼は女性の盗賊を捕まえ、彼女と結婚することができた。彼女が子供を産み、また戻る約束をして泉に飛び込んでから50年が経つ。死の淵にあるアキの前に、長年待ち続けていた妻が、昔の歌を歌いながら再び泉から現れる。この時の歌はもはや略奪を行うために人を眠らせる歌ではない。「優しく美しく、甘美」[306]なこの歌は、アキと彼女の間に切れることなく繋がっていた赤い糸のように描かれる。

2.2.2. ギリシア神話および人魚伝説の加味

新月の夜、泉の底に住んでいる盗賊達は食べ物を盗むために地上に現れる。彼らの登場に関する描写をみてみると、ギルの場合、「目にまぶしいほど色白の男女の妖精がその泉から上がってきた」[307]とある。しかし、ハーンが描く盗人は全裸で泉から現れる。ハーンの描写では、「月よりも白く、魚のごとく露(あらわ)に一糸(いっし)もまとわぬ、夢のように美しい若者と娘であっ

た」[308]となっている。単に全裸であるだけではなく、「魚のごとく」というような表現がなされている。ハーンの「泉の乙女」の中で彼らが「魚」と関連して描写されるのは、登場のシーンだけではない。盗賊を捕まえるために酋長アキが使用するものは魚網(fish-net)であり、突然現れたアキを見て驚いた盗賊達は「魚のように、泉の中へ身を躍らせて」[309]飛び込む。魚網に掛かった二人のうち、男性の盗賊が逃げる時も「まるで鮭のように」[310]泉に飛び込む。アキに捕まった彼女の姿は「まるで美しい魚の体のよう」[311]であり、アキが百歳を超えて死の床にあった時、彼女は「湖の魚のようにしなやかな姿で」[312]再び現れる。

ハーンがこのように「魚」の表現にこだわる理由は何だろうか。論者はそれを人魚伝説との関連から考察したい。第一に考えられるのは、マンガイアの創造神話では最初の人間が半人半魚であったことである。[313]半人半魚と言っても、一般的に思われる上半身が人間で下半身が魚の姿をしている人魚とは異なり、その形は右側が人間で左側が魚というものである。このマンガイアの創造神話が、ハーンに人魚伝説のイメージを与えたのではないだろうか。

人魚伝説は、長い歴史を持ち、時代によって異なるイメージとして文学作品に登場してきたが、それでは、ハーンの時代における人魚のイメージはいかなるものであったのだろうか。[314]人魚の歴史は、今から6-7千年前の古代バビロニアまで遡るが、後世に形作られた人魚伝説に最も近いものとして現れたのは、ホメロスの『オデュッセイア』で描かれたセイレーンである。セイレーンは、人間を歌で魅惑して死に至らせる魔物の女であり、上半身が裸であることや人間を誘惑することから中世のキリスト教の下では、男を蠱惑する娼婦として描写された。しかし、1835年にハンス・クリスチャン・アンデルセン(Hans Christian Andersen, 1805-1875)が書いた「人魚姫」"The Little Mermaid"の出現は、従来の人魚に関するイメージを一変させた。「それまでは、人魚の概念はきわめて否定的なものだった。成熟した女性で、邪悪で、人の心を迷わし、運命を狂わせる、男性にとって危険極まりない存在だったのである。ところがロマン派の時代になると、人魚は、無垢で身心のある、傷つきやすい、恋する少女に姿を変えた」。[315]ハーンの時代における人魚は、この恋する少女のイメージの人魚であり、ハーンはそのイメージを恋する泉の乙女に投影したのであろう。

「泉の乙女」で見られる盗賊達の特徴―白い体で非常に美しく、歌で人に魔法を掛ける―は、人魚伝説に共通する特徴と一致する。ホメロスの『オデュッセイア』に登場するセイレーンは自分が住んでいる島で魔法の歌を歌い、通り掛かる船人に魔術を掛けて船を

沈没させる。また、ハインリヒ・ハイネ(Heinrich Heine, 1797-1856)の『ローレライ』*Lorelei* (1823)では人魚が岩壁の上で歌を歌って船人を死に導く役を演じている。恋する少女のイメージの人魚と共にこのような人を蠱惑する人魚のイメージもまた、「泉の乙女」の中に用いられているのである。

もう一つ、「泉の乙女」から人魚伝説が読み取れる場面は、アキが魔法の歌が聞こえないようにと、自分の耳を塞ぐ箇所である。それは、先に述べた『オデュッセイア』で、オデュッセウスがセイレーンの島を通り過ぎた時、魔法の歌から自分の船員を守るため彼らの耳を蜜蝋で塞がせた場面に通じる。

このように人魚伝説の色合いを添えることによって、ハーンは物語をより魅力的にし、かつ内容に厚みを持たせたと言える。

ハーンの物語におけるギリシア神話の影響は酋長アキの活躍に見て取ることができる。例えば、泉から出てくる白い盗賊達を捕まえる際、ギルの「泉の妖精」では、村人の皆が協力してすくい網を作り、網に掛かった妖精達を一緒に泉から引き上げようとする。しかし、ハーンの「泉の乙女」でのアキは、ギリシア神話の英雄ヘラクレスのごとく全ての作業を一人で行う。彼は魔法の歌を聞かないように耳を塞ぐほど賢明であり、一人で二人の盗賊を泉から易々と引き上げるほど力が強い。ハーンはアキの行為を通して、「泉の乙女」にいささかギリシア神話の英雄譚の要素を加味するのである。

「泉の乙女」が与える一種特異な印象は、月を強調することによって生み出されている。原話での月の役割はそれほど重要ではない。原話の妖精達が新月の夜に泉から地上に現れる理由は、明るい満月の夜には農作物を盗む場面を村人に見られる危険性があるからである。しかし、「泉の乙女」の白い盗賊達が新月を選ぶ理由は、彼らの魔法の歌の呪術が、満月の夜には力を失うからである。ハーンは、新月の夜に地上に響き渡る白い盗賊達の魔法の歌や泉から出てくる眼にまぶしいほど白く美しい男女、そして、甘く強く流れる歌およびその歌よりも強い魔力を持ち、夜の万物を照らす美しい月光などを描き、「泉の乙女」が幻想的な世界を伝える話であることを伝える。特に、月は魔法の歌よりも強力な魔力を持っていることを強調し、物語全体の中で月の役割が重要であることを示している。

さらに、「泉の乙女」における月と女性との関係は、原話にはみられない神秘感を物語に与える。よく知られていることであるが、月はエジプト、ギリシア、ローマ、インド、中国など、様々な国の神話の中で女性との関わりが語られてきた。[316]例えば、ハーンが詳しく知っていたと思われる[317]ギリシア神話では、周知の通り、ゼウスの双子の兄弟の中でアポロは太

陽の神だが、アルテミスは処女の月の女神でもあり、ゼウスと恋に落ちたセレネも月の女神、カオスから生まれたと言われるエウリュノメも最古の月の女神として描かれている。「泉の乙女」において、ハーンが、女性性を表象するイメージとして月を活用したとしても不思議ではないだろう。その上、月は満ちたり、欠けたり、隠れたりで、永遠不変に見える太陽とは異なり、「生成、誕生、死の普遍的な法則に従っている」。[318]それゆえ生産・生殖のイメージと重なり、出産する性である女性と月とは深い関係を持っているのである。このような月のイメージがハーンの物語に投影されている。「泉の乙女」について以下のような描写がなされている。

> 人々は娘の美しさに驚きの念に打たれた。娘が動けば、体から光がさした。娘が川で泳げば、その跡はさながら水(み)の面(も)に映える月のように、一条のきらめく光の筋となってふるえた。ただこの光り輝く美しい娘が、月の満ち欠けと逆さに満ち欠けすることに人々はやがて気づいた。娘の白さがいちばん白く輝く時は新月の折で、月が満月になれば娘はほとんど輝くことを止めてしまう。[319]

彼女は月のように光を放っており、川で泳ぐとその光が水とともに痕跡を残す。さらに、彼女の体から放たれる光は月の満ち欠けに合わせて変化する。ここでもう一つ注目すべきことは、彼女と水との関係である。言うまでもなく、月の満ち欠けに合わせて変化するものには海潮がある。海、ひいては、水は、この世の中にある全ての生命の根源であり、生命を創生するという意味では女性も同様である。従って、古来女性と水は深い関係を持って語られてきたが、その月と水と女性との結び付きは、ハーンにおいても、彼女が水の世界から出てきた、と描写されることで、確認できる。原話の「泉の妖精」の中で冥界(Nether-World)という言葉で表現されている、タパイルが住んでいた泉の底は、ポリネシア神話ではアヴァイキと呼ばれる場所で、死の神ミルと霊が存在する世界である。タパイルは死神ミルの娘であり、アヴァイキはミルが人間の魂を集め、大きいかまどで料理を作っている場所である。[320]しかし、「泉の乙女」ではアヴァイキやNether-Worldという表現は全く用いられていない。泉の底の世界に関する直接的な説明はなされておらず、タパイルという名前も使われていない。なぜなら、タパイルは死の女神ミルの娘であることを指し、彼女が住んでいた場所がアヴァイキであることがわかるからである。ハーンの描写では、素朴に「地下の世界を流れる水が湧き出すヴァイピキの泉のほとり」[321]から乙女が出てきたことになってい

る。ハーンは、彼女が水の世界からきたような印象を読者に強く与える。さらに、彼女が自分のお腹を裂いて赤子を取り出すよう夫に懇願する場面に注目すると、水の世界からきた彼女の体は水と光、月光と風で作られているため、刀で切られても不死の存在として描かれている。すなわち、原話でのNether-Worldのイメージは、ハーンの物語では、神話的・神秘的な水の世界として描写され、海の潮が月の満ち欠けに合わせて変化するように、彼女自身も変化するのである。

2.2.3. 帝王切開の意味の変化

ハーンの「泉の乙女」とギルの「泉の妖精」には妊婦が夫に自分のお腹を裂いて赤子を取り出すように頼む場面がある。双方とも夫はその頼みを断り、女は無事に自然分娩してその子をある時期まで育てる。女が自然に子供を出産することになるのはともに共通しているが、お腹を切開して赤子を取り出すよう頼む理由についてはハーンの物語と原話では大きく異なる。どのように異なるのか、ここで女が夫に懇願する場面を各々の作品から引用する。

「泉の乙女」

でも、わたしはあなたとは素姓(すじょう)の違う一族のものです。いまとなってはお暇乞(いとまごい)をいたさねばなりません。もしわたしを愛してくださるのなら、このわたしの白い体を切り開いて、わたしたちの子供を助け出してくださいまし。というのももしこの子がわたしの乳房から乳を吸えば、わたしはこの世界に、わたしとは縁のないこの世界に、あともう十年暮さねばなりません。それにわたしの体を切り開いても、わたしを傷つけることにはならないのです。たといわたしが一旦死ぬようにみえても、わたしの体は生き続けるのです。[322]

「泉の妖精」

「私に帝王切開手術を行ってください。それで、私の死んだ身体は土に埋めて下さい。でも、私達の子供は慈しんでください。」アティはその願いを断り、彼女に子供を自然に産ませた。そのため、妖精は美しい息子の「生きている」母親になった。

長い時間が過ぎて、息子が逞しく育ったある日、母親は夫の前で激しく泣い

た。彼女はその悲しみの理由を、地下の世界では母親が初めの子供を産むと、
皆死んでしまうからだと夫に言った。[323]

このようにギルの「泉の妖精」では、最初の子供を産む際、お腹を切開して死んでいった母親の話が語られている。19世紀イギリスの人類学者エドウィン・シドニー・ハートランド(Edwin Sidney Hartland, 1848-1927)の『妖精物語の科学－妖精神話に関する研究』*The Science of Fairy Tales－An Inquiry into Fairy Mythology*(1891)には、ギルの「泉の妖精」で描かれている帝王切開に関して、次のような説明がなされている。「彼女の住んでいた世界の人々は出産直前の女性に帝王切開を行う習慣があり、それゆえ子供の誕生は母の死を伴った。しかし、驚いたことに地上では母親が自然に子どもを分娩し、子供と母親が一緒に救われることを彼女は知った。そこで彼女は夫を説得して、自分と一緒に下界に降りてその残酷な習慣をやめさせてほしいと言った。」[324]すなわち、ギルの「泉の妖精」の中で女が自分の死を悟りながらも体を切るように頼んだのは、自分が住んでいた冥界では自然に子供が産まれることを知らなかったゆえに、出産の時は必ずお腹を切る習慣があったからである。しかし、その頼みが夫のアティによって断られ、自然に子供を産んで、死なずに済んだタパイルは、今まで自然分娩を知らずに死んで行った下界の母親のことを思い、悲しみに暮れて夫の前で激しく泣いたのである。従って彼女が泉の底の世界に戻ったのも、その残酷な習慣を終わらせるためであった。

しかし、ハーンの物語では別の筋書になっている。彼女は自分の属していない人間世界から少しでも早く離れるために体を切るよう頼んだのである。体が裂かれて死んだようにみえたとしても、それは元の世界に戻るためのことであり、実は死んでいない。言い変えると、子供が母の腹を切って生まれ、母は死んでしまい、結果的に子供は孤児になる悲しい伝説は、ハーンの感性にはふさわしくなかった、と言えよう。なぜならハーンが目指していたと思われるのは悲愴感のない美しく純粋で幻想的な世界の創出であり、悲劇伝説の伝播ではなかったからである。

2.2.4. 失踪した息子

自然分娩を教えるため、冥界に戻ってしまう「泉の妖精」がおいて行くのは夫だけではない。生まれた息子も母親に捨てられ、地上に残される。ハーンは「泉の妖精」の捨て子を自分の物語の中ではどのように描いているだろうか。母が去った後の息子の様子をそれぞ

れ引用してみよう。最初にギルの原話を、次にハーンの再話を紹介する。

「泉の妖精」

それ以後、彼の息子はいなくなった母親を偲んでアティヴェ、すなわち「捨てられたアティ」と呼ばれるようになった。息子は霊の世界からきた母親同様、極めて肌の色が白かった。しかし、実に奇妙なことであるが、彼の子孫は普通の人間のように肌の色が黒かった。[325]

「泉の乙女」

子供はすらりと背の高い、美しい子に育った。しかし、母親似ではなかった。——海の彼方から来る異人のように色が白いだけであった。それでも少年の眼には、あやしい光が宿っていた。新月の夜にはきらきらと美しく輝き、月が満ちるにつれて輝きは薄れた…… 一夜大嵐が吹き寄せた。椰子の木々も葦のように風にたわみ、不思議な声や叫びが風とともに吹き寄せた、泣きながら、叫びながら。夜明けに白い少年の姿は消えた。以後その少年の姿を二度と見た者はなかった。[326]

まず、「泉の妖精」の息子の子孫が普通の人間とほとんど変わりない、という部分に注目したい。この一文が意図するのは、母親タパイルのように白い肌の持ち主であった彼が、村の人間の娘と結婚して子孫を残し、地上で一生を終えたということである。そして、彼の子孫は増え続け、彼は人間と妖精の間に生まれた半妖精あるいは半人間としてアティ氏族の先祖になる。これは、「泉の妖精」の話自体が半妖精の先祖を持つアティ氏族の起源神話なのである。

しかし、ハーンの再話における息子は、人間らしさより水の世界から来た母親の種族に近い特徴が強調されている。彼は水の世界から出てきたような白い体をもっていて、母親の体から発せられる光が月の満ち欠けによって変化したのと同様に、体こそ光らないが、代わりに瞳が月とともに変化する。このような母親の特質の一部を受け継いだ息子は、ある嵐の夜、風とともに聞こえてくる自分を呼んでいる不思議な声に誘われてこの世からいなくなる。ハーンはあからさまにそれが母親の声だとは語らないが、状況からみればそれが母親の声で、息子を自分の国に連れて行ったことが推量される。

このように物語の中で子どもが捨てられないようにする工夫は、ハーンの他の作品にも見られる。日本で出版した『明暗』*Shadowings*(1900)の中の「和解」"The Reconciliation"がそうである。「和解」の原話「人妻死後会旧夫語」は、主人公の男が貧困のため妻を捨てて新しい嫁を迎える話である。しかし、時間が経っても捨てた先妻のことが忘れられず、結局彼女の元に戻ることになる。当然、後妻は実家に帰るが、原話にはその時主人公と後妻との間に子どもがいたかどうかについては全く触れられていない。しかし、ハーンの「和解」では、後妻を実家に帰らせる同じ場面で、文中に括弧をつけてわざわざ「彼女は彼の子どもを産んでいない」と書くことで、子どもがいなかったことを強調する。

ハーンが物語の中で子どもが捨てられないようにするのは、幼い頃に両親から捨てられたハーン自身の生い立ちに起因すると思われる。4歳から叔母に預けられ、自分の世界、価値観に合わないカトリックの寄宿学校を転々としながら、16歳で事故により片目を失い、結局19歳で単身アメリカに渡るまでの期間は、ハーンにとって幸福であったとは決して言えないだろう。ハーンはその生い立ちのゆえに、原話では子どもが捨てられても、自分の再話の中ではそうならない細工をしたと言えないだろうか。もっともハーンにも親しいと思われるユダヤ・キリスト教の聖書伝統では、孤児への特別な保護装置が要請されていたことも無縁ではないだろう。

「泉の乙女」には、主に四つの改変が見られた。それを再度纏めてみると、第一に、ある部族が殺戮に使った「盗賊の歌」の挿入、第二に、ギリシア神話や人魚伝説の影響、第三に、ポリネシア伝説の改変、すなわち帝王切開をめぐる異なる解釈、第四に、息子の失踪である。

第一の「盗賊の歌」の挿入であるが、ハーンはこの歌を魔法の歌に改変した。原文での「盗賊の歌」は村の襲撃や村人の殺害のための呪文であるが、ハーンの話の中では村人や自然を眠らせるための魔法の歌に変えられている。また、魔法の歌を冒頭に置くことで、物語が異次元との関わりで展開することを暗示したと言える。さらに、酋長アキは最初に魔法の歌を聞かなかったことから女と出会う。その後彼女と別れるようになるのだが、最後には逆にその歌が聞こえてきたことで、彼もようやく彼女の住む世界にたどりつく。すなわち、魔法の歌は最初から最後までアキと彼女を繋ぐ役割を果たしているのである。同時に現世と異次元をつなぐ糸でもある

次は第二のギリシア神話や人魚伝説の影響である。ハーンはポリネシアの創造神話に人魚が出てくることに着目し、「人魚姫」の恋する美しい少女のイメージを借用して泉の乙

女に投影したと言える。また、「泉の乙女」の酋長アキは、原話のアティが単に部族の酋長であったことと異なり、水の世界からの白い盗賊を一人で捕まえて結婚する英雄のような人物として描かれている。さらに、「泉の乙女」には月と水と女性とが強く結び付けられており、それによって、「泉の妖精」にはみられない神話的な世界が醸し出されているのである。

第三の特徴は、ポリネシア伝説の改変、すなわち帝王切開をめぐる異なる解釈である。ギルが「泉の妖精」の中で後世に伝えようとした腹を割くお産というポリネシアの伝説は、ハーンの手によって幻想的物語として生まれ変わった。しかし、文学作品としては甘く、切ない物語に再生されたが、ギルが意図したポリネシア伝説の伝播という面では、原作者の意図が活かされなかったといえる。

第四の失踪した息子であるが、原話では母親に捨てられた息子を、再話では人間世界から失踪させる。息子は失踪しても、結局母親と再会し、母親と共に暮すことが暗示される。さらに、失踪した息子に続き、百歳を過ぎた父親も再び泉から現れた母親のキスによって死を迎える。それは、生者が訪れえない泉の底の世界に彼も行けるようになったことを意味する。すなわち、一家の再会が暗示されているのである。

3. 結論

今日においてラフカディオ・ハーンが『怪談』や『骨董』に代表される再話作家として広く知られていることはいうまでもない。ハーンの再話文学はすでにシンシナティ時代にその原型がみられるが、それが本格的に書かれるようになるのはニューオーリンズ時代である。これまでは『飛花落葉集』がハーンの再話の出発点と位置づけられてきた。しかし、本章では、新聞記事「熱帯の入口にて」に挿入された「アントワーヌ神父のナツメヤシ」によって、彼が作家活動を始める前から再話を試みていたことを明らかにした。

ニューオーリンズの姿をシンシナティの読者にエキゾティックに伝えるために、オールドリッチの物語「アントワーヌ神父のナツメヤシ」を選び出し、これを紹介した。オールドリッチの原作は、実在人物のアントワーヌ神父を主人公に据えたもので、そこで神父はかつての自らの恋愛を忘れることのできない世俗的な苦悩を抱えた人物として描き出される。しかし、ハーンの記事の神父はオールドリッチと異なる。神父は世俗的な苦悩をもたない善良な人物として性格付けされている。また、記事中ではアントワーヌ神父の存在そのものが疑問

視される。こうしてアントワーヌ神父は現実に存在しない、あるいは、存在し得ないような人物として、理想化されたのである。この非現実化がハーンの「アントワーヌ神父のナツメヤシ」のひとつの特徴だとすれば、もうひとつの特徴は次の点にみることができる。オールドリッチの原話における一人の女性をめぐる三角関係、ひびの入った友情は、現実に起こりうる世俗的な事柄である。ハーンの再話にはそのような事柄が排除される。純愛、誠実な友情といったハーン自身の恋愛や交友の理想に沿って原話は刈り込まれてゆく。こうしてハーンの再話には彼の倫理観や美意識が反映されることになった。このように、出来事を自らの理想に基づいて単純化あるいは類型化することを様式化と呼ぶのであれば、ハーンの「アントワーヌ神父のナツメヤシ」のもうひとつの特徴は様式化といえる。この非現実化と様式化という文学的傾向は『飛花落葉集』の「泉の乙女」に継承される。

「泉の乙女」の原作者のギルが取り上げたのは、確かに現実の世界ではないが、それでも彼の書き残した神話や伝説は、南太平洋のマンガイア島の歴史や慣習、文化つまり現実の生活と密接に関わるものである。例えば、彼が収集した「盗賊、あるいは殺人者のためのお祈りまたは呪文」という歌は、当地の住民が実際の生活で使用したものであった。要するに、ギルの原話は現実そのものとは言えなくとも、島の現実を前提としたものだった。これに対して、ハーンはギルが収集した上記の歌を物語の幻想的雰囲気を強めるために利用した。この歌をハーンは「泉の妖精」に挿入することで、村の略奪という側面を薄め、その代わりに、物語の幻想的かつ非現実的雰囲気を際立たせる。この傾向は、登場人物に人魚伝説やギリシア神話の登場人物のような性格を付与することで強調される。ハーンの物語の非現実化の一方で、様式化につい言えば、ギルの原話では父子、妻や母親は失ったままである。ハーンはここで原話に手を加えて、家族が再会でたことを暗示するような結末を用意している。『飛花落葉集』所収の「泉の乙女」にも「熱帯の入口にて」と同様の特徴、物語の非現実化と様式化が確認できるのである。

本章ではハーンの初期の再話作品を原話と比較し、両者の相違を通して、ハーンの作品の特徴さらには彼の再話文学を独自のものにしている要素を分析した。本章で確認した非現実化と様式化とは、ハーンに名声と成功とをもたらした『怪談』、『骨董』にまで受け継がれるハーン文学の特質といえるかもしれない。

第6章　解放黒人問題とハーン

ハーンは、再話文学の原型をシンシナティにおいて形成し、ニューオーリンズにおいて素材を非現実化することで物語の様式化を追求する独自のスタイルを確立した。これは、ハーンの再話文学の重要な特性である。本章ではハーン文学にあるもう一つの独自性に注目したい。それは第3章においても扱った異文化への姿勢である。第3章では、シンシナティの黒人とニューオーリンズのクレオールに対するハーンの視点を比較し、外来者の一瞥つまり通過者の視点のみを有していた彼が、現地住民の眼、つまり定住者の視点もまた獲得する過程を考察した。さらに本章ではハーンが、ニューオーリンズならびにマルティニク島の解放黒人および混血の人々をどのように捉えていたのかという点を論じる。序章で述べたように、先行研究ではしばしば、黒人に対するハーンの視座は、一貫性に欠けているという分析がなされている。たとえば、杉山直子は、黒人についてのハーンの描写に矛盾があり、それは、白人の彼が黒人の他者と同一化する過程から生じるものであると解釈する。[327]論者は、ハーン個人に関わる観点というよりは、当時南部において問題になっていた自由黒人にまつわる論争という枠組みで、黒人に対するハーンの視座を捉え直す試みをしたい。

南北戦争後の19世紀後期において、ニューオーリンズでは解放黒人をめぐって激しい論争が巻き起こっていた。その主な論点は黒人の公民権に関わるものである。すなわち、一方は解放黒人をアメリカ市民として認める考え方、他方は既存の社会的秩序を維持しようとする考え方、この両者の葛藤であった。この新旧の価値観の衝突を前にして、ハーンはその状況をシンシナティの読者に伝えるために、南部の黒人問題に関する論説を書いた。その論説は解放黒人の公民権に対するハーンの考え方を表し、ひいては有色人種に対するハーンの姿勢を示すものである。このハーンの姿勢を、第1節では、まず、彼の論説を通じて明らかにし、続いて、その姿勢が実際に彼の文学作品に反映された例をみる。そのために、第2節において、マルティニク島の黒人奴隷を主人公とした小説『ユーマ』を取り上げる。この作品は、1890年に刊行されたハーンの2作目の小説であり、マルティニク島における奴隷解放直前の時期を舞台背景としている。『ユーマ』の分析を通して、ハーンの文学世界に通低している異文化に対するハーン独自のスタンスを浮き彫りにする。

1. 南部の解放奴隷への眼差し

1.1. 南北戦争後の南部黒人の状況

1877年11月、ハーンは『シンシナティ・コマーシャル』紙の通信員として、ニューオーリンズの政治関連記事を依頼されていた。ニューオーリンズに着いて間もないハーンが選んだのは、南部の黒人をめぐる話題であった。当時、南部では、黒人の公民権をめぐり、激しい論争が巻き起こっていたからである。まずその背景を知るためには、南北戦争(1861-1865)後の状況を確認しておこう。オックスフォードの『アメリカの歴史』*The Oxford History of the American People*には、南部における解放黒人の平等が法的に保証された経緯について次のように説明する。[328]つまり、憲法修正第14条――解放黒人を含むアメリカ生まれの人々をアメリカ市民として認めた――と憲法修正第15条――人種、肌の色、あるいは以前の奴隷状態と関係なく、市民の参政権を保証した――の成立である。連邦政府は、南部の州が憲法修正第14条を認めない限り、連邦に復帰できないようにし、黒人の平等を南部に認めさせた。それによって、南部は黒人の参政権も認めざるを得なかったのである。

しかし、南部の白人が心の中では不満を抱いていたことは想像に難くない。実際に、反黒人団体として知られるクークラックスクラン(Ku Klux Klan)、いわゆるケーケーケー(KKK)やそれと類似する秘密結社が次々と現れた。[329]南部の再建を推進していた北部共和党の急進派は、南部の反発を抑えるため、各州に軍隊を駐屯させた。しかし、ハーンがニューオーリンズに着いた1877年、南部に駐屯していた北部の軍隊の撤退が決まった。[330]実際に南部から北部が手を引いたことを意味する。

戦争が終わってから軍事政府が終わるまでの約10年間、南部の白人は彼らの立場なりの苦痛を感じていた。その心境を北部の著名な雑誌を通して最初に訴えたのが、匿名のサウス・カロライナ人である。その寄稿は、1877年2月の『アトランティック・マンスリー』誌に掲載された。寄稿者は、サウス・カロライナが終戦後、いかに辛い時間を過ごしてきたのかを述べる。その寄稿文の中では、南部の政治的混乱から利益を得ようと押し寄せてきた北部人の行為が告発されている。彼らは、黒人から票をあつめるために、あらゆる手段を用いているとされる。例えば、字の読めない黒人たちが、自分たちの票の行方も知らずに指示された通りに投票する様子[331]。資格を十分に満たしていない黒人たちが政府や司法の要職に無理やり就任させられる様子。[332]こうした場面が告発されるのである。同年11

月、ニューオーリンズの歴史家シャルル・ガヤレ(Charles Gayarré, 1805-1895)は、同じく北東部の雑誌『ノース・アメリカン・レビュー』*North American Review*に"The「南部の問題」"Southern Question"という27頁の論説を寄稿した。ハーンは、この論説を基に、論説「南部の預言者」を執筆し、『コマーシャル』紙に掲載することで、シンシナティの読者に南部の情勢を伝えたのである。以下では、ハーンの論説「南部の預言者」を取り上げ、解放黒人および彼らの公民権に対するハーンの向き合い方を考察する。

1.2.「南部の問題」の著者ガヤレ

ハーンの論説「南部の預言者」は、1877年12月12日付の『シンシナティ・コマーシャル』紙に掲載された。ガヤレの論説が雑誌に掲載された翌月に書かれたものである。論説の分量は、新聞の4コラムに及ぶ長さであり、そのほぼ7割以上がガヤレの引用だった。ここで、まずガヤレがどのような人物なのかを確認しておきたい。ガヤレは、1805年、フランス人の母(Marie Boré)とスペイン人の父(Carlos Gayarré)の間に生まれる。彼の父親は本来の意味のクレオール(ヨーロッパの家系のアメリカ生まれの人)であり、母方の祖父は奴隷を所有した大農場主で、ルイジアナ州の初の市長となった人物である。ガヤレは、祖父の奴隷を受け継ぎ、南北戦争以前には、彼自身も下院議員、州検事、判事、国務長官など、公職に務めた。南北戦争の以後、晩年のガヤレは、経済的に苦しい時期を過ごしたものの、ニューオーリンズの同僚や友人に尊敬される人物であった。彼は歴史家としても著述活動をした。『ルイジアナの歴史』*Louisiana History*(1866)は、初めて体系的に書かれたルイジアナの歴史書である。[333]

ガヤレの経歴が示すように、彼の家柄は、ニューオーリンズが植民地だった頃からその地に暮らした名家である。ガヤレは政治的にも学問的にも認められた人物だった。また、彼は奴隷所有者であり、南部の他の農場主と同様に奴隷解放によって大きな打撃を被った。南部の白人の考えを誰よりも理性的に説明できる人物として、ハーンはガヤレを選んだといえる。それでは、ハーンの記事「南部の預言者」を紹介しよう。

1.3.「南部の預言者」の概要

基本的にハーンの記事は、ガヤレの論説の引用で構成されているため、ガヤレの主張とほぼ同じである。

奴隷制度により、南部には貴族社会が生み出される。南部の白人は、政治、経済的に大きな影響力を持つようになった。北・西部は、それを妬み、奴隷制度に反対した。南北戦争が終わり、南部の貴族社会は崩壊し、南部は経済的に困難な状況に陥った。しかし、より深刻な問題は、解放黒人問題の台頭である。連邦政府は、資格のない黒人を政府の要職に就かせ、かつての主人を支配する立場に立たせることもあった。だが、批判されるべきは、当の黒人ではなく彼らに司法と立法という武器を持たせた連邦政府である。連邦政府に反逆したことが、南部の罪だったとしても、黒人に公民権を与えたことは、南部にとってあまりにも重い罰である。神に反逆したアダムでさえ、「ゴリラ」に服従させられる罰は受けてはいない。これが原因となり、共和党の政策は、南部において激しい抵抗にあったのである。結局、北・西部は、南部に自治権を戻したが、奴隷制度が廃止され、従属の関係がなくなった状況で、白人と黒人が問題なく共存共栄するのは不可能である。優性の人種と劣性の人種が平和に共存することはできない。歴史の舞台から姿を消した数多くの種族が証明するように、優性の人種に従属しない限り、劣等の人種は滅亡させられる。

北・西部が奴隷制に干渉した結果、国全体が厳しい経済状況に陥った。従って、北・西部は、自由黒人問題にはむやみに手を出すべきではない。問題を早く解決する方法は南部にすべてを委任することである。白人が優位に立たない限り、南部の平和や繁栄はない。だからこそ、南部の白人は、黒人を支配し、合法的に彼らの投票を管理しようとするのだ。しかし、結局のところ、一方の人種が他方の人種を滅亡させるだろう。権力を共有することはできないのだから。

ここまでがハーンがまとめたガヤレの主張の概要である。南北戦争後の南部の白人が、解放黒人について持っていた感情や黒人に対する連邦政府の政策に持っていた不満を如実に読み取ることができる。

記事の中で、ハーンが自分の意見を表明するのは、最初と最後だけである。記事の冒頭でのガヤレの紹介と、締めくくりに黒人滅亡説や黒人参政権についての意見がハーンのものである。本文では、記事をより効果的に伝えるための南部人とのインタビューが挿入されるものの、基本的にはガヤレの論説の引用と引用をつなぐ役割をする。次節では、締めくくりにあるハーンの意見を中心に、解放黒人問題に対するハーンのスタンスを考察する。

1.4.「南部の預言者」に見るハーンの解放黒人への姿勢

ガヤレは、肌色により人間の優越性が決まると信じる人物だった。彼によると、白人は、人類の先祖に最も近い人種であり、黒人は、肉体的・精神的に最も遠い存在である。黒人は、生まれながら「劣等」(inferior)であるため、自立することができず、結局は滅亡するだろう、とガヤレは論説の最後で予測したのである。

このガヤレの黒人滅亡説にハーンは興味を抱いた。ガヤレの論説を紹介した終、自分の意見を述べる。

> 黒人が白人文明の中心でいきのびられないことは、歴史や経験によって証明されてきた。従属的状態の場合は例外だが。──黒人はどうしようもなく絶望的なほどに自立できない。彼らは臆病で、子供っぽいうえに愚かである。一人にされると、しばらくは弱々しくもがくが、すぐ貧困や病気で死ぬ。[334]

黒人の自立性のなさに関するハーンの評価は、ガヤレのそれと変わらないように見える。ハーンは、ガヤレと同様に肌の色で人種の優劣を判断したのか。ガヤレが黒人を指す時に使用した「劣性の階級」(inferior class)という言葉をハーンがどのように使ったのかをみると、その答えが見出せる。ガヤレは、必ず黒人のみに対して「劣性の」という表現を使用した。白人の場合、どれほど社会的地位が低くても、教養がなくても、その人が「劣性」と呼ばれることはない。伝統的社会の秩序を守るためには、その人の内面的な資質とは関係なく、白人は「優性」(superior)でなければならないからである。しかし、ハーンにとって「劣性の階級」は、ガヤレのそれとは異なる。ハーンは、"White Trash"と呼ばれる貧しい白人を「劣性の階級」と表現した。彼が提示した理由は、貧乏白人は、教育を受けていないことから教養がなく、自己訓練ができていないため、人種偏見を抑制することができないからである。彼らこそ「劣性の階級」であり、黒人に暴力を振るう危険な存在であるとハーンは述べる。すなわち、ハーンが優劣を判断する基準が肌色でないことがはっきりする。

ハーンが、黒人滅亡説について、上のような意見を述べた理由は、その意見に続くインタビューから見て取れる。ハーンは、ニューオーリンズの元奴隷所有主にインタビューした内容を紹介する。そのインタビューによると、元奴隷所有主は、解放された元奴隷たちが心配となり、彼らの居場所を確認し、援助しようとした。しかし、彼は、元奴隷のほぼ半分が死んだことが分かったと語る。次はその一人の証言である。

彼ら〔元奴隷だった黒人〕はほぼみんな死にました。自分自身の世話をすることができなかったからです。時々、彼らを助けようとしました。病気になった時は、医者を送り、余裕がある時には食べ物や着る物を提供しました。しかし、無駄でした。黒人は常に食べさせ、面倒を見なければならないのです。彼らは自分で身を処するようにされると死にます。[335]

ハーンが、黒人滅亡説について、ガヤレのような人種観に基づいていないとすれば、彼がそのように述べたことには別の背景があることが推測される。その背景は、上のインタビューから見て取れる。すなわち、彼は、自分の赴いた場所で体験したこと、人々からインタビューしたことから、物事を判断したといえる。ハーンは自立できない黒人について言及したが、それは黒人全般を指したものではない。なぜなら、ハーンは、シンシナティにおいて、黒人が多く暮らす街を取材し、彼らの社会について書き残しているが、そこには、裕福ではないにせよ、普通に働きながら生活している元奴隷の黒人が描かれているからである。

「解放前は」、蒸気船の荷揚げ作業の大部分をこなしていたのは白人だった。しかし今は、徐々にこの仕事は黒人の専売特許になりつつある。ひとえに彼らの有能さのたまものである。〔…〕汽船運輸（うんゆ）における黒人労働の卓越した価値を、今では業者も認めるようになった。そして黒人人夫の待遇は今や戦後の一時期以上によくなっていると云ってよいだろう。[336]

波止場の黒人人夫に対するハーンの描写には、自立できない黒人を思わせる箇所は全くない。ハーンはシンシナティにおいて逞しく生きている黒人の姿を多く見ており、それを記事に収めていた。元奴隷だった黒人がシンシナティの大経営者になるまで、その波瀾万丈波乱万丈な人生を記事に取り上げたこともある。[337]こういったことを考えると、ハーンが「南部の預言者」の中で言及するのは、黒人一般ではなく、戦後ニューオーリンズにおいて生活に苦しむ人々の話であることが分かる。

『アメリカの歴史』の著者は、戦後、南部の黒人の生活が非常に苦しいものであったことを明示する。彼によると、「北部の勝利と憲法第十三条[338]は黒人を解放した。しかし、黒人の生活の面倒まではみなかったのである。多くの黒人は、自由とは働かずに暮らすことだと考えて、森に出かけたり、守備隊の駐屯地近くに群がったりして、施し物をたよりに生活し、

伝染病にかかって死んでいった」。[339]ハーンはこのような南部の黒人の状況を見て、自立できない黒人という判断をしたと思われる。

ところが、黒人に自立できる環境が提供されたことがある。南北戦争の終わる直前に、黒人の自立のための制度が短い間実施された。いわゆる「40エーカーとラバ一頭」(40 acres and a mule)のことだ。南北戦争を勝利に導いた北部のウィリアム・シャーマン将軍は、指揮下に1万人の黒人兵士を持っていた。彼は黒人指導者と面談し、黒人が自由と同じくらい耕す土地を望んでいることを知った。1865年1月、彼は特別野戦命令第15号（Special Field Orders, No. 15）を発表した。その中には、黒人家族一世帯に40エーカーの土地を与えるという内容が記されていた。さらに軍はいらなくなったラバを一頭与えるといった。その特令により、4万人以上の黒人が土地をもらい、そこに定着した。しかし、同年4月、リンカーン大統領が暗殺される。次に大統領となったアンドリュー・ジョンソンは、南部に同情的な人物であった。彼は北部と南部との和解のために、同年8月シャーマンが出した命令を廃止し、黒人から土地を没収した。[340]

土地は元の主に返還され、黒人は再び白人の地主の下で、奴隷だった時代よりも劣悪な環境で働かなければならなくなった。奴隷制度下では、所有主が奴隷の面倒を見る責任がある。しかし、解放後はその責任がなくなり、利益だけを考えればいいシステムになったのである。19世紀の経済学者、ヘンリー・ジョージ(Henry George, 1839-1897)は、『進歩と貧困』*Progress and Poverty*の中で次のように述べる。

> 奴隷制が廃止された今、南部の農場主たちは自分たちに何の損失もなかったことに気付いた。解放奴隷が住もうとする土地を所有すれば、彼らは前と同じく労働力を支配することができた。しかし、大変高価な責任は取り除かれたのだ。[341]

この言及と類似する箇所が『アメリカの歴史』にも見られる。

> 北部は戦争に勝ったかもしれない。しかし、平和をかちとったのは南部だった。南部は、奴隷制度の本質──共同で使用できる安くておとなしい労働力を確保しながら、同時に奴隷制度によって奴隷所有者が負担しなければならなかった資本の投下と社会的な義務から解放されたのである。[342]

ハーンがニューオーリンズに着き、目の当たりにした黒人は、経済的に自立できる環境に置かれておらず、場合によっては、奴隷制度の下で働いた頃よりも劣悪な環境での労働を強いられていたことがわかる。黒人は自立することを未だ学んでいなかったからである。

黒人の参政権問題に関して、ハーンは一見したところ、ガヤレと同じ立場を取っている。彼は、参政権が与えられた地域において、黒人の人口が減少した事実をあげ、与えられた参政権の中で一部の特権は取り消す必要があると述べる。このハーンの記事では、具体的な理由が挙げられていないが、日本時代に書かれた記事では、理由が明示されている。1894年10月20日付『神戸クロニクルズ』*Kobe Chronicle*の論説「アメリカにおける人種問題」"The Race-Problem in America"[343]において、ハーンは、黒人に参政権を与えた北部の目的は「共和党が政権を維持することだった」と指摘している。黒人の投票により、この間まで非常に貧乏だった白人が、国会入りするために黒人たちから衣服代の援助を受けるほどであったのに、数年の間に百万長者になったという例を挙げ、南部に蔓延していた北部からの政治家の腐敗を糾弾する。南北の政治的軋轢の間で、南部の黒人が南部の白人の暴力の犠牲になっていることも暴露している。結局、ハーンの眼に映ったアメリカ南部の状況は、黒人が参政権を行使しても彼らの利益になるどころか、参政権を行使したことで白人の暴力にあうという不条理である。ガヤレと異なる理由を挙げて、ハーンは黒人の参政権を制限する必要があると述べている。

記事を締めくくる文章は、少々物悲しげなノスタルジーを呼び起こすものとなっている。

> 黒人についていえば、彼らは時間の経過と共に姿を消すに違いない。黒人はツタのように自立できず、しがみつけるオークのような強い友人が必要だ。その友人からの支援は断たれた。黒人の人生は横たわったような無力さの中で衰退していくだろう。彼らは畑に自分たちの過去の痕跡を残そうと思わないだろうか。その畑は黒人の大変な労働により肥沃となったのだ。美しい土地に自分たちの存在の記憶を残そうと思わないだろうか。黒人がむなしく肥えさせた土地なのだ。ああ、そうだ。──甘くてもの悲しい、奴隷の歌のこだま──この不思議で美しいメロディは、貧しく、子どもっぽい人々の心から生まれたものだ。彼らにとって自由は破滅であったのだ。[344]

ハーンが考える南部黒人は、自由を手にしたものの、自分たちの痕跡や生きた記憶を

残すことのできない状況になっている。彼らが耕して肥沃にした畑と彼らの日常は、奴隷制度という枠組みのなかにあったからである。その土地に、黒人たちが主体的に自分たちの存在の記憶を残そうと思わない、とハーンは嘆いている。ハーンは、外国人として奴隷制度に関しては、非当事者であり、擁護するでもなく、反対意見も述べない。奴隷制廃止は、奴隷という束縛からの解放を意味する。しかし、ハーンが目にしたものは、自立が何かを学ぶことなく、またその手段も与えられないまま、ある日突然、それまでの受け身の生活から追い出され、困惑する黒人の現実の姿だった。

ハーンの記事のタイトルは、「南部の預言者」であり、その預言者は、ガヤレである。そして、そのガヤレが預言したのは、黒人の滅亡だった。ハーンは、その滅亡説を自分の意見としても繰り返す。南部の黒人は、解放はされたが、自立手段は持っていない。彼らの周りには、黒人の票を利用しようとする北部人か、彼らの遺伝的な劣性を心から信じる南部人であふれている。そのような環境の中で、多くの黒人が貧困や病気、あるいは白人のリンチにより死んだ。ハーンが窮地に立たされた黒人たちを見て、彼らの滅亡を口にしたとしてもおかしくない状況だったのである。

ハーンが、奴隷制に賛同していたとは言えないが、その制度にまつわるすべての要素を否定したとも言えない。奴隷制が抱える非人道的な悪を問題視しながらも、急進的な制度変革のもたらす別の暴力に対して、ハーンは繊細な配慮を見せているからである。さらに矛盾、抑圧、非人間性を内包する奴隷制ではあっても、その制度の中で育まれた肯定的な人間関係を温かいまなざしで見つめようとするハーンもいる。過酷な制度の中で弱い立場に立たされる人間への深い共感を描いている作品が、『ユーマ』である。そこにはハーンの人種問題のとらえ方の重要な側面が垣間見える。

2. 黒人女性奴隷『ユーマ』の物語

『ユーマ』は、ハーンが仏領西インド諸島のマルティニク島に滞在中に書き上げた作品である。最初に発表されたのは、1890年1月、2月号の『ハーパーズ・マンスリー』誌であり、同年5月、ハーパー社から単行本として刊行された。ハーンがマルティニク島で聞いた実話を元にしており、副題には、「西インドの奴隷の物語」が付いている。小説として書かれたが、ハーンがマルティニク島において経験した多様な事柄が包括されている。例えば、1890年7月号の『コスモポリタン』*Cosmopolitan*誌にハーンが寄稿した「西インド諸島──

肌色の多様なその社会」"West Indian Society of Many Colorings"には、マルティニク島における奴隷制度について以下のように書かれている。

> かつてここには、親密で心も通いあう島の暮らしがあった。それは、階級の偏見や政治的対立で乱されることも決してなく、様々な悪を本質的に内包しながらも、人間の詩情にあふれた優しさと情感に特徴づけられた、家父長制度下の生活であった。古い社会制度の異国情緒あふれるすべての人間関係を美しい薄霧のように包みこんでいた何かが、かつては存在した。[345]

ハーンは、西インド諸島のかつての奴隷制度から家父長制度に類似する特徴を見出している。奴隷制度自体は、様々な悪を内包するが、その制度は一つの社会規範として定着し、その中では温かみのある人間的な関係も育まれているとの理解である。続いて、ハーンは奴隷制度の中に昔ながらの家族関係が溶け込んでいる事実に言及する。

> かつてクレオールの主人は十中八九、家内の奴隷を養子養女のように考え、彼らに対し親に似た愛情を抱いていた。〔…〕生まれつきよほど邪悪な性格でない限り、クレオールの奴隷所有者が黒人たちに対して、心の中に不親切な感情を抱くことなどあろうはずもなかった。〔…〕奴隷制本来の主要な残酷さは、すでに植民地の歴史の初期の時代に自ら燃え尽きてしまったにちがいない。後にはこのような人間関係に伴う直接的な個人の苦悩は一般に想像されるよりも少なくなっており、使われる側には不正だという認識が皆無に近く、使う側にも悪の意識が極めて薄弱であった。時と習慣が道徳的感受性を鈍化してしまったのである。[346]

ハーンは『ユーマ』において、一方では、引用のように拡大された家族関係として定着した奴隷制度を描写する。こうした奴隷制度には、使われる側にも、それを使う側にも、制度自体の不当性に関する認識がほとんどないのである。しかし、他方でハーンは、奴隷制度がいかに家族関係として機能するにしても、その本質に、人間が他の人間の自由を束縛するという不条理と不当性があることを示す。

物語の舞台は、1840年代のマルティニク島であり、クライマックスになる出来事は、

1848年、奴隷制度が廃止される直前、黒人奴隷たちが白人農場主たちを襲撃した事件である。『ユーマ』は、『チータ』と同様に色鮮やかな表現で熱帯の島や島での生活が描写し、当時の書評では、ローカル・カラー作品として評価された。[347]本節では、ハーンの人種問題の捉え方を見ることが目的であるため、ローカル・カラー文学としての側面については触れない。まず、『ユーマ』のあらすじを紹介しよう。

2.1. 『ユーマ』のあらすじ

マルティニク島には、かつて植民地時代、ダーと呼ばれる乳母の制度があった。乳母は、たいてい混血黒人女性であり、献身的に主人の子供の世話をした。奴隷の身分にもかかわらず、彼女は白人の子供に母親として敬愛された。

ユーマは、マルティニク島の豪商ペロンネット家のダーの娘として生まれた。5歳の時に彼女の母がなくなり、ペロンネット夫人が彼女を自分の娘エメーと一緒に育てた。ペロンネット夫人は彼女を実の娘のように何不自由しないように育てた。その後、エメーはデリヴィエールという大農場主のもとに嫁ぎ、ユーマもつき添っていった。しかし、間もなくエメーは女児を一人残し病死する。ユーマに娘マイヨットのことを頼むという遺言を残した。ユーマは、マイヨットの乳母となり、献身的に面倒をみる。

その間、デリヴィエールの農園の人夫頭ガブリエルとユーマは恋に落ちた。彼は筋肉逞しく、聡明であり、勇敢な人だった。二人は結婚を願うようになる。しかし、ペロンネット夫人は、農園で働く奴隷の黒人との結婚を許さなかった。ガブリエルはユーマに逃亡して自由の身になろうと提案する。ユーマは葛藤するが、結局マイヨットや自分に優しく接してくれた人々を裏切ることはできなかった。

その頃、島に奴隷の反乱が起きた。15万人にのぼる奴隷が蜂起し、白人の雇主を襲撃した。デリヴィエール一家も親類の家に避難したが、そこにも危険が迫ってきた。デリヴィエールは、ユーマに逃げることを勧めたが、ユーマはマイヨットを守るため逃げようとはしなかった。結局館は焼き打ちをかけられる。ガブリエルがユーマを救うために駆けつけてきたが、ユーマはマイヨットを抱いたまま、炎の中に姿を消す。

2.2. 西インド諸島のマルティニク島における黒人乳母ダー

小説の主人公ユーマは、ダーの子どもであり、彼女自身もダーとなる。ハーンは、物語の冒頭で、ユーマの話に入る前に、マルティニク島における黒人乳母ダーの存在を紹介する。

ハーンによると、ダーは、混血の女性の中でも肌色の濃い女性から選ばれる。彼女らは、献身的に主人の子どもの面倒をみる。子どもたちは、彼女らを母親として愛し、敬意をもって遇する。そして、その愛情は一生続くものである。多くの場合、ダーは彼女の主人のところで生涯を終える。彼女らは、法律的に所有物だが、ダーを売りに出すようなことは破廉恥な行為とされていたようである。彼女らの生き方は、自分たちの子どもに対する親としての喜びを放棄した点で、自己犠牲的なものである。

ハーンは、ダーの制度が奴隷制度の副産物であることを認識しつつも、彼女らが無条件で主人の子どもを愛した行為は真実であり、賞賛すべきことと、評価する。彼は、ダーの制度を、「あの奴隷制度という残酷で苦い土壌から成長し繁茂した、あらゆる暗黒の雑草の中で不思議にもぽかっと咲いた一輪の珍しい花」[348]と形容する。ダーに対するハーンのこのような評価は、物語の中で決定的な役割を果たす。主人の子どもに対するダーの無条件の愛情が、最終的にユーマの決断を決定的にする動機となるのである。次項では、奴隷制度をめぐる登場人物の論争や主人公ユーマの葛藤を考察する。

2.3. 伝統化した奴隷制度

作品『ユーマ』は、急速に変化していく社会の中で、古い伝統的な価値と新しい革新的な価値がぶつかり合う現実を描く。ユーマの女主人ペロンネット夫人が前者を、ユーマの恋人ガブリエルが後者を代表する。ユーマは、奴隷制度という古い伝統の中で生まれ育ち、奴隷制廃止を主張する革新的なガブリエルに出会う。彼女は、両者の価値観の板挟みになり、苦悩するのである。

伝統化した奴隷制度は、ユーマに対するペロンネット夫人の行動に代表される。ペロンネット夫人は、奴隷ユーマのために三つの配慮をしたのである。第一は彼女に教育を施さなかった。第二は物質的なものを十分に与えた。第三は彼女を解放しなかった。この三つの行為には、ペロンネット夫人なりの理由があった。まず、教育を受けさせなかった理由は次の通りである。

> ユーマは読み書きを習わなかった。ペロンネット夫人は、ユーマには奴隷としての身分の外へ出ることはいかなる努力をもってしても出来ない以上、たとい勉学の機会を与えたとしても、それはこの子に不満をつのらせるだけだろう、と考えたのである。[349]

ペロンネット夫人は、ユーマが教育を受け、自分の立場に気付き、不満をつのらせた挙句、変えられない状況を変えるべく無駄な努力をする結果を怖れたであろう。それよりは、無知のままにいた方がユーマにとって幸せであろう、と考えたといえる。ハーンは、ペロンネット夫人を通して、奴隷制度の内側にいる人々の思考の一端を見せるのである。

ペロンネット夫人は、身分制度の変化など外部的変革は不可能だと考えたが、少なくとも、自分のできる範囲での変化はユーマに与えた。それは、物質的な豊かさである。ペロンネット夫人はユーマにお洒落な服や宝石などを十分に与えた。ユーマは、島の黒人女性が身につけたがるものは、何でも持っていた。

> ペロンネット夫人は彼女の召使いのことを誇りに思い、ユーマが当時有色の女性が着用した優雅で輝かしい衣装をできるだけ美しく着こなすことに喜びを覚えていた。服装に関する限り、ユーマは解放されたクラスのいかなる女をも羨む理由はなかった。彼女は混血女性（カプレス）の女が着ることを望み得るようなあらゆる服を取揃えて持っていた。〔…〕このユーマの装身具の中には、エメーからのいろいろな可愛らしい贈物もまざっていた。しかし、宝石の大部分はユーマのために、ペロンネット夫人がお年玉として、毎年、買い与えてくれたものだった。ユーマが希望する楽しみは、それがもっともなものである限り、ユーマにことごとく与えられた。ただし奴隷の身分から解放される「自由」だけは別だったが。[350]

ユーマが非常に豊かな生活をしており、ペロンネット夫人が彼女を大切にしていることが分かる。ユーマに「自由」だけは与えなかったが、それもペロンネット夫人側から考えると、ユーマのためのことであった。ユーマ自身は、何一つ不自由しない生活を送っていたため、自由について深く考えてはいなかった。どちらかと言えば、皮肉なことに、ペロンネット夫人の方がユーマを自由にする計画を立てていた。娘のエメーは、母親にユーマを自由にしてくれるよう嘆願したが、ペロンネット夫人は二度もそれを断る。その理由は、ユーマのためだった。夫人は、ユーマが奴隷の身分であるため、彼女の身が道徳的に保護されており、外の危険から彼女は守られていると考えていた。特に、夫人は、ユーマが彼女にふさわしくない男性と結婚することを主人として防げると考えたのである。夫人は次のようにユーマの解放計画を立てていた。

〔ペロンネット夫人は〕ユーマをいつか勤勉で貯金のある解放奴隷と結婚させようと思っていた。ユーマのためによい家庭をきずいてくれるような男の——船大工とか家具職人とか建設業者とか機械工の親方といった種類の男であった。そしてそうした機会が訪れたら、ユーマを自由な身分にしてやろうと思っていたのである。その時はほかに多少は持参金も添えてやる。それまではユーマはともかくもこの上なく幸せなのだから。[351]

ペロンネット夫人は、ユーマが結婚しても経済的に問題がないように、安定した職業を持つ解放黒人を相手として探してやろうと考えている。安心できる相手とユーマが家庭を築けば、安心してユーマを自由にすることができる、とペロンネット夫人は考えるのである。

ペロンネット夫人の計画は、奴隷制の観点から見ると、ユーマが主人の命令に逆らえないことを利用して、彼女の人生を勝手に決めているように見える。しかし、それまでの彼女とユーマの関係を考えると、二人の関係は、主人と奴隷というよりは、里親と娘に近い。彼女がユーマにとって親の代わりだとすれば、ペロンネット夫人の心配は、娘を心配する親のそれと変わりはない。親の意向により子の結婚相手が決まる状況は、ハーンが「西インド諸島——肌色の多様なその社会」の中で言及した当時の家父長制下の家族関係を思い出させる。すなわち、ペロンネット夫人は、奴隷制度を家族制度の一つとして捉える「使う側」の代表として描かれているのである。ユーマは、奴隷制度が不正という認識がほとんど無い使われる側の代表である。ハーンの表現を借りると、道徳的感受性が鈍化していたユーマは、ガブリエルという青年との出会いにより、自分の身分を自覚することになる。

2.4. 奴隷の身分に対するユーマの自覚

ユーマの結婚に対するペロンネット夫人計画こそが、ユーマに自分の身分を悟らせる契機となった。ユーマは、ペロンネット夫人の娘エメーの嫁ぎ先デリヴィエールの大農場に付き添って行き、彼女の子どもマイヨットのダーとなった。ユーマは、そこで農園の黒人奴隷で人夫頭であったガブリエルと恋に落ちた。ガブリエルは、ユーマとの結婚をペロンネット夫人に申し込んだ。しかし、ユーマの将来を計画していたペロンネット夫人は、黒人奴隷に彼女を嫁がせるつもりはなく、結婚の申し出を拒絶した。ユーマは、それまでに自分が奴隷の身分であることについて深く考えたことがなかった。しかし、自分が奴隷であるため、愛する人と結婚できないことに気づき、大きな衝撃を受ける。

> だがユーマにとってこの決定は痛烈なショックであった。彼女は茫然として涙を流すことさえ出来なかった。それから、突然の苦痛が呼びおこす、本能的で自動的な怨恨の感情とともに、彼女に生まれて初めて「自分は奴隷なのだ」という事実についての強烈な自覚が生じた――自分は自分に打ちかかる意思に対しては抵抗することもできない、情けない身の上だということを。[352]

彼女は、初めて主人の意向に合わないものを欲しがったことによって、奴隷の身分が含む絶対的服従性に気づかされたのである。一度自分の身分に気づかされると、彼女は主人に対する激しい憎しみや自分が置かされた状況への不満を感じ始めた。それまでは、マイヨットのダーであることになんの不満も持たなかったが、今は、ダーの役割が自分を拘束するための束縛以外のなにものでもない気がしたのである。「影の中に生き、ロッキング・チェアで揺れ、子供じみた口をきくことにユーマは倦み疲れた[353]」のである。

ここで一つ注目すべき点がある。それは、ハーンが冒頭において説明したダーの描写をひっくり返したことである。冒頭では、「ダー自身が心は子供で、子供言葉を話し、子供らしいことが好きだった。――無邪気で、よくはしゃぎ、愛情に溢れていた」と描写される。しかし、本文の中のユーマは、ダーとして子どものように行動することに疲れを感じている。先行研究において、杉山が指摘したハーンの矛盾する黒人描写は、この点にある。すなわち、冒頭においてダーの子どもっぽさを黒人の人種的特徴として強調しながら、本文のユーマは知的で複雑な性格に描いたことである。[354]しかし、ユーマがダーの役割に懐疑の念を抱くことになったきっかけは、奴隷の身分を自覚したことである。彼女は、「自分の子供ではない子供のために、子供のように振舞い、考え、話すように運命づけられた」[355]ことに疑いを持つこととなる。彼女が倦み疲れた理由は、まさにハーンが冒頭においてダーの美徳として賞讃した特徴であり、ユーマが奴隷の身分を自覚するまでは何の不満もなくやり通してきた仕事である。つまり、冒頭において描写されたダーは、奴隷制度の枠組みの中で、与えられた運命に順応し、何の疑いもなく任された役割を果たすものである。しかし、奴隷制度に疑問を持ち、与えられた運命から逃れようと自覚した瞬間、ダーは任された役割にも倦み疲れてしまうのである。ハーンは、ダーの役割に対するユーマの姿勢の変化を通して、ユーマが奴隷制度の内的矛盾を初めて当事者として認識したことを明示したといえる。

ユーマは、何よりも、ガブリエルと自分を別れさせようとする人々が許せない。自分を取り巻く環境に憤りを感じながらも、ユーマはどうしようもない無力感に苦しむ。その時、ガブリエ

ルがユーマに逃亡することを提案する。自由の身になれるという提案である。ユーマは戸惑いながら、落ち着きを取り戻し、自分の人生について振り返ってみる。

> いけない、いけない！自分のいままでの人生がことごとく不幸だった、などというのは真実ではない。ユーマは楽しかった数々の日々をそっとおだやかに思い返した。光り輝く日々だった。自分の幼年時代の日々はとくに楽しかった。エメーと一緒だったからである。〔…〕そのエメーは臨終の間際にも愛情と信頼の眼差しで、自分の手を握って、そして死にゆきながらその唇で囁いた。「ユーマ、ああユーマ、あなたは私の子供を大事に可愛がってくれるわね？なにごとが起ころうと、ユーマ、この子が小さいかぎり、ユーマはこの子を離れないわね。約束して、ユーマ」。そしてユーマは約束した。[356]

彼女は、奴隷の身分を自覚する以前は、マイヨットのダーを任されたまま、機械的に義務を全うしてきた。勿論、マイヨットを愛していなかったわけではない。しかし、奴隷の身分について深く考えていなかったのと同様に、彼女はダーの役割についてもそれほど深く考えていなかったのだ。しかし、奴隷の身分やダーの役割に疑問を感じ、嫌気を感じて初めて、自分を取り巻く環境について深く考え、友人に対する愛情や彼女が残した子供に対する責任感に気付いたのである。つまり、それは、彼女が奴隷としてではなく、主体的な一人の人間としてマイヨットのダーになれたことを意味する。

2.5. 廃止すべき悪としての奴隷制度

ユーマが恋に落ちたガブリエルは、ペロンネット夫人の対極の立場にいる人物である。ハーンは、ユーマとガブリエルの会話を通して、伝統化した奴隷制度を代表するペロンネット夫人の主張をことごとく論破する。ユーマは、逃亡を提案したガブリエルに、自分の心境を打ち明ける。彼を愛するが、それまで自分に良くしてくれた人々を裏切ることはできない、と。自分を信頼した友人エメーの子供を見捨てることはできない、と。それは、奴隷制度が家族制度の一部として機能する社会の中で刷り込まれた考えである。しかし、ガブリエルは、どれほど白人が親切であろうと寛大であろうと、黒人が自由を放棄する理由にはならないと考える人物だった。ガブリエルは、ペロンネット夫人がユーマに配慮したゆえに取った三つの行為について、ことごとく反論していく。まず、ペロンネット夫人がユーマに物質的に豊か

さを提供したことや彼女にふさわしい結婚相手を探そうとしたことに対する反論である。

> 「たまたま悪者でなかったというだけで、良くしてくれたとおまえは言うのか。一体どんな風に良くしてくれたのだ。おまえを着飾らせ、きれいなスカートや艶出しの木綿更紗をくれ、可愛い首飾りをしてくれた。そして金造りの宝石も身につけさせてくれた。それで世間は『奥様は奴隷に対しても物惜しみをせぬ。御主人様も親切にしてくださる』と大声をあげて言ったりする。だが本当にくれたのか。くれたのではないぞ、貸してくれただけだぞ。見せびらかすためにおまえの体につけさせてみただけの話しだ。おまえはなに一つ所有することはできない。おまえは奴隷だ。法律の前ではおまえは虫けら同様、はだかの無一物なのだ。おまえにはなにもものを持つ権利はないのだ。俺がおまえにやったものですら持つ権利はないのだ。おまえは自分が選んだ男の妻になる権利すらない。」[357]

ガブリエルは、ペロンネット夫人がユーマに物質的な豊かさを提供したとしても、主人と奴隷の関係には変わりがないこと、ユーマが享受していると思う豊かさは本物ではないことを指摘する。そして、自分が一生を過ごす相手すらも選択できない現状を突きつけ、ユーマが奴隷の身分であることを再度確認させる。そして、ユーマが主体的に果たそうと決めたダーの役割についても、厳しく批判する。彼は、ダーの制度がもたらす個人への暴力性を暴く。

> 「おまえらは半生を白人の子供たちを育てるためについやしてきた。おまえらの青春をそのために捧げた。だがそのくせおまえ自身が母となった時は、そのおまえ自身の子供の世話を焼く権利さえないのだぞ。」[358]

ハーンは、冒頭において、ダーの自己犠牲的献身を褒め称えた。しかし、彼は、ガブリエルの口を通して、自己犠牲的献身の裏側を露わにする。それは、ダー個人にその人生そのものを犠牲にすることを要求する社会の暴力である。しかし、ダーのこのような側面は、ユーマが、奴隷の身分を自覚した時にすでに気づいた側面でもあった。ユーマは、それにもかかわらず、マイヨットを育てると決意したのである。

ガブリエルは、最後にペロンネット夫人がユーマ本人のためといい、教育を受けさせなか

ったことに対して反論をする。

「違うぞ、おまえは奥様の令嬢と同じように育てられたわけではないぞ。白人の御婦人が知っていることをおまえたちはなぜ教わらなかったのか。なんで奴隷の身分のままでいるのか。良くしてくれたとおまえは言うが、それは彼らの利害のためだ。現にそのせいでおまえは彼らのもとを離れようとしない。俺と一緒になれば自由の身になれるというのに。」[359]

ガブリエルの立場からユーマの人生を見直すなら、ユーマは白人の令嬢と同様の待遇を受けたわけではない。それにもかかわらず、自分の人生を犠牲にして、子どものダーをやらなければならない。彼女は、主人が「よくしてくれた」という理由から、奴隷の身分のままに留まることを選択したとするが、ガブリエルからみれば、そのために自由をあきらめねばならないのは、あまりにも大きすぎる対価なのだ。

ユーマは、懸命にペロンネット夫人が利害関係から親切を施す人ではない、とガブリエルを説得しようとする。そして、ガブリエルの主人であるデリヴィエールがいかに彼によくしてくれたのか、いかに親切な人なのかを思い出させようとする。しかし、ガブリエルは、ほかの主人より良い主人はいても、奴隷にとって良い主人はいないと断言する。ガブリエルは、それまでユーマがタブーとして回避してきた問題を突きつける。

「おまえは奴隷制度は良いもの、正しいものとでも考えているのか。」[360]

それまで、自信を持ってガブリエルを説得していたユーマだったが、今度は言葉に詰まる。ユーマは、ガブリエルとの出会いにより、奴隷制に疑問を感じ始めていたからである。しかし、同時に疑念を持ってはならないとも感じていたのである。彼女は、恐る恐るそれまで続いてきた奴隷制擁護の理論をオウムのように繰り返す。

「でも善き神さまがこの世に御主人さまと奴隷とがいるように按配(あんばい)してくださったのですから……」[361]

ガブリエルは、思わず「馬鹿な、なんという子供じみたことを言う！」[362]と叫んだ。彼はユ

ーマのこの発言の後、彼女との口論をやめる。ユーマの心の中に彼の論理では変えられない何かがあることに気付いたからだ。彼は「ユーマの名づけ親に対する義務感や子供に対する義務の観念は、どうやらユーマの宗教についての観念と混じりあっているようだ」[363]と感じる。ガブリエルは、それが「白人の教育によって作り出された黒人の側の知能上の弱さ」[364]と解釈する。彼はユーマの説得をあきらめ、他の方法を考え始める。

2.6. 選択を迫られるユーマ

これまで見てきたように、ユーマを間において、ペロンネット夫人の考えとガブリエルの考えは衝突する。ペロンネット夫人から見ると、ユーマは実の娘同様で、彼女には何でも与えたつもりだった。しかし、ガブリエルから見ると、夫人がユーマの自由を束縛している以上、二人は主人と奴隷の関係以外なにものでもない。ハーンはガブリエルの発言を通して、奴隷制が持つ倫理的問題を浮かび上がらせるが、それにもかかわらず、ペロンネット夫人のユーマへの思いやりやエメーとの友情、ユーマが彼らに抱いた愛情にも真実があることを読者に伝える。すなわち、ハーンはどちらの主張にも説得力を持たせ、その判断を読者に委ねる。

しかし、ユーマは、最悪の状況において、その選択を迫られる。黒人奴隷の暴動が起き、彼女は、ペロンネット夫人とマイヨットと共にデリヴィエールの親戚の邸宅に閉じこめられる。ガブリエルは、邸宅に駆けつけ、ユーマだけなら助けられる、と彼女に選択を迫る。しかし彼女は、奴隷所有主たちと一緒に死ぬことを選択する。主人に対する忠誠を尽くすためではなかった。自分に抱きつく幼児子どものマイヨットを置いて、自分だけが助かる道を選択できなかったのである。彼女は、マイヨットを抱きしめ、炎の中に消えて行く。

奴隷制度は、生まれ落ちた瞬間からユーマを束縛するものであり、悪を内包した制度であった。しかし、その奴隷制度の不正義・不当性を指摘し、自由および人権を約束した思想は、彼女が初めて自主的に決断を下した瞬間に、彼女を死に追い込む。ハーンは、ユーマの悲劇を通して、急激な時代の変化、価値観の衝突の中で矛盾を抱えて暮らすことを余儀なくされる個人の悲劇を描いたのである。

3. 結論

本章では、ハーンがニューオーリンズならびにマルティニク島の黒人および混血の人々

をどのように捉えたかについて考察した。19世紀末、南北戦争の終焉と共に、伝統的な社会システムであった奴隷制度は廃止され、白人にだけ適用されていた自由および平等という概念を普遍的に適用することを南部は強制された。南部の白人は、奴隷に自由が与えられただけではなく、公民権までもが与えられたことに戸惑いや不快感を隠さなかった。南部の白人が持つそのような感情が、ニューオーリンズの歴史家ガヤレの論説「南部の問題」によく表れる。ガヤレは、肌色によって優性や劣性が決まると考える人物であり、論説の中で、劣性である黒人の滅亡を予想した。ハーンは、ガヤレと同様に黒人の滅亡を予測するが、その理由は全く異なるものであった。ハーンは、奴隷制廃止後、黒人の生活が以前よりも苦しくなっている状況に注目した。北部によって突きつけられた自由と平等という理念は、黒人に自立できる手段と時間を与えなかったため、彼らを自分たちの日常から追い出しただけの結果となった。ハーンはそのような状況を踏まえて、黒人の滅亡を予測したのであった。伝統か革新かという理念の衝突ではなく、その衝突により、実際に日常の拠り所と平安を失った人々の苦しみこそがハーンの関心事だったといえよう。

ハーンは、奴隷制度に非人道的な悪が含まれていることを認めながらも、長期間続いたそのシステムの中から、良い人間関係が生まれたことにも目を向けた。元奴隷のことを心配し、生活を援助した元奴隷所有主がその例である。ハーンのこういう視線は、小説『ユーマ』に溶け込んでいる。『ユーマ』は、奴隷制が廃止された時代に書かれた、奴隷の物語である。物語の中で、ユーマは、自分に差し伸べられた黒人ガブリエルの手ではなく、主人の家族と共に死を選ぶ。ハーンは、あたかも作品『ユーマ』を通して奴隷が主人へ忠誠を尽くすのを賛美するようにもみえる。しかし、ユーマの苦悩や彼女とガブリエルとの論争は、そうではないことを物語る。ユーマは、奴隷制度の不当性を自覚しながらも、古い制度の中で死を選ぶ。その理由は、伝統に対する盲目的な信念ではなく、友人への約束やその子に対する純粋な愛情といった主体的信念である。ハーンは、奴隷制という伝統的価値と自由という革新的価値のはざまで苦悩する個人の悲劇を描いたのである。

西インド諸島のダーという古き慣習に対するハーンの視線は、異文化に対するハーンの眼差しをはっきりと代弁してくれる。彼は、自分の人生を犠牲にして他人の子どもの面倒をみるダーの自己犠牲的な態度を賞讃すべきものだと記す。しかし、同時に、彼はダーのそのような性格が奴隷制度によって作られたものであることも知っていた。すなわち、奴隷制が崩壊すると、古い価値も追い払われ、それまで当然として主人の命令を受け入れたダーたちが不満を感じ始めることである。それが、ユーマの苦悩を通して具現される。変化して

いく時代を認知しながらも、あえて過ぎ去っていく古き時代の慣習にノスタルジーを抱き、それを敢えて排除しないこと、それがハーンの作品の底辺に流れる異文化への眼差しであると論者は考える。

彼のこのような眼差しは、場合によっては、現代の視点からみると、人種差別主義者を思わせる原因であろう。しかし、急速に変わっていく社会の中で、衝突する二つの価値観を体験し、どちらか一方に肩入れすることなく、衝突していく過程をそのまま描くこと、そしてその過程の中で、進歩していく現代の価値よりは、忘れ去られる古い価値の中にこそ、ハーンが、人間の美しい本質と異文化を描く魅力を感じたのであろう。

終章　本研究の結論と課題

ハーン文学の成熟期が、彼の日本時代にあることは周知の評価である。ハーンは、『日本瞥見記』や『心』といった作品を世に出したことで、日本人の心、日本文化の真髄を描くことのできる人物として、卓越した日本理解者であるという評価をかち得ている。欧米においてその独自の文学的世界が認知されたのも、日本との出会いがあったからである。その日本時代を満開の花に譬えるなら、その花を支える根と幹は、ハーンのアメリカ時代といえるだろう。本研究の目的は、ハーン文学の根幹にあたるアメリカ時代、すなわち彼が報道記事を書きながら、作家としての自己意識を形成し、遂に独自の文学世界を構築する過程やその成果を明らかにすることであった。

アメリカ時代におけるハーンの報道記事は、ハーン文学を研究するにあたって重要な資料である。しかし、ハーンが著述した報道記事は、日刊紙の記事であったため、彼の生前には、まとまった形で刊行されることはなかった。ハーンの死後、蒐集家や研究者たちが彼の記事を特定し、刊行に着手した。その作業は現在もなお継続されている。これら一連の報道記事は、ハーン文学の基盤となるものであり、本論文でも、一次資料として用いた。ハーンの文筆活動の軌跡については、先行する伝記的研究に本論文は多くを負っている。ハーンの伝記は、彼の友人の手になるものを嚆矢として、十数冊の優れた伝記がある。とりわけ、ハーンのシンシナティやニューオーリンズでの活動期に重点を置いて書かれたものの他、既に刊行された伝記を補足、包括する形で書かれたものもある。これらの伝記的諸研究は、ハーンが報道記者として自己形成し、作家として個性ある作品を生み出す過程の検証には、不可欠な研究である。本論文においては、これらの伝記的研究を基盤にして、ハーンを取り巻く当時のジャーナリズム界やアメリカ文学界といった文化的脈絡を視野に入れ、ハーンの文学的世界の形成過程を包括的に確認した。従来、アメリカ時代の作品に対するハーン研究は、基本的にアメリカ文学のカテゴリーの中で行われてきた。そのためにそこでの研究対象となるのは、伝統的な意味での文学の範疇に属するものに重点が置かれていた。従ってハーンの一連の犯罪報道記事などは、その対象とはならなかったのである。当然ながらハーンの報道記事は、伝記的研究の中で取り上げられてはいる。しかし、彼の文学自体の批評、分析のための資料としては重要視されてこなかった。本論文は、アメリカ時代を通観して、ハーン文学の特質を浮き彫りにする試みである。この試みから、

伝記研究や、文学評論において等閑視されていた種々の側面が可視的となった。各章の構成に従い、解析の成果をまとめておきたい。

第1章では、ハーンの報道記事の文学的手法に注目した。それが顕著に表れるのは、犯罪報道記事であった。彼の手法はいわば、犯罪事件の物語化である。南北戦争終了後、新聞自体が脱政治・脱党派へと向かう流れの中で、ジャーナリズム界に新たに求められたものは、身近で日常的なニュースであった。こうした変化を敏感に察知したハーンは、犯罪事件をより刺激的に伝える手法を思いついた。ハーンは、事件報道をエンターテインメントの一種と捉えたのである。ハーンが活用した文学的手法は、三つの特徴を持っていることが確認できた。

第一は、ハーンが、出来事を物語る語り手となったことである。彼は、取材した内容を改めて再構成し、それを三人称小説の語り手として伝えた。人物の会話は報道記事特有の伝達の形式ではなく、直接話法が挿入された。それにより、現実感、臨場感が醸し出された。

第二は、写実的で緻密な描写法である。ハーンは犯行現場や死体検視といった場面を読者の五感に訴えるように、リアルに描写した。事件の報道のためだけなら、とりたてて必然性が無くても、グロテスクな場面をありのままに、現場の臭い、味、形、音声、手触りまでリアルに描写したのである。現代の人々が、ホラー映画のグロテスクな場面や血なまぐさい場面をみるのと同じような効果をハーンは当時の読者に与えた。

第三は、想像力を活かして犯行現場を再現したことである。犯罪事件のクライマックスといえる犯行の瞬間が生々しく再現されたばかりでなく、想像力を駆使して、犯人が犯行に至るまでの一連の行為を再構築している。そうすることによって、ハーンは読者を犯罪事件の真っただ中に引き込み、疑似体験の場を提供した。あたかも、犯行現場に居合わせているかのような感覚を読者に与えたのである。

これらの手法は、ハーンが報道記者として活動を始めた最初の2年間で、自らの表現法の原点として確立された。報道記者としてのハーンの力量が世に知れわたる切っ掛けとなった「皮革製作所殺人事件」には、これらの要素が集約されている。同記事に挿絵が初めて挿入されたことも注目に値する。本論文では、ハーンの記事と他紙の報道記事とを比較し、彼の記事が独創性および市民が求めるエンターテインメント性を持っていることを検証した。

ハーンは、短い報道記事の中で、読者の目を一瞬で釘付けにする手法、センスに長け

ていた。この経験は、彼が短編作品に優れた個性を発揮できた要因であったと思われる。第4章で取り上げた『チータ』がその傾向を如実に表している。元々あった素材を再構築し、新たな物語に仕立てあげる、こうした手法は、後のハーンの創作スタイルに大きな影響を与えた。来日前に書き上げた小説『チータ』や『ユーマ』は実話を元にして再構築されたものである。ハーン文学を代表する再話もまたこの範疇に属する。例えば、『怪談』に収録された「雪女」は、ハーンが日本の民間伝承と出会い、それを再構築して物語化したものである。シンシナティの報道記者時代に培った独自の表現手法と再話への傾斜は、後のハーンの文学世界の決定的要素になったといえよう。

ハーンは、この後作家活動を目指して、ニューオーリンズに移り住むことになる。これがハーンの文学的転機にもなる。読者に「現場」の刺激を与えたいという今までのセンセーショナリズムを超えて、日常のただなかにありながら、人の心のひだに秘められる諸種の感情、怒り、悦び、嘆き・哀しみ、笑いなどに目を向ける。ハーンは、平凡な日常的出来事のなかに、非日常的な「感動」を見出し、文学の糧にしたといえるのではなかろうか。彼はここに作家としての新たな感性を発見したのである。第2章、第3章では、ニューオーリンズ時代のハーンのこうしたまなざしを追ってみた。

第2章は、挿絵制作者としてのハーンに焦点を当てると共に、彼が書いた挿絵記事の特質に注目する。ハーンは、日刊紙に挿絵記事を取り入れることにより、ニューオーリンズ新聞史に足跡を残した。彼が、この地で挿絵制作に必然性と自信を見出した根拠は、一つに、シンシナティにおける挿絵入り雑誌の刊行経験があったこと、二つ目に挿絵入り記事「皮革製作所殺人事件」で成功を収めたことにある。実際ニューオーリンズでも、彼の挿絵記事は、読者の支持を獲得したばかりでなく、他社の新聞にも挿絵記事の重要性を認識させることとなった。換言すれば、ハーンの挿絵記事は、ニューオーリンズ新聞界においても、挿絵記事の先駆けであり、模範ともなったのである。

本章では、ハーンの挿絵記事を風刺と風俗の二つの観点で捉え、分析を行った。ハーンの風刺は、権力ある者にもまた日常を生きる庶民にも向けられている。前者に対する風刺は、厳しい論調で書かれており、挿絵は一種の武器と化し、そのメッセージは読者に分かりやすく伝えられた。後者の庶民に対する風刺では、庶民が日常の生活の中で過ちを犯すことに対し、鋭く突いてはいるものの、その過ちの背景に潜む庶民の苦悩、苦痛にも目配りされている。前者の風刺は、確かに権力者側の批判には、効果的であったが、あまりに直接的な表現であったことから、平板に流れる傾向も否定出来ない。しかし、庶民に

対する風刺は、問題の裏に潜む事情にまで目配りがなされ、読者の共感を誘うものであった。ニューオーリンズの日常を描いた風俗の記事にも、眼に見える表面的姿だけではなく、その奥にある庶民の喜怒哀楽も繊細な筆致で描きこまれている。つまり、ハーンは、庶民の何気ない日常に目を向けては、ユーモアおよびペーソスが共存する表情豊かな作品を仕上げたのである。ハーンは19世紀末のニューオーリンズを時には厳しく、時には温かく、時にはユーモラスに郷土史の中に描き残したのである。

第3章では、ハーンの異文化体験とその記述の仕方に変化があることに着目した。この異文化体験を通して、ハーン文学は成熟を遂げるのである。この章でとりあげたのは、シンシナティの黒人社会およびニューオーリンズのクレオール社会に関する文学的スケッチである。黒人とクレオールとはシンシナティとニューオーリンズにおけるマイノリティであり、両者とも外部とは関わろうとしない性質の社会を形成していた。それゆえ、その様子は外部の人間にとって未知であり、好奇心をかきたてる存在であった。ハーンはそのような存在に目を向け、スケッチの素材として取り上げた。シンシナティにおいてハーンは黒人社会を細部に至るまで観察したが、彼らに共感することはなかった。彼らの生活を通り過ぎながら、素描するのみであった。いわば、それは通過者の観察といえる。こうした通過者としての記述はニューオーリンズにおいては影をひそめた。ハーンはクレオール社会の中で生活し、彼らに同化しようと努力した。そうすることで、クレオール住民と同じような視点を持つことができた。つまり、定住者の視点である。その結果、ハーンは、クレオール社会に対して、通過者の観察と同時に定住者の視点を持つようになったのである。このような視点の変化により、ハーンのスケッチには奥行きが与えられ、異文化の中にありながら、深い共感を抱いているハーンを発見することができるのである。

第4章では、ハーンがジャーナリストから作家になる過程とその成果を考察した。ハーンが、ニューオーリンズを文学的転換の地として選んだ背景には、ケイブルの存在があったことを指摘した。その根拠は、以下の三点である。一点目は、ハーン自身が作家を志していたこと、二点目は、当時流行したローカル・カラー文学に彼自身も惹かれていたこと、三点目は、彼と類似した状況の中でケイブルが南部作家として認められていたことである。ハーンは、こうしてシンシナティの報道記者生活から離れ、南部文学の発祥地ニューオーリンズに移ったのである。南部文学におけるハーンの活動は、ケイブルとの関係抜きには語れない。ハーンは、ニューオーリンズでケイブルと親交を結び、文学的活動を共に行った。ケイブルは、作家としての第一歩となる北東部の文芸雑誌にハーンを紹介した。ハーンは、

それをきっかけに活発な文筆活動を行ない、南部作家の一人として認められるようになったのである。南部作家としてのハーンが世に送ったのは、彼の最初の小説『チータ』であった。『チータ』には、ハーンがシンシナティの報道記者時代に身に付けた手法が活かされている。事件を劇的に再構築するあの手法である。ハリケーンを描写する際、この手法が効果的に使われている。さらに『チータ』は、ローカル・カラー文学としてその条件を満たしていた。つまり、異国的な舞台背景、主人公に据えた現地人、ふんだんに取り入れられた方言である。このように『チータ』は、ハーンがシンシナティ時代に培った手法が活かされたばかりでなく、南部文学の本質を自身の内部に取り込み、地方色豊かに表現した作品である。ハーンは、『チータ』の完成を契機に作家としての自立を決意したのである。

第5章では、ハーンの再話文学がどのように生まれ、発展したのかについて分析した。ハーンの再話の原型は、シンシナティ時代の犯罪報道記事に見られる。しかし、実際に再話文学の形を取った記事は、シンシナティからニューオーリンズに向かう途次に書き上げた「熱帯の入口にて」である。これは、ニューオーリンズの印象記である。その中で、ハーンは、作家T.B.オールドリッチの作品「アントワーヌ神父のナツメヤシ」に範をとり、翻案した。ハーンの翻案による再話作品「熱帯の入り口にて」では、原作に比べて、男女の恋を美しく純粋に描き、物語の現実的要素を極力排除し、全体が非現実的世界に変容されている。こうした特徴は、ハーンが後に刊行した最初の再話集『飛花落葉集』の「泉の乙女」にも表れている。このように物語を、時代性、場所柄を超えて、恋愛の純粋美、いわば事柄の様式美を追求するハーンの姿勢、傾向は、既にシンシナティ時代、殺人者の自殺未遂事件を扱った「愛の真髄」にも見られた。この傾向は、日本時代の『怪談』の「お貞の話」に見られる男女の結びつきを描いた作品に受け継がれるのである。

物語の具体的な舞台装置、人物の具体的像を捨象する傾向を持つハーンの再話手法の特有性を確認したところで、ハーンの異文化に対する独自の姿勢を、次章でもう一度考察した。第6章の解放黒人の宿命的な悲劇を扱う小説『ユーマ』である。

ここでは、黒人の公民権をめぐる問題に向き合うハーンの両義的なスタンスを考察した。ハーンがニューオーリンズに移住した当時、当地では解放黒人問題が激しく議論されていた。北部の人々が、自由と平等という理念から黒人の公民権を主張したのに対し、南部の人々は、伝統と慣習、そして感情的な側面から、黒人への公民権付与に抵抗していたのである。南部の人間は、奴隷だった黒人が自分たちと平等になることに違和感と屈辱を覚えたのであろう。こうした微妙な論争の中で、ハーンの姿勢は両義的であった。一方で

は、公民権に象徴される自由と平等の理念に賛同したが、他方、南部白人が抱える喪失感や憎悪にも理解を示したのである。しかし、基本的に、現実に生じている解放黒人の問題、すなわち政治的・社会的公民権についてはほとんど言及していない。彼にとって関心の対象であり、文学的に重要だったのは、異なる価値観のはざまで苦悩する解放黒人の現実であった。奴隷制廃止という社会システムの変化は、人々に物理的な変化だけでなく価値観の転換、人権の至上性も突きつけたのであった。ハーンは、新たに台頭した革新的理念には、異論をもたなかったが、既存の信念を強引に変えさせようとする行為には賛同しなかった。そうした革新的行為は、時には暴力的衝突を引き起こすことを熟知していたからである。変動期の社会にありがちなそうした思想的、感情的衝突の最中で、どちら側にも身を置くことができない個人、弱者の立場を余儀なくされる人間は、一体どのようにすれば、正しい解答が得られるのか。南部の地で、自らは外部者として、しかし同時に内部者の眼をも獲得したハーンは、当事者性意識のなかで不条理な矛盾に自らも苦悩するのである。ハーンは小説『ユーマ』の中で、そうした個人の苦渋に満ちた選択の現実をリアルに描写する。ユーマは、奴隷が蜂起した折、主人の家族と死の運命を共にする道を選んだ奴隷である。一見したところ、主人への忠誠心から死を選んだように見える。しかし、ハーンが描こうとしたユーマは、価値観が対立する状況下でも、自らの意思によって、主体的に自分の最後を決めるのである。解放奴隷問題は、アメリカ大陸の急速に変化する時代を映すものである。速い速度で種々の理念や価値観が変容する時代に、ハーンは、変化の外側に放り出され、無力で、行き場を失った黒人解放奴隷の悲劇に目を向けるのである。

第1章から第6章までの考察を経て、ジャーナリストハーンが作家ハーンへと変容、成熟していく過程を辿ってきた。ハーンのシンシナティ時代は、彼が活動した三つの地域の中で一番短い時代だが、彼の文学的傾向の転機であったと結論できる。報道記者時代に身に付けた彼の文学的手法は、二つの点において彼の後の創作スタイルに影響を与えることになった。一点目は、原話の活用である。報道記者時代、事件を物語の素材として扱ったハーンは、創作の際も常に実話を元にしてそれを再構成する形で創作活動を行うようになった。それは二編の小説『チータ』と『ユーマ』に顕著にみることができる。彼が作家として名を成した再話も、原話を再構成して書き換えたものである。

二点目は、スタイルへの影響である。ハーンの再話作品は、概ね新聞記事程度の長さで書かれている。例えば、日本時代を代表する再話であり、あまねく知られた作品である

「耳なし芳一」や「雪女」には、読者の目を瞬時にくぎ付けにするようなインパクトが存在する。それは、集約した語句で、インパクトを与えることが要求される新聞記事の形式がハーンの文章のリズムになり、創作のスタイルとなったといえるだろう。

ハーンの文学的傾向と同じく、彼の陰影のある独自の異文化理解は、ニューオーリンズ時代にひとつの頂点を迎えている。彼の地は、クレオール人とアメリカ人、白人と黒人、混血と黒人など、多様な民族が共存し、民族間の衝突に加えて、北部と南部の思想的対立が激しく渦巻いている地域であった。ハーンはそういった対立や葛藤の中で、どちらかの側に立ったり、一方に肩入れすることもなかった。彼は、矛盾した社会現実を重視し、目前の種々の葛藤に対する拙速な解決法には慎重な態度をとった。公民権に対するケイブルの主張を理解しながらも、彼に対立する南部の白人の立場にも共感を示したことが、ハーンのそのような姿勢を物語る。政治思想に関するハーンの主張には一貫性がなく矛盾している、と何人かの研究者が指摘したのもそのためであろう。確かに政治思想に関するハーンの主張は時と場合によって変わることがある。一貫した思想や構想を明示しないという意味で、彼を優れた思想家として評価することはできない。同じような理由から政治家としても名を残すことができなかったと思われる。臨機応変の主張とは、しかし、裏を返せば、様々な事象、人々の見解に柔軟に寄り添うことができたということでもある。ハーンにとって、特定の思想や特定のコミュニティ、特定の人種といった単位は、物事の判断基準ではなかった。ハーンが興味を持つのは人間である。呼吸し、笑い、悲しみ、苦しむ一人一人の個人である。諸々の矛盾を抱えながら生を営む人間の複雑な内面である。そして、ハーンは人々の複雑な内面をその心情において共感し得たのである。その共感力が彼を作家へ、それも異文化の「心」を描くことのできる作家へと成長させたのである。確かに、政治思想において彼は一貫した思想を持っていないかもしれない。しかし、ハーンの作品に表れる矛盾は、一貫性の欠如を意味するのではない。むしろそれはハーンが、生きた一人一人の血の通った人間に寄り添い共感した証であり、その共感を作品に織り込んだ成果である。

ハーンは、また、この人々への共感を、さらに多くの人々が共感できるものにする能力を有していた。ニューオーリンズにおける挿絵記事で確認したように、彼は、そこに暮らす一個人の体験談を万人が共感できる作品に仕立てることができた。つまり、様々な人々の個人的体験を普遍的体験へと昇華させる文学的才能を彼は有していたのである。ハーンが光を当てた様々な問題、悩み、諸矛盾は、今日の我々の内面をも照らし出している。共感し、その共感を万人に伝える力、それこそが彼の作品を不朽のものとした素因であり特

質でもある。

本論文では、ハーンのキャリアを中心に、彼がジャーナリストから作家へと変化していく過程やその成果を論じることに主眼を置いた。そのために、あえてハーンが自身を変容させていく瞬間が明確に捉えられる作品を重点的に選択した。アメリカ時代に培われた独自の文学手法や異文化理解の分析、さらに日本時代の著作活動を視野に収めることで、本論文はハーン文学の実像に一歩迫ることができたのではないだろうか。すなわちハーン文学の転換点ないしは変容の節目を意図的に捉えながら、ハーンのアメリカ時代を再構成しようと試みるものであった。この試みをハーン文学という織物の縦糸とするなら、横糸としての個々の作品論が要請される。アメリカ時代におけるハーンの新聞記事は、未刊行のものも含めれば、いまだに研究されないまま残されているものも少なくない。本論文が取り上げたのは、その一部にすぎない。作品に関して言えば、翻訳を含め、7冊の作品があるが、本論文では、その中の3冊の作品を取り上げた。ハーンの作品の全てには、言うまでもなくハーン文学の特徴が遍在する。その個々の作品に向き合い、内容や背景、意図するものを分析し、批評を試みることで、ハーンのアメリカ時代がより網羅的、多角的に描出できることは間違いない。ハーン文学という織物の横糸をより充実した形で織り込むこと、すなわち全体的な作品論を試みることは、論者の今後の重要な研究課題といえる。

注釈

引用の翻訳は、特に記載がない場合、論者によるものである。私訳の場合、原文を添えた。

一次文献の中でハーンの著作は略語で表記した。略語一覧参照。

序章

1 ハーンの略歴については、銭本健二・小泉凡共編「ラフカディオ・ハーンの年譜」(『ラフカディオ・ハーン著作集』第15巻、恒文社、1988、533-753)および関田かをる「小泉八雲年譜」(平川祐弘監修『小泉八雲事典』、恒文社、2000、703-726)を参照した。

2 ハーンは、ハーパー社が自分の原稿を無断で編集したことに怒りを感じていた。彼がマルティニクにおいて送った小説「チータ」や数編のスケッチが編集されてハーパー社の雑誌に掲載されたのだ。来日直後、同行したイラストレーターへの報酬が自分より高いことを知り、それまでの積もっていた怒りが爆発したのである。「ラフカディオ・ハーンの年譜」『著作集』、15、623。

3 ハーンは、1889年5月にマルティニク島からニューヨークに戻り、翌年の3月にアメリカを発った。

4 ハーンの文学作品のリストは以下の通りである。作品の邦訳は、平井呈一訳の『小泉八雲作品集』全12冊を参照した。最後の『天の川綺譚』はハーンの死後出版された。

出版年	原題	邦題
アメリカ		
1884	*Stray Leaves From Strange Literature*	『飛花落葉集』
1887	*Some Chinese Ghosts*	『中国怪談集』
仏領西インド(マルティニク島)		

1889	*Chita*	『チータ』
1890	*Youma*	『ユーマ』
1890	*Two Years in the French West Indies*	『仏領西インドの二年間』
日本		
1894	*Glimpses of Unfamiliar Japan*	『日本瞥見記』
1895	*Out of the East*	『東の国から』
1896	*Kokoro*	『心』
1897	*Gleanings in Buddha-Fields*	『仏の畑の落穂』
1898	*Exotics and Retrospectives*	『異国風物と回想』
1899	*In Ghostly Japan*	『霊の日本』
1900	*Shadowings*	『明暗』
1901	*A Japanese Miscellany*	『日本雑記』
1902	*Kottó*	『骨董』
1904	*Kwaidan*	『怪談』
1904	*Japan: An Attempt at Interpretation*	『日本――一つの試論』
1905	*The Romance of the Milky Way, and other studies & stories*	『天の川綺譚』

[5] ハーンの作品が最初に発表されたのは、ニューヨークの『ハーパーズ・ウィークリー』*Harper's Weekly*である。ハーパー社の雑誌には、『ハーパーズ・マンスリー』*Harper's Monthly*、『ハーパーズ・ウィークリー』、『ハーパーズ・バザー』*Harper's Bazaar*があり、ハーンの作品はその三つの雑誌に掲載された。本文にも述べたが、日本に来る際に契約を結んだのもハーパー社である。ハーパー社は、印刷業や出版業を営んでいたハーパー兄弟が設立した会社である。1850年に創刊された『ハーパーズ・マンスリー』は、アメリカにおいて最初の本格的な全国誌であり、文芸総合雑誌であった。

（Cyganowski, Carol Klimick. *Magazine Editors and Professional Authors in Nineteenth-Century America: The Genteel Tradition and the American Dream*. New York and London: Garland Publishing Inc., 1988. 17）当時、作家が作品を出版する際、先に雑誌に作品を発表し、その後出版することが典型的な方法だった。ワシントン・アーヴィング(Washington Irving, 1783-1859)やナサニエル・ホーソン(Nathaniel Hawthorne, 1804-1864)を始めとしてそれ以後の作家たちは、その方法で作品を出版した。その際、最も好まれた雑誌は、『ハーパーズ・マンスリー』や『アトランティック・マンスリー』*Atlantic Monthly*、『スクリブナーズ・マンスリー』*Scribner's Monthly*だった。(Oates, Joyce Carol, ed. *The Oxford book of American short stories*. New York: Oxford University Press, 1992. 8)1883年、ハーンはシンシナティ時代の友人ヘンリー・E・クレビール(Henry E. Krehbiel, 1854-1923)に宛てた手紙で、雑誌の仕事について語った。雑誌への寄稿は、時間がかかり大変な仕事だが、雑誌社が出版社を紹介してくれるため、割に合わなくても頑張っていく、と意気込みを語っている。(Bisland, *Life and Letters* 1, WL, 13, 279)

6 "New Publications." *The New York Times* 14 Oct. 1894. 本記事は、『ニューヨーク・タイムズ』のデータ・ベースから入手した。当時の新聞はスキャンしたPDFファイルで提供される。PDFファイルのアドレスは、http://query.nytimes.com/mem/archive-free/pdf?res=FA0F12F83A5515738DDDAD0994D8415B8485F0D3である。(2013年09月23日）原文は、以下の通りである。

> What he did for the Pearl of the Antilles he has done for the Land of the Sunrise, and again has made visible the intimate psychical beauties of a country often visited, indeed, but never really seen till he went there and discovered it.

7 ローエルは、1887年9月号の『アトランティック・マンスリー』誌に「極東の魂」"The Soul of the Far East"を寄稿し(Lowell, Percival. "The Soul of the Far East." *The Atlantic Monthly* 60. 359(1887): 405-413. Boston: Atlantic Monthly Co)、ロチは、1887年に『お菊さん』*Madame Chrysanthème*を刊行した。ロチは、1890年12月号『ハーパーズ・ニュー・マンスリー・マガジン』*Harper's New Monthly Magazine*誌に英

語版の『日本の女性たち』"Japanese Women"を寄稿している(Loti, Pierre. "Japanese Women." *Harper's New Monthly Magazine* 82. 487(1890):119-131. New York: Harper & Brothers, Publishers)。

[8] "Book Review", *Overland Monthly* 7. 41(1896): 578. San Francisco: Overland Monthly Publishing Company. 原文は以下の通りである。

> *Kokoro,* meaning "the Heart of Things," illustrates their temper and attitude during and after the war. No Occidental writer has ever got so near to the mind and spirit of the Japanese as Mr. Hearn. In the fifteen essay-stories under review he carries the reader not only into the homes but into the very lives of the people.

[9] Miner, Earl. "Hearn and Japan: An Attempt at Interpretation." *Centennial Essays on Lafcadio Hearn*. Ed. Kenji Zenimoto. Matsue: The Hearn Society, 1996. 19-43. この論文は、翌年の1997年、平川祐弘編の『世界の中のラフカディオ・ハーン』に採録された。アール・マイナーに関する引用は、この翻訳による。マイナー、アール/平川節子訳「ハーンと日本――一つの解明の試み」(『世界の中のラフカディオ・ハーン』平川祐弘編、河出書房新社、1994、317-335)

[10] マイナー、1994、322。

[11] マイナー、1994、323。

[12] ハーンがニューオーリンズの『タイムズ・デモクラット』の文芸部長として働いた際、彼と一緒に勤務した女性。ハーンの書いた記事を読み、ジャーナリストになろうと志したという。「心の恋人」としてハーンとは一生交友を続けた。(平川祐弘監修『小泉八雲事典』、恒文社、2000年、507頁)

[13] 音楽批評家、歴史家。ハーンとはシンシナティにおいて、記者仲間として親交を深めた。クレビールは、『ガゼット』紙の記者としてハーンと共に様々な取材に行った。さらに民俗音楽その他のあらゆる分野で研鑽し合った。ニューオーリンズにハーンが行った後も、文通を続けた。ハーンはクレオール音楽を収集し、クレビールに送った。しかし、二人の関係は、1887年、ハーンがマルティニクに出発する直前に終わってしまった。些

細なことでハーンの自尊心が傷つけたと言われる。(『小泉八雲事典』、2000、197頁)

14 ハーンの作品『中国怪談集』について賛辞を送り、交遊を結ぶこととなった眼科医師。

15 Hearn, Lafcadio. *Children of the Levee*. Ed. O.W. Frost. Lexington, KY: University of Kentucky Press, 1957.

16 遠田勝「解説」『評伝ラフカディオ・ハーン』、恒文社、1984、427-428。

17 モーデルが刊行したハーンの記事は次の通りである。『カルマ』*Karma*(1918)、『東西文学論集』*Essays in European and Oriental Literature*(1923)、『アメリカ雑録』*An American Miscellany*(1924)、『西洋落穂集』*Occidental Gleanings*(1925)。

18 西崎一郎が編集した選集は以下の通りである。1939年東京の北星堂書店から刊行された。『野蛮床屋』*Barbarous Barbers and Other Stories,* 『東洋論集』*Oriental Articles,* 『新来の光明姫他』*The New Radiance, and Other Scientific Sketches,* 『クリスマスの玩具他』*Buying Christmas Toys and Other Essays,* 『文学評論集』*Literary Essays*。

19 ハトソンが刊行したのは、次の3冊である。『印象派作家日記抄』*Fantastics and Other Fancies*(1914)、『クレオール小品集』*Creole Sketches*(1924)、『論説集』*Editorial: New Orleans Journalistic Writings*(1926)。

20 シンシナティ大学のジャーナリズム研究者ジョン・クリストファー・ヒューズ(Jon Christopher Hughes)は、シンシナティにおけるハーンの犯罪報道記事を1990年に『陰惨な時代』*Period of Gruesome*(1990)というタイトルで刊行した。ニューオーリンズにおけるハーンの業績に再び光を与えたのは、中央アジア・コーカサス研究所の所長フレデリック・スターである。彼は2001年、それまでに未刊行だったハーンの記事を含めた『ニューオーリンズ発見』*Inventing New Orleans*(2001)を編集した。2004年には、『インクワイヤラー』紙の現役記者オウエン・フィンセンと同社に勤めた経歴を持つキャメロン・マクワーターが、同紙におけるハーンの記事の選集に解説を加え、『「怪談」以前の怪談』を刊行した。ハーンが記事を書いた当時のシンシナティや『インクワイヤラー』紙の状況が解説に書かれている。スターの『ニューオーリンズ発見』に収録された未刊行記事の編集に協力したのは、ニューオーリンズのデリア・ラバー(Delia Labarre)だった。ラバーは、2007年にハーンの挿絵記事全てを復刻し、『ラフカディ

オ・ハーンのニューオーリンズ』*The New Orleans of Lafcadio Hearn*(2007)というタイトルで刊行した。

[21] 平川祐弘『ラフカディオ・ハーン—植民地化・キリスト教化・文明開化』、ミネルヴァ書房、2004、198。

[22] 杉山直子「アウトサイダーとしてのハーン—『他者』との同一化をめぐって」『世界の中のラフカディオ・ハーン』、河出書房新社、1994、157。

[23] Taylor, Nikki Marie. *Frontiers of Freedom: Cincinnati's Black Community, 1802-1868*. Athens, Ohio: Ohio University, 2005. 188.

[24] Bronner, Simon J. *Following Tradition*. Logan, Utah: Utah State University Press. 1998. 103-109.

[25] Ewell, Barbara C. and Pamela Glenn Menke. Introduction. *Southern Local Color*. Eds. Ewell and Menke. University of Georgia Press, 2002. xxxviii-xlii.

第1章

[26] 1877年10月以降もハーンは『コマーシャル』紙に記事を書いた。しかし、その記事は、彼がシンシナティからニューオーリンズに移った後、同紙に寄稿したものである。特派員としての身分で掲載されたハーンの最後の記事は、1878年4月12日付までだが、1877年11月から掲載された記事は、ハーンがニューオーリンズに移った後の記事である。

[27] シンシナティ時代におけるハーンの記事の種類は、先行研究において述べたモーデルやフロスト、ヒューズが刊行した記事の選集から把握することができる。特にヒューズは、『陰惨な時代』の巻末に、シンシナティにおけるハーンの記事の目録を見出しと共に収録している。そのリストにより、刊行されていない記事に関しても、記事の種類を把握することができる。

[28] Cockerill, John A. "Lafcadio Hearn, the Author of Kokoro." *Current Literature* 19. 6.(1896): 476. Current Literature Publishing Company.

[29] 2004年に刊行された『「怪談」以前の怪談』は、現役記者キャメロン・マクワーター(Cameron McWhirter)とオウエン・フィンセン(Owen Findsen)が『インクワイヤラー』紙におけるハーンの記事を共編したものである。マクワーターは『インクワイヤラー』紙の報道記者として勤めた経歴があり、フィンセンは同紙の記者として勤務している。『「怪談」以前の怪談』に収録された記事は、これまで発表されてきたハーンの新聞記事と多く重なっている。しかし、同書が他の選集と異なる点は、シンシナティ時代のハーンと同じく新聞記者として勤める二人の編集者が、ハーンの記事について解説を書き添えている点である。フィンセンは、「皮革製作所殺人事件」に添えた解説「『皮なめし場の殺人事件』の報道」の中で、同記事が当時の新聞形式から並はずれた点があることを明らかにした。フィンセン、オウエン/高橋経訳『「怪談」以前の怪談』、同時代社、2004、100-103。

[30] 里見繁美「ラフカディオ・ハーンのシンシナティ・ニューオーリンズ時代」『ラフカディオ・ハーン—近代化と異文化理解の諸相』、九州大学出版会、2005、117-147。

[31] 里見、2005、126-127。

[32] 1.1を書くに当たり、以下のハーンの伝記を参照した。ビスランドの『ラフカディオ・ハーンの人生と書簡』、フロストの『若き日のラフカディオ・ハーン』、ケナードの『ラフカディオ・ハーン』*Lafcadio Hearn*(1912)、スティーヴンスンの『評伝ラフカディオ・ハーン』である。

[33] ニューヨークから西部へ向かう移民列車に乗った思い出「私の最初のロマンス」"My First Romance"がエリザベス・ビスランド編『ラフカディオ・ハーンの人生と書簡』に収録されている。その中に彼は「夏の光であった」"The Light is of a summer day"と書いている。(Bisland, *Life and Letters* 1, WL, 13, 42)

[34] 1875年に刊行された『イラスト入りシンシナティ案内書』*Illustrated Cincinnati*(1875)によると、シンシナティの人口は、1870年の時点で約216,239名である。その中で、136,627名がアメリカ生まれの人で、アメリカの国外生まれ、つまり移民が79,612名である。移民は次のような割合で構成されている。ドイツ系が49,448名、アイルランド系が18,624名、イギリス系が3,526名、フランス系が2,093名、スウィス系が995名、スコットランド系が787名、ウェールズ系が507名である。(Kenny, Daniel J. *Illustrated Cincinnati: Pictorial Hand-Book of the Queen City*. Cincinnati: Robert Clarke

& Co., 1875. 43)

[35] フロスト、O.W./西村六郎訳『若き日のラフカディオ・ハーン』、みすず書房、2003、88-89。

[36] ミンニー・シャーロット・アトキンソンは、ハーンの父親チャールズ・ブッシュ・ハーンがハーンの生母ローザと離婚した後、再婚して儲けた3人の娘のうち次女である。彼女とハーンの文通は熊本時代から始まり、神戸および東京時代まで続いた。手紙の内容は、ハーンの生い立ち、両親に対する思い出、大叔母ブレナンとモリヌークスの関係、学校生活、シンシナティ時代の辛酸、新聞記者としての体験談、日本時代の生活などについて語られている。(『小泉八雲事典』、2000、626)

[37] Kennard, Nina H. *Lafcadio Hearn: Containing Some Letters from Lafcadio Hearn to His Half-Sister, Mrs. Atkinson*. New York: D. Appleton and Company, 1912. 67-69.

[38] ワトキンは1848年にイギリスからアメリカに移住した移民者である。正規の教育は受けていなかったが、哲学や文学などに興味を持っており、独学で多方面のジャンルの本を乱読した人物である。(『小泉八雲事典』、2000、701)

[39] E・スティーヴンスン/遠田勝訳『評伝ラフカディオ・ハーン』、恒文社、1984、56。異母妹アトキンソン夫人に宛てた手紙は、前掲書のKennardの*Lafcadio Hearn: Containing Some Letters from Lafcadio Hearn to His Half-Sister*からの再録である。

[40] ハーンがワトキン宛てに送った手紙は、*Letters from the Raven*というタイトルで1907年刊行された。収録された手紙を見ると、ハーンはワトキンを"Dear Old Dad"あるいは"Dear Old Man"と呼んでいることが確認できる。関田かおる編『知られざるハーン絵入書簡』(1991)には、ワトキン宛ての原書簡影印が収録されている。

[41] 1888年から1912年までアメリカのニューヨークで刊行された雑誌。最初は月刊誌として刊行されたが、その後年2回、1回、4回など、不規則に刊行される。コカリルの記事が掲載されたのは、年2回刊行されている時期である。雑誌には、文学に関するゴシップや最新の文学情報、また詩や散文やスケッチなどが掲載された。(Mott, Frank Luther. *A History of American Magazines. Vol.4*, Cambridge, Harvard

University Press, 1957. 506-507)

42 スティーヴンスン（遠田訳）、1984、64。原文の出処は、Cockerill, 1896, 476である。引用した箇所は、E・スティーヴンスンの『評伝ラフカディオ・ハーン』に収録されており、その訳文を用いた。

43 スティーヴンスン（遠田訳）、1984、64。

44 スティーヴンスン（遠田訳）、1984、65。

45 ハーンのシンシナティ時代について最も詳しく扱っているのは、フロストの『若き日のラフカディオ・ハーン』である。フロストは、ハーンが『インクワイヤラー』紙に入る前、編集長がコカリルに代わったことについては説明している。しかし、アメリカの新聞状況の変化および『インクワイヤラー』紙の性格の変化が、ハーンの活動にどう影響を及ぼしたのかについては説明していない。

46 1.3を書くにあたり、モット(Mott)の『アメリカン・ジャーナリズム：1690-1960』*American Journalism: 1690-1960*（1941）およびドキャンプ(DeCamp)の『ヴァイン街の偉大な老婦人』*The Grand Old Lady of Vine Street*（1991）を主として参照した。

47 Mott, Frank Luther. *American Journalism: 1690-1960*. New York: The Macmillan Company, 1941. 357.

48 コパーヘッドは1861年7月20日付『ニューヨーク・トリビューン』紙で最初に使われた。南部に共鳴する民主党支持者を静かに近づいて攻撃する蛇に例えた名称である。

49 Mott, 1941, 411-516.

50 Ward & Trent, et al. *The Cambridge History of American Literature.Vol 3*. New York: G.P. Putnam's Sons, 1921, pp. 322-324.

51 Mott, 1941, 412.

52 シンシナティには五つの朝刊新聞があった。その三つが英語の新聞であり、二つがドイツ語の新聞であった。(Kenny, 1875, 69)

53 DeCamp, Graydon. *The Grand Old Lady of Vine Street*. Cincinnati: The Merten Co., 1991, 44-46.

54 Mott, 1941, 434-435.

55 スティーヴンスン（遠田訳）、1984、70。

56 スティーヴンスン(遠田訳)、1984、70。

57 『小泉八雲事典』の「未刊行資料」項目には、シンシナティとニューオーリンズの記者時代にハーンが書き残した記事の数が整理されている。その中で、書誌上『インクワイヤラー』紙におけるハーンの記事としている数は、4人の研究者によって異なる。パーシヴァル・D・パーキンス(Percival D. Perkins, 1897-1963)は、135編、西崎一郎は253編、フロストは249編、ヒューズは248編である。(『小泉八雲事典』、2000、610)これらの記事の目録を合わせると、『インクワイヤラー』紙におけるハーンの記事は約280篇以上となる。

58 フロスト(西村訳)、2003、206。

59 スティーヴンスン(遠田訳)、1984、97。

60 池田美紀子訳「大めがね」『著作集』、1、22。

61 Hearn, Lafcadio. *Period of the Gruesome: Selected Cincinnati Journalism of Lafcadio Hearn*. Ed. Jon Christopher Hughes. Lanham New York London: University Press of America, 1990. 18-19. 原文は以下の通りである。

> At this Bond sobbed as though his heart would break, saying that his last hope in the world was gone.
>
> This bit of information seemed to be the last drop in his cup of misery. For some minutes he cried like a child, when Wilson said:
>
> "Hush your crying; it may not be as bad as reported." Bond then said," I would not have any thing happen to her in this world."
>
> Wilson—"Why, Bond, the people generally think you have a great deal of animosity toward her."
>
> Bond—"No, I never had, and have not now. I would not harm a hair of her head if I had her in my power."

62 PG, 20. 原文は以下の通りである。

> He was about half asleep, and was muttering something indistinctly when the noise of the footsteps caused him to start up.

Throwing off the covers, he raised on his elbows, and looking around with a wild stare cried out, "She's dead—she's dead, and what can I do!" Then, taking his wounded hand from under the cover he snatched at the cut in his throat as if to tear it open. The attendants, however, were too quick and caught it before he was able to do any harm. Then he laid down again, closing his eyes, saying "I'm not dead yet, am I? Who said I was dead?"

[63] Hearn, Lafcadio. *Articles on Literature and Other Writings from The Cincinnati Enquirer 1873*. Ed. Makita Tominaga. Tenri: Tenri Central Library, 1974. 12. 原文は以下の通りである。

Imagine, when you have pictured this, and as you wrap yourself more closely against the keen December blast, that you see an object darker and higher than the ice approaching, and pause to see. It is a skiff, and, striking a pier, sheers half round and then glances into the moonlight below. Good God! Were those human faces, and were they dead ones, or did the three men—you think you counted three, though you had but an instant in which to judge—sleep in the stupor which such bitter cold can bring?

[64] 高橋訳『「怪談」以前』、70。

[65] 高橋訳『「怪談」以前』、70-71。

[66] 泰畯一訳「死の舞踏」『著作集』、2、434。

[67] 泰畯一訳「死の舞踏」『著作集』、2、435。

[68] 泰畯一訳「死の舞踏」『著作集』、2、437。

[69] 泰畯一訳「死の舞踏」『著作集』、2、439。

[70] PG, 25. 原文は以下の通りである。

In that room Hattie had often noticed young women standing in a peculiar attitude. She wondered what it meant. Of course, she had her suspicious, which suspicions were verified. When her ten

weeks were up and her money earned. The Madame took her in that back room, and directed her to place herself in the same position as that in which she had seen the other women. The instruments used by the Madame were a steel rod, with a bulb at one end, and a long, slender syringe filled with liquid.

71 PG, 27-28. 原文は以下の通りである。

The privy at Madam Augestine's house was dragged yesterday, and the filth to the depth of two feet examined. The tools used by the vault-cleaners were pushed about in the search for hard substances and the hook on the end of one of them caught in a cloth parcel. It was carefully lifted out and laid on the ground. On being unrolled it was found that the filth had not yet penetrated to the inside, wherein rested the remains of a miscarriage—the body of a child in the earlier stage of formation. It rested in the middle of putrid mass of bloody matter, foul and clotted.

72 PG, 28. 原文は以下の通りである。

Some of the matter in the privy was taken out and examined. It will be readily understood why no more remains were found in the filth, which would rapidly turn animal matter, unless it were tough and hardened into a mushy substance unrecognizable after a short time. Had the child found in the silk dress been thrown in on top of the other without any covering, it would in all likelihood not have been distinguishable for the rest.

73 PG, 79. 原文は以下の通りである。

She closed all the windows and shutters, drank the contents of two bottles of paregoric which were on the mantel, turned on all the gas, without lighting it—having from appearances previously made an attempt to break the brackets off—and armed herself for

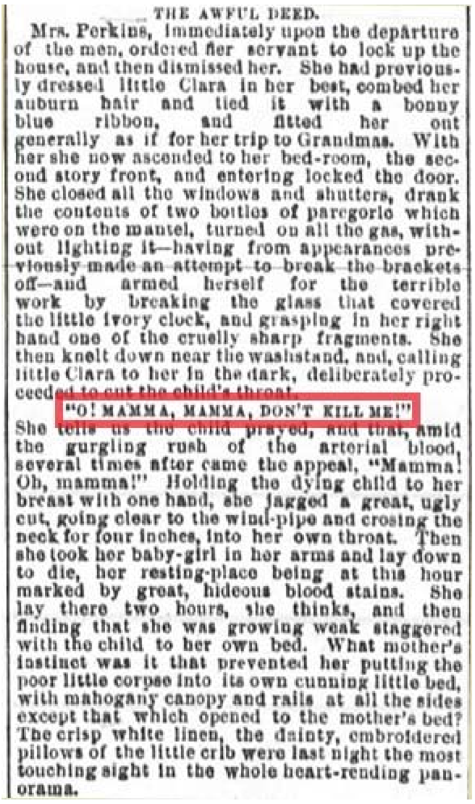
the terrible work by breaking the glass that covered the little ivory clock, and grasping in her right hand one of the cruelly sharp fragments. She then knelt down near the washstand, and, calling little Clara to her in the dark, deliberately proceeded to cut the child's throat.

74 PG, 79. 原文は以下の通りである。

"O! MAMMA, MAMMA, DON'T KILL ME!''

She tells us the child prayed, and that, amid the gurgling rush of the arterial blood, several times after came the appeal, "Mamma! Oh, mamma!" Holding the dying child to her breast with one hand, she jagged a great, ugly cut, going clear to the wind-pipe and crosing the neck for four inches, into her throat.

75 『インクワイヤラー』紙には、以下のように見出しが書かれた。



THE AWFUL DEED.

Mrs. Perkins, immediately upon the departure of the men, ordered her servant to lock up the house, and then dismissed her. She had previously dressed little Clara in her best, combed her auburn hair and tied it with a bonny blue ribbon, and fitted her out generally as if for her trip to Grandmas. With her she now ascended to her bed-room, the second story front, and entering locked the door. She closed all the windows and shutters, drank the contents of two bottles of paregoric which were on the mantel, turned on all the gas, without lighting it—having from appearances previously made an attempt to break the brackets off—and armed herself for the terrible work by breaking the glass that covered the little ivory clock, and grasping in her right hand one of the cruelly sharp fragments. She then knelt down near the washstand, and, calling little Clara to her in the dark, deliberately proceeded to cut the child's throat.

"O! MAMMA, MAMMA, DON'T KILL ME!"

She tells us the child prayed, and that, amid the gurgling rush of the arterial blood, several times after came the appeal, "Mamma! Oh, mamma!" Holding the dying child to her breast with one hand, she jagged a great, ugly cut, going clear to the wind-pipe and crosing the neck for four inches, into her own throat. Then she took her baby-girl in her arms and lay down to die, her resting-place being at this hour marked by great, hideous blood stains. She lay there two hours, she thinks, and then finding that she was growing weak staggered with the child to her own bed. What mother's instinct was it that prevented her putting the poor little corpse into its own cunning little bed, with mahogany canopy and rails at all the sides except that which opened to the mother's bed? The crisp white linen, the dainty, embroidered pillows of the little crib were last night the most touching sight in the whole heart-rending panorama.

[76] この事件は、1874年10月1日付ワシントンの『ナショナル・リパブリカン』*National Republican*の1面、ニューオーリンズの『タイムズ・ピカユーン』*Times Picayune*の8面、1874年10月3日付のシカゴの『デイリー・トリビューン』*Daily Tribune*の7面、等に掲載された。これらの新聞記事は、アメリカの国会図書館の新聞検索を利用した。http://chroniclingamerica.loc.gov/（2013年10月17日）

[77] 19世紀前半の婦人［女児］用の裾飾りのついたゆるく長いパンツ。

[78] PG, 80. 原文は以下の通りである。

> Little Victim was already cold. She was clad in a dress that had been white Marseilles, exquisitely embroidered, and with lace at the hem. But only a small portion of the front of the skirt revealed what color it had been. It was crimson down each sleeve to the very cuff. It was crimson in the dainty waist. The delicate underclothing, the fancifully worked pantalettes, and the neat stockings, the pretty pink garters and close-fitting boots were deeply blood-dyed, as was also, as shown by the Coroner's investigation, the silken under-vest.

[79] PG, 80. 原文は以下の通りである。

> Despite the frightful, gaping wound in the throat, the little body was beautiful. The golden ringlets were deeper tinted here and there than nature made them, but still fell gracefully over the fine brow to the blood-stained ribbon which bound them; the blue eyes were half open, the little lips just parted enough to show pearly teeth, and the tiny hand half folded and whiter than marble because of the exhausted veins. It was at once the most weirdly beautiful and piteous sight that ever met our eyes.

[80] Bisland, *Life and Letters* 1, WL, 13, 45-46.

[81] フロストの『若き日のラフカディオ・ハーン』には、「国じゅうの日刊紙がハーンの記事を引用していた」と記されている。この言及を手掛かりに、『ニューヨーク・タイムズ』を調べた

結果、"Shocking Murder"という記事が掲載されたことがわかった。『ニューヨーク・タイムズ』以外にも、1874年11月9日付ワシントンの『ナショナル・リパブリカン』の1面、ヴァージニア州の『ホイーリング・デイリー・インテリジェンサー』*The Wheeling Daily Intelligencer*の1面、11月12日付ロサンジェルスの『デイリー・ヘラルド』*Los Angeles Daily Hearald*の2面，など全国の新聞において報道された。これらの新聞記事は、アメリカの国会図書館の新聞検索を利用した。

http://chroniclingamerica.loc.gov/（2013年10月17日）

82 ティンカー、E.L./木村勝造訳『ラフカディオ・ハーンのアメリカ時代』、ミネルヴァ書房、2004、13。

83 高橋訳『「怪談」以前』、114。

84 『若き日のラフカディオ・ハーン』によると、皮革製作所殺人事件の後、ハーンの仲間の記者たちは、彼を指すのに「『インクワイヤラー』紙のために『なめし皮工場殺人事件』を書いたハーン」と呼んだ。(フロスト（西村訳）、2003、144)

85 フィンセン/高橋訳「『皮なめし場の殺人事件』の報道」『「怪談」以前』、101。

86 DeCamp, 1991, 32.

87 高橋訳『「怪談」以前』、114。

88 『インクワイヤラー』紙以外の三紙は、シンシナティ州立図書館(The Public Library of Cincinnati and Hamilton County)に依頼し、取り寄せた。

"Hideous Crime." *Cincinnati Commercial* 9 Nov. 1874: 8.

"A Horrible Crime." *Cincinnati Daily Gazette* 9 Nov. 1874: 8.

"Murder Most Foul." *Cincinnati Daily Times* 9 Nov. 1874: 4.

"Violent Cremation." *Cincinnati Enquirer* 9 Nov. 1874: 1.

89 "A Horrible Crime." *Cincinnati Daily Gazette* 9 Nov. 1874: 8. 原文は以下の通りである。

> ...and to his horror drew forth the liver and entrails, as well as part of the charred trunk of the dead man. Another trial brought forth the head, which became detached from the trunk with the brain exuding from the charred skull. Another trial brought out

one of the charred limbs, and subsequent effort regained all that remained that was not reduced to powder.

[90] "Murder Most Foul." *Cincinnati Daily Times* 9 Nov. 1874: 4. 原文は以下の通りである。

There was nothing left but bones, ghastly matter of crisply wasted flesh, and in the broken skull the brains, that had been burned to dryness and would scarce fill the palm of the hands.

[91] 平川祐弘訳「皮革製作所殺人事件」『著作集』、1、40。

[92] "Hideous Crime." *Cincinnati Commercial* 9 Nov. 1874: 8.原文は以下の通りである。

Where the assassins(it is believed there were two) first found Schilling is not known. But it is evident they stabbed him with a dung-fork, and beat him with sticks. That he struggled with them desperately and called loudly for help there is no doubt. He made a fight for his life alone in the dark in the small stable and in the yard. But he probably had only his naked hands to use. His murderers had taken him at a terrible disadvantage. He was young and strong, and life was dear to him. But his fate was sealed, and he was murdered.

[93] "A Horrible Crime." *Cincinnati Daily Gazette* 9 Nov. 1874: 8. 原文は以下の通りである。

The perpetrators of the crime must have been lying in wait in the harness-room adjoining the stable, as Schilling was evidently taken unawares, and killed after a short struggle. That Schilling had retreated behind the horse for protection was evident from the fact that there was the greatest quantity of blood at that point, although abundant evidence of a bloody struggle existed all over the small stable.

[94] "Murder Most Foul." *Cincinnati Daily Times* 9 Nov. 1874: 4.原文は以下の通りである。

> When he entered the stable door he was attacked by some person or persons, who were doubtless lying in, wait for him. A struggle, as the appearance of the ground indicated, ensued which ended in Schilling being overpowered and struck with a manure fork of six prongs, until life was extinct. There was no eye witness to this terrible tragedy, to the victim's desperate fight for life, to his fearful death in the darkest corner of the little stall.

[95] 平川訳「皮革製作所殺人事件」『著作集』、1、47-48。

[96] "A Horrible Crime." *Cincinnati Daily Gazette* 9 Nov. 1874: 8. 原文は以下の通りである。

> Into the flue a small door opens for the purpose of cleaning. A man's body would hardly pass through it; but nevertheless, into this opening the dead man's body was forced down into the flue, and left to roast and be burned up, thus destroying the chief point in evidence—that of the murdered man's body.

[97] "Hideous Crime." *Cincinnati Commercial* 9 Nov. 1874: 8.原文は以下の通りである。

> Having laid Schilling out dead, or insensible and sorely wounded, ...chucked the body into a hole upon a bed of hot ashes under the boiler, and shut the door, leaving their victim inclosed in a hot air chamber, where he would roast as completely as a round of beef in a fully heated bake-oven.

[98] "Murder Most Foul." *Cincinnati Daily Times* 9 Nov. 1874: 4.原文は以下の通りである。

> Here horrors accumulated Saturday night, beginning with the murder, hideous in itself from the manner of attack, the means

used and its desperate accomplishment, and ending with roasting the body, which perhaps when shoved into the gaping mouth of the red hot ash pit had still a faint show of life.

99 平川訳「皮革製作所殺人事件」『著作集』、1、41-42。

第2章

100 以下のような形で書かれた。(Tinker, 1925, 259)ハーンは、ニューオーリンズの町で歌を歌うアマチュア・ミュージシャンに対し、迷惑だと感じたであろう。その心情が皮肉を交えて表現されている。訳は『ラフカディオ・ハーンのアメリカ時代』による。(ティンカー(木村訳)、2004、232)

 TY ITE UNE 26, 1880. THE AMATEUR MUSICIAN. "Every man his own musician!" Let the notes discordant swell; Strain your throat with vocal efforts, Make the cat-gut strings rebel. With shapes angular and horrent, Let your pictured notes arise, As when bombs are madly bursting In their circuit through the skies. Shriek! O, genius undeveloped! Screech and crack, oh trembling strings! Haply she may like the racket— That poor angel without wings:— But, oh do not once imagine, When you make that angel weep, That your dismal noise is music: Others curse you loud and deep;— Curse you as a fiend from torment, Come their tender nerves to shock; Curse you as the evil genius Of the babies in the block.	「アマチュア・ミュージシャン」 誰でもご自分が音楽家なのだ！ 音色をもっと調子外れにするがいい、 喉をひきつらせ声をはりあげ、 楽器の弦を暴れさせろ。 ごつごつと逆立った格好の、 音符の音をぶちあげろ。 爆弾が狂ったように破裂させ 空の軌道をまわらせろ。 悲鳴だ！　おお、天才は花開いていない、 金切り声とがっちゃんこの音、 弦は震えているのだ！ ひょっとして、彼女はこの騒音が好きなのかも— あの哀れな翼のない天使は—。 おお、それでも夢にも思うなよ、 あの天使は泣いているんだ。 お前の出したすごい騒音が、音楽だなどとは。 他人は貴様を大声で深く呪っている—。 拷問で彼らの優しい神経を 驚かせた悪鬼だと呪っている。 ひとまとめのがらくた連中の中の 不吉な天才だと呪っている。

[101] 常松正雄監修/訳「The Daily City Item, 1880―挿絵入り記事に見る19世紀末ニューオーリンズ」『ニューオーリンズとラフカディオ・ハーン』、今井出版、2011、80。里見は、「ラフカディオ・ハーンのシンシナティ・ニューオーリンズ時代」において、ニューオーリンズ時代のハーンを扱っている。しかし、それはハーンの文芸記事を中心としてハーン文学の特質を捉える試みであり、挿絵に関する分析は行われていない。

[102] タナー医師の絶食実験は、ニューヨークにおいて行われ、話題を呼んでいた。タナー医師は、人間が熊のように冬眠できるという仮説を持っており、空気、食事、水がなくても何週間か生き延びることができると主張した。その主張を証明するための実験である。『ニューヨーク・タイムズ』紙は毎日のようにタナー医師の様子を記事で伝えた。ハーンは、挿絵記事の利点を活用し、タナー医師の痩せ細っていく様子を5回にわたって伝えた。

[103] 『アイテム』紙におけるハーンの活動や同紙の経営状態の改善に関しては、『評伝ラフカディオ・ハーン』を参照した。(125-126)

[104] Hutson, Ethel. "Lafcadio Hearn's Cartoons." *Creole Sketches*. By Lafcadio Hearn. 1924. xvii-xxv. Mott, *American Journalism*, 1941, 502.

[105] Labarre, Delia. Introduction. *The New Orleans of Lafcadio Hearn: Illustrated Sketches from the Daily City Item*. By Lafcadio Hearn. Baton Rouge: Louisiana State University Press, 2007. xxxi.

[106] Labarre, 2007, xxxviii.

[107] Labarre, 2007, xxxviii.

[108] この時インタビューした内容は、1874年3月22日付「我々の芸術家たち」"Our Artists"というタイトルで『インクワイヤラー』紙に掲載された。その記事の中に、ハーンとファーニーがお互いに芸術をめざす者同士で、商業的環境に対する同様の悩みを持っていたことなどが書かれている。（Hearn, Lafcadio. *Lafcadio Hearn: Selected Writings 1872-1877*. Ed. WM. S. Johnson. Indianapolis: Woodruff Publications, 1979. 190-195）

[109] 池田訳「大めがね」『著作集』、1、21。

110 『ジー・ギグランプス』をめぐるファーニーとの関係は、ハーンの記事「大めがね」に依拠している。記事「大めがね」は、第1章から第8章までの構成となっている。その構成は次の通りである。第1章「オファニー氏が大衆の教育を提案すること」、第2章「オファニーが、産科医および代父の役をはたすこと」、第3章「インクヮイアラー紙の記者が『大めがね』に地位を得ること」、第4章「大めがねが『もっぱらその真価によって』生きること」、第5章「『大めがね』に大量の血液交換をすること」、第6章「『クラデラダッチ』が死に『大めがね』が人事不省に陥ること」、第7章「グールが放蕩息子の真似をすること、及び、とうもろこしの殻で生きること」、第8章「『ニューヨーク・ヘラルド』が『大めがね』が死んだ理由を聞いて卒中に見舞われること」。

111 池田訳「大めがね」『著作集』、1、24。

112 池田訳「大めがね」『著作集』、1、24。

113 池田訳「大めがね」『著作集』、1、26-27。

114 池田訳「大めがね」『著作集』、1、32。

115 高橋訳『「怪談」以前』、114。

116 第2節において取り上げる挿絵記事は、Hearn, Lafcadio. *The New Orleans of Lafcadio Hearn: Illustrated Sketches from the Daily City Item*. Ed. Delia Labarre. Baton Rouge: Louisiana State University Press, 2007に依拠した。

117 ティンカー(木村訳)、2004、261。

118 Tinker, Edward Larocque. "Lafcadio Hearn, Columnist and Cartoonist." *The New York Times* 13 Apr. 1924. 原文は以下の通りである。

> The police did not know how to deal with this new form of attack, and so it was far more efficacious for reform than long, stodgy editorials.

119 NO, 93-94. 1880年9月25日付。

120 NO, 94. 原文は以下の通りである。

> As we have said before, if a gang of regular hoodlums attack their skulls cracked, we should sustain the police under reasonable circumstances, but when there are three policemen and only one

drunken man, and the former choose to stomp and kick the latter to death, we can not but consider it simply a case of murder.

121 NO, 95. 1880年9月27日付。

122 NO, 95. 原文は以下の通りである。

If it is a case of assault and battery, witnesses seem to rise up from beneath the ground to testify that the policeman's life was in awful jeopardy, that the battered-up man had a knife or a pistol, and that the police showed great forbearance.

We have no doubt a police man could, if he wanted to, find witnesses to swear that they had seen him in seven different parts of the city at the same time.

123 NO, 97. 1880年9月29日付。

124 NO, 97. 原文は以下の通りである。

After a while we may expect to hear witnesses swear that the ground jumped up and hit Bares in the stomach, or that Bares hit himself in his own stomach, or that his own stomach hit Bares, or that a brick fell off of the top of the house and fell on his abdomen while he was standing up, or that Corporal Driscoll was kicked so far away by Bares that he could not find his way back to the scene until the morning of the next day.

125 NO, 99. 1880年10月2日付。

126 NO, 99. 原文は以下の通りである。

We, the intelligent coroner's jury, do find that the deceased did come to his death through peritonitis.

There are not less than nine hundred and ninety-nine different causes which may produce peritonitis.

The deceased might have been kicked in such a manner as to produce peritonitis.

Or he might not.

He might have fallen down the stairs and hurt himself.

Or he might not.

He might have fallen upon his back so as to destroy his stomach,

Or he might not.

He might have kicked himself in his own abdomen by accident.

Some witnesses swear that they saw the deceased killed by the policeman,

Others swear the contrary.

We live in the immediate neighborhood and deem it judicious to give the police man the benefit of the doubt.

We think it might not be healthy to do otherwise.

Therefore we simply find that the deceased died of peritonitis.

And that, according to the testimony of the police, he received falls enough to produce peritonitis.

And if the public are not satisfied with this verdict, they can just hold the inquest over again themselves.

127 NO, 100-101. 1880年10月5日付。

128 NO, 100.

129 NO, 101. 原文は以下の通りである。

We have no doubt there may be some good men on the police; but we have not yet had the inestimable pleasure of becoming acquainted with them.

130 NO, 72-73. 1880年8月31日付。

131 NO, 72. 原文は以下の通りである。

There is the washerwoman who works very cheap; but who never gives you back your own socks or undershirts; and the

exchange is invariably to your disadvantage.

There is the washerwoman who makes it a rule of life to wash off all the buttons of your shirts and pull all the strings off your drawers and never dreams of putting them on again. This washerwoman charges like sixty.

132 NO, 72-73. 原文は以下の通りである。

It is pretty rough to labor hard all the week, working until one is ready to drop down with fatigue; obligated to watch changes of weather; obliged sometimes when a clothes-line breaks to do all the work over again ...

And then to carry the work to those who ordered it,—all nice and clean and pretty,—expecting to receive the just reward of one's labor;—

But, on the contrary, to receive nothing but lying promises and sometimes even hard words;—

And then to go home hungry; and to sit down and cry because there is not a cent in the house!

[...]

No wonder that washerwomen should sometimes feel disgusted with their work, and cease all effort to try and please, and tear off buttons and pull of drawer strings with rage and fury.

It isn't their fault if they are not always angels.

133 NO, 126. 1880年11月29日付。

134 NO, 126.

135 *New Orleans of Lafcadio Hearn*の編者ラバーは、この記事の注釈の中で、ニューオーリンズの排水システムの問題がケイブルなどによりも指摘されている点を取り上げる。排水システムの問題により、台風や長期間の雨の際には、水が町に逆流し、舗装されてない道は、馬車が通れない状況となり、ゴミが散乱することとなる、との指摘である。

(NO, 166)

[136] NO, 127. 1880年12月1日付。

[137] NO, 127. 原文は以下の通りである。

The sun showed his face yesterday; and the people of New Orleans began to think that the world was coming to an end.

But even as they were trying to accustom their eyes to the light, it became dark again, and the floodgates of heaven were reopened.

So that people talked about rain-areas and barometers and colds and rheumatisms even worse than before.

[138] NO, 127. 1880年12月2日付。

[139] NO, 127. 原文は以下の通りである。

The above represents the physiological changes which will probably make themselves manifest in the pedal extremities of our people, if this weather continues. Nature adapts animals to their surroundings. Animals that inhabit swamps are web-footed. Let us prepare ourselves to become web-footed.

[140] NO, 61-62. 1880年8月15日付。

[141] NO, 61-62. 原文は以下の通りである。

It is so shadowy and quiet. Only the stars are looking; the frogs pay no attention to what does not concern them; the sobbing of the wavelets never interrupts a love; and the distant music of the land, the cries of waiters, the clinking of glasses, and the murmurs of the crowd are too far distant to destroy the delightful sensation of being all alone together by the lake shore.

But they talk in whispers nevertheless.

Doubtless there are many lives of which the fate has been decided by these quiet rendezvous by the lake shore.

Doubtless there are many who will remember to their dying

day the story of these evening chats, the whispering of the waves, the chant of frogs and crickets, the winking of the silent stars above, and the distant murmur of the joyous crowd.

142 NO, 112. 1880年10月29日付。

143 NO, 112. 原文は以下の通りである。

When the fire is out, it is pleasant to hear the voices of the firemen singing in the night, as they pass through the deserted streets in solid column.

It is the signal that the danger is over; the welcome news that all is well. "Sleep on, good folks!—pleasant dreams!—we are taking care of the good old city!"

Sometimes perhaps they do not sing. There is only a hurried trampling of feet. Their voices are lowered when they speak. And people feel anxious, and look out of the windows into the darkness. It is all well for the city. The fire is out. But the fire of a young life has gone out with it. Some brave boy has died at his post under the red rain of fire. And the singers can not sing, because their hearts are heavy.

144 NO, 89-90. 1880年9月18日付。

145 ハーン、ラフカディオ/常松正雄訳「ケーキとキャンディ」『ニューオーリンズとラフカディオ・ハーン』、今井出版、2011、102-103。

146 1878年、アメリカの南部を黄熱が襲った。1877年11月にニューオーリンズに着いたハーンも、黄熱の被害者の一人であった。ニューオーリンズにおける黄熱による死亡者は、4,046人であり、その中で白人が3,863人だった。その中でも2,344は16歳以下の子どもであり、特に4歳の男の子の死亡率が高かった。(Ellis, John H. *Yellow Fever & Public Health in the New South*. Lexington: University Press of Kentucky, 1992. 59.)

147 常松、2011、103。

[148] 『ラフカディオ・ハーンのニューオーリンズ』の編者ラバーは、刑務所改革を訴えたハーンの一連の記事により、改革は半分成功した、と解説において語る。最初の挿絵記事「とりつかれる人ととりつくもの」"The Haunted and the Haunters"は、1880年5月22日付の挿絵入り記事である。刑務所に集まる蝙蝠やその糞化石のため、刑務所のみならず周りの一帯が悪臭に満ちている様子が描かれている。この記事を含めた連続の記事により、大陪審が刑務所の環境を調査することが決まり、1881年には刑務所および受容所の委員会が立ち上がった、とラバーは指摘する。(NO, 131)

第3章

[149] Hamilton, Kristie. *America's Sketchbook: the Cultural Life of a Nineteenth-Century Literary Genre*. Ohio: Ohio University Press. 1998. 2.

[150] ハーンは、晩年東京大学において行った講義の中で、スケッチについて次のように述べた。「素描文と私が呼ぶのは、目で見、心で感じられた生活の実景など、散文で書かれた短い考察のことである。〔…〕要するに、素描文は何百何千という多様な形式を取りうるのであり、したがって、あらゆる文学的能力の表現に対して考えうる最大の領域を提供するものである。内省、叙述、感情表現等の最大限の力量を、素描文の中で発揮することができる。」(小沢博訳「散文小品」『著作集』、9、119)

[151] "New Publications." *The New York Times* 14 Oct. 1894.

[152] "Book Review", *Overland Monthly* 7. 41(1896): 578. San Francisco: Overland Monthly Publishing Company.

[153] "Loti and Hearn." *The New York Daily Tribune* 21 Jan. 1906.この記事は、アメリカの国会図書館の新聞検索を利用し、入手した。
http://chroniclingamerica.loc.gov/(2013年10月17日)

[154] ティンカー(木村訳)、2004、296。

[155] "Dolly." *Cincinnati Commercial* 27 Aug. 1876. 「ドリー」は、モーデルにより『アメリカ雑録』(1924)に最初に収録され、後に黒人に関するスケッチの選集『波止場の子供たち』(1957)に再録された。

[156] 平川祐弘著『西洋脱出の夢』、新潮社、1981、177-195。

[157] Roskelly, Hephzibah. "Cultural Translator: Lafcadio Hearn." *Literary New Orleans*. Ed. Richard S. Kennedy. Baton Rouge and London: Louisiana State University Press, 1991, 17.

[158] Kennyの*Illustrated Cincinnati: Pictorial Hand-Book of the Queen City*を参照した。

[159] Kenny, 1875, 43

[160] 1870年の総人口に移民が占める割合は、79,612名であり、黒人は5,900名であった。(Kenny, 1875, 43)

[161] ハーンは「堤防の生活」"Levee Life"の中で次のように述べる。「日雇人足の場合、季節によっても違うが、一時間あたり十五から二十セントが相場である。彼らを雇うのは、しばしば、アイルランド系の請負業者で、彼らは一個いくらで船一隻分の荷揚げを請負うのである。しかし一流の船となると、たいてい請負業者には頼らず、いきなり親分と渡りをつけて、人足たちと契約を結び、その場合時給は二十五セントにはね上がることもある。黒人たちのいう『解放前は』、蒸気船の荷揚げ作業の大部分をこなしていたのは白人だった。しかし今は、徐々にこの仕事は黒人の専売特許になりつつある。ひとえに彼らの有能さのたまものである。」(仙北谷晃一訳「堤防の生活」『著作集』、1、136)

[162] Federal Writers' Project. *Cincinnati: a guide to the queen city and its neighbors*. Cincinnati: The Wiesen-Hart Press, 1943. 196.

[163] Taylor, 2005. 187-188.

[164] ハーンが結婚した女性は、アリシア・フォーリー(Alethea Foley, 1854-1913)、通常マティ(Matty)と呼ばれた混血の女性である。マティとの関係は、3年あまりで破局を迎えた。ハーンがシンシナティからニューオーリンズに移った際、二人の関係も終わった。(『小泉八雲事典』、2000、603)

[165] 日曜版の新聞は、平日とは異なり、軽く扇情的な素材、人々のスキャンダル、奇怪な物語など、多様な素材の読み物を提供するものであった。(Scott, Frank W. "Newspapers Since 1860." *The Cambridge History of American Literature*

Vol.3. Eds. William Peterfield Trent, John Erskine, Stuart P. Sherman and Carl Van Doren, New York: G.P. Putnam's Sons, 1921. 330-331)

166 フロスト(西村訳)、2003、184。

167 フロスト(西村訳)、2003、184。

168 フロスト(西村訳)、2003、184-185。

169 フロスト(西村訳)、2003、187。

170 フロスト(西村訳)、2003、186。

171 千石英世訳「無宿人」『著作集』、4、94-95。

172 千石訳「無宿人」『著作集』、4、97。

173 千石訳「無宿人」『著作集』、4、107-108。

174 南北戦争以前のミンストレル・ショーは、主に白人による公演であった。しかし、終戦後は、黒人が公演に登場するようになった。(Rubin, Rachel and Melnick, Jeffrey. ed. *American popular music: new approaches to the twentieth century.* Amherst: University of Massachusetts Press. 2001. 141-142)

175 Hearn, Lafcadio. "A Child of the Levee." *Children of the Levee*. Ed. O.W. Frost. Lexington, KY: University of Kentucky Press, 1957.

176 Taylor, 2005, 187. 原文は以下の通りである。

> Much of what is known about Cincinnati's black shadow community in the post-Civil War era comes from journalist and ethnographer Lafcadio hearn, who penned colorful depictions of this community in the 1870s.

177 Bronner, Simon J. Introduction. *Lafcadio Hearn's America: Ethnographic Sketches and Editorials*. By Lafcadio Hearn. Kentucky: The University Press of Kentucky, 2002. 2. 原文は以下の通りである。

> In Short, he documented, and artistically sketched, a side of American life that lay hidden in the shadows, even if it appeared flourishing, boisterous, and often disturbing when one bothered to get close. Those cultural scenes, those groups, and those

customs—so much a part of the rising urban American experience in the late nineteenth century—were barely recorded except by the prolific pen of Lafcadio Hearn.

178 千石訳「ロス・クリオロス」『著作集』、4、212-225。

179 ムラートMulatto：白人と黒人の第一代混血児。クォドルーンQuadroon：白人とムラートの混血児。黒人の血を4分の1受けている人。オクトルーンOctoroon：白人とクォドルーンの混血児。黒人の血を8分の1受けている人。

180 Cable, George W. "Who are the Croles?" *The Century* 25. 3(1883): 396. New York: The Century Company.

181 ニューオーリンズにおいて、ハーンが書いたスケッチに登場するクレオールは、必ずしもケイブルの定義による「フランス語を使用する白人貴族」とは限らない。

182 2.1を書くにあたり、以下を参照した。

Campanella, Richard., and Marina Campanella. *New Orleans then and now*. Louisiana: Pelican Publishing Company, 2005(1999).

Eakin, Sue and Culbertson, Manie. *Louisiana: The Land and Its People*. Louisiana: Pelican Publishing Company, 1998(1986).

Hirsch, Arnold R. and Logsdon, Joseph. *Creole New Orleans: Race and Americanization*. Louisiana: Louisiana State University Press, 1992.

183 1803年、アメリカはナポレオン治下のフランスより、ミシシッピ川とロッキー山脈の間の広大な地域(約214万㎢)を1500万ドルで購入した。(Louisiana Purchase)

184 19世紀の初頭には、クレオールとアメリカ人が比較的にはっきり区別された。クレオールは、スペインあるいはフランスの血筋を引き、カトリックを宗教とした。文化的にはラテン系でありニューオーリンズ出身だった。アメリカ人は、北ヨーロッパ、主にアングロサクソンの血筋を引き、プロテスタントを宗教とした。そして北部からニューオーリンズに移住してきた人々であった。クレオールの居住地は、古くから暮らしていた地域、カナル・ストリートの川下である。アメリカ人は、カナル・ストリートの川上の地域に新しく家を建てて生活した。(Campanella, 2005(1999), 14-15)

185 Eakin, 1998(1986), 209.

[186] Hirsch, 1992, 154.

[187] 牧野陽子訳「クレオール方言」『著作集』、1、347。

[188] Hearn, Lafcadio. *Creole Sketches*. Ed. Charles Woodward Hutson. Boston and New York: Houghton Mifflin, 1924.

[189] 小泉八雲著平井呈一訳「クリーオール小品集」『中国怪談集他』、恒文社、1976年、132-133。

[190] 「クリーオール小品集」『中国』、134-136。

[191] WL, 1, 135.

[192] スティーヴンスン（遠田訳）、1984、143。

[193] 1938年に刊行された『ニューオーリンズ都市案内』には、クレオール料理が紹介される。その中で、蟹の茹で方が説明されている。蟹は必ず生きたものを買うべきであり、生きたまま茹でるべきであると記される。(Federal Writers' Project. *New Orleans City Guide*. Houghton Mifflin Company. 1938. 167)

[194] 「クリーオール小品集」『中国』、168。

[195] 「クリーオール小品集」『中国』、168-169。

[196] 「クリーオール小品集」『中国』、169-170。

[197] スティーヴンスン（遠田訳）、1984、141。

[198] スティーヴンスン（遠田訳）、1984、141。

第4章

[199] 地理的に北部から見た呼称で、北部に近いケンタッキー、テネシーなどをShallow Southというのに対し、通例サウス・カロライナ、ジョージア、アラバマ、ミシシッピ、ルイジアナの5州をさす。

[200] ティンカー（木村訳）、2004、23。

[201] この手紙は日付不明だが、『コマーシャル』社の便箋を使ったことから1875年以降に書かれたものと推測できる。（関田かおる編著『知られざるハーン絵入書簡』、雄松堂出版、1991、25）

[202] 関田、1991、26。

[203] エドウィン・ヘンダスンの証言が最初に取り上げられたのは、1906年に刊行された最初の伝記*The Life and Letters of Lafcadio Hearn*(WL, 13, 60)である。しかし、そこでは、ヘンダスンの名前は言及されず、同僚の証言として紹介された。ヘンダスンの名前は、1922年に*Double Dealer*誌に発表された"Lafcadio Hearn in New Orleans"で言及された。同寄稿文では、ハーンがシンシナティからニューオーリンズに来ることになった経緯や、ニューオーリンズにおける活動について書かれている。ハーンのニューオーリンズ行の理由をヘンダスンの証言を用いて説明した。(Kendall, John S. "Lafcadio Hearn in New Orleans, I, On the *Item*." *Double Dealer* 3. 17(1922): 236. New Orleans: Double Dealer Publishing)

[204] スティーヴンスン（遠田訳）、1984、110。

[205] スティーヴンスン（遠田訳）、1984、121。

[206] Bisland, *Life and Letters* 1, WL, 13, 170.

[207] フロスト（西村訳）、2003、206。

[208] オコーナーは、ワシントンに暮らす文学愛好家であった。ニューオーリンズ時代、ハーンが書いたドレ論を読み、文通を求めてきた。（「書簡の宛先人一覧」『著作集』、15、771）

[209] スティーヴンスン（遠田訳）、1984、178。

[210] Ewell, 2002, xxxviii.

[211] Ewell, 2002, xl.

[212] Brodhead, Richard H. "The American Literary Field, 1860-1890." *The Cambridge History of American Literature*. Ed. Sacavan Bercovitch. New York: Cambridge University Press, 2005. 47.

[213] Ewell, 2002, xxxvi.

[214] Ewell, 2002, xxxvi.

[215] 「南部文学」という概念がどこから由来したのかは、『南部文学の必携』の中に説明される。この概念が登場し始めたのは、1830年代のことであった。当時オリジナルな国民文学を生み出そうという気運が高まった際、国民文学を各地域の特徴ある文学の映

し出しとみなす地域主義が表れたのである。「南部文学」という概念は、その地域主義を受け入れた南部の知識人達が、南部の伝統や実態を充実に反映し、国民文学に貢献するものとして取り入れたとされる。(Irons, Susan H. "Southern Literature, Idea of" *The Companion to Southern Literature*. Eds. Flora, Joseph M. and Lucinda H. MacKethan. Baton Rouge: Lousiana State University Press, 2002. 828-829)

216 Ewell, 2002, xxxvii.

217 "Topics of the Time." *Scribner's Monthly* 22. 5(1881): 785-786. New York: The Century Company.

218 Frisby, James R., Jr. *New Orleans Writers and the Negro: George Washington Cable, Grace King, Ruth McEnery Stuart, Kate Chopin, and Lafcadio Hearn, 1870-1900*. UMI Dissertation Information Service, 1990(1972). 16.

219 "Topics of the Time", 1881, 786.

220 Waring, George E., Jr. "George W. Cable." *The Century* 23. 4 (1882): 602. New York: The Century Company.

221 河島弘美訳「ケーブルの物語の舞台」『著作集』、1、372。

222 スティーヴンスン（遠田訳）、1984、134。

223 Bisland, *Life and Letters* 1, WL, 13, 164. 原文は以下の通りである。

> George Cable, a charming writer, some of whose dainty New Orleans stories you may have read in "Scribner's Monthly," is writing a work containing a study of Creole music, in which the songs are given, with the musical text in footnotes. I have helped Cable a little in collecting the songs; but he has the advantage of me in being able to write music by ear.

224 スティーヴンスン（遠田訳）、1984、135。

225 Bisland, *Life and Letters* 1, WL, 13, 220. 原文は以下の通りである。

> I was a little disappointed, although I was also much delighted, with parts of Cable's "Grandissimes." He did not follow out his

first plan—as he told me he was going to do—viz., to scatter about fifty Creole songs through the work, with the music in the shape of notes at the end. There are only a few ditties published; and as the Creole music deals in fractions of tones, Mr. Cable failed to write it properly. He is not enough of a musician, I fancy, for that.

226 「彼〔ケイブル〕は、最初の二作〔『古きクレオール時代』、『グランディシム一族』〕の中に一部の歌を挿入したいと思った。しかし、編集長らの反対により、わずかの抜粋を除いて、すべて省略した。」(Turner, Arlin. *George Washington Cable*. Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1966. 227)

227 ティンカー(木村訳)、2004、163-164。

228 Turner, 1966, 227.

229 Bisland, *Life and Letters* 1, WL, 13, 331.

230 Bisland, *Life and Letters* 1, WL, 13, 332.

231 Bisland, *Life and Letters* 1, WL, 13, 355.

232 『古きクレオール物語』*Old Creole Days*は、1879年最初に出版された時は七つの短編で構成されていた。1883年の「マダム・デルフィン」"Madame Delphine"が追加され、再出版された。そのタイトルは以下のとおりである。

Title	『スクリブナーズ・マンスリー』に掲載された日付
Madame Delphine	1880年5月
Café des Exilé	1876年3月
Belles Demoiselles Plantation	1874年4月
"Posson Jone'"	1879年発表。同誌に掲載されない。
Jean-ah Poquelin	1875年5月
'Tite Poulette	1874年10月
'Sieur George	1873年9月
Madame Délicieuse	1875年8月

[233] Turner, 1966, 85.

[234] 個人としては、William Dean Howells, Oliver Wendell Holmesなどがケイブルの*Grandissimes*を賞讃した。雑誌としては、*The Nation, Appleton's Journal, Atlantic Monthly*などが、好評を掲載した。(Turner, 1966, 100)

[235] Turner, 1966, 101.

[236] Bronner, 1998, 104.

[237] クレオールが抱いていた不満を少し詳しく説明しよう。彼らを最も怒らせたのは、血統に関する問題であった。『グランディシム一族』の前半の第4章には、かつてニューオーリンズの支配階級だったクレオール名門家の先祖の話が紹介される。その中で、植民地建設時に功績を残した名門家の先祖はアメリカの原住民の女性と結婚し、別の名門家の先祖は本国から送られてきた女囚人と結婚したとする。貴族の末裔であると主張してきたクレオールは、とんでもない屈辱と感じた。さらに、純粋な血統を保持していた小説の主人公オノレ・グランディシムにさえも、混血の兄が登場し、彼は家族の一人として認められる。自由黒人であるとしても、もともと奴隷階級に属する混血の人が家族として認められる場面は、クレオールにとっては耐えられないものであった。さらに、主人公オノレ・グランディシムは、最も美しく、上品で、非の打ちどころのないクレオール貴族として描かれるが、ケイブルは、まさに彼の口を通して、同胞のクレオールを批判させ、黒人人権の擁護といった北部寄りの思想を語らせる。このような側面により、クレオールの人々は、ケイブルを憎むようになったのである。

[238] Turner, 1966, 101-102.

[239] Turner, 1966, 102.

[240] Turner, 1966, 102.

[241] Bisland, *Life and Letters* 1, WL, 13, 223-224. 原文は以下の通りである。

> Nearly all the Creoles here—white—know English, French, and Spanish, more or less well, in addition to the patois employed only in speaking to children or servants. When a child becomes about ten years old, it is usually forbidden to speak Creole under any other circumstances.

[242] Turner, 1966, 129.

[243] 関田、1991、38。

[244] 関田、1991、41。

[245] マレイ、ポール/村井文夫訳『ファンタスティック・ジャーニー』、恒文社、2002、155。

[246] Turner, 1966, 200.

[247] ティンカー（木村訳）、2004、163。

[248] Turner, 1966, 235.

[249] ティンカー（木村訳）、2004、163。

[250] ティンカー（木村訳）、2004、163。

[251] Coleman, Charles W., Jr. "The Recent Movement in Southern Literature." *Harper's New Monthly Magazine* 74. 444 (1887): 839-840, 855. New York: Harper and Bros.

[252] McCormick, W.B. "Fifty Years of American Literature." *Catholic World* 63. 377 (1896): 622-623. New York: The Office of the Catholic World.

[253] スティーヴンスン（遠田訳）、1984、134。

[254] WL, 13, 81.

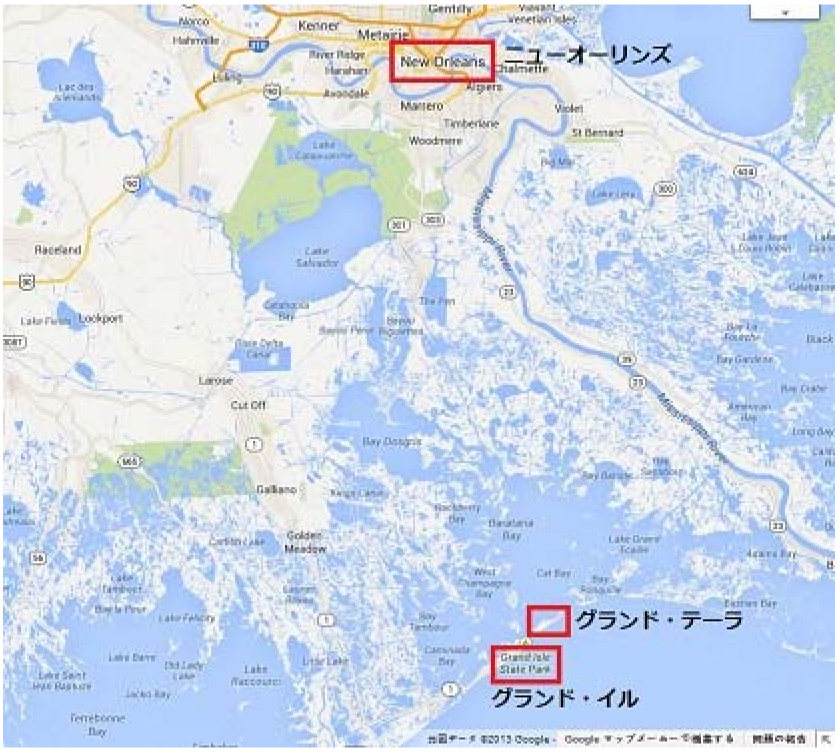
[255] 1888年8月、知人であるジョージ・M・グールドに宛てた手紙には、『チータ』を仕上げるまで10ヶ月を要したこと、500ドルで原稿が売られたことが述べられている。(Bisland, *Life and Letters* 2, WL, 14, 55)

[256] "Talk about New Books." *Catholic World* 51.301(1890): 127. New York: The Office of the Catholic World. 1890.

[257] Hutton, Laurence. "Literary Notes." *Harper's New Monthly Magazine* 79. 474 (1889): E003. New York: Harper & Brothers, Publishers.

[258] マレイ（村井訳）、2002、172。

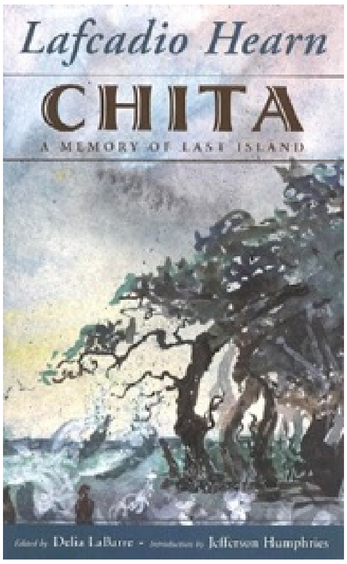
[259] 第1部では、ルイジアナ州のグランド・イル島とグランド・テーラ島の描写が出る。その位置は次の地図に示した。



260 マレイ（村井訳）、2002、175。

261 ハーン、ラフカディオ/平川祐弘訳「チータ」『カリブの女』、河出書房新社、1999、12-13。

262 2003年、ミシシッピ大学出版社が刊行した『チータ』を見ると、カバーがこの樫の樹の絵になっている。（左絵）グランド・イルを紹介するhttp://www.grandisle.usには、風によって曲がってしまった樫の樹の写真が紹介されている。（右絵）



263 「チータ」『カリブ』、15。

264 『聖書』(新共同訳)ヨハネの黙示録15章2節「わたしはまた、火(ひ)が混(ま)じったガラスの海(うみ)のようなものを見た。」

265 ティンカーは、"Cable and the Creole"という論文の中で、『グランディシム一族』をめぐって、クレオール社会がケイブルを批判する理由について述べる。その理由は、作品の中で白人クレオールが支離滅裂な英語を使用したこと、そして、混血の兄弟をクレオールの家族として認めたことである。(Tinker, Edward Larocque. "Cable and the Creoles." *American Literature* 5. 4 (1934): 320. Duke University Press)

266 Cable, George W. *The Grandissimes*. New York: Charles Scribner's Sons, 1880, 83. 訳は以下の通りである。ケイブル、ジョージ・ワシントン/杉山直人訳『グランディシム一族』、彩流社、1999、75。

娘は苦悩の眼差しを返した。
「いいえ、でもあの人は立派な借家を何軒か持ってて家賃なんかいらないんじゃない?」
「それが要るのよ。ああ、家賃を手に入れるためにはできることはしないといけないわけね。おお確かにそう。あの人は金持ち、だけど少しでもお金が要る、たいそう要るの。何のためにかって?」突然の霊感を受けて話し手は興奮して立ち上がった。「ほら、マドモワゼル」彼女はおおげさにドレスをゆるめる仕草をした

267 Tinker, 1934, 320.

268 フロスト(西村訳)、2003、259-260。

269 「チータ」『カリブ』、70。

270 WL, 4, 200-201. 訳は以下の通りである。

「ズズンヌ?ズズンヌ何ていうの?」
「ズズンヌがわたしよ、リリー」
「リリー、それが全部じゃないよ。ほかの名前はなんていうの?」
「ほかの名前は知らない」

「ママンはなんていうの？」

「ママンは、ママンはデール」

「それじゃパパはなんていうの？」

「パパはズリアン」

「そうか。じゃママンはパパを何て呼ぶの？教えておくれ」

子供は下を見て、指を口に当てて、ちょっと考えてから答えた、

「パパを『シェリー』とか『パプート』と呼んだ」

「ああ、そうか、そうか。ママンはおまえをほかの呼び方しなかった？」

「知らない、わたしは知らない」(「チータ」『カリブ』、67-68)

271 「チータ」『カリブ』、24。

272 「チータ」『カリブ』、30。

273 「チータ」『カリブ』、31。

274 「チータ」『カリブ』、36。

275 WL, 4, 176.

276 「チータ」『カリブ』、41。

第5章

277 平川、1981、113-155。

278 ベンチョン・ユーは、『神々の猿』(恒文社、1992年)の中で『飛花落葉集』がハーンの再話文学の始まりであると述べており(99)、森亮は『小泉八雲の文学』(恒文社、1990年)の中で同書がハーンの再話の出発点であると記している(103)。

279 「熱帯の入口にて」"At the Gate of the Tropics"は、1877年11月19日から20日にわたって書かれた。『コマーシャル』紙に掲載されたのは、11月26日付第2面である。この記事は、モーデルによって『西洋落穂集』*Occidental Gleaning*(1925)第1巻に収録された。本章では、オールドリッチの作品がどのように紹介されたのかを確認するため、『コマーシャル』紙の原文も取り寄せ、参照した。

280 アントワーヌ神父以外にも、ナツメヤシを植えた伝えられた人々は、トルコ人やアルジェリアあるいはチュニスからのムーア人やスルタン、およびフロリダ州から来たインディアン

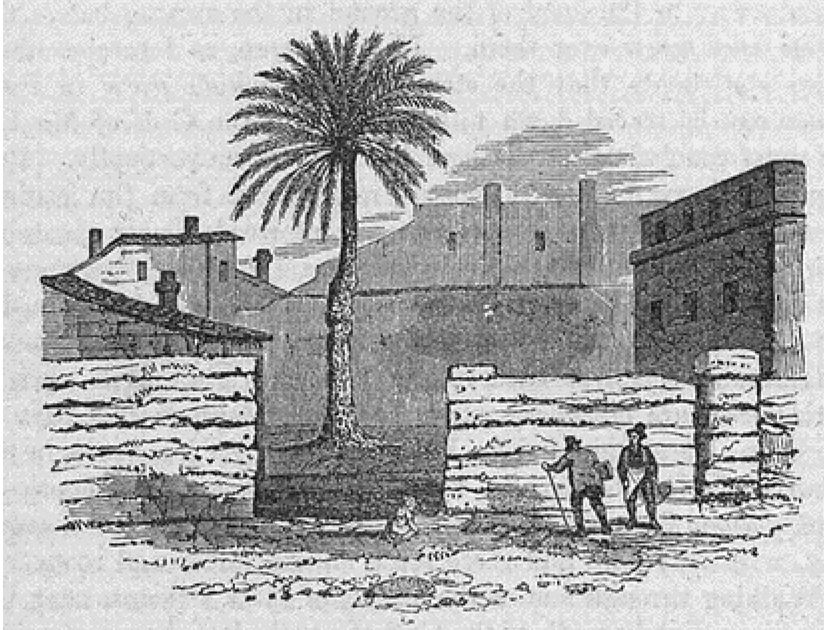
などである。

281 千石訳「熱帯の入口にて」『著作集』、4、195。

282 『西洋人名辞典』（岩波書房、1981年）によると、スコットランド生まれのチャールズ・ライエルは、オックスフォード大学で地質学を学び、ロンドン大学の教授となる。地質学の近代的体系を確立し、ダーウィンの進化論に影響を与えたと言われる。英国地質学会の会長を二期務めた。

283 ライエルの『第二回北米合衆国訪問記』は、2巻本からなり、ニューオーリンズのナツメヤシに関しては、第2巻に記されている。同書にはナツメヤシの挿絵が収録された。（Lyell, Sir Charles. *A Second Visit to the United States of North America Vol.II*. London: John Murray, Albemarle Street, 1849. 109-110）

Fig. 8.



Père Antoine's Date-palm (Phœnix dactylifera).

284 Johnson, Allen, ed. *Dictionary of American Biography Vol. I.* New York: Charles Scribner's Sons, 1928-1958. 321-322によると、アントワーヌ神父は当時ルイジアナ州で非常に有名な司祭であり、貧民救済などニューオーリンズの市民のために一生を尽くした。彼の葬儀には、州議会を一日休会にして参列した州議員達をはじめとして、多くの人々が弔問に訪れた。彼が死ぬまで暮らした小屋の隣にあるナツメヤ

シは、彼の死後ニューオーリンズの名所となった。尚、アントワーヌ神父が司祭を務めたセイント・ルイス・大聖堂に関しては、URL: http://stlouiscathedral.org/によった。（2013年9月28日）アントワーヌ神父の名は今日にまで知られており、ニューオーリンズにはPère Antoineの名を冠した通りやレストランもあるという。

285 千石訳「熱帯の入口にて」『著作集』、4、192。

286 Aldrich, Thomas Bailey. *Marjorie Daw and Other People*. Boston: James R. Osgood and Company, 1873. 267.

287 千石訳「熱帯の入口にて」『著作集』、4、192。

288 たとえば、平川祐弘は「ギリシア人の母は日本研究者ハーンにとって何を意味したか」（『国文学　解釈と教材の研究』、第43巻第8号、学燈社、1998年7月）の中で、「母親のイメージはハーンにとって失われた幸福のシンボル」（8）であったと解釈し、ジョージ・ヒューズは「ハーンの作品に見る女性像」（『ハーンの轍の中で』、研究社、2002年）において、ハーンにとって母親に関する記憶がかすかであったため、実際の母親を描くより、理想的な母親の姿を作品において描いた（175-178）と指摘する。

289 弟宛ての手紙は以下の著作から引用した。(Bisland, *Life and Letters* 1, WL, 13, 9-10)手紙の日付は不明だが、ハーンが弟から最初に連絡を受けたのが1889年の秋だった。（遠田勝「『ジェイムズ・D・ハーン宛書簡集』解説」『著作集』、15、429）来日以前の書簡だったことから、1889年から1890年の間に書かれたと推測できる。

290 Aldrich, 1873, 271-272. 原文は以下の通りである。

> Speculators piled gold on his doorsteps, and he laughed at them. Sometimes he was hungry, and cold, and thinly clad; but he laughed none the less.
>
> "Get thee behind me, Satan!" said the old priest's smile.

291 千石訳「熱帯の入口にて」『著作集』、4、192。

292 ニューオーリンズがフランス領からアメリカ領になったのは1803年のことであった。（Louisiana Purchase）それ以来、北部から来た人々は、同地を都市化しようと、町の整備に着手した。当時、アントワーヌ神父のように自分の敷地を守ろうとして開発業者と戦ったが、結局失敗した物語が作家ジョージ・W・ケイブルの作品「ジャナ・ポクラ

ン」"Jean-ah Poquelin"の中で語られる。(Cable, George W. *Old Creole Days*. Charles Scribner's Sons, 1879, 1881, 1883; rpt. Pelican Publishing Company, Inc. 2001, 179-212)

293 Bisland, *Life and Letters* 1, WL, 13, p.62.

294 小泉八雲/平川祐弘編『怪談・奇談』、講談社、1990、167。

295 小泉節子「思い出の記」『思い出の記/父「八雲」を憶う』、恒文社、1976、17。

296 小泉八雲/平井呈一訳『飛花落葉集他』、恒文社、1976、6。

297 『飛花』、6。

298 現在クック諸島と知られている諸島の一部の島が最初に歴史に名を刻まれたのは1595年、スペインの探検家であるアルバロ・ド・メンダーニャ(Alvaro de Mendana, 1541-1595)の文書による。彼は西欧人として最初にプカプカ(Pukapuka)島を「発見」し、航海日記に残した。その後、約300年間、クック諸島は西欧人に接されなかったが、1773年と1777年に、ジェームズ・クック(James Cook, 1728-1779)の第二次と第三次探検航海の途中で南の群島が発見された。クックは発見した島にイギリスの海軍の将軍の名前を付けて、ハーヴィ群島と呼んだ。しかし、クックの発見から50年後、ロシアの地図作成者がクックを偲んでクック諸島と呼び始め、現在に至る。ギル自身は序言でハーヴィ群島という地名を使用しているが、ここではクック諸島という呼称で統一する。

299 Müller, Friedrich Max. Preface. *Myths and Songs from the South Pacific.* By William Wyatt Gill. London: Henry S. King & Co., 1876. xii-xiii.

300 「泉の乙女」のテキストは、*Writings of Lafcadio Hearn in Sixteen Volume*の第2巻*Stray Leaves from Strange Literature*に収録されたものを使用した。日本語訳は、平井呈一訳『飛花落葉集』(恒文社、1976)である。

301 Gill, Rev. William Wyatt. *Myths and Songs from the South Pacific*. London: Henry S. King & Co., 1876. 265-267. 原文は以下の通りである。

> In Rarotonga, at the pretty village of Aorrangi, is the small fountain of Vaitipi. On the night after full moon, a woman and a man of dazzling white complexion rose up out of the crystal water. When the inhabitants of this world were supposed to be asleep,

they came up from the shades to steal taro, plantains, bananas, and cocoa-nuts. All these good things they took back to netherworld to devour raw.

Little did the fairies think that they had been seen by mortals, and that a plan was being devised to catch them. A large scoop net of strong cinet was made for this purpose, and constant watch set at the fountain by night. On the first appearance of the new moon they again came up, and, as usual, went off to pillage the plantations. The great net was now carefully outspread at the bottom of the fountain, and then they gave chase to the fair beings from spirit-world. The fairy girl was the first to reach the fountain, and dived down. She was at once caught in the net, and carried off in triumph. But in replacing the net after the struggle, a small space remained uncovered; through this tiny aperture the male fairy contrived to escape.

The lovely captive became the cherished wife of the chief Ati, who now carefully filled up the fountain with great stones, lest his fairy spouse should return to nether-world.

They lived very happily together. She was known all over Rarotonga as the "peerless one (Tapairu) of Ati." She got reconciled to the ways of mortals, and grew content with her novel position. In the course of time she became pregnant, and when the period for her delivery had come, she said to her husband, "Perform on me the Caesarean operation, and then bury my dead body. But cherish tenderly our child." Ati refused to accede to this proposition, but allowed Nature to take her course, so that the fairy became the living mother of a fair boy.

When at length the child had become strong, the mother one

day wept bitterly in the presence of her husband. She told him that it was grief at the destruction of all mothers in the shades upon the birth of the first-born. Would he consent to her return thither in order that so cruel a custom should be put an end to? Ati should accompany her. This was agreed upon, and accordingly the great stones were dragged up from the bottom of the fountain. All kinds of vegetable gums were now collected, and the fairy carefully besmeared the entire person of Ati, so as to facilitate his descent to the lower world.

Holding firmly the hand of her human husband, the fairy dived to the bottom of the fountain, and nearly reached the entrance to the invisible world. But Ati was so dreadfully exhausted, that out of pity for him she returned. Five times was this process repeated—in vain! The fair one from spirit-land wept because her husband was not permitted to accompany her; for only the spirits of the dead and immortals can enter.

Sorrowfully embracing each other, the "peerless one" said, "I alone will go to spirit-world to teach what I have learnt from you." At this she again dived down into the clear waters, and was never again seen on earth. Ati went sorrowfully back to his old habitation; and thenceforth their boy was called "Ati-ve'e" =Ati-the-forsaken, in memory of his lost fairy mother. He was surpassingly fair, like his mother from spirit-land; but strangely enough, his descendants are dark, like ordinary mortals.

It is to this lovely fairy woman the old song of the Ati clan alludes:—

Kua ve'eia te pou enua, She has descended again to spirit-world!

Ka paa 'i te rau atua o Ati e i Vaitipi e! Men praised the divine being first seen by Ati at the fountain.

Akana tu a kino te inangaro! But his heart is now filled with grief.

Hence the origin of the common name "Tapairu"=peerless one, in memory of their fairy ancestress.

302 次が14章のタイトルである。1. Myths of Creation. 2. Deified Men. 3. Astronomical Myths. 4. The Exploits of Maui. 5. Tree Myths. 6. Ina, the Fairy Voyager. 7. Miscellaneous Myths. 8. Hades; or, the Doctrine of Spirit-World. 9. Veêtini; or, the Immortality of the Soul. 10. Adventures in Spirit-World. 11. Fairy Men and Women. 12. Death-Talks and Dirges. 13. Human Sacrifices. 14. The Seasons, Phases of the Moon, etc., etc.

303 平川祐弘著『小泉八雲：西洋脱出の夢』、新潮社、1981、126。

304 Gill, 1876, 150-151. 原文は以下の通りである。

Here is our sure helper.
Arise on our behalf:
Stand at the door of this house,
O thou divine Omataianuku!
O thou divine Outuutu-the-Tall,
And Avaava-the-Tall!

We are on a thieving expedition—
Be close to our left side to give aid.
Let all be wrapped in sleep.
Be as a lofty cocoa-nut tree to support us.
O house, thou art doomed by our god!
Cause all things to sleep.

Let profound sleep overspread this dwelling.
Owner of the house, sleep on!
Threshold of this house, sleep on!
Ye tiny insects inhabiting this house, sleep on!
Ye beetles inhabiting this house, sleep on!
Ye earwigs inhabiting this house, sleep on!
Ye ants inhabiting this house, sleep on!
Dry grass spread over the house, sleep on!
Thou central post of the house, sleep on!
Thou ridge-pole of the house, sleep on!
Ye main rafters of the house, sleep on!
Ye cross beams of the house, sleep on!
Ye little rafters of the house, sleep on!
Ye minor posts of the house, sleep on!
Thou covering of the ridge-pole, sleep on!
Ye reed-sides of the house, sleep on!
Thatch of the house, sleep on!

The first of its inmates unluckily awaking
Put soundly to sleep again.
If the divinity so please, man's spirit must yield.
O Rongo, grant thou complete success!

This prayer was uttered as near as possible to the dwelling to be robbed. The users of it were famous for their success.

305 タパイルに関するギルの説明は以下の通りである。ラロトンガの地下には冥界(Nether-World、あるいはAvaikiとも呼ぶ)が存在し、そこには奇形で醜い死の女神ミル(Miru)が人間の魂を大きいかまどに入れて料理しながら住んでいる。ミルにはタウテ

ィティ(Tautiti)という一人の息子とタパイル(Tapairu)という四人の娘がいる。月夜に行われる踊りには息子の名前タウティティが付けられている。タパイルは兄のタウティティに敬意を表して、踊りが行われる月夜には地上に姿を現し、金星が昇るとアヴァイキ(Avaiki)に帰る。(Gill, 1876, 256)

306 平川、1981、130。

307 Gill, 1876, 265.

308 平川、1981、127。

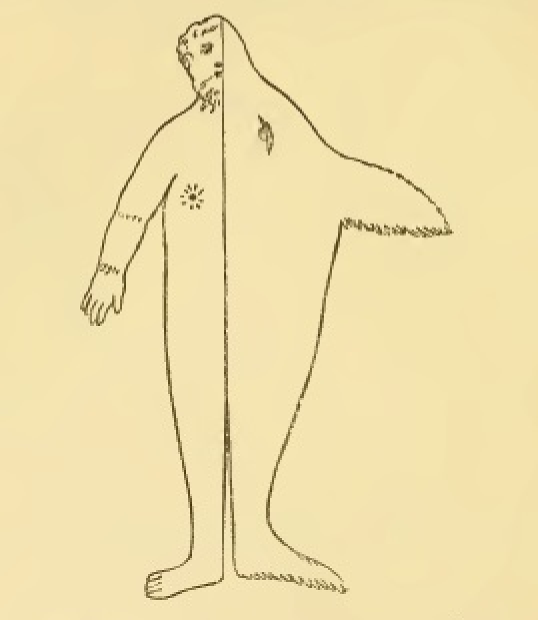
309 平川、1981、128。

310 平川、1981、128。

311 平川、1981、128。

312 平川、1981、130。

313 『南太平洋の神話と歌謡』の第1章は「創造神話－全ての始まり」であり、世界の始まり(Gill, 1876, 1-3)が語られている。最初の人間はヴァテア(Vatea)という名前で体の左側が魚で右側が人間である。(Gill, 1876, 3-5)



IMAGINARY REPRESENTATION OF VĀTEA.

314 人魚伝説に関しては、ヴィック・ド・ドンデ著富樫瓔子訳『人魚伝説』(創元社、1993年)を参照した。

315 ヴィック、1993、89。

316 月と女性に関してはフリース、アト・ド/山下主一郎他訳『イメージ・シンボル事典』(大修館書店、1984年)の「月」の項目を参照した(436-438)。

317 ハーンが持っていたギリシア神話の知識に関して、平川祐弘の「ギリシア人の母は日本研究者ハーンにとって何を意味したか」には、ハーンが少年時代にチャールズ・キングズリーの『ギリシア神話英雄物語』を愛読したと述べられている(9)。また、「熱帯の入口にて」の次に12月10日付けで『コマーシャル』紙に掲載された「南部」*The City of the South*(『著作集』、4、196-211)をみると、彼が古代のギリシアに深く興味を持っていたことがわかる。

318 ミルチャ、エリアーデ著久米博訳『豊饒と再生』、せりか書房、1974、7。

319 平川、1981、128。

320 『南太平洋の神話と歌謡』には、第8章「ハデス、あるいは霊の世界の教理」にアヴァイキや死神ミルに関する詳しい説明がなされている。第11章「妖精の男性と女性」には「タパイル;或は妖精の女性と男性」*Tapairu; or, fairy women and men*が最初に掲載され、タパイルがミルの娘であることやミルがアヴァイキで人間の魂を集め、大きいかまどで料理を作っていることなどが詳しく説明されている。

321 平川、1981、128。

322 平川、1981、129。

323 Gill, 1876, 266. 原文は以下の通りである。

> ..."Perform on me the Caesarean operation, and then bury my dead body. But cherish tenderly our child." Ati refused to accede to this proposition, but allowed Nature to take her course, so that the fairy became the living mother of a fair boy.
>
> When at length the child had become strong, the mother one day wept bitterly in the presence of her husband. She told him that it was grief at the destruction of all mothers in the shades upon the birth of the first-born.

324 Hartland, Edwin Sidney. *The Science of Fairy Tales.* London: W. Scott, 1891. 319-320.

[325] Gill, 1876, 266. 原文は以下の通りである。

> ...and thenceforth their boy was called "Ati-ve'e"= *Ati-the-forsaken*, in memory of his lost fairy mother. *He* was surpassingly fair, like his mother from spirit-land; but strangely enough, his descendants are dark, like ordinary mortals.

[326] 平川、1981、130。

第6章

[327] 杉山、1994、147-160。

[328] モリソン、サムエル/西川正身翻訳監修『アメリカの歴史』、集英社、1997(1965)、36。

[329] モリソン、1997(1965)、53-54。

[330] 1877年にアメリカの大統領選挙があった。共和党政権は、様々な腐敗が明るみに出たため、新たに政権を取ることは厳しいと思われていた。開票の結果、南部の3州とオレゴン州の開票に疑わしいところがあることが分かった。もし、民主党が4州の票を失うと、民衆党候補の選挙人数が184人減り、逆に共和党が4州を全部奪うと、185人となって、一票上回ることになる状況だった。連邦議会は、選挙委員会を設置し、調査団を南部の3州に派遣した。ここで民衆党と共和党の間に取引があったと思われている。すなわち、民主党が共和党候補の当選を認める。その代わり、共和党は南部から駐屯部隊を撤退させ、解放黒人に公民権を保証した憲法修正第15条の不履行を黙認することだった。1877年3月、選挙委員会は、4州の民主党得票を無効にすると発表し、共和党候補の当選を宣言した。連邦政府は、南部の駐屯部隊を撤退させ、憲法修正第15条を実施させるために事実上なんの熱意も示さなかった。（モリソン、1997(1965)、80）

[331] A South Carolinian. "The Political Condition of South Carolina." *The Atlantic Monthly* 39. 232 (1877): 178. Boston: Atlantic Monthly Co.

[332] A South Carolinian, 1877, 179.

[333] Phillips, V. Faye. "Charles Etienne Arthur Gayarré." *KnowLA Encyclopedia*

of Louisiana. Ed. David Johnson. Louisiana Endowment for the Humanities, 22 Dec.2010. Web. 14 Sep. 2013.
<http://www.knowla.org/entry.php?rec=744>

334 Hearn, Lafcadio. *Barbarous Barbers and Other Stories*. Ed. Ichiro Nishizaki. The Hokuseido Press, 1939. 122. 原文は以下の通りである。

> It has been proven by history and experience that the negro can not exist in the center of white civilization, excepting in a subordinate condition;—he is helplessly and hopelessly dependent; he is timid and childish and feeble-minded. Left to himself he struggles weakly for a while, and soon dies of want and disease.

335 BB, 123. 原文は以下の通りである。

> "They are nearly all dead; they could not care for themselves. Sometimes l tried to help them. I sent them physicians when they were ill, and supplied them with food and clothing at times when I could afford it. But it was no use. The negro must be fed and cared for constantly. He dies if left to care for himself."

336 仙北訳「堤防の生活」『著作集』、1、136-137。

337 『シンシナティ・インクワイヤラー』に掲載された1875年2月21日付の記事「ピケット親父」"Ole Man Pickett"がそれだ。シンシナティにおいて黒人のための食堂付きダンスホールを運営するヘンリー・ピケットに関するものだった。ピケットは、元奴隷であり、紆余曲折の末、自分が稼いだお金で自由を買い取った人物である。ハーンは、シンシナティの黒人社会の名物として彼を紹介した。（中田賢次訳「ピケット親父」『著作集』、2、176-181）

338 公式に奴隷制を廃止した憲法修正条項。

339 モリソン、1997(1965)、26-27。

340 Sutherland, Jonathan D. *African Americans at War: An Encyclopedia*. Santa Barbara. California: ABC-CLIO, Inc., 2004. 194-96.

[341] George, Henry. *Progress and Poverty*. New York: Robert Schalkenbach Foundation. 2006(1879). 195. 原文は以下の通りである。

> And now that slavery has been abolished, the planters find they have sustained no loss. Ownership of the land—on which the freed slaves must live—gives them almost as much control of labor as before. Yet they are relieved of some very expensive responsibilities.

[342] モリソン、1997(1965)、17。

[343] 岩原康夫訳「アメリカにおける人種問題」『著作集』、5、427-430。

[344] BB, 125-126. 原文は以下の通りである。

> As for the black man, he must disappear with the years. Dependent like the ivy, he needs some strong, oak-like friend to cling to. His support has been cut from him, and his life must wither in its prostrate helplessness. Will he leave no trace of his past in the fields made fertile by his mighty labors, no memory of his presence in this fair land he made rich in vain? Ah, yes!—the echo of the sweetly melancholy Songs of Slavery,—these weird and beautiful melodies born in the hearts of the poor, childlike people to whom freedom was destruction.

[345] 牧野訳「西インド諸島」『著作集』、1、433-434。

[346] 牧野訳「西インド諸島」『著作集』、1、434。

[347] "Editor's Study." *Harper's New Monthly Magazine* 81. 484(1890): 642. New York: Harper & Brothers, Publishers.

[348] 「ユーマ」『カリブ』、139。

[349] 「ユーマ」『カリブ』、144。

[350] 「ユーマ」『カリブ』、145-146。

[351] 「ユーマ」『カリブ』、146。

[352] 「ユーマ」『カリブ』、191。

[353]「ユーマ」『カリブ』、193。

[354] 杉山、1994、147-160。

[355]「ユーマ」『カリブ』、193。

[356]「ユーマ」『カリブ』、200-201。

[357]「ユーマ」『カリブ』、213。

[358]「ユーマ」『カリブ』、213-214。

[359]「ユーマ」『カリブ』、214。

[360]「ユーマ」『カリブ』、214。

[361]「ユーマ」『カリブ』、215。

[362]「ユーマ」『カリブ』、215。

[363]「ユーマ」『カリブ』、215。

[364]「ユーマ」『カリブ』、214。

参考文献一覧

1. 一次資料

Hearn, Lafcadio. *Articles on Literature and Other Writings from Cincinnati Enquirer 1873*. ed. Tominaga Makita. Tenri: Tenri Central Library, 1974.

———. *Barbarous Barbers and Other Stories*. ed. Ichiro Nishizaki. The Hokuseido Press, 1939.

———. *Children of the Levee*. ed. O.W. Frost. Lexington, KY: University of Kentucky Press. 1957.

———. "Hideous Crime." *Cincinnati Commercial* 9 Nov. 1874: 8.

———. "A Horrible Crime." *Cincinnati Daily Gazette* 9 Nov. 1874: 8.

———. "Murder Most Foul." *Cincinnati Daily Times* 9 Nov. 1874: 4.

———. *The New Orleans of Lafcadio Hearn: Illustrated Sketches from the Daily City Item*. ed. Delia Labarre. Baton Rouge: Louisiana State University Press, 2007.

———. *Period of the Gruesome: Selected Cincinnati Journalism of Lafcadio Hearn*. ed. Jon Christopher Hughes. Lanham New York London: University Press of America, 1990.

———. "Violent Cremation." *Cincinnati Enquirer* 9 Nov. 1874: 1.

———. *Writings of Lafcadio Hearn in Sixteen Volumes*. Kyoto: Rinsen Book Co., 1998; Boston and New York: Houghton Mifflin Co., 1922.

Vol. 1. *Leaves from the Diary of an Impressionist; Creole Sketches; and,Some Chinese Ghosts.* by Lafcadio Hearn.

Vol. 2. Stray *Leaves from Strange Literature; and, Fantastics and Other Fancies.* by Lafcadio Hearn.

Vol. 3-4. *Two Years in the French West Indies.* by Lafcadio Hearn.

Vol. 13-15. *Life and letters: in three volumes.* edited by Elizabeth Bisland.

Vol. 16. *Japanese letters.* edited with an introduction by Elizabeth Bisland.

Aldrich, Thomas Bailey. *Marjorie Daw and Other People*. Boston: James R. Osgood and Company, 1873.

Cable, George W. *The Grandissimes*. New York: Charles Scribner's Sons, 1880. ジョージ・ワシントン・ケイブル著杉山直人訳『グランディシム一族』、彩流社、1999年。

Gayarré, Charles. "The Southern Question." *The North American Review* 125. 259.(1877): 472-299. Boston: James R. Osgood and Company.

Gill, Rev. William Wyatt. *Myths and Songs from the South Pacific*. London: Henry S. King & Co., 1876.

小泉八雲著平井呈一訳『中国怪談集他』、恒文社、1976年。

小泉八雲著平井呈一訳『飛花落葉集他』、恒文社、1976年。

ラフカディオ・ハーン著キャメロン・マクワーター他共著高橋経訳『「怪談」以前の怪談』、同時代社、2004年。

ラフカディオ・ハーン著平川祐弘訳『カリブの女』、河出書房新社、1999年。

ラフカディオ・ハーン著『ラフカディオ・ハーン著作集』全15巻、恒文社。

第1巻： 平川祐弘他訳「アメリカ雑録」、1980年。

第2巻： 森亮他訳「アメリカ論説集I・II・III」、1981年。

第3巻： 森亮他訳『アメリカ論説集IV・V； アメリカ文学評論』、1981年。

第4巻： 篠田一士他訳『西洋落穂集』、1987年。

第5巻： 斎藤正二他訳『東西文学論； 神戸クロニクル論説集』、1988年。

第11巻： 野中涼他訳『英文学史I』、1981年。

第12巻： 野中涼他訳『英文学史II』、1982年。

第14巻： 原一郎他訳『ゴンボ・ゼーブス； カルマ； 書簡I・II』、1983年。

第15巻： 斎藤正二他訳「書簡Ⅱ(続き)・Ⅲ」、銭本健二・小泉凡共編「拾遺年譜」、1988年。

2. 二次文献

洋書

Aldrich, Thomas Bailey. *Marjorie Daw and Other People*. Boston: James R. Osgood and Company, 1873.

Brodhead, Richard H. "The American Literary Field, 1860-1890." *The Cambridge History of American Literature*. ed. Sacavan Bercovitch. New York: Cambridge University Press, 2005. 11-62.

Bronner, Simon J. *Following Tradition*. Logan, Utah: Utah State University Press. 1998.

———. ""Gombo" Folkloristics: Lafcadio Hearn's Creolization and Hybridization in the Formative Period of Folklore Studies." *Journal of Folklore Research* 42. 2 (2005): 141-184. Indiana: Indiana University Press.

———. Introduction. *Lafcadio Hearn's America: Ethnographic Sketches and Editorials*. By Lafcadio Hearn. Kentucky: The University Press of Kentucky, 2002.

"Book Review." *Overland Monthly* 7. 41 (1896): 557-560. San Francisco: Overland Monthly Publishing Company.

Cable, George W. *Old Creole Days*. Charles Scribner's Sons, 1879, 1881, 1883; rpt. Pelican Publishing Company, Inc. 2001.

———. "Who are the Croles?" *The Century* 25. 3(1883): 384-398. New York: The Century Company.

Campanella, Richard., and Marina Campanella. *New Orleans then and now*. Louisiana: Pelican Publishing Company, 2005(1999).

Cockerill, John A. "Lafcadio Hearn, the Author of Kokoro." *Current*

Literature 19. 6 (1896): 476. Current Literature Publishing Company.

Coleman, Charles W., Jr. "The Recent Movement in Southern Literature." *Harper's New Monthly Magazine* 74. 444 (1887): 837-856. Harper & Brothers, Publishers.

Cyganowski, Carol Klimick. *Magazine Editors and Professional Authors in Nineteenth-Century America: The Genteel Tradition and the American Dream*. New York and London: Garland Publishing Inc., 1988.

DeCamp, Graydon. *The Grand Old Lady of Vine Street*. Cincinnati: The Merten Co., 1991.

Eakin, Sue and Culbertson, Manie. *Louisiana: The Land and Its People*. Louisiana: Pelican Publishing Company, 1998(1986).

"Editor's Study." *Harper's New Monthly Magazine* 81. 484(1890): 642. New York: Harper & Brothers, Publishers.

Ellis, John H. *Yellow Fever & Public Health in the New South*. Lexington: University Press of Kentucky, 1992.

Ewell, Barbara C., and Pamela Glenn Menke, eds. *Southern Local Color*. Athens and London: University of Georgia Press, 2002.

Farny, Henry, and Lafcadio Hearn, eds. *Ye Giglampz: A Weekly Illustrated Journal Devoted to Art, Literature and Satire.* Cincinnati: Crossroads Books, with the Public Library of Cincinnati and Hamilton County, 1983.

Federal Writers' Project. *Cincinnati: a guide to the queen city and its neighbors*. Cincinnati: The Wiesen-Hart Press, 1943.

Federal Writers' Project. *New Orleans City Guide*. Houghton Mifflin Company. 1938.

Flora, Joseph M., and Lucinda H. Mackethan, eds. *The Companion to Southern Literature*. Louisian State University Press, 2001.

Frisby, James R., Jr. *New Orleans Writers and the Negro: George*

Washington Cable, Grace King, Ruth McEnery Stuart, Kate Chopin, and Lafcadio Hearn, 1870-1900. UMI Dissertation Information Service, 1990(1972).

Frost, O.W. *Young Hearn.* Tokyo: The Hokuseido Press, 1958. O.W.フロスト著西村六郎訳『若き日のラフカディオ・ハーン』、みすず書房、2003年。

Gale, Robert L. *A Lafcadio Hearn Companion.* Westport, Connecticut and London: Greenwood Press, 2002.

George, Henry. *Progress and Poverty*. New York: Robert Schalkenbach Foundation. 2006(1879).

"George W. Cable", *Century* 23. 4(1882): 602-605. New York: The Century Company.

Hamilton, Kristie. *America's Sketchbook: the Cultural Life of a Nineteenth-Century Literary Genre*. Ohio: Ohio University Press. 1998.

Hartland, Edwin Sidney. *The Science of Fairy Tales.* London: W. Scott, 1891.

Hartsock, John C. *A History of American Literary Journalism.* Amherst: University of Massachusetts Press. 2000.

Hearn, Lafcadio. "The Grandissimes Once More." *Daily City Item*[New Orleans, LA] 13 Jan. 1881.

———. *Lafcadio Hearn: Selected Writings 1872-1877*. ed. WM. S. Johnson. Indianapolis: Woodruff Publications, 1979.

———. *Letters from the Raven*. ed. Milton Bronner. New York: Brentano's, 1907.

———. "The Scenes of Cable's Romance." *The Century* 27. 1 (1883): 40-48. New York: The Century Company.

Hirsch, Arnold R. and Logsdon, Joseph. *Creole New Orleans: Race and Americanization*. Louisiana: Louisiana State University Press, 1992.

Hutson, Ethel. "Lafcadio Hearn's Cartoons." *Creole Sketches*. By Lafcadio Hearn. 1924. xvii-xxv.

Hutton, Laurence. "Literary Notes." *Harper's New Monthly Magazine* 79. 474 (1889): E003. Harper & Brothers, Publishers.

Irons, Susan H. "Southern Literature, Idea of" *The Companion to Southern Literature.* eds. Flora, Joseph M., and Lucinda H. MacKethan. Baton Rouge: Lousiana State University Press, 2002.

Johnson, Allen, ed. *Dictionary of American Biography Vol. I.* New York: Charles Scribner's Sons, 1928-1958.

Kendall, John S. "Lafcadio Hearn in New Orleans, I, On the Item." *Double Dealer* 3. 17(1922): 234-242. New Orleans: Double Dealer Publishing.

Kennard, Nina H. *Lafcadio Hearn: Containing Some Letters from Lafcadio Hearn to His Half-Sister, Mrs. Atkinson*. New York: D. Appleton and Company, 1912.

Kenny, Daniel J. *Illustrated Cincinnati: Pictorial Hand-Book of the Queen City*. Cincinnati: Robert Clarke & Co., 1875.

King, Homer W. *Pulitzer's Prize Editor: A Biography of John A. Cockerill 1845-1896*. Durham, N.C.: Duke University Press, 1965.

Labarre, Delia. Introduction. *The New Orleans of Lafcadio Hearn: Illustrated Sketches from the Daily City Item*. By Lafcadio Hearn. Baton Rouge: Louisiana State University Press, 2007.

"Loti and Hearn." *The New York Daily Tribune* 21 Jan. 1906.

Loti, Pierre. "Japanese Women." *Harper's New Monthly Magazine* 82. 487(1890):119-131. New York: Harper & Brothers, Publishers.

Lowell, Percival. "The Soul of the Far East." *The Atlantic Monthly* 60. 359(1887): 405-413. Boston: Atlantic Monthly Co.

Lyell, Sir Charles. *A Second Visit to the United States of North America Vol.II*. London: John Murray, Albemarle Street, 1849.

McCormick, W.B. "Fifty Years of American Literature." *Catholic World* 63. 377 (1896): 619-625. New York: The Office of the Catholic World.

Miner, Earl. "Hearn and Japan: An Attempt at Interpretation." *Centennial Essays on Lafcadio Hearn*. ed. Kenji Zenimoto. Matsue: The Hearn Society, 1996. 19-43.

Mott, Frank Luther. *American Journalism: 1690-1960*. New York: The Macmillan Company, 1941.

———. *A History of American Magazines. Vol.4*. Cambridge, Harvard University Press, 1957

———. *The News in America*. Harvard University Press, 1952.

Müller, Friedrich Max. Preface. *Myths and Songs from the South Pacific.* By William Wyatt Gill. London: Henry S. King & Co., 1876.

Murray, Paul. *A Fantastic Journey.* London and New York: RoutedgeCurzon, 2005(1993). ポール・マレイ著 村井文夫訳『ファンタスティック・ジャーニー』、恒文社、2000年。

"New Publications." *The New York Times* 14 Oct. 1894.

Oates, Joyce Carol, ed. *The Oxford book of American short stories*. New York: Oxford University Press, 1992.

Phillips, V. Faye. "Charles Etienne Arthur Gayarré." *KnowLA Encyclopedia of Louisiana*. ed. David Johnson. Louisiana Endowment for the Humanities, 22 Dec.2010. Web. 14 Sep. 2013. <http://www.knowla.org/entry.php?rec=744>

Roskelly, Hephzibah. "Cultural Translator: Lafcadio Hearn." *Literary New Orleans*. ed. Richard S. Kennedy. Baton Rouge and London: Louisiana State University Press, 1991.

Rubin, Rachel, and Jeffrey Melnick, eds. *American Popular Music: New Approaches to the Twentieth Century*. Amherst: University of Massachusetts Press. 2001.

A South Carolinian. "The Political Condition of South Carolina." *The Atlantic Monthly* 39. 232 (1877): 177-194. Boston: Atlantic Monthly Co.

Scott, Frank W. "Newspapers Since 1860." *The Cambridge History of American Literature Vol.3*. eds. William Peterfield Trent, John Erskine, Stuart P. Sherman and Carl Van Doren, New York: G.P. Putnam's Sons, 1921.

Stevenson, Elizabeth. *The Grass Lark*. New Jersey: Transaction Publishers, 1999(1961). E・スティーヴンスン著遠田勝訳『評伝ラフカディオ・ハーン』、恒文社、1984年。

Sukehiro, Hirakawa. ed. *Rediscovering Lafcadio Hearn: Japanese Legends Life and Culture.* Folkestone, Kent, UK: Global Books Ltd., 1997.

Sutherland, Jonathan D. *African Americans at War: An Encyclopedia*. Santa Barbara. California: ABC-CLIO, Inc., 2004.

"Talk about New Books." *Catholic World* 51.301(1890): 127. New York: The Office of the Catholic World. 1890.

Taylor, Nikki Marie. *Frontiers of Freedom: Cincinnati's Black Community, 1802-1868*. Athens, Ohio: Ohio University, 2005.

Tinker, Edward Larocque. "Cable and the Creoles." *American Literature* 5. 4 (1934): 313-326. Duke University Press.

———. "Lafcadio Hearn, Columnist and Cartoonist". *New York Times* 13 April. 1924.

———. *Lafcadio Hearn's American Days*. New York: Dodd, Mead and Company, 1925. E・L・ティンカー著木村勝造訳『ラフカディオ・ハーンのアメリカ時代』、ミネルヴァ書房、2004年。

"Topics of the Time." *Scribner's Monthly* 22.5 (1881): 785-786. New York: The Century Company.

Turner, Arlin. *George Washington Cable*. Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1966.

Waring, George E., Jr. "George W. Cable." *The Century* 23. 4 (1882): 602-606. New York: The Century Company.

和書および翻訳

梅本順子著『浦島コンプレックス—ラフカディオ・ハーンの交友と文学』、南雲堂、2000年。

エリアーデ、ミルチャ著久米博訳『豊饒と再生』、せりか書房、1974年。

グランド、マイケル・ヘイゼル、ジョン共著西田実他訳『ギリシア・ローマ神話事典』、大修館書店、1988年。

小泉節子・小泉一雄共著『思い出の記/父「八雲」を憶う』、恒文社、1976年。

小泉八雲著平川祐弘編『怪談・奇談』、講談社、1990年。

里見繁美「ラフカディオ・ハーンのシンシナティ・ニューオーリンズ時代」『ラフカディオ・ハーン—近代化と異文化理解の諸相』、九州大学出版会、2005年、117-147頁。

島根大学付属図書館ハーン図書出版編集委員会編『ニューオーリンズとラフカディオ・ハーン』、今井出版、2011年。

白神栄子著『ラフカディオ・ハーン研究: 愛と女性と』、旺史社、1993年。

杉山直子「アウトサイダーとしてのハーン」『世界の中のラフカディオ・ハーン』、河出書房新社、1994年、147-160頁。

関田かおる編著『知られざるハーン絵入書簡』、雄松堂出版、1991年。

太平洋学会編『太平洋諸島入門』(三省堂選書158)、三省堂、1990年。

タイユミット、エティエンヌ著中村健一訳『太平洋探検史』、創元社、1993年。

常松正雄監修/訳「The Daily City Item, 1880—挿絵入り記事に見る19世紀末ニューオーリンズ」『ニューオーリンズとラフカディオ・ハーン』、今井出版、2011年。

ドゥヴルー、ジョルジュ著加藤康子訳『女性と神話—ギリシア神話にみる両性具有』、新評論、1994年。

ドンデ、ヴィック・ド著荒俣宏監修富樫瓔子訳『人魚伝説』、創元社、1993年。

中村和恵「カラードの幻惑」『講座小泉八雲II—ハーンの文学世界』、新曜社、

2009年、127-155頁。

中村和恵「黒人の乳母(ダー)―ラフカディオ・ハーンとジーン・リース」『国文学』第49巻11号、学燈社、1998年10月、117-128頁。

西川盛雄編『ラフカディオ・ハーン―近代化と異文化理解の諸相』、九州大学出版会、2005年。

ハーン、ラフカディオ著 真貝善五郎訳『ラフカディオ・ハーンの神戸クロニクル論説集』、恒文社、1994年。

ヒューズ、ジョージ著 平石貴樹・玉井暲訳『ハーンの轍の中で』、研究社、2002年。

平川祐弘著『オリエンタルな夢―小泉八雲と霊の世界』、筑摩書房、1996年。

平川祐弘「ギリシャ人の母は日本研究者ハーンにとって何を意味したか」『国文学』第43巻第8号、学燈社、1998年7月、6-18頁。

平川祐弘監修『小泉八雲事典』、恒文社、2000年。

平川祐弘著『小泉八雲：西洋脱出の夢』、新潮社、1981年。

平川祐弘・牧野陽子編『講座小泉八雲I―ハーンの人と周辺』、新曜社、2009年。

平川祐弘・牧野陽子編『講座小泉八雲II―ハーンの文学世界』、新曜社、2009年。

平川祐弘編『世界の中のラフカディオ・ハーン』、河出書房新社、1994年。

平川祐弘著『ラフカディオ・ハーン―植民地化・キリスト教化・文明開化』、ミネルヴァ書房、2004年。

フリース、アト・ド著 山下主一郎他訳『イメージ・シンボル事典』、大修館書店、1984年。

マイナー、アール「ハーンの日本――つの解明の試み」『世界の中のラフカディオ・ハーン』平川祐弘編、河出書房新社、1994。

牧野陽子「民話を語る母」『講座小泉八雲II―ハーンの文学世界』、新曜社、2009年、69-101頁。

松井文夫「ラフカディオ・ハーンと『クレオール』」『比較文学研究』第72号、東大比較文学会、1998年。

松村武雄編『オーストラリア・ポリネシアの神話伝説』、名著普及会、1987(1928)

年。
モリソン、サムエル著西川正身翻訳監修『アメリカの歴史』、集英社、1997(1965)
年。
森亮著『小泉八雲の文学』、恒文社、1990年。
ユー、ベンチョン著池田雅之監訳『神々の猿』、恒文社、1992年。

図版

図１

『インクワイヤラー』紙

THE CINCINNATI ENQUIRER.

VOL. XXXII: NO. 313. MONDAY MORNING, NOVEMBER 9, 1874. PRICE FIVE CENTS.

VIOLENT CREMATION.

Saturday Night's Horrible Crime.

A Man Murdered and Burned in a Furnace.

The Terrible Vengeance of a Father

Arrest of the Supposed Murderers.

Links of Circumstantial Evidence.

The Pitiful Testimony of a Trembling Horse.

Shocking Details of the Diabolism.

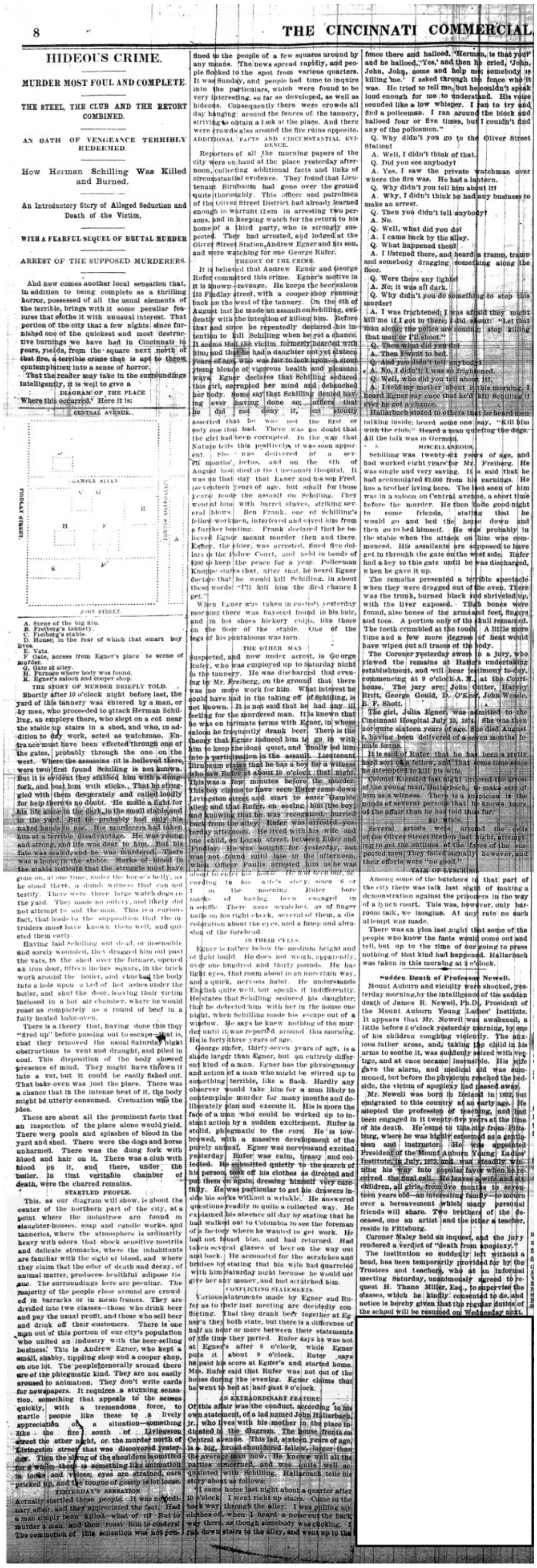
Statements and Carte de Visite of the Accused.

Andreas Egner.

Fred Egner.

George Rufer.

『コマーシャル』紙



8

THE CINCINNATI COMMERCIAL.

HIDEOUS CRIME.

MURDER MOST FOUL AND COMPLETE.

THE STEEL, THE CLUB AND THE RETORT COMBINED.

AN OATH OF VENGEANCE TERRIBLY REDEEMED.

How Herman Schilling Was Killed and Burned.

An Introductory Story of Alleged Seduction and Death of the Victim,

WITH A FEARFUL SEQUEL OF BRUTAL MURDER

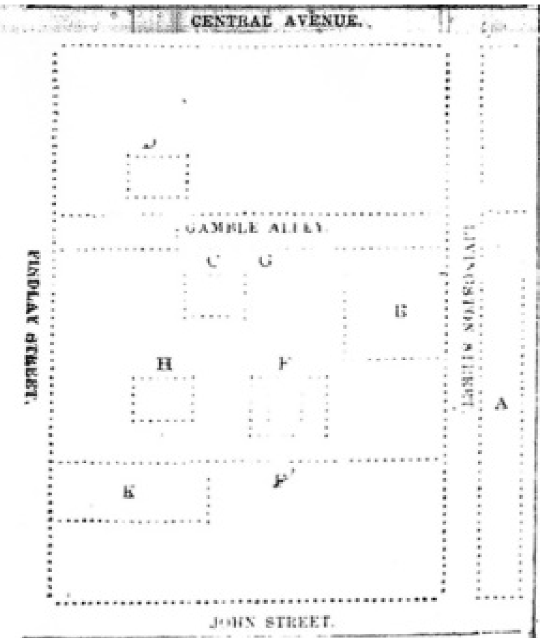
ARREST OF THE SUPPOSED MURDERERS.

And now comes another local sensation that, in addition to being complete as a thrilling horror, possessed of all the usual elements of the terrible, brings with it some peculiar features that clothe it with unusual interest. That portion of the city that a few nights since furnished one of the quickest and most destructive burnings we have had in Cincinnati in years, yields, from the square next north of that fire, a terrible crime that is apt to throw contemplation into a sense of horror.

That the reader may take in the surroundings intelligently, it is well to give a

DIAGRAM OF THE PLACE

Where this occurred. Here it is:



A. Scene of the big fire.
B. Freiberg's tannery.
C. Freiberg's stable.
D. House, in the rear of which that smart boy lives.
E. Vats.
F Gate, access from Egner's place to scene of murder.
G. Gate at alley.
H. Furnace where body was found.
K. Egner's saloon and cooper shop.

挿絵の拡大

『ガゼット』紙

CINCINNATI DAILY GAZETTE: MON

A HORRIBLE CRIME.

Man Murdered with a Pitchfork.

HIS BODY PLACED IN A FURNACE TO BE BURNED.

The Remains Reduced to a Shapeless Crisp.

ARREST OF THREE PERSONS FOR THE CRIME.

Strong Circumstantial Evidence of their Guilt.

REVENGE FOR A DAUGHTER'S WRONGS THE INCENTIVE.

Great Excitement in the Neighborhood.

Perhaps the most shocking murder, in all its details, ever perpetrated in this city, occurred on Saturday night between 10 and 11 o'clock. Words are inadequate to describe the diabolical details of inception and carrying to consummation this horrible deed, and the mind shudders at the contemplation of a crime so awful, and the subsequent fiendish endeavors on the part of the murderers to hide the evidence of their guilt.

HERMAN SCHILLING.

Herman Schilling, the victim of this terrible tragedy, is a young German, was born in Westphalia, and at the time of his butchery was about twenty-seven years of age. He came to this country about twelve years ago, and for the last eight years has been employed in the tannery of Henry Freiberg, by whom he was greatly esteemed.

Hermann Schilling is described as an inoffensive man, although of superior muscular development. He was about five feet seven inches in height, cross-eyed, had light hair and complexion, and weighed a hundred and fifty pounds. He was a single man, and by his fidelity to his employer, and industry, was trusted by him to manage a portion of his business. That Schilling was frugal in his habits may be judged from the fact that he had laid up some $1,700 from his [illegible] with Mr. Freiberg. Schilling slept in a small apartment in the establishment, and exercised a general care over the tannery during the night, although he was employed in the daytime.

THE TANNERY.

The place where this terrible crime was committed, as before stated, was in the tannery of Henry Freiberg. The buildings are situated on the north side of Livingston street, between Central avenue and John street, west of Gamble alley, on the western side of which the tannery abuts. The front buildings are opposite the scene of the disastrous fire of Friday night, by which the large establishment of M. Werk & Co. was destroyed. The buildings are of frame, and occupy a frontage on Livingston street of about one hundred and twenty-five feet.

About forty feet north of this front row of buildings is another row the entire length of the lot, and between these two rows is the vat yard, where the hides go through the tanning process. This rear row of buildings is divided into a number of compartments, of which the following diagram will give a good idea:

THE COOPER'S YARD.

Adjoining the tannery on the west is the cooper shop and yard of Andreas Egner, who also keeps a saloon at No. 153 Findlay. This yard is the one through which it is supposed the murderers made their way when forcing an entrance to their intended victim. Egner's saloon, which fronts on Findlay street, also opens into this yard.

GAMBLE ALLEY.

Gamble alley is separated from the vat yard by a fence some twelve feet high, and which an ordinary man could not easily scale.

THE STABLE.

The stable, in which from the surroundings it is supposed the unfortunate man met his death, is in the north-east corner of the court yard, and is about twelve feet square, with a single door, and accommodations for but one horse. The floor is of earth, and was covered with hickory shavings, evidently from a wagon spoke turning shop. The walls were covered with cobwebs to which hay seed and chaff adhered in large quantities; and from this circumstance arises one of the strong points in evidence against one of the parties arrested for suspicion of having committed the crime.

WHEN SCHILLING WAS LAST SEEN ALIVE.

An interview with Cornelius Westenbrook, No. 126 Findlay street, with whose family the murdered man took his meals, elicited the fact that Schilling left his house at 10 o'clock on Saturday night, saying that he was going to look after the horse and then go to bed. That was the last time Schilling was seen alive by anybody but his murderers.

COMMISSION OF THE DEED.

As will be seen hereafter, the murder must have been committed between 10 and 11 o'clock. It occurred in the stable, where the victim had gone to look after the horse before going to bed. The perpetrators of the crime must have been lying in wait in the harness-room adjoining the stable, as Schilling was evidently taken unawares, and killed after a short struggle. That Schilling had retreated behind the horse for protection was evident from the fact that there was the greatest quantity of blood at that point, although abundant evidence of a bloody struggle existed all over the small stable.

THE INSTRUMENT OF DEATH.

The weapon with which the unfortunate man was killed was a six-pronged pitchfork, which was found in the stable, covered with blood and hair. This was secured by Lieut. Birnbaum, and will be used in evidence at the trial of the men arrested.

DISPOSITION OF THE BODY—IT IS PUT INTO A FURNACE AND LEFT TO BURN UP.

From the stable where the bloody crime was consummated, the body was dragged through the vat-yard and into the furnace and boiler-room. And here the most horrible part of the story commences. The boilers are heated by a peculiar furnace adapted for burning wet tanbark and sawdust, which is gradually dried, and the burning gas from which passes by a flue into the flues of the boiler. Into this flue a small door opens for the purpose of cleaning. A man's body would hardly pass through it; but nevertheless, into this opening the dead man's body was forced down into the flue, and left to roast and be burned up, thus destroying the chief point in evidence—that of the murdered man's body.

THE CREMATION NOT PERFECT.

But this was not to be. The fire had gone down so low that it failed to do the perfect work; and although it was still burning when discovered about half-past 8 o'clock yesterday morning, and the body burned to a crisp—some portions, bone and all, being totally destroyed and missing—enough of the abdominal viscera and the skull and brain were left to tell the horrible tale. Had it been on any other night except Saturday, on which night the fires are only kept up sufficiently to keep the wet tanbark and boiler warm, every vestige of the murdered man's body would have been lost.

HOW THE MURDER WAS DISCOVERED.

Schilling was usually an early riser and very prompt at his meals, but he did not appear at Mr. Westenbrook's breakfast table on Sunday morning. Shortly after 7 o'clock John Hollerbach—whose statement will be given hereafter—went to Mr. Westenbrook and told him he believed Herman Schilling was murdered; that he had heard a fight in the tan-yard last night, and that the gates were locked and he could not get in. Mr. Westenbrook then sent for Mr. Freiberg, who came about 8 o'clock, and forced open the gate on Gamble alley.

THE FIRST EVIDENCE.

On entering the yard, the first thing noticed was that the stable door was open, and that there was blood on the door step and in the stable. The bloody pitchfork was lying in the stable door. The gate leading into Egner's cooper yard was open. An examination of Schilling's sleeping-room showed that it had not been occupied. Where was Schilling? He could not be found.

THE POLICE NOTIFIED.

Mr. Westenbrook immediately dispatched a messenger to Oliver Street Station-house with the news that a man had probably been murdered at Freiberg's tannery, and that assistance was wanted. Lieutenant Jacob Birnbaum and Officer George Knoppe repaired to the spot at once, and after examining the premises thoroughly, became convinced that a murder had indeed been committed.

THE BODY TRACED TO ITS HIDING PLACE.

In the corner of the stable, behind the horse, was a large quantity of blood; on the doorstep was blood; on the tanbark in the yard was blood, although it was somewhat difficult to trace, being tramped and wet; but following the faint traces they were led to the door of the engine room. Inside the engine-room door was a pool of blood, where the murderers had evidently laid the body down a moment. This door is in the south-east corner of the room, and the furnace door is in the north-west corner, and between these, a distance of about forty or fifty feet, are more vats, covered with tan-bark. The trail was partly lost here, but on reaching the planks on the other side more blood was seen, and the tracks led right up to the furnace door.

THE FURNACE DOOR.

This fatal door had blood upon it. The space inside the door which leads to the flue before spoken of was bloody. This door stands about two feet from the ground, and was open. Ten feet from this door, in a pit about eight feet deep, is the door in which the fire is placed, and between the two, the openings into which wet tanbark is thrown to supply fuel. In this place Lieutenant Birnbaum thought he discovered something resembling a human body.

RECOVERY OF PORTIONS OF THE BODY.

Taking a blunt hook with a long handle, such as is used in tanneries to manipulate hides in the vats, Lieutenant Birnbaum reached into the opening, and to his horror drew forth the liver and entrails, as well as part of the charred trunk of the dead man. Another trial brought forth the head, which became detached from the trunk, with the brain exuding from the charred skull. Another trial brought out one of the charred limbs, and subsequent effort regained all that remained that was not reduced to powder.

THE CORONER TAKES CHARGE.

Coroner Maley was summoned, and arrived shortly afterward. He impaneled a jury, viewed the charred remains, and adjourned the inquest until 9 o'clock this morning, in order to secure the attendance of witnesses. The remains were taken to Habig's, on Sixth street, where they now are.

A WITNESS WHO CAN THROW SOME LIGHT ON THE AFFAIR.

John Hollerbach, jr., whose father keeps a saloon on Central avenue, between Livingston and Findlay streets, and which abuts the east side of Gamble alley almost opposite the stable where Schilling was killed, is able to throw some light on this horrible affair, although for some unaccountable reason he failed to alarm the neighborhood at the time the affray occurred. He attributes his singular action to fright, and that may be the case, for he is but sixteen years old, but is large and strong for one so young. A reporter visited him yesterday afternoon, when he made in substance the following statement:

JOHN HOLLERBACH, JR.

He said he was sixteen years old, and had been out playing. When he returned home, about 10 o'clock, he went in by the back entrance, on Gamble alley, in preference to going through the bar-room. He sleeps in the back room of the second story, and had gone up stairs and undressed himself. After he was undressed he heard a noise, muffled, as if coming from a person that was being choked. Hollerbach put on his clothes and ran down to the alley; and, knowing of threats that had been made against Schilling by Andreas Egner and his son, he cried out in German: "Herman, is that you?"

"Yes," answered Schilling: "John! John! John! for God's sake come quick and help me! Some one is killing me!"

Hollerbach then asked Schilling who had hold of him, but Schilling could not talk loud enough for him to hear or understand. He then hallooed, "Police!" "Watch!" four or five times, and ran around several squares, but could not see any. Before he went, however, Hollerbach states that he swore very wickedly, and told the murderers to let that man alone or he would shoot them.

When he returned from his fruitless search for a policeman to the alley he heard heavy tramping and dragging on the floor, as if some men were moving a dead body. He became very much frightened, and ran up the back stairs without saying anything to anybody, undressed and went to bed, and lay awake all night. The first person he spoke to about the matter in the morning was his mother, whom he told that he was afraid Herman Schilling had been murdered.

SINGULAR CONDUCT.

It is somewhat singular that young Hollerbach did not alarm the people in his father's saloon, which the police assured us was filled with people laughing and singing an hour after the occurrence just narrated. The night watchman over the ruins of Werk's candle factory was also in easy call, with a lantern in his hand, and Hollerbach says he saw him, but he did not cry out after he left Gamble alley, but merely ran to try and find a policeman. When questioned as to why he did not call the watchman with the lantern, he said he did not know the watchman had any right to arrest anybody; but he was so scared he didn't know what to do—which is probably the truth.

YOUNG HALLERBACH DETAINED AS A WITNESS.

At a late hour last night the Superintendent of Police ordered the arrest and detention of John Hallerbach, jr., as a witness in the case, and he was accordingly taken to Oliver Street Station.

SPREAD OF THE NEWS.

As soon as it was positively known that a murder had been committed, the news spread like wild-fire throughout the neighborhood; an excited crowd gathered around the tannery, and were only kept from forcing open the gates by the presence of a number of policemen. The large number of sight-seers who had come on the beautiful Sabbath morning to view the devastation of the fire of Friday night caught the infection and deserted the burned premises for that of the scene of the murder. By noon there must have been fully three thousand persons standing listlessly around, peering through the crevices of the buildings and fences, eager to see the site of so bloody a tragedy; and, although the charred remains had been removed fully two hours previous, and the crowd were continually assured of that fact, they lingered nevetheless, and talked in subdued tones of the horrors of the tragedy.

RUMORS.

Among the large number present early in the morning, and in the almost ceaseless conversation, it would have been curious if some fact, reflecting on somebody, had not been brought to light. One rumor gained such wide circulation, and was so vehemently reiterated, that Lieut. Birnbaum felt it incumbent on him to take one man into custody, against whom, it was claimed by the crowd, if he was not positively guilty, there were strong circumstances warranting his arrest.

THE FIRST ARRESTS.

Lieut. Birnbaum, acting on this strong circumstantial evidence, accordingly arrested Andreas Egner, the cooper and saloon-keeper above mentioned, and his son, Frederick Egner.

THE PRISONERS.

Andreas Egner, the father, is a German, about forty-five years old, and keeps a beer saloon, boarding-house, and cooper-shop at No. 153 Findlay street. He is a man rather below the medium size, hair somewhat gray, and weighs about 130 pounds. His son Frederick is a boy of perhaps nineteen, large and muscular for his age. They were taken to Oliver Street Station.

EVIDENCE AGAINST ANDREAS EGNER.

The evidence against Andreas Egner, although circumstantial, is thought to be conclusive as to his guilt. In his house, when arrested, was his hat covered with cobwebs filled with hay seed and chaff, with which the walls and ceiling of the stable abounded. In the bottom of his pantaloons legs, which were turned up, and adhering to his woolen stockings, were hickory turning chips, with which the floor of the stable was covered, and which, it is claimed, had evidently become lodged there during the scuffle in the stable, which young Hollerbach detailed to our reporter. It is stated by Officer George Knoppe that Egner had, in his presence, threatened to kill Schilling at the first opportunity. Other persons corroborated the officer's statement to the number of half a dozen. The reasons assigned for the threatening are as follows:

A CASE OF ALLEGED SEDUCTION.

Andreas Egner had a daughter, Julia by name, aged sixteen years. About a year ago, Egner informed our reported, she told her father that Herman Schilling had seduced her, and that she was then pregnant. Egner states that one evening, shortly after his daughter had told him of her condition, he caught, Schilling in the act of jumping from her bed-room window. Schilling was at that time a boarder in Egner' house, but he soon after quit them, and went to Cornelius Westenbrooks to board. During all this time Schilling was sleeping in his little room in the tannery, and only got his meals from Egner.

SCHILLING ADMITS.

Schilling admitted that he had had illicit intercourse with Julia Egner, but denied seducing her, stating that she was of loose character, and that the fact was patent to many persons in the neighborhood and that he did not feel like having the sins of others placed at his door. Thus matters stood until the period of the young girl's confinement approached, and Julia was removed to the Cincinnati Hospital until the event transpired.

THE GIRL DIES.

About the 6th of June last the girl was brought to childbed, and shortly afterward died. This so enraged the father and brother against Schilling, that on the same day of her death they attacked Schilling in the tan-yard.

A BATTLE WITH STAVES.

Armed with barrel-staves, the father and brother rushed into the tan-yard from the cooper's yard adjoining on the west, and belabored Schilling until he was almost lifeless. Father and son were arrested but they threatened to finish their bloody work at the first opportunity.

ARRESTED, FINED, AND HELD IN BONDS TO KEEP THE PEACE.

For this offense the two Egners were arrested on a warrant and taken before Esquire True, where, after a hearing, they were fined in a considerable sum, and held in bonds to keep the [illegible] Schilling. And there the matter rested until the night of the bloody tragedy.

YOUNG EGNER.

There is no positive evidence against Frederick Egner, except the circumstances of his threatening to kill Schilling on the first opportunity. These threats, as before stated, have been made to a number of persons.

CIRCUMSTANTIAL EVIDENCE AGAINST ANOTHER PERSON.

Circumstances seemed strongly to point to another man as one of the guilty parties, and the evidence produced against him after his arrest seems to justify the suspicion held against him. His name is George Rufer, a tanner, or tanner' laborer by trade, and he had been working for Mr. Freiberg for some months past, but was discharged by him on Saturday evening, on account of the slacking of business. He is a man twenty-seven years of age, slim built, about five feet eight inches high, and of light complexion.

THE ARREST OF GEORGE RUFER.

Circumstances pointing to George Rufer as one of the murderers, caused a search to be instituted for him, but he could not be found at the time the Egner's were arrested. On their first visit Rufer's wife, who lives with her family at No. 90 Logan street, informed the officers that her husband had not been out of the house the night before, but on a subsequent visit she said he had been down on Spring street until 9 o'clock. Nothing had been seen of Rufer until about 4 o'clock in the afternoon, when he was arrested by officers Paullus and Knoppe at the corner of Elder and Logan streets, near to his residence. He was at once taken to Oliver street Station-house, where our reporter subsequently visited him.

GEORGE RUFER'S STATEMENT.

Rufer's statement to our reporter was, in substance, that he had been discharged on Saturday evening by Mr. Frieberg because he had no more work for him to do, and that he delivered to Mr. Freiberg the key to the gate opening into the yard of the cooper shop.

He then went home, and ate his supper, after which he went to a grocery on the corner of Findlay and Logan streets, and got some beer; that he then went home and went to bed, and this morning early got up and went out to Columbia to see if he couldn't get work in a furniture factory there. He was not successful, and returned to the city about 4 o'clock, and was soon after arrested. He denied being on Spring street on Saturday night, as his wife had asserted.

THE EVIDENCE AGAINST RUFER.

The first evidence against Rufer was that he had made threats against the life of Schilling. He was a great friend of the Egners, and spent much of his leisure time in their beer saloon, and had on several occasions made common cause with them in difficulties. On Saturday night he was seen in the saloon, although he denies being there. These were the circumstances that led to his arrest; but on being taken to the station-house the most convincing proofs of a circumstantial nature were found on his person.

BLOOD ON HIS PANTS.

On being taken into the cell-room, Rufer was made to undress. On the left knee of his pantaloons were found two hardened, glistening spots almost the size of a man's hand. The pantaloons were black, and the spots were dusty from his long tramp to Columbia, and it was hard to tell whether they were blood spots or not; but on removing his pantaloons two corresponding spots appeared on the knee of what had once been white drawers, that were unmistakably blood stains.

Rufer wore a pair of boots with cloth tops and imitation cloth uppers. These were spotted with what appeared to be blood, but it will require careful microscopic analysis to determine the question.

SCRATCHES AND BRUISES ON HIS FACE.

On his forehead was a large bruise that looked as if it might have been made by a man's fist. Under his right eye and on his nose were several scratches. These wounds Rufer accounted for by saying that on the evening previous he had engaged in a fight with his wife because she wanted some money and he would not give it to her, whereupon she flew at him and scratched him.

The key to the gate, which Rufer said he had delivered to Mr. Freiberg, was not given to that gentleman, and in the morning the gate was found unlocked and wide open.

EGNER'S SALOON.

This saloon, which is at No. 153 Findlay street, was visited by our reporter about 4 o'clock yesterday afternoon. Beer was being dispensed with a rapid hand by a middle aged woman to as hard looking a crowd of men as one is likely to see in the worst dens of the city. The talk was loud and most villainous. On asking the bar woman whether she was Mrs. Egner, she replied in German that she was not, that Mrs. Egner had gone down to look after the old man in the Station-house.

MRS. RUFER.

This woman was also away from home, looking after her husband, when our reporter visited the house. She is described by her neighbors as a good, peaceable woman.

THE LATER FEELING IN THE NEIGHBORHOOD.

The excitement had in no way died out when our reporter left the scene of this terrible tragedy late last evening. Even the rain, which fell briskly after 4 o'clock could not entirely disperse the crowd, little knots of which stood around with umbrellas discussing the horrible nature of the crime.

Taking it altogether, the people of this city have never been so deeply stirred over a murder committed within its limits. The fiendishness of the attempt to burn the body after having cruelly murdered an inoffensive man, has stirred every feeling of indignation that can be aroused; and brought a firm determination that the murderers must suffer the extreme penalty of the law.

挿絵の拡大

『タイムズ』紙

THE CINCINNATI DAILY T

MURDER MOST FOUL.

Charred Remains of the Victim

RAKED FROM FURNACE ASHES.

Horrible Scenes at Freiberg's Tannery.

Run Through With a Pitchfork and Then Burned.

The Supposed Perpetrators Arrested.

TESTIMONY AT THE CORONER'S INQUEST.

図 2

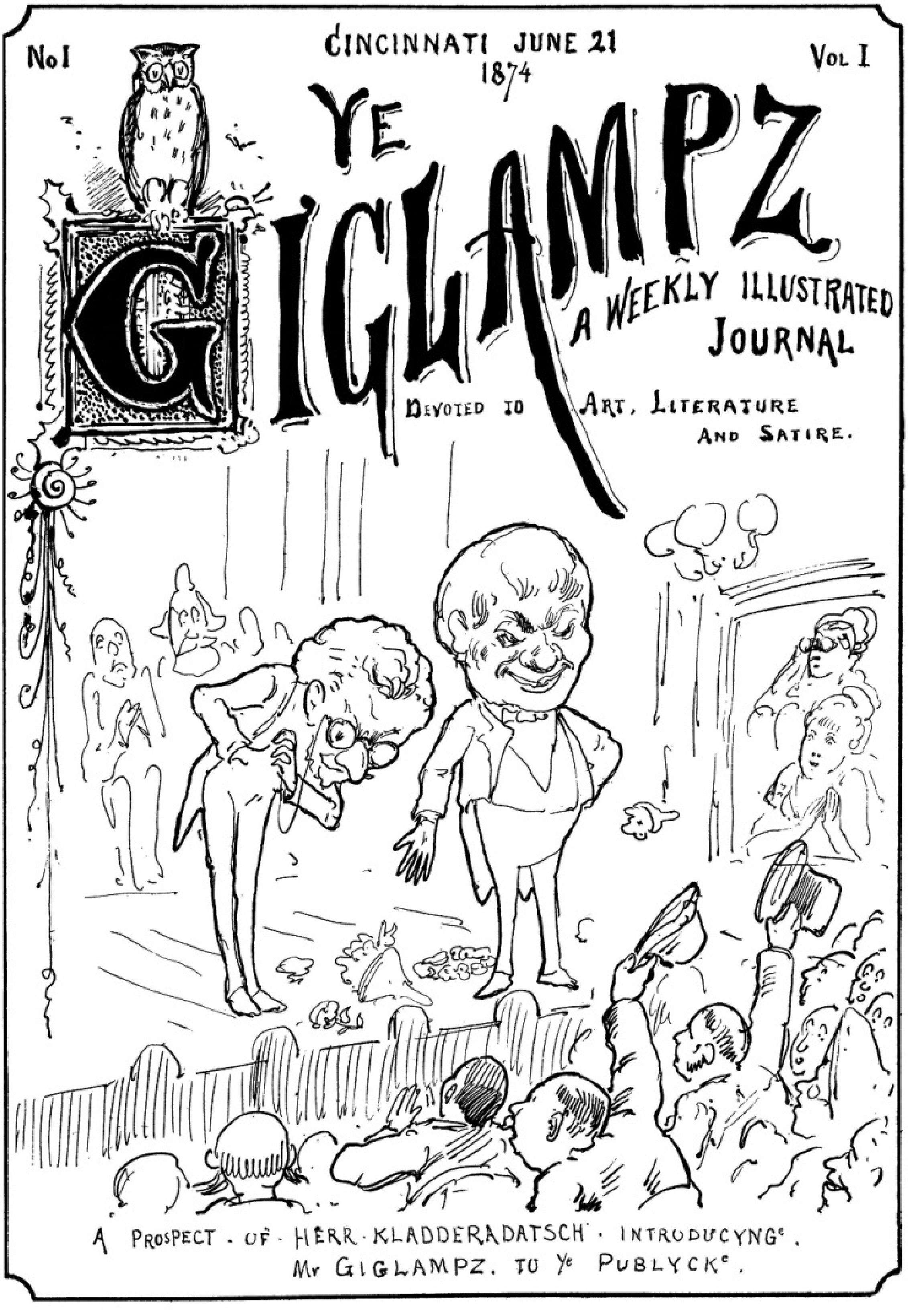
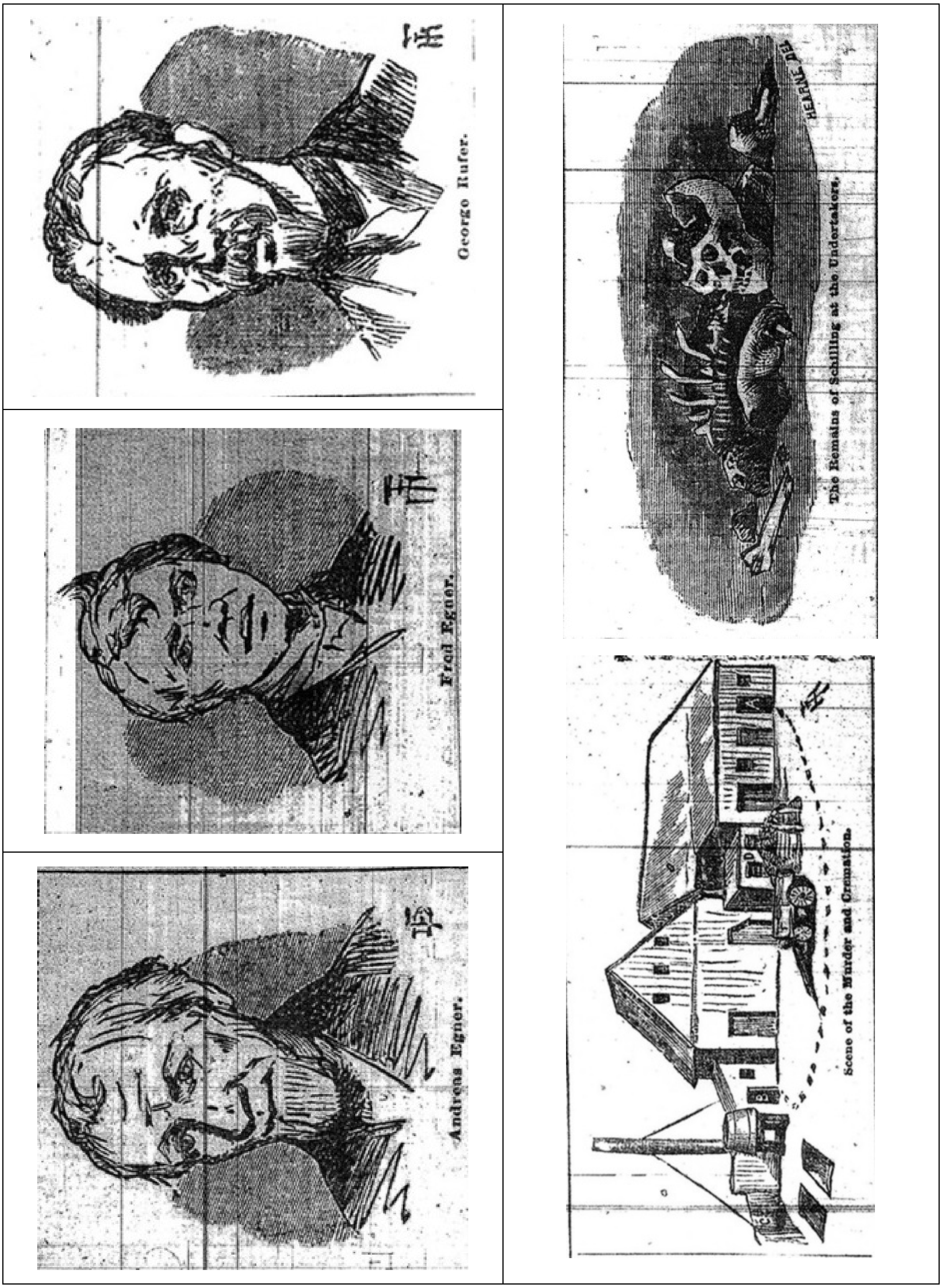

No I
CINCINNATI JUNE 21
1874
Vol I
YE
GIGLAMPZ
A WEEKLY ILLUSTRATED
JOURNAL
DEVOTED TO ART, LITERATURE
AND SATIRE.
A PROSPECT . OF . HERR . KLADDERADATSCH . INTRODUCYNGe.
Mr GIGLAMPZ. TO Ye PUBLYCKe.

図 3

BURNING OF THE STE. MER PAT ROGERS.
Scenes on the day afte the catastrophe.

図 4


George Rufer.
Fred Egner.
Andreas Egner.
HEARNE DEL
The Remains of Schilling at the Undertakers.
Scene of the Murder and Cremation.